太陽の勇者ファイバードstrikers

天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ

【Ｎコード】
Ｎ６８０４Ｈ

【作者名】
天使

【あらすじ】
※これは、リリカルなのはｓｔｒｉｋｅｒｓの悪の科学者ジェイル・スカリエッティが悪じゃなく正義に成るストーリーが混ざっています。不愉快に思われたら退場して構いません。

ｏｐの太陽の翼は、スバル・ナカジマがＥＰの見つめていたいをウーノが歌います。

プロローグ：男の過去（前書き）

ジェイル・スカリエッティのオリジナルの過去を書きました。※考えるのは，大変でした。

プロローグ：男の過去

とある大学の入り口に紫髪の２０代後半の白衣を着た男がトランクケースを持って大学を見上げていた。

（ふん！馬鹿な大学の教授共め！私が居なく成った事を後で悔やむがいい！やはり…アノ人しか認めてくれなかったな…）

そう思うのは、ジェイル・スカリエッティである。

今から数年前、大学の展示会でジェイルは、小さいブースをようやく手にして自分の作品を展示していた。

しかし彼の作品を見ようとする人達は、いなかった。

しかし

「素晴らしい！これを作ったのは、君か！？」

とジェイルに聞いてきたのは、小さい男の子、女の子を連れている初老の男だった。

「え…そ、そんなに素晴らしいですか？」

ジェイルは、驚いていた自分の発明を理解してくれる人が居た事に

感動で嬉しかった。

「何言っているんじゃ！こう言う発明こそ世界平和に役立てる！」

…世界平和？私の作品は、世界平和に貢献の為にあったのか！？

ジェイルは、自分の発明が世界平和にあると実感した。

「ちゅげーぜにいちゃんミラクルカッコイイぜ！」

初老の男の側に居た男の子が言った。

「カッコイイかい？」

ジェイルは、男の子を見ながら言った。

「あたりまえじゃん！」

男の子は、自信満気に言った。

ジェイルは、固い表現から柔らかい表現に成り笑顔に変わった。

「ありがとうございます！」

ジェイルは、初老の男に握手した。

その後、初老の男達は、ジェイルの発明を展示会が終わるまでジェイルの説明を真剣に聞いていた。

「いやー楽しかったぞ！」

初老の男も愉快な気分で言った。

「そうじゃ！もしも、大学に嫌気を刺した時は、儂の研究所に来い。儂の名前は、天野博士。地球の日本で天野平和科学研究所で研究している。」

天野博士は、そう言い残し帰って行った。

ジェイルは、今までの過去を思い出した。

「さて、そろそろ行くとするか…」

ジェイルは、大学を後にして地球の日本に向かった。

プロローグ：男の過去（後書き）

ケンタ「地球に来たジェイルにいちゃん。何かじいちゃんと一緒にアンドロイドやマシーンを作り上げて俺とハルカに見せて来た。次回　太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ　第一話：奇跡の勇者登場！　次回も世界平和！」

第一話：奇跡の勇者登場（前書き）

少し原作の太陽の勇者ファイバードを違った風に書きました。

第一話：奇跡の勇者登場

（此処が地球の日本か…）

ジェイルは、地球がミットチルダより文明が進んでいない聞いていたがジェイルの想像よりもかなり進んでいない事に驚いた。

（はぁ…天野平和科学研究所は、何処何だ？）

ジェイルは、天野博士から場所を聞いていたがまったく解らない。

「ん！？」

ジェイルが困っているとパトカーがありその隣には、ガタいの良い男が立っている。

「仕方ない…聞くか…」

ジェイルは、ガタいの良い男に寄って来た。

「すいません！」

ジェイルが訪ねると

「何だ！」

ギロ！

男は、ジェイルに睨みながら言ってきた。

「あの、天野平和科学研究所に行きたいんですが何処に行けば良いんですか？」

ジェイルが道を訪ねると男は、益々睨みながら来た。

「お前、天野の知り合いか？」

男は、ジェイルに聞き返した。

「ええ…そうですが。何か？」

ジェイルは、男の威圧感に押され一歩下がった。

「悪いが署まで来て貰うぞ」

男がジェイルに手を伸ばそうとした時！

「逮捕状は！？逮捕状が無いと冤罪に成るのよ！！」

二人の間に少女が割り込んで来た。

「ちぃ！天野んとこのガキか…」

男は、諦めたのかパトカーに乗って去ってしまった。

「お久しぶりね、ジェイルさん。」

少女は、ジェイルの事を知っていたのか挨拶してきた。

ジェイルは、この少女の事を見覚えがあった。

「もしかして、ハルカちゃんかい？」

ジェイルは、数年前の展示会で天野博士に連れられていた子供の一人を思い出した。

すると

「ジェイル君？ジェイル君じゃないか！？」

ジェイルが後ろを振り向くとアノ時と変わらない天野博士がスーパーの袋を持っていた。

「ハカセ！天野ハカセ！」

ジェイルは、天野に駆け寄って来た。

「どうしたんじゃ！こんな何処まで？」

天野がジェイルに訪ねた。

「ハカセ！お願いします！私を助手にして下さい！」

ジェイルは、真剣な目で天野に言った。

「ジェイル君…やっと世界平和の素晴らしさに理解してくれたか…」

ポロ

天野は、少し涙目に成りながら言った。

「よっし！今日から君は、儂の助手だ！」

笑顔で天野は、ジェイルに言った。

「はい！ハカセ！」

二人は、燃えていると。

「ちょっとおじいちゃん！今の家計も厳しいのにジェイルさんを食べさせていけるの！？」

ハルカは、天野に睨みながら言った。

「大丈夫じゃ。何か成るわい。」

天野は、余裕で言ってジェイルと共に燃えている。

ハルカは、また悩む種が増えてしまった。

その後、ジェイルが来た事をハルカに電話で聞いたケンタが急いで天野平和科学研究所に向かっていた。

「うわ！やべー！遅刻だ！」

ケンタは、ジェイルの歓迎会で行こうとしたが母親に止められ宿題で時間が掛かってしまった。

「くそ！こうなれば近道だ！」

ケンタは、近道に入り走り出した。

ドン！

ケンタは、何かに当たり倒れた。

「大丈夫？」

ケンタは、声がして目を開けると金髪で紅い瞳の美人の女性だった。

ケンタは、見ただけで顔を真っ赤にさせた。

「い、いえ！こちらこそ！」

ケンタは、謝ると直ぐに天野平和科学研究所の方に走って行った。

「大丈夫かなアノ子？」

女性は、ケンタを心配そうに見ていた。

「フェイトちゃ～～ん！」

すると向こうから違う女性の声が聞こえ来た。

「あ、なのは。」

フェイトと言う女性は、向こうから来る高町なのはを見て手を振った。

「他のみんなは？」

フェイトは、なのはにこの世界に来た他のみんなが今何をしているのか聞いてきた。

「スバル達は、待機しているし、はやてちゃん達が現地の警察と合同会議に出ているよ。」

なのはが今の現状をフェイトに説明した。

「まさか…この地球でアンナのが確認したなんて…」

そうフェイト達、管理局の起動六課が地球に来た理由がアル出来事から始まった。

それは、今から数週間前になる。

地球の大気圏上空に３つのエネルギー生命体を確認した。

これをロスト・ロギアの可能性があると考えた時空管理局本部は、直ちに起動六課をロスト・ロギア調査に任命した。

「何かの間違いであればいいけど。」

フェイトが言うとなのはは、頷いた。

「はぁ～～やっと着いた…」

急いで来たケンタは、へとへとで天野平和科学研究所に入った。

「もう！遅いわよケンタ！」

扉を開けるとジェイルと天野博士とハルカが居た。

「やあケンタくん！」

ジェイルがケンタに挨拶をしてきた。

「ジェイルにいちゃん！お久しぶり！」

ケンタは、喜んで挨拶した。

「ねえねえ！じいちゃん！にいちゃん！電話で話していた物が出来たって本当！？」

ケンタが気になったのは、ジェイルと天野ハカセが作ったアンドロイドとマシーンに興味があったからだった。

「ああ！勿論じゃ！」

天野は、誇らしげに言った。

「けど、ジェイルさんが精密な部分の大半以上をやったじゃない。」

ハルカが言うと天野は、しょんぼりした。

「落ち込まないで下さいハカセ！私は、少し手伝っただけなんですから…」

ジェイルは、天野を慰めた。

天野も少し立ち直ったが未だに気にしている。

「ねえねえ！早く見せてよ。」

ケンタが見たくてしょうがない様子だった。

天野がジェイルに向かって頷くとジェイルは、奥にあるレバーを下げた。

すると、書斎の本棚が横に開いた。

「じいちゃん！いつの間に作ったの！？」

ケンタは、秘密の隠し通路がある事に驚きと感動に成っていた。

「な～に…ジェイル君が来る前から作り上げていたわい。」

天野は、自慢気にケンタに言った。

４人は、隠し通路に入るとジェイルが隠し通路の中にあるもう一つのレバーを押すと扉が閉まり下に移動していた。

到着すると扉が開いて様々なマシーンがあった。

「わ～～♪」

ケンタは、マシーンを見て益々感動した。

「じいちゃん、ジェイルにいちゃん！すげーぜ！ミラクルカッコイイぜ！」

ケンタは、こんなカッコイイ乗り物を見るのが初めてだった。

「驚くのは、早いぞケンタ。」

天野達は、まだ凄い物をケンタとハルカにある様な感じだった。

天野とジェイルは、更に奥に行くと二つシャッターがある場所までケンタとハルカを案内した。

「儂とジェイルが作ったマシーンで操縦するロボットと！」

「そのロボットに的確なサポートをするアンドロイドを」

「作ったんだよ（じゃ）！！」

二人の目が光り輝いていた。

「じゃあ、まずは、ジェイル君が作ったアンドロイドから」

天野は、ジェイルに変わらせた。

ジェイルは、隣脇のスイッチをＯＮにするとシャッターが開き紫色の髪の女性が服を着たまま立って眠っていた。

「それじゃあ行きます！」

ジェイルは、女性の隣にあるボタンを押した。

すると女性は、目を少しだが開け始めた。

「やあ。気付いたかい？君の名前は、解るかい？」

ジェイルは、女性に自分の記憶にある名前を聞いてきた。

「はい、私の名前は、ウーノと申します。主に通信や情報、環境把握などの能力を有しています。」

ウーノは、今覚えている記憶を言った。

「私の名前は、ジェイル・スカリエッティ。君を作った科学者だ。」

ジェイルは、ウーノに自己紹介をした。

「此方の方々は？」

ウーノがジェイルにケンタ達が何者なのか訪ねた。

「私の隣に居るのが私の尊敬する科学者の天野博士ハカセだ。そして、君の正面に居る方には、天野ハカセのお孫さんのケンタくんとハルカちゃんだ。ハルカちゃんの肩に居るのは、ハルカちゃんのペットのチャンプくんだ。」

ジェイルがウーノにみんなの事を紹介した。

「キキ！」

ハルカの肩に居たチャンプがウーノの肩に乗り移った。

「よろしくねチャンプくん。」

ウーノが小指をチャンプに向けるとチャンプは、その小指で握手し

た。

「それじゃあ、そろそろ儂の作ったロボットを見せるか。」

「じ…じいちゃん！早くこのロボットが動くところを！」

ケンタは、天野が作ったロボットが動くところを早く見たかった。

「その前にハルカお赤飯の準備は出来とるか？」

天野は、ハルカに聞いた。

「お赤飯よりこっちの方が大事よ。」

しかしハルカが持っていたものは、消火器だった。

「ん？信用しとらんな？」

「されていると思ったの？」

うわ、ハルカちゃん・・・しっかりしているな・・・

ジェイルは、ハルカのしっかりさに唖然としていた。

天野は、少しの間だけ間が空いたが改めて

「いよいよこの火鳥勇太郎に命を吹き込まれる時がきたのじゃ！」

「火鳥勇太郎？」

ケンタが頭を斜めにして疑問になっていた。

「ケンタくん、ロボットにも名前があって当然だよ。」

ジェイルが言うと天野も「その通りじゃ。」と言った。

「それじゃあ行くぞ！」

天野は、火鳥勇太郎の隣にあるレバーを引いた。

すると火鳥勇太郎の体が光出した。

ビィィン！ビィィン！

火災警報装置が作動した。

「やっぱり！」

ハルカが、消火器を火鳥に向かって放射しようとした時「いや未だじゃ！」天野は、まだ実験をやめたくなかった。

しかし、とうとう火鳥の体から火が付いた。

「消化システム作動。」

ウーノは、パソコンでインプットすると天井から水が出てきた。

「ああ・・・！！ショボン・・・」

天野は、火鳥の体に水がかかりショックの様子だった。

「じいちゃん大丈夫だよ。じいちゃんなら動かせるよ。」「そうですよハカセ！」

ケンタとジェイルは、天野を慰めた。

「そうじゃ！火鳥勇太郎は、宇宙の彼方から正義のエネルギー生命体がやって来て火鳥勇太郎に乗り移ってくれるんじゃ！」

「「「正義のエネルギー生命体？」」」

ジェイル、ケンタ、ハルカは、天野の言っている意味が分からなかった。

「そうじゃ！その前にお赤飯を・・・「ん！？ハカセ！大変です！上の階で火事に成りかけています！」

ジェイルが横のモニターを見ると上の階が燃えていた。

「何じゃと！ジェイルくん！ハルカ！ワシと消化作業を手伝ってくれ！」

「はい！ハカセ！！」

ジェイルは、天野の共に上の階に向かった。

「ケンタ！アンタは、ウーノさんと一緒に此処で待っていなさい！」

ハルカも上に行く時にケンタに言った。

「え？何でさ！？」

「分からないの？目覚めたばかりのウーノさんが上に来たら何かと面倒事に巻き込まれちゃうからよ！」

「あ！？そうか！」

ケンタは、ハルカの言っている意味が理解した。

天野達が居なくなるとウーノが指を指した。

「どうしたの？ウーノねぇちゃん？」

「此方に何かが向かってきます。」

「え！？」

ケンタは、ウーノの言っている意味が分からなかった。

上の階では、ようやく火事の消化作業が終わった。

天野が火事の出火元を探すとマイナスエネルギー探知機が火種だったらしい。

「と言う事は・・・いかん！とんでもないマイナスエネルギーを検地したんじゃ！ついに悪魔が復活したか！ん？」

外からパトカーや消防車のサイレンが鳴っていた。

「ハルカ、ジェイルくん！ワシが外で何とかするから中に入られたらフォローを頼む！」

「はい、ハカセ。」

天野は、外に出て行った。

「あ～ご苦労さん・・」

天野は、何も無かったかのように消防隊員に言った。

「火事は、どこですか！？」

「火事？何のことじゃ？」

消防隊員が聞くと天野は、お惚けに成っていた。

「天野ハカセ・・またお惚けですか？」

パトカーから昼間ジェイルを署まで連行しようとした佐津田刑事が居た。

佐津田刑事が天野平和科学研究所に入ろうとしたときハルカがやってきた。

「礼状は！？礼状が無いと不法侵入よ！」

ハルカは、佐津田に睨んでいた。

「おじょうちゃん・・・警察を舐めてもらったら困る。近所からも苦情が来ているんだ。此処で妙な発明をしとるとな。」

佐津田がハルカの頭を撫ぜたがハルカは、振り払った。

「とにかく、出火原因を調べさせてもらうぞ！」

佐津田は、天野平和科学研究所に入った。

「やっぱり焼けとるじゃないか！」

佐津田は、指摘してきた。

「いいや！消えとるんじゃ！」

ヴィィィン！

天野平和科学研究所の上空から5つの光がやって来て外のパトカー、救急車、消防車に3つが乗り移った。

他の2つは、研究所に入っていった。

「な、何だ！？」

佐津田が後ろに下がるとマイナスエネルギー探知機に触った。

ジュウ！

「アチイ！！」

佐津田の左手のひらに火傷をした。

「た、大変!?サツダさん!今すぐ病院に行って治療を!」

白衣を着て首の辺まで長い茶髪の女性に連れられて病院に運ばれる佐津田。

それを見て他の救急隊員も佐津田を連れて行く。

「手が熱いけどまだアノじいさんに聞くことがあるんだ俺は!」

「いいえ!手遅れになったら元もこうもありません!」

佐津田は、暴れるが何とか救急車の中に乗せて病院に向かった。

「さようなら〜」「もう来なくていいぞ!」「お大事に〜〜。」

天野達は、何とか佐津田を帰せてホッとした。

一方、ケンタとウーノは、天野の作ったロボットが行き成り光が入ってきた。

「わぁぁぁ・・・」

ケンタは、震えながら平然としているウーノの後ろに隠れた。

そしてロボット：火鳥勇太郎が動き始めた。

横を見るとモニターにロボットの人間に成った映像があり火鳥が別の機械に向かった。

「どうなちゃったの？」

ケンタが驚いていると

「ドウナチャッタノ・・・」

火鳥は、機械に触る前にケンタのほうに横を向きながら喋った。

「しゃ、喋った！？」

ケンタは、更に驚いた。

「シャ、シャベッタ（ニコ）」

火鳥は、笑った。

火鳥が機械のボタンを押すとクリームが出てきてそれを体に塗る。

そして全て体に塗ると人間の皮膚の様に成った。

「うわぁ♪」

ケンタは、火鳥勇太郎が目覚めて感動していた。

すると上の階から天野達が、戻ってきた。

「ケンタ?ケンター!?」

ハルカが呼ぶと扉が開いた。

「じゃじゃじゃ~ん!!」

ケンタが機嫌のいい顔で言った。

「どうしたんじゃ?」

天野がケンタに聞いてきた。

「じいちゃん!ジェイルにいちゃん!ついにやったよ!」

「おしっこで火事を消火したの?」

ハルカは、ケンタが驚いているのをそれぐらいにしか見ていなかった。

「違うよ！火鳥勇太郎が目覚めたんだよ！」

ケンタが指を指すを何も服を着ていない火鳥勇太郎が立っていた。

「きゃ！」

ハルカは、何も着ていない火鳥に目を隠した。

「ハ・・ハカセ・・」

ジェイルも奇跡に驚いていた。

「ま、まさか！？」

天野も驚いていた。

「さっきの光で目覚めたんだよ！それもモニターで想像していた通りに成ってさ。」

ケンタは、嬉しそうに言った。

「まさか、フランケンシュタインじゃないじゃろうな・・」

天野は、火鳥に近寄ってポツリと言った。

そして少し咳き込み火鳥に向かった。

「ワシがお前を作った天野じゃ。よろしくな。」

天野は、火鳥に手を指し伸ばすと火鳥は、何をすればいいのか分からなかった。

「挨拶だよ！さっき言った通りにしなきゃ。」

ケンタが火鳥に教えた。

「ワシハ、オマエニツクラレタカトリジャヨロシクナ！」

火鳥は、まだ言葉を理解していなかった。

「じいちゃん、まだ言葉を理解していないんだ・・ちゃんと知らないんだよ。それとこっちに居るのがハルカ、肩に乗っているのがチャンプ、じいちゃんの隣に居るのがジェイルにいちゃん。」

火鳥は、ハルカにしゃがんだ。

「よ、よろしく・・」

「ヨ、ヨロシク」

ハルカの肩に居るチャンプも火鳥に尻尾で挨拶した。

「ケンタ！火鳥さんをこのままにさせておくき！？」

ハルカがケンタに言う。

「あ！いけねぇ！今もってくるよ！」

ケンタが上に向かった。

ウィィィン！ウィィィン！

その音にジェイルとウーノがパソコンに寄って操作する。

「ハカセ！大変です！巨大なマイナスエネルギーを探知しました！」

ジェイルは、驚いて天野に報告した。

「何じゃと！！して場所は！？」

天野は、ウーノに聞いた。

「はい！中東辺りです！それも巨大な蟻地獄です！！」

ウーノは、解析をした。

「え！蟻地獄！？」

ハルカは、火鳥に服を着せながら言った。

「おお！これは、巨大な怪物が出たらしい！」

天野も別のモニターを見ると驚いていた。

「火鳥勇太郎！早速仕事じゃ！」

火鳥も服を着替え終わって準備は、出来ていた。

椅子が出て来て火鳥が座ると下に下がった。

そしてまた椅子が出てきた。

「へへへ♪このチャンスを待っていたんだ！」

ケンタが座ると天野が駆け寄って「ヘルメットを持っていけ！」ケンタは、そのまま火鳥同様に下に下がりレスキューマシーン：ファイヤージェットに乗っていた。

「あれ！？ケンタは！？」

ハルカは、ケンタが居ない事に気づくともうファイヤージェットの中にいた。

『ケンタ！そこで何をしているの！？ケンタは降りてらっしゃい！！』

ファイヤージェットに通信が入りハルカがケンタに降りるように言ったがケンタは、言うことを聞かなかった。

『とにかく冷静に行動するんじゃぞ！』

天野が言うと「了解！」ケンタが言った。

『お前じゃない火鳥に言っているんじゃ！』

「冷静に行動・・了解！」

火鳥は、天野の指示に従った。

「おじいちゃん！」

連絡本部では、ケンタを行かせた事が心配で天野に抗議するハルカ。

「ワシらは、忙しいんじゃ！」

天野は、ジェイル達の手伝いに忙しそうだった。

そしてファイヤージェットが発進して空に飛んだ。

町では、なのは達機動六課がロスト・ロギアの探索をしているとデバイスにシャーリーの通信が入った。

「なのはさん、フェイトさん大変です！中東で巨大な怪物が出たとの通信が入り機動六課の応援が入りました！」

「シャーリー。わかった！今から私達も向かうから！機動六課の出動要請があったから行くよ！」

フェイトがデバイスで通信を切りみんなに言った。

「「「「了解！！」」」」

機動六課のメンバーは、デバイスでバリアジャケットに着替えて現地に向かった。

「うわあああああ！！！」

中東地域では、石油で働く人々が逃げ回っていた。

そしてファイヤージェットが着いた。

「ウワ！ヒデェ！」

ケンタもこの光景に唖然とする。

『消火じゃ！石油に燃えついたらえらい事に成るぞ！』

天野の通信を聞いた火鳥は、ファイヤージェットから消火弾を探してコンピューターにインプットした。

シュパ！シュパ！

ファイヤージェットの先端から弾を射出した。

周りの火は、消し去った。

火鳥は、ファイヤージェットを砂漠の平地に着陸させた。

「何なんだアイツ！？」

ファイヤージェットから降りたケンタは、言った。

「ドライアス！！」

火鳥がその言葉を言うと火鳥の目が光り出し髪の毛も上がった。

「え！？」

ケンタは、驚いた。

突然、誰も乗っていないファイヤージェットが飛び始めた。

「ファイヤー・・・ジェエエット！！」

ファイヤージェットは、変形し巨大なロボットに変わり火鳥も変化したファイヤージェットに向かって宙を飛び体が火の鳥の様に成りロボットの中心に乗り移った。

『チェエエンジィィ・ファイバード！！』

火鳥は、ファイバードと成った。

「わあ・・」

ケンタは、驚いた。

ファイバードが巨大な怪物に向かって指をかざした。

『貴様！ドライアスの手先だな！！』

それを見ていた天野達も驚いていた。

「ドライアスの手先ってなに！？」

「これは、一体！？」

「何がどうなっているのかさっぱり分からん・・・」

天野達は、見守ることしか出来なかった。

「しかし、アノ手は、誰でしょうかドクター？」

ウーノは、それが気がかりだった。

『このファイバードが居る限り宇宙の平和は、乱させはしない！』

「そうか！本当に宇宙のエネルギー生命体が乗り移ったんだ！」

ケンタは、ファイバードの言葉にはしゃいでいた。

『ギャゴゴゴゴ！！』

ボワ！

怪物は、口から火炎放射をファイバードに向かって発射したが怯まなかった。

『フレイムブレスター！！』

ファイバードは、腕を空に翳すと空から別のレスキューマシーンがやって来た。

フレイムブレスターがファイバードの真下に下りると合体した。

『フォームアップ！武装合体ファイバード！！』

ファイバードは、後ろから剣を取り出した。

『フレイムソード！！』

ファイバードは、剣を持って構える。

怪物は、火炎放射を発射した。

『フレイムバリアー！！』

ファイバードは、剣でバリアーを作った。

『ゴゴ！！』

ドン！

怪物は、ファイバードに体当たりした。

『ぐあ！』

ファイバードに当たったが体勢を直す。

そして怪物が尻尾で攻撃をした瞬間。

シュッ！

ファイバードが尻尾を斬った。

それでも怪物は、攻撃をやめない。

ファイバードは、攻撃を次々と斬り付けていく。

ピィィィィンン！！

ファイバードも額が光出した。

『フレイムソード・チャージアップ！！』

剣の刃に炎が纏い怪物目掛けて構えた。

『えええいいいい！！！』

シュパ！！

ドオオオンンン！！

怪物は、ファイバードの必殺技で爆発していった。

「やったー！やったー！凄いや！！」

ケンタもファイバードが勝利して喜んでいた。

他の人々も喜んでいると石油タンクに何かが写った。

「な、何じゃあれは！？ロ、ロボットになっとる！そんな筈は、ワシとジェイルくんが設計した時には、あんなのは無かったぞ！」

「確かにそうですねハカセ・・・」

二人も驚いていた。

「もしかして本当に宇宙人が乗り移ったんじゃないの？」

ハルカも驚きと興奮をしていた。

「いや・・あれは、冗談のつもりだったんじゃが・・」

「え？」

ここに奇跡が起こっていたのだ。

火鳥とケンタは、地元の人々に感謝されてファイヤージェットで帰っていった。

「急いでみんな！！ってあれ？」

なのは達が向かった時には、もう片付いていた。

「「「「私（僕）達の出番って何だったんだ・・」」」」

新人フォアード達は、がっかりしていた。

ファイヤージェットの中では、天野平和科学研究所に向かっている最中だった。

「本当に宇宙から来たなんてスゲー！ミラクルカッコいいじゃん！♪」

「喜んでは、居られない・・ドライアスの地球侵略は、まだ始まったばかりだ。」

ケンタは、火鳥がこの戦いが序章に過ぎないと感じていた。

第一話：奇跡の勇者登場（後書き）

ケンタ「火鳥兄ちゃん地球の事何も知らないんだ。やっぱオレが手助けしないとね。宇宙警備隊なんてミラクルカッコいいじゃん♪ええ！？サミット会場にドライアスが時限爆弾を大変だ！　次回太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ　第二話　サミット爆破二秒前　次回も世界平和！」

第二話：サミット爆破二秒前（前書き）

この話で、トーレとドゥーエが出てきます。

第二話：サミット爆破二秒前

ファイバード達宇宙警備隊が天野平和科学研究所に来る前だった。

黒い光が海底に向かっていた。

「ん！？」

海底に隠れて研究をするのは、悪の天才科学者Ｄｒジャンゴだった。

「こ、これは！？」

ジャンゴが見ると黒い光が３つに分かれて一つは、龍と虎そして鷹の像に乗り移っり他の黒い光がジャンゴの作ったサイボーグに乗り移った。

サイボーグが動き、龍と虎そして鷹の像が動くとジャンゴは、驚いた。

「フフフ、暗黒時代の到来じゃ！グハッハッハッ！！」

そして二体のサイボーグは、巨大な光る目の前に立っていた。

「申し訳ありませんドライアス様…あと少しの所を宇宙警備隊に邪魔されました。」

細い体のサイボーグが光る目をドライアスと呼んで詫びていた。

「まさかヤツラがこの地球に来るとは・・・」

体格の良いサイボーグも宇宙警備隊が来るのは、驚いていた。

『追手の存在が解っただけでも価値があろう。』

ドライアスは、余裕でゾルとシュラに答えた。

「何たる事だ!?」

後ろからＤｒ．ジャンゴが三人の会話を聞いていた。

「我が野望を邪魔する輩そいつ等は、何者なんじゃ!?」

Ｄｒ．ジャンゴは、ドライアスに聞いた。

「宇宙警備隊だ。」

ドライアスの部下のシュラが代わりに答えた。

「何!?」」

Ｄｒ．ジャンゴは、更に驚いた。

『心配は、無用だ。Ｄｒ．ジャンゴ。』

「ドライアス様は、無敵にございます。」

ドライアスが自信気に言うとシュラもドライアスに答えた。

「では、一刻も早く次の作戦に入ろう。成功すれば世界各国の首脳を一網打尽にでき我等共通の野望を達成出来よう。」

Ｄｒ．ジャンゴは、次なる作戦に移行しようとしていた。

？？？「その通りだ。」

Ｄｒ．ジャンゴが後ろを振り向くと何処かの軍隊の制服を着た男が居た。

「お主は、レジアス。」

Ｄｒ．ジャンゴがそう言う人物は、時空管理局のレジアス中将だった。

「Ｄｒ．ジャンゴよ。私が貴様の研究の資金援助をしている事を忘れるな。」

レジアスは、Ｄｒ．ジャンゴに言った。

「解っておる。ワシらが世界征服した暁には、管理局を牛耳る存在にしてやるわい！」

ドライアス達は、更なる地球征服をしようとしていた。

天野平和科学研究所では、ジェイルとウーノそして天野は、研究所でそれぞれの研究をしていた。

「ドクター、いよいよですね。」

ウーノがジェイルに言った。

「そうだね、ドゥーエとトーレがもうすぐ完成だ。」

ジェイルとウーノの目の前には、火鳥と身長が同じ位のショートカットの女性と茶髪のロングヘアーの女性が立って眠っていた。

「おお！ジェイルくんも完成したのか？」

天野がジェイルに聞いてきた。

「はい。ハカセの方は？」

ジェイルは、天野に聞いてきた。

「ワシの方も今出来た所じゃ。」

天野は、変な装置を発明していた。

「それでは、いきます！」

ジェイルがトーレとドゥーエの隣にあるスイッチをＯＮにした。

二人は、目を開いた。

「やあ、君達の名前は、解るかい？私は、君達を作ったジェイル・スカリエッティだ。私の隣に居るのは、君達の姉のウーノだよ。」

ジェイルが説明した。

「こんにちわ私は、トーレです。よろしくお願いします。ドクター、

ウーノ姉さま。私の主な能力は、高速戦闘に長けております。」

トーレは、礼儀正しく挨拶した。

「はじめまして。あたしは、ドゥーエ。よろしくねドクター、ウーノ姉さん。私の主な能力は、隠密です。」

ドゥーエは、誰でも慣れ易い口調で言った。

??『ダンナコド、ハココ・・・』

「「「「「「!!??」」」」」」

5人は、人の声で警戒していた。

「敵か!?」

トーレが睨みを引かせていた。

しかし、周りを確認しても誰も居ない。

「格納庫です!」

ウーノがパソコンで確認したら格納庫に人の声の反応を察知した。

「大変じゃ!」

天野は、上の階に火鳥達を呼びに行った。

上の階では、火鳥とチャンプがテレビを見ていた。

『ふてぇー野郎だ。神妙にお縄に付け！！』

火鳥達は、時代劇を見ていた。

「おやつよー！」

ハルカが火鳥のとチャンプのドーナツを持って来た。

しかし火鳥は、ドーナツを持ってこれが何か理解できなかった。

するとチャンプが火鳥のもう一つのドーナツを取った。

「こらチャンプ！！」

ハルカがチャンプを叱ろうとした時

「こいつめ！」

火鳥は、テーブルの上に乗った。

「ふてぇー野郎だ！御用！御用だ！！」

火鳥は、今見ていた時代劇の真似をしていた。

「？？？」

ハルカも唖然と驚いていた。

それでもチャンプは、逃げる。

「待ちやがれ！神妙にしやがれ！！」

火鳥は、ドーナツをチャンプに投げつけた。

ガチャ！

「ヤッホー！」

ケンタが扉を開けるとケンタの口に火鳥が投げたドーナツが入った。

「何なんだよ一体？」

ケンタがテレビを見ると時代劇がやっていた。

「駄目だよこんな言葉は、今の時代使わないんだから。ちゃんと言葉を覚えるなら・・・」

ケンタは、テレビのチャンネルを変えてニュースにした。

「サミットって何？」

火鳥がケンタに聞いた。

「え？それは・・・世界の首脳が集まって色々・・」

「首脳って？どんなことを言うんだい？」

「そんな難しい事わかんなくっていいの！」

ケンタもよく解っていなかった。

「ケンタ！ハルカ！火鳥！ちょっと来てくれ！」

天野が来ていきなり来いと言ってきたので火鳥達は、そのまま研究所に向いそのままジェイルにトーレとドゥーエを紹介されたまま格納庫に行った。

「じいちゃんどうして泥棒が居るってわかったの？」

ケンタが天野に聞いた。

「いや、格納庫で人の声がしたんじゃ。」

天野もネジを締める棒を持っていった。

『ウヨンゲキゴ！』

レスキューマシーンが喋った。

「タ、タンクが喋った！？」

ケンタは、驚きトーレも戦闘態勢に成った。

すると火鳥が前に出てレスキューマシーンの方まで行った。

『ウヨンゲキゴ！』

レスキューマシーンが火鳥の前で言った。

「カキパ」

火鳥が喋りだす。

『ダクラバシ！』

火鳥が天野達に向いた。

「泥棒　居ない。　これ　私の仲間。」

火鳥が答えた。

「何！？」

「まだ居たのか？」

「仲間って？」

天野、ジェイル、ケンタは、火鳥に聞いた。

『脅かしてすまないな。俺達は、宇宙警備隊だ。』

そうマシーンが喋った。

「宇宙警備隊！？」

ハルカは、驚いた。

「じゃあ、ドライアスを追って来たって言うのは本当なの？」

ケンタが火鳥に聞いた。

「そうだケンタ。」

火鳥が答えた。

「じゃあ何で答えてくれなかったの？」

「聞かれなかったから。」

火鳥が答え返した。

「他にも仲間は居るのか？」

天野とジェイルが探している。

「ココには　いない　外の車の何て言ったかな？」

火鳥がマシーンに聞くと

『いや、俺もこの星の車は知らないからな。』

マシーンも火鳥もこの星の車を知らないらしい。

「そのうち皆にも紹介できるよ。」

火鳥が答えてくれた。

「うわ！宇宙警備隊なんてミラクルかっこいいじゃん♪」

ケンタは、マシーンを見ながら言った。

「ヨッシ！今日からお前は、エースバロンだ！」

天野は、勝手に名前を決めた。

『え？けど・・・俺は・・・』

火鳥を見ると良いじゃないかっと言う顔をしていた。

『エースバロン・・まっいいか。』

エースバロンに名前が成った。＊作者もエースバロンの本当の名前は知りません。（すいません）

「そうじゃ皆に見せたい物があるんじゃ。ついて来てくれ。」

天野は、別の部屋にエースバロン以外の皆を移動させた。

「時間制御マシーンじゃ！」

天野が火鳥達に言った。

「時間制御マシーン？」

ハルカが驚いて言った。

「地球上のあらゆる機械を一定だけ時間止められる事が出来る画期的大発明じゃ！」

天野は、火鳥達に説明した。

「例えば、機械で事故で怪我をする人が居るじゃろ？」

天野は、電動鋸機を設置して木の人形を置いた。

「そんな時は、この時間制御マシーンが居れば・・ＯＮ　どうじゃ！？」

天野は、ケンタ達に聞いた。

「じいちゃん！全然止まらないよ！」

人形は、そのまま切られそうにに成った時、鋸の刃が上に上がって人形に切らずに済んだ。

「じいちゃん！」

ケンタが睨んだ！

「いいえ、時計が止まっていました。」

ウーノが答えた。

「何！？」

天野が時計を見ると確かに止まっていた。

「この星の時間で十秒間止まっていたよ。」

火鳥が答えた。

「見ろ。時計を止めただけでも成功じゃ！」

天野は、喜んでいた。

ウィィィン　ウィィィン

マイナスエネルギー探知機が反応をしていた。

「ハカセ！」

ジェイルが天野に報告した。

「一体何処が襲われるんじゃ！？」

天野は、考えていた。

一方、世界サミットの会場の船では、起動六課も警備要請が入っており警察と共に警備をしていた。

「何もなければ良いけど・・ん!?」

なのはがそう思うと突然揺れが生じた。

「あ、あれは!?」

海から巨大な渦潮が発生してそこから海老かエイが合体した怪物が現れた。

デバイスを構えようとするが、一般人には、管理局の存在を知られるわけには行かない為変身は、出来ない状態だった。

怪物が船を捕まえると頭の部分からスーツを着たゾルとシュラがこっちに向かってきた。

「止まりなさい！止まらないと撃ちます！」

なのはは、佐津田刑事と共に銃を構え他のフォアード達も同じだったがそれでもゾルとシュラは、こっちに向かってきた。

ドン！

「きゃ！」「ぐあ！」

なのはと佐津田は、ゾルに殴り飛ばされた。

「「「「なのはさん！！佐津田刑事！！」」」」

バキューン！！

ティアナは、銃を発射し正当防衛をした。

しかしその弾丸もゾルには、効かなく弾丸を弾いた。

「この小娘が！」

バン！

「ぐあ！」

「ティア！」

スバルが殴り飛ばされたティアナに駆け寄った。

ゾル達は、首脳達の居る会議室に向かった。

「君達は、何者なんだ！？」

首脳の一人が言った。

「宇宙皇帝ドライアス様の要求を伝える。ドライアス様は、この地球の支配権を欲しがってらっしゃる。」

シュラが首脳達に伝えた。

だがそれに首脳達は、従わなかった。

「そうか・・ならこれならどうだ！」

ドン！

シュラは、懐から爆弾を出した。

「ドクター、ハカセ！解りました！場所は、世界サミットが行われている場所です。」

ウーノが答えた。

「火鳥兄ちゃん行こう！」

「ケンタは、駄目！」

ケンタが行こうとするとハルカが止めた。

「火鳥兄ちゃんは、地球の事を何も知らないんだからオレが手助け

しなきゃ！」

ケンタは、それでも行きたかった。

「私からも頼む。」

火鳥は、この星の事を知らないのでケンタの協力が欲しかった。

「仕方ない！ケンタ。お前を宇宙警備隊地球協力隊員に任命する！」

天野は、仕方ないと思った。

ケンタと火鳥は、それぞれの椅子に座りレスキューマシーンのエースバロンに乗り込んだ。

そして他の４体レスキューマシーンと合体したエースバロンは、世界サミットのある場所まで向かった。

「断る！宇宙皇帝か何かは知らないが！地球を貴様らの様な奴等に渡すわけにはいかん！！」

首脳達は、絶対に地球を渡したらとんでもない事になると直感した。

「仕方ない、それなら死んでもらおう！」

シュラが爆弾のスイッチを押した。

「後五分で爆発する。」

ゾルがそう答えた。

首脳達は、おびえ始めた。

会議室の裏では、佐津田となのはが様子を見ていた。

「くそ！こうなったら強行手段だ！」

佐津田がは入ろうとするとなのは達、起動六課のメンバーが止めた。

「佐津田刑事落ち着いてください！」

なのはが説得した。

「そうですよ！人質に何かあったら元もこうもありませんよ！」

スバルも言った。

「くそ！万事休すか！」

佐津田は、とても悔しかった。

そんなことをしている間に火鳥達は、海底から来ていた。

「エースバロン！人質を解放するまで待機だ。」

『了解！』

火鳥達は、エースバロンから分裂したマリンバロンに乗り潜入をしていた。

「くそ！このまま手も出せないの！？」

ティアナは、悔しそうだった。

「ティア・・・ん！？」

スバルが振り向くと青年と少年が横切った。

「あ、ちょっと待ちなさい！」

スバルが追いかけていった。

「あれ？確かに居たんだけど・・？」

スバルが突き当たりに行くと居なかった。

火鳥達は、更に奥に隠れていた。

火鳥は、耳で遠くの人質を探していた。

すると声が聞こえた。

「要求にのんだら?」

首脳の一人が言った。

「時限爆弾を止め「止め方忘れた。」あ、そっか!」

その声を聞いた瞬間「許せねぇ!」火鳥が駆け出した。

「好きにはさせね!」

タッタッタッタッタッ!!

「え!?うわ!」

物凄い速さにスバルも驚いた。

「やい!てめぇーら!!この大江戸で悪事をするとはフテェ野郎どもだ!!」

どうどうと火鳥がゾルとシュラに言った所を見てなのはは、口が限界まで開いて驚いた。

「たとえお天道さんが許してもこのオイラが許さねぇ!!」

戦闘員を次々やつけながら言った。

「お縄についてもらうぜ！！」

火鳥がゾルとシュラに言った。

シュラの額から光線を放ったが交わされる。

火鳥がシュラに回し蹴りをしてシュラは、飛ばされた。

「この野郎！！」

ゾルがスーツを破り火鳥に遅いかかってきた。

火鳥は、ゾルの攻撃を交わした。

「今の内に！」

会議室の外からフェイトが爆弾を取ろうとしたが全然取れない。

「何しているの！？早く逃げて！！」

ケンタが会議室の中に入ってきた。

「危ないよ！後1分には爆発するんだよ！！」

フェイトは、懸命に取ろうとするが全然取れない。

『ケンタ！伏せろ！』

ヘルメットからトーレの通信が入った。

ケンタは、伏せた。

「ＩＳ発動！ライドインパルス！！」

バキ！

トーレの高速の攻撃により爆弾が取れた。

「させるか！」

シュラも高速のトーレの足を掴み投げた。

「ぐあ！」

トーレは、壁に叩き付けられた。

「火鳥兄ちゃん！！」

ケンタは、叫んだ。

「そうはさせねぇ！！」

ゾルが火鳥に後ろから締め付けたがそれでも火鳥は、走りながら爆弾を持って外まで行った。

「そうだ！じいちゃん！例の時間制御マシーンで時間を止めて早く！！」

ケンタは、天野に通信を取った。

「おじいちゃん！」

天野平和科学研究所で通信を聞きハルカも声を上げる。

「いかん！ジェイルくん！ウーノ！」

「はい！」

ジェイルとウーノ、ドゥーエは、急いで運びに行った。

外に出ると巨大な怪獣が爆弾を捨てるのを邪魔した。

「エースバロン！出動だ！！」

『了解！』

火鳥が言うとエースバロンが反応した。

バロンチームは、海上にやってきた。

『バロンチーム・フォームアップ！！』

エースバロンが胴体に変化し、ファイヤーバロンとドリルバロンが左右の腕に変化しマリンバロンとスカイバロンが両足に変化してそれぞれ胴体のエースバロンに装着した。

『五体合体！サンダーバロン！！』

サンダーバロンは、怪物に向かって体当たりをした。

怪獣もサンダーバロンに攻撃したがガードした。

「エースバロンがロボットに！？」

ハルカは、モニターで見て驚いていた。

「当然じゃろ。」

天野は、時間制御マシーンを運びながら言った。

「よっしー！出来たぞケンタ！」

天野は、ケンタに通信で連絡した。

「早く！早くして！！」

ケンタの目の前で４秒になっていた。

「早く！」

ハルカも言った。

ガチャ！

レバーを引くと爆弾のタイマーが止まった。

それを見た火鳥は、ゾルを振り払い爆弾を海上投げた。

ドォォォォン！！

それを見ていたスバルも「た・・助かったの・・・？」とホッとした。

サンダーバロンは、まだ怪物と戦っていた。

怪物が分裂しエイと海老になった。

エイの方には、ゾルが。海老の方には、シュラが乗っていた。

「そっちは、頼んだぞ！」

シュラが通信でゾルに言って「おう！」ゾルも答えた。

シュラの乗った怪物が船の方に向かってきた。

火鳥は、船の高い場所に居るとファイヤージェットが来た。

「ファイヤー・・・ジェェェット！！」

ファイヤージェットは、変形し巨大なロボットに変わり火鳥も変化したファイヤージェットに向かって宙を飛び体が火の鳥の様に成りロボットの中心に乗り移った。

『チェェェンジィィ・ファイバード！！』

火鳥は、ファイバードと成った。

「何なのあれ！？」

スバルが驚いていた。

「ファイバードだい！」

ケンタが答え返した。

『とりゃぁぁぁぁぁ！！』

ゲシン！！

海老の怪物は、ファイバードの蹴りで飛ばされた。

『フレイムブレスター！！』

ファイバードは、腕を空に翳すと空からフレイムブレスターがやって来た。

フレイムブレスターがファイバードの真下に下りると合体した。

『フォームアップ！武装合体ファイバード！！』

ファイバードは、後ろから剣を取り出した。

『フレイムソード！！』

ファイバードは、剣を持って構える。

海老の怪物の鋏から光線が発射されたがフレイムソードで弾き返され片腕を壊された。

海中の中にサンダーバロンも攻撃をしておりゾルも限界だったのでシュラの乗っている怪物と合体した。

「行くぞ！」「おう！」

怪物がファイバードに攻撃をしだが。

「フレイムバリアー！！」

ファイバードには、効かなかった。

ファイバードの額が光出した。

『フレイムソード・チャージアップ！！』

剣の刃に炎が纏い怪物目掛けて構えた。

『えええいいいい！！！』

シュパ！！

ドオオオンンン！！

怪物は、ファイバードの必殺技で爆発し二つの脱出ポットでにげって行った。

「やった！ってオレどうやって帰れば良いだろ？」

ケンタが言っているとトーレが隣にいた。

「ケンタ捕まっていろ！」

トーレは、ライドインパルスでファイヤージェットまで高速移動で飛びファイヤージェットまで行き一緒に乗っていた。

「あのロボットは一体？」

なのはが言っていると起動六課の部隊長の八神はやてがやって来た。

「なのはちゃん、フェイトちゃん、みんな今上からあのロボット達の身元の調査の要請があったから。しばらくは、地元の警察にお世話になりそうや。」

はやてが内容を言うと「あ！子供がさらわれた！！」スバルが言い佐津田となのはが行くと一瞬見えたがもうそこには居なかった。

「あの人達は、一体？」

そらを見ながら思うスバルであった。

第二話：サミット爆破二秒前（後書き）

ケンタ「ミラクル驚き！佐津田刑事とティアナって言う人が乗っていたパトカーも火鳥兄ちゃんの仲間なんだって！もう秘密が多すぎて黙っているのも大変だ・・え！？フロン工場が襲われた！？　次回　太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ　第二話　勢ぞろい宇宙警備隊　次回も世界平和」

第三話：宇宙警備隊勢ぞろい（前書き）

チンクとクアットロが出てきます。

第三話：宇宙警備隊勢ぞろい

ケンタは、学校でクラスメート達と一緒にゲームをしていた。

「おいおい！知っているか？昨日のサミットで活躍したロボット、カッコ良かったな！」

すると別のクラスメートも

「ああ！けどロボットの名前何って言うんだろ？」

「オレ知っているぜ。剣で悪いロボットを倒したのがファイバードでもう一体がサンダーバロンって言うんだぜ。」

ケンタは、クラスメート達に言った。

「けどケンタ。何で知っているんだ？」

他のクラスメートが聞いてきた。

「へへへ♪それは…イタタタタ！」

ケンタの後ろからハルカが耳をつねってクラスメート達が聞けない距離まで行った。

「ケンタ！忘れたの！？火鳥さん達の事は、秘密だって事を！」

ハルカがケンタの耳元で言った。

「あ！そうか！」

ケンタは、ジェイルや天野から宇宙警備隊の事は、内緒に成っていたことに気付いた。

それとジェイルからそんな事を外部に話したら時空管理局に火鳥達が連行されたり、天野もロスト・ギアを扱った罪で終身刑になるからだった。

「ケンター。ロボットを教えてくれよ！」

クラスメート達がケンタに教えてと要求してきた。

「ごめん、ごめん！今のは、冗談なんだ！」

ケンタがいつもの口調で答えた。

「なーんだ…ん！？先生が来たぞ！」

クラスメートが言うとみんな席に着いた。

「え～担任の先生が産休を取り代わりに外国から先生が来ました。どうぞ！」

教室から校長先生が来て事情を話すとドアから先生がやって来た。

「こんにちは、産休の間だけ教師を任されたフェイト・T・ハラオンです。まだ教師として至らない所もありますがよろしくお願いします。」

フェイトは、礼儀正しく生徒に話した。

「うわ…」

男子は、あまりにも綺麗な教師だったので目を奪われた。

そして、校長先生が教室を離れると男子が先生に質問をしっぱなしで今日の授業が終わった。

「じゃあなケンター。」

クラスメートがケンタにさようならの挨拶をして帰ろうとした時、フェイトが自分の前に立っていた。

「え～と天野ケンタくんだよね？」

フェイトがケンタに聞いてきた。

「はい！そうですけど…何ですか？」

ケンタが聞いてきた。

「実は、昨日のロボットの事を詳しかったみたいだけど何で知っているの？」

フェイトが不思議そうに言ってきた。

「え？それは

「フェイト先生！この子妄想癖があるから気にしないでください。」

あ！そうそう！オレ妄想癖があるからアッハッハッ！じゃ！フェイト先生！」

ケンタが言いそうに成った所をハルカによって何とかこの場を切り抜けた。

「え?そうなの?じゃあ帰りは、気を付けて帰ってね。」

フェイトは、ケンタを見送った。

(勘違いだったのかな?)

フェイトは、そう思った。

「佐津田刑事、何処に行くんですか?」

パトカーで佐津田刑事の運転で聞くティアナだった。

「なに、少し刑事の仕事をお前にも見て教えようと思ってな。」

佐津田刑事は、ティアナが優秀な刑事に成ると直感していた。

(あたし…刑事じゃなく管理局員なんですけど…執務官志望の。)

ティアナは、そう思った。

しかし、佐津田刑事は、ティアナが他のフォアードに無い才能を感じていた。

佐津田刑事は、天野平和科学研究所の前にある交番に寄った。

「こ、これは、佐津田刑事!?今日は、どの様な用件でしょうか?」

警官が敬礼した。

「様子は、どうだ?」

佐津田刑事は、何かを聞いてきた。

「え?何がでしょうか?」

警官が訪ねた。

「何って天野平和科学研究所だ。」

佐津田刑事は、言い返した。

「はい…変わった所は、無くだだ…助手が数人雇われています。」

警官は、佐津田刑事に答えた。

「助手?」

佐津田刑事は、目を光らせた。

「はい…男が二人、女が三人です。後は、それしか変わった所はありません。しかし、佐津田刑事？何で天野さんを疑っているんですか？」

警官が聞いた。

「あのじいさんは、三年前の三億円強奪事件の容疑が絡んでいると思うんだ。邪魔したな…行くぞティアナ。」

佐津田刑事は、パトカーに乗りティアナも乗った。

佐津田刑事達は、天野平和科学研究所の裏にパトカーを止めた。

「ティアナ。少し物音を立てるなよ…」

佐津田刑事がティアナに言った。

「了解しました。（ちょっと！これじゃあまるでこっちが泥棒じゃない！）」

ティアナは、心の中で突っ込んだ。

佐津田刑事達は、草村に隠れると裏の方では、火鳥が白衣と眼鏡を付けて図鑑を持ち歩いていた。

そして、佐津田刑事達と火鳥の目が合わさった。

「「うわ！」」

佐津田刑事とティアナが驚いた。

「こんにちは。」

火鳥は、笑顔で佐津田刑事とティアナに挨拶をした。

「お、お前何者だ!?」

佐津田刑事が火鳥に聞いた。

火鳥は、蝶を見ていた。

「これは、ハトでしょうか?」

火鳥が聞いた質問に佐津田刑事とティアナは、?に成っていた。

「これは、桜でしょうか?」

火鳥は、チューリップを見て言った。

「え?それは…

「火鳥さん!この人達に言わなくても良いのよ!」

ハルカとケンタが帰って来てハルカが言った。

「早く行きましょう。」

ハルカが火鳥を連れて行こうとした。

「おかえりーケンタ、ハルカ。」

研究所から天野とジェイルが出て来た。

「じいちゃんただいま！何それ？」

ケンタが天野に聞いてきた。

「これか？　ガシッ！　「犯罪の匂いがする！」

天野が発明品をケンタ達に説明しようとすると佐津田刑事が取り上げた。

佐津田刑事が力一杯握ると変な液体が溢れて来て足を滑らした。

「佐津田刑事！」

ティアナが倒れそうな佐津田刑事を支えようとするとティアナの手にも変な液体が付いて佐津田刑事と共に木に粘着してしまった。

「だから言わんこっちゃない！」

天野は、呆れて佐津田刑事達を見て言った。

「な、何だ天野！これは！？」

佐津田刑事が天野に聞いた。

「これは、ワシが世界平和の為に発明したミラクル ハード接着剤じゃ。」

天野が発明品を説明した。

「な、何だと!?」

佐津田刑事は、接着した部分を取ろうとしたが全然離れなかった。

「あ～無理無理!普通の接着剤の何倍も凄いからのぉ。」

天野が言った。

「じいさん!何とかしろ!」

佐津田刑事とティアナは、慌てていた。

「心配いらん。半日経てば、離れる。まあ、試作品じゃからな。」

天野が余裕で答えた。

「あ、そうだ!ケンタくん、ハルカちゃん。今、トーレが作ったケーキが出来たばかりだからおやつにしよう?さっき味見をしたら凄いプロ並だから。」

ジェイルがケンタ達に言うと喜んだ。

「ドクター、ハカセ!お茶が入りました。」

ウーノが外に出て言った。

火鳥がパトカーを振り向くと火鳥の目が何かに反応した。

「え?火鳥兄ちゃん?」

「火鳥さん？」

ケンタとウーノは、火鳥がパトカーの方に向かったのを疑問に成り二人も火鳥に着いてきた。

「ケンタ、ウーノ。紹介するよ。」

火鳥は、パトカーに乗りケンタとウーノも乗せて何処かに行った。

「こら待てパトカー泥棒！」

佐津田刑事は、追いかけ様としたが接着剤で動けなかった。

（夕飯には、帰れないな～…）

ティアナは、空を見て思った。

火鳥は、パトカーに乗っているがパトカーが勝手に動いていた。

『君がケンタくんとウーノさんだね。私は、ガードスターだ。』

ガードスターは、ケンタとウーノに挨拶をした。

「けど何で佐津田さんは、じいちゃんを疑っているの？」

ケンタがガードスターに聞いた。

『何でも天野ハカセが三年前の三億円強奪事件の容疑がかけられているらしい。』

ガードスターが答えた。

「え？違うよ！じいちゃんは、盗みなんてしてないよ！」

ケンタは、ガードスターにキッパリと答えた。

「わかっている。純粋に平和を願うエネルギーが研究所から満ちている。ハカセは、悪人ではない。」

火鳥は、天野ハカセが平和を願っていると信じている。

『悪党のエネルギーに反応するのは、ドライアス位だ。』

ガードスターも火鳥同様天野を信じていた。

「ドライアスって悪い人と一緒に居るって事？」

「その可能性が高い。」

火鳥がケンタの質問に答えた。

「もしかして、Ｄｒ．ジャンゴとレジアス中将の事かしら？」

ウーノが火鳥の話を聞いて思い出した。

「Ｄｒ．ジャンゴ？レジアス中将？」

火鳥がその人物達の事が気に成りウーノが更に話を続けた。

「はい、以前ドクターとハカセから聞いたのですがＤｒ．ジャンゴは、悪の科学者でレジアス中将は、危ない過激派の人物らしいです。その人達は、マイナスエネルギーを発散していると申していました。」

火鳥達は、そのまま町に向かった。

一方Ｄｒ．ジャンゴの研究所は、Ｄｒ．ジャンゴとレジアス中将がドライアスの前にいた。

「名づけて皆殺し作戦じゃ！」

Ｄｒ．ジャンゴがドライアスとレジアスに言った。

『皆殺しにされては困る。奴隷と成る人間供を残して置かなければ・・地球を制する意味が無い。』

「その通りだ。管理局の犬を作る事もある。」

ドライアスとレジアスは、同じ答えでＤｒ．ジャンゴに答えた。

「いいや、一部の人間達だけ紫外線にやられて死ぬだけじゃ。心配するな。」

Ｄｒ．ジャンゴは、紫外線を使うらしい。

地球には、オゾン層と呼ばれるバリアーが在り、一部の宇宙から来る有害物質から守っている役割を持っている。

つまりオゾン層を壊すことにより紫外線が地球上に降り注ぎ地球の生物の大半が死滅することに成る。

Ｄｒ．ジャンゴは、簡単に説明をした。

『その作戦見せてもらおう』

ドライアスが微笑むとレジアスも頷いた。

「ワシの作戦に間違いは無い！フッ八八八八八！！」

研究所には、Ｄｒ．ジャンゴの笑い声が響いていた。

「おーい！此処から離してくれー！！公務執行妨害で逮捕するぞ！！」

佐津田刑事は、慌てていた。

「人聞き悪いことを言うな自分達がそうなったんじゃろが！」

天野は、ケーキを食べながら言った。

天野は、研究所の中に入って行った。

「たまには、良い薬よ。んー♪おいしい！」

テーブルでケーキを食べているハルカが美味しそうに言った。

「ありがとうハルカ・・・・」

トーレは、恥ずかしそうに言った。

「まったくトーレったら恥ずかしがり屋さんだから。」

それを見ていたドゥーエがニコニコしながら言った。

？？？「まったくですわぁ。」？？？「うむ・・」

トーレの隣で眼鏡をかけた女性と幼児体系の銀髪の女性が言った。

この二人が新しいアンドロイドであった。

眼鏡を掛けた女性は、クアットロ：主な能力は、通信や機械の改造の助手及び彼女達アンドロイドのメンテナスである。

銀髪の女性は、チンク：主な能力は、ダガーを使った武器格闘であ

った。

「けど火鳥さんとケンタにウーノさんは、何処に行ったのかしら?」

ハルカは、心配になっていた。

ウィィィン　ウィィィン

「ハカセ!」

お茶を楽しんでいたジェイルの目が変わって天野に言った。

「またしても悪のエネルギー反応が!?」

天野達は、地下の作戦司令室に向かった。

フロンガス工場では、ドライアスの戦闘ロボット達が巨大なチューブでフロンガス管に繋いでいた。

それを見た警備員が寄ってきた。

整備員の前にゾルとシュラが立っていた。

「フロンガスを頂きに来た。」

シュラが言った。

ゾルが警備員達の前に来て殴り飛ばした。

シュラが合図すると戦闘ロボット達は、フロン工場のタンクを銃で壊した。

ドォォォォォン

タンクが次々に爆発して工場は、火事になった。

「そうだ！人間供を近寄らせるな。」

シュラが戦闘員達に言った。

『緊急事態発生!!フロンガス工場で破壊工作が行われた模様!』

ガードスターの通信から警官の通信が入った。

「何!?」

火鳥が驚いた。

『ドライアスか!近いな!』

ガードスターが地図を映像で火鳥達に見せた。

「とにかく行ってみよう!」

火鳥が言うとガードスターが現場に急行した。

「ハカセこれを！」

司令室でジェイルが天野にある物を渡した。

「これは、いかん！」

天野にも深刻な顔に成った。

「フロンガス工場が襲われている！」

それを聞いたのかエースバロンが出動しようとしていた。

「待って！」

ハルカがエースバロンを止めた。

「おじいちゃんが持たせたい物が有るんだって！」

ハルカの言葉にエースバロンは、止まった。

フロンガス工場では、消防車が数台来ていた。

火鳥達も現場に着いた時には、ひどい火事になっていた。

「これは!?ドライアスの仕業か!」

火鳥も驚いていた。

後ろから救急車がやって来た。

「早く怪我人を!」

女医が救急隊員に言った。

「ガードレスキュー!」

火鳥が救急車に寄った。

「「ガードレスキュー?」」

ケンタとウーノも火鳥の言っている意味がわからなかった。

『私の事だ。』

救急車が喋った。

「うわ!この救急車も仲間なの?」

ケンタは、驚いていた。

すると工場から怪我人を運んだ女医と救急隊員が来た。

『とにかく私は、怪我人を運んでくる。』

ガードレスキューは、火鳥にそう答えた。

火鳥達は、ガードスターに乗って向かった。

「ん?今のは・・」

女医が不思議そうにガードスターを見ていた。

「シャマル先生早く!」

救急隊員がシャマルを呼んだ。

「はい!」

シャマルも救急車に乗って病院に向かった。

「火鳥兄ちゃん。まずいって警官じゃないのにパトカー乗って居る所見られちゃ。」

ケンタが言った。

「あ！そっか！」

火鳥も今気付いた。

フロンガス工場の中央で球根の様なロボットが吸収したフロンガスを空に向かって方出していた。

キィィィィン！！

炎の中からパトカーが現れた。

パトカーから火鳥が降りてシュラとゾルに向かって立っていた。

戦闘ロボット達も銃で火鳥に攻撃したがまったく効かず攻撃し返された。

「やっぱりてめぇーらの仕業か！何を企んでやがる！」

火鳥がゾルとシュラに睨みながら言った。

「グハハハハハ！皆殺しよ！」「フロンガスでオゾン層を破壊して人間供は、紫外線を浴びて死ンでいく。」

シュラが説明した。

「何だって!?」

火鳥も驚きながら球根のロボットを見た。

「グハハハハ!自らの作ったフロンガスで滅ぶとは、愚かな奴らだ!」

ゾルが愉快に言った。

ガードスターがケンタとウーノを安全な所に降ろすと火鳥の方に向かって行った。

『チェェェンジ!!ガードスター!!』

ガードスターが青いロボットに変形した。

「この!」

ゾルがガードスターに大砲で攻撃しガードスターに当たった。

「「ガードスター!!」」

ケンタとウーノが呼ぶと戦闘ロボットが銃をケンタに向けウーノが咄嗟に盾に成った。

「ケンタ!ウーノ!ビスター!」

火鳥が懐から小型のロボットを出すと次々に戦闘ロボットを倒した。

ビスターがケンタの腕に乗りブレスに成った。

「ビスターだ！君が持っていろ。」

火鳥が戦闘ロボットをやっつけながら言った。

『通信機にも成る。』

火鳥がビスターを使ってケンタに言った。

『ぐあああ！』

ガードスターは、ゾルの攻撃に動けなかったが『メットオン！』ガードスターの頭からメットが出てきた。

ビュン！

『相棒の礼は、きっちりさせて貰ったぞ！』

銃を出したガードスターは、そのままガードスターは、銃で攻撃をした。

「助けてくれ！」

ビルから逃げ遅れた人々が助けを求めていた。

「大変だ火鳥兄ちゃん！逃げ遅れた人がまだ居るよ！」

ケンタは、ビスターで火鳥に通信した。

「何？いかん！ガードスター！逃げ遅れた人達の救助を頼む！」

火鳥がガードスターに指示した。

『了解！』

ガードスターは、ビルに向かった。

『俺達も居るぜ！』

炎から消防車とガードレスキューがやって来た。

「え？消防車も居るの！？」

ケンタは、驚いていた。

『チェェェンジ！ガードファイヤー！』

消防車が赤いロボットに変形した。

『チェェェンジ！ガードレスキュー！』

救急車も白いロボットに変形した。

『『メットオン！』』

ガードレスキューとガードファイヤーもメットが出て火災の方にガードファイヤーが消火をしてガードレスキューは、ガードスターが手に持っている人々を渡して安全な所まで避難をさせに行った。

「行くぞ！」「おう！」

ゾルとシュラは、球根のロボットに乗った。

そして巨大な怪物に成った。

『こいつめ！』

ガードスターが銃で攻撃をした。

しかし頑丈で全然効いていない。

『ゴオオ！』

ピュウ！

ロボットは、高熱のフロンガスをガードスターに噴射した。

『『ガードスター！！』』

ようやく戻ったガードレスキューとガードファイヤーもロボットの攻撃を避けた。

「ファイヤー・・・ジェェェェット！！」

火鳥は、空からファイヤージェットを呼び変形し巨大なロボットに変わり火鳥も変化したファイヤージェットに向かって宙を飛び体が火の鳥の様に成りロボットの中心に乗り移った。

『チェェエンジィィ・ファイバード！！』

火鳥は、ファイバードと成った。

ビュウ！

『とう！』

ファイバードは、攻撃を交わした。

『とりゃぁぁ！』

ガジッ！

ロボットの体から触手がファイバードを捕まえた。

ビュウ！

『グアアア！』

ロボットは、捕まえたファイバードを攻撃した。

『いかん！ファイバードを救うんだ！』

『『おう！』』

ガードスターが言うと他の二人も向かった。

『ガードチーム・フォームアップ！』

ガードスターが胸の辺りに変形しガードファイヤーが胸を収める部分と両腕、両腿に変形しガードレスキューが両足に変形して装着した。

『三体合体！ガーディオン！！』

ガーディオンに成った。

「うあ・・合体しちゃった・・・」

ケンタは、見ながら驚いた。

ガーディオンは、胸部からバルカン砲でファイバードを救出した。

ガジ！

ファイバードがロボットの胴体を持った。

『ガーディオンこいつからフロンガスのパイプを引き離せ！』

ファイバードは、指示した。

『了解！』

ガーディオンも加わり何とかパイプから引き離した。

『やった！』

『いや！まだフロンガスが出ている。』

そうまだガスは、流出したままだった。

『フロンガスは、俺に任せろ！』

空からエースバロンがやって来た。

エースバロンは、ハッチの辺りからミラクルハード接着剤入りのミサイルを的確に命中させた。

「やったぞ！ワシが作ったミラクルハード接着剤が役に立ったぞ！」

司令室で天野は、喜んでいた。

『フォームアップ！五体合体サンダーバロン！』

エースバロンは、サンダーバロンに合体した。

『待たせたな！』

サンダーバロンが到着してようやく宇宙警備隊全員が揃った。

『フレイムブレスター！！』

ファイバードは、腕を空に翳すと空からフレイムブレスターがやって来た。

フレイムブレスターがファイバードの真下に下りると合体した。

『フォームアップ！武装合体ファイバード！！』

ファイバードは、後ろから剣を取り出した。

『フレイムソード！！』

ファイバードは、剣を持って構える。

ファイバードの額が光出した。

『フレイムソード・チャージアップ！！』

剣の刃に炎が纏い怪物目掛けて構えた。

『えええいいいい！！！』

シュパ！！

ドオオオンンン！！

ロボットは、ファイバードの必殺技で爆発し二つの脱出ポットでにげって行った。

事件も解決して火鳥達は、天野平和科学研究所にいた。

「そうか！パトカーに救急車に消防車までか！」

「面白い組み合わせですね。」

天野とジェイルは、他の宇宙警備隊の存在を知った。

「本当にビックリしちゃったよ！火鳥兄ちゃん仲間が一杯なんだもん！」

ケンタも驚いていた。

「ケンタにだって友達は、いるだろ？」

「けどまた秘密が増えちゃって苦労するんだよな。」

ケンタは、嬉しそうに言った。

「火鳥さん。その子結構お喋りなんだか「コラー！どう言う事だ！？全然取れないじゃないか！もう半日経っているぞ！」

すると隣から気力の無いティアナと佐津田刑事がいた。

「まだ元気があったんか？」

天野達が寄ってきた。

「これは、もしかすると本当にハードでミラクルな接着剤かもしれんな・・つまり、永久に剥がれないと言う訳じゃ！」

天野が佐津田刑事達に説明した。

「それじゃあ！この木を切ってでも「この木は、この土地に有る立派な木じゃ！貴様らの詰らん手の為に切れるか！」

天野が佐津田に怒鳴った。

「詰らん手だと！馬鹿野郎！俺は、どうなるんだ？「あー！おじいちゃんを馬鹿呼ばわりしたわね！可哀想だと思ってご飯持ってきたけどあげないわ！」

ハルカは、佐津田とティアナのおぼんを下げて行ってしまった。

「ま！心配するな。中和剤を作ってやるから安心しろ。」

「中和剤は、何時出来るんだ？」

佐津田は、天野に聞いた。

「ジェイルくん、何時位かかるかの？今から始めたら？」

天野はジェイルに聞いた。

「そうですね、後3日は、掛かりそうですね。」

ジェイルがキッパリと答えた。

「「み、3日!?」」

佐津田とティアナは、驚いた。

「はっはっはっはっはっ!冗談じゃ!冗談!明日の朝までには、出来ているわい。それまで風邪を引かんようにな!」

その朝まで地獄の夜を過ごす事に成る佐津田とティアナであった。

第三話：宇宙警備隊勢ぞろい（後書き）

ケンタ「火鳥兄ちゃんが献血をして来たんだ。献血って言うのは、大怪我した人や病気の人の治療の為に使うんだ。ってあれ？火鳥兄ちゃんが献血したら人間じゃないってばれるんじゃ？ミラクルマズイよ！　次回　太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ　第四話　恐怖の血液ウィルス　次回も世界平和！」

第四話：恐怖の血液ウィルス（前書き）

スバルとガードチームが一緒に戦います。

第四話：恐怖の血液ウィルス

Ｄｒ．ジャンゴの研究所では、ジャンゴが血液を使って何かの実験をしていた。

「ふん！ゾルとシュラめ何時もワシのせいにしおって。ワシの立てた計画は、完璧だったんじゃ！」

ジャンゴは、何かを取り出した。

「このブラッドパンクウィルスを使えば混入された人間の組織は、破壊され廃人同様に成るのじゃ！グアハハハハハ！！」

ジャンゴは、自信満気に言っている。

「今度の作戦は、自信がある様だな。」

シュラがジャンゴの発明品を持って言った。

「部屋に入る時位ノックせい！」

ジャンゴは、シュラを睨んだ。

シュラは、発明品を持って外に出様とした。

「シュラ！何処に行く！」

ジャンゴは、シュラに聞いた。

「これが本当に効くのか試してきてやる」

シュラは、研究所を後にした。

天野平和科学研究所では、天野が変な眼鏡で実験していた。

「両手を使わずに使える双眼鏡。これぞ画期的な大発明じゃ。」

天野は、口で双眼鏡の調整をしていた。

「あの・・天野ハカセ？」

隣で珍しそうに見ているチンク。だが、彼女がそれだけじゃなく天野を心配していた。

スル！

「わわわ！」

ドプン！

天野は、潜水艦がある場所の水に入った。

「ただいま！」

外の扉からハルカとケンタが帰ってきた。

しかし水の中に入っており、それをチンクが助けている所にケンタ達が帰ってきたからだった。

「火鳥兄ちゃんは？」

ケンタは、天野に聞いた。

「火鳥ならハカセとドクターのお使いで本屋に行っています。」

チンクが天野が発明品で夢中に成っているので代わりに答えた。

「ハカセとドクターの頼まれていた本も買った所だし帰るか。ん？」

火鳥が帰ろうとした時、救急車に目をやった。

「献血にご協力ください！」

外で男の人がスピーカーで言っていた。

「貴方の善意が人を救うのです！」

「人の命を救う？」

火鳥は、その言葉で救急車の方に向かった。

「あの・・」

「献血ですか？」

男が火鳥に聞いてきた。

「献血って何ですか？人の命を救うんですか？」

火鳥は、男に尋ねた。

「え・・？そうです。病気や怪我した人を輸血で救って貰うんです。」

男が説明をした。

「つまり人助けに成ると？」

「ええ、そうです。」

「じゃあ、僕も提供します。」

火鳥は、目の前の輸血の登録場に向かった。

「どうぞ沢山取ってください。血液は、沢山あればあるほど良いんでしょう？」

「え？それは、そうですけど・・」

受付の人も驚いていた。

ガチャ！

奥から人が出てきた。

「献血は、初めてですか？」

女医が聞いた。

「はい。」

火鳥は、答えた。

「気持ちは、嬉しいですけど。まず貴方の健康にも考えなくてはいけませんよ。献血をしてもらいますけど血液型の検査をまずしてもらいます。」

女医が答えた。

「血液型って何ですか?」

火鳥は、血液型の検査と言う言葉が理解できなかった。

「え?血液型は、ですね。色々な種類があるんです。A型とかB型とかO型とかあるんですよ。」

女医が説明した。

「どれが一番良いんですか?」

「どれって言われましても・・生まれたときからそれぞれ違う血液型で決まっているんですよ。」

女医は、答えた。

「へぇ〜〜〜。」

火鳥は、初めてきいた。

そして献血を終えて最終的な血液検査の時、火鳥と言う青年の血液

型は、普通の人のとは、少し違っていた。

「どうしたんですか？シャマル先生？」

隣に居た女の人が聞いてきた。

「少し気になるから血液研究所で調べますね。でも・・あの人どこかで見たことある気がしたんだけど・・・」

シャマルは、火鳥を見ながらそう言った。

「こんにちわ～セインです～～♪主な能力は、人が行けない場所でも探索できる能力をもっていま～す♪」

緑髪の女性が元気良くケンタ達に挨拶した。

「わたしは、セッテと申します。主な能力は、チンク姉さまと同様

武器を使った格闘に長けています。」

紫髪の女性も挨拶した。

「ただいま戻ってきました。」

火鳥は、天野とジェイルにそれぞれ頼まれていた本を渡した。

「少し遅かったのどうしたんじゃ？」

天野もジェイルと一緒に発明しながら紅茶を飲んでいた。

「献血に行っていました。」

火鳥は、天野にそう答えた。

「「ブッーーーーーー！！！」」

ジェイルと天野は、同時に紅茶を吹いた。

「いいい、今なんと言った！？」

天野が火鳥に聞いた。

「帰りに献血に協力してきました。」

火鳥がそう答えた。

「なんと言う事をしてくれたんじゃ・・」

「はぁ～～～～・・・・」

二人は、絶望的な事に成っていた。

「いけない事なんでしょうか？」

天野とジェイルに聞いた。

「それは不味いのでは？」

二人の吹いた紅茶を拭きながらチンクが言った。

「そうね・・私達の血液と火鳥さんの血液には、人間の血液を真似したアマノＸ２８と言う物が流れているから病院で検査されれば・・」

ウーノも深刻そうに言った。

「まさか・・火鳥さん、住所も教えたんじゃなくてぇ？」

クアットロも恐る恐る火鳥に言った。

「書いちゃいましたけど・・それが何か？」

火鳥は、正直に答えた。

「すいません・・人助けに成ると思い遂・・・」

火鳥は、申し訳なさそうに言った。

「名前も住所も知らせちゃったんだぜ。これが佐津田刑事達の耳に入ったら・・」

ケンタも不味いと感じていた。

「如何すればいいんだ・・・そうじゃ！」

天野は、奥に行った。

そして大きい注射器をケンタに向けた。

「え！？嫌だよ！それだったらじいちゃんがすれば良いじゃないか？」

ケンタは、天野に言った。

「あ！そうか　プス！　痛たたたた！！！」

天野は、注射を刺したが痛がった。

「ハカセ！ウーノ！救急箱を！」

ジェイルが天野に駆け寄ってウーノに救急箱を頼んだ。

「はいドクター！」

ウーノも奥に救急箱を探しに行った。

「それするんなら直接返して貰えば良いじゃない！」

ケンタが言った。

「ケンタ冴えている！」
「あ！その手もあったか！」
「考えればそうだな。」

ハルカ、チンク、トーレは、口に出した。

「俺、取ってくる」
ケンタは、火鳥が献血をした場所に行った。

「あれ？すいません。此処に献血する救急車が居ませんでしたか？」

ケンタは、近くの売店の人に聞いた。

「ああ！一時間前位に帰って行ったわよ。」

「え！？」

ケンタは、人の居ない所に行きビスターで通信をした。

「何じゃと！？帰ってしまった！？」

天野とジェイルは、ケンタの通信を聞いて更に絶望的に成った。

「ハカセ、ドクター。この不祥事は、私の責任です。ハカセとドクターには、迷惑をかけません。」

「いや…もう迷惑をかけておる…」

「それに、献血を集める場所もウーノとクアットロに調べさせたけどセキュリティーシステムが頑丈で今日一日じゃあ無理と言われてしまったんだ…どうすれば良いんだ…」

天野とジェイルは、悩んでいた。

「もしかしたら…」

火鳥は、地下の指令室に向かい天野達も向かった。。

「ガードレスキュー。聞こえるか?」

火鳥が司令室の通信を使いガードレスキューに連絡した。

『聞こえるぞファイバード。今日は、どうしたんだ?』

ガードレスキューは、通信に答えた。

「献血は、全て何処に保管されるんだ?」

火鳥は、ガードレスキューに聞いた。

『少し待ってくれ…解ったぞ。献血は、全て血液研究所に運ばれるらしい。』

ガードレスキューは、瞬時に病院のデータベースに侵入し献血が全て集める場所を火鳥達に教えた。

「ありがとう。助かったよ。」

火鳥は、ガードレスキューにお礼を言った。

『な～に、何時でも声をかけてくれ。』

ガードレスキューは、通信を切った。

「血液研究所か…」

「ちょっと待て！」

ケンタも戻って来て火鳥が血液研究所に向かったが天野が止めた。

「行くならこれを持って行け。」

天野は、変なロボットを火鳥達の前に出した。

「これには、アマノＸ２８をインプットさせておる。血液研究所には、無数の検査の管が有るから日が暮れてしまう。」

天野は、変なロボットを火鳥とケンタに持たせようとしたが手の部分でガラスのコップを持っていたがピィキィンと割れてしまった。

「これじゃあ！血液のサンプル管まで壊しちゃうじゃないじいちゃん！」

ケンタが天野に言った。

「とにかく言って来ますハカセ。」

火鳥は、ケンタを連れて血液研究所に行った。

天野は、ロボットの事を思い出していた。

「そうか！思い出した！このロボットは、を掴む加減がクリアしなかったんじゃ！」

天野は、ロボットの欠点を思い出した。

「だったら鍋掴みを乗せてから遣れば良いんじゃないの？」

ハルカが天野にアドバイスをした。

「それがあったか！クアットロ！早く火鳥達に連絡して戻って来る様に伝えてくれ！」

「はぁーい！」

クアットロは、火鳥を戻してロボットを持たせチンクも同行した。

「やっぱり、この人の血液は、普通の人の血液とは、違う。」

血液研究所の血液検査室でシャマルは、調べていた。

ドン！

ドアから戦闘ロボットが入って来てシャマルに銃を向けた。

「な、何なの貴方達は！？」

シャマルは、振り返って言った。

シャマルは、睨んだが下手に動けばやられると思い大人しく連れさらわれた。

火鳥達は、ガードレスキューに乗せてもらい血液研究所に着いた。

「こんな用事の為に呼び出してすまないな。」

火鳥がガードレスキューにお礼を言った。

『そんな事より早く回収してこいよ。』

火鳥達は、ガードレスキューから降りて血液研究所に向かった。

「奪えると良いね。」

「奪う!?」

火鳥がその言葉を聞いた時に深刻な顔をした。

「火鳥、取り戻すの事だ。」

チンクがケンタのフォローをしてあげた。

「ふぅ〜〜・・・ん!?兄ちゃんあれを見て!」

ホッとしたケンタが上を見ると驚く物が書いってあった。

「ＳＯＳ・・?あれは、何なんだい?」

火鳥がケンタに聞くとチンクがダガーを懐から取り出した。

「助けを呼んでいるんだ!」

「助けを!?」

火鳥達は、血液研究所に急いだ。

（早く来て・・・・）

シャマルが白衣のポケットから口紅を出し背後の窓からＳＯＳを書いた。

周りには、多くの人々が居て迂闊に念話をしたらばれてしまうのであえてこの手段をシャマルが考えた。

「ぐあああ！」

別の場所では、抵抗する研究員を戦闘ロボットが攻撃していた。

「何て事をしやがる！」

火鳥がこの場に来て戦闘ロボットに飛び掛る。

「はぁ！」

ヒュン　ヒュン！

チンクが火鳥の後ろからダガーで遠距離援護をしていた。

「やい！ボスは、何所に居るんだ！？」

火鳥とチンクは、次々に人質を解放していった。

「大丈夫ですか？」

火鳥がシャマルに手をさし伸ばした。

「ええ・・（この人は、一体・・？）」

シャマルは、火鳥を見て思った。

『ガードファイヤー！ガードスター！応答してくれ！』

外にいたガードレスキューが他のガードチームに連絡していた。

「うわ！何がどうなっているの？」

消防署では、臨時として派遣されたスバルがガードファイヤーの中に乗り中を調べているといきなり動き出した。

『しっかり捕まっていな！』

「え！ええ！！！！？」

スバルは、消防車が喋った事に驚いていたがそれでも構わずにガードファイヤーが現場に向かった。

血液検査室の場所にケンタとロボットがいた。

「此処か。」

ケンタが中に入ると人の声がして室内の中に隠れてた。

「さて・・ジャンゴのウィルスを試すか。こいつの入れた血液を投入した人間は、廃人同様になる筈。・・ん！」

それを聞いてシュラが外が騒がしいので血液検査室を後にした。

「兄ちゃん達に連絡だ！」

ケンタは、ビスターで火鳥に連絡をした。

「人間を廃人に！？」

火鳥がその言葉を言うとチンクも驚いた。

「うん！この耳で確かに聞いたんだ。それと何故か目の前に兄ちゃんの血液があったから回収しておいたよ。」

「今何所に居る？」

「地下の血液検査室。」

「わかった！」

火鳥達は、地下の血液検査室に向かった。

「はっ！」

階段の所でシュラがいた。

火鳥とチンクがジャンプしてシュラの方を向いた。

「ドライアスの手先め！大切な血液に悪さをしようなんざこの俺が許さねぇ！」

「覚悟しろ！」

火鳥とチンクがシュラに向かって構えた。

「かぎつけて来やがったか。」

シュラは、冷静に言った。

「火鳥兄ちゃん！」

ケンタも火鳥達と合流した。

「邪魔な奴らだ。」

ゴゴゴゴゴ！

天井から蟷螂の様な巨大ロボットが現れた。

「ファイヤー・・・ジェェェット！！」

火鳥は、空からファイヤージェットを呼び変形し巨大なロボットに変わり火鳥も変化したファイヤージェットに向かって宙を飛び体が火の鳥の様に成りロボットの中心に乗り移った。

『チェェェンジィィ・ファイバード！！』

火鳥は、ファイバードと成った。

ファイバードは、外に出た蟷螂のロボットと向き合い蟷螂のロボットが肩からビームを出しファイバードが避けた。

しかし、蟷螂のロボットは、素早くファイバードの懐に潜り倒した。

『てぇぇい！！』

ファイバードは、蟷螂のロボットを巴投げで後ろに飛ばした。

「ロボットが戦っている！」

屋上に逃げてきた人々がファイバードの戦いを見ていた。

「ん！危ない！」

屋上から戦闘ロボットが銃を向けるのを見てシャマルが言った。

「リボルバーシュート！！」

ビュン！

ボウ！

誰かが外から戦闘ロボットを何かで命中させた。

『バトルアップ！チェンジ！ガードファイヤー！！』

『バトルアップ！チェンジ！ガードレスキュー！』

『バトルアップ！チェンジ！ガードスター！』

パトカー、救急車、消防車がロボットに変形を見て屋上の人々は、驚いていた。

「シャマル先生！」

シャマルは、その声のする方を見るとスバルが居た。

「スバル！？なんで此処に居るの！？」

「話は、後です！ガードファイヤーの梯子が出ます！非難してください！」

「わかったわ！」

シャマルは、この人達を非難させるのが最優先だと考えスバルに従った。

ガードファイヤーが屋上から梯子を出した。

『早く降りてください！』

ガードスターが外から言った。

バッバッバッバッバッバッ！！

生き残った戦闘ロボットが梯子で非難する人に銃で発砲した。

「リボルバーシュート！！」

ビュン！

バンバン！

スバルとガードスターが戦闘ロボットをやっつけていった。

『急いで！』

「お願いします！」

『てぇりゃ！』

ガン！

ファイバードが蟷螂ロボットを押していた。

ビュン！

『グア！』

後ろから攻撃があり向くと別のロボットがいた。

「コイツは、俺に任せて他の奴らを始末して来い！」

別んもロボットに乗っているシュラが指示すると蟷螂のロボットは、シャマル達の方に向かった。

『フレイムブレスター！！』

ファイバードは、腕を空に翳すと空からフレイムブレスターがやって来た。

フレイムブレスターがファイバードの真下に下りると合体した。

『フォームアップ！武装合体ファイバード！！』

ファイバードは、後ろから剣を取り出した。

『フレイムソード！！』

ファイバードは、剣を持って構える。

ガキン！

『ぐうう！』

フレイムソードとロボットの片手のドリルが出て鍔釣合いに成った。

『全員非難したようだな！』

ガードスターが確認をした。

ダッダッダッダッダッダッダッ！！

蟷螂のロボットがガードスターとスバルに襲い掛かった。

『メットオン！』

【プロテクション！】

ガードスターからメットが出て来てスバルの前にも防御魔法を張り跳ね返した。

『合体だ！』

『『おう！』』

ガードスターは、二人に指示した。

『フォームアップ！』

ガードスターが胸の辺りに変形しガードファイヤーが胸を収める部分と両腕、両腿に変形しガードレスキューが両足に変形して装着した。

『三体合体！ガーディオン！！』

ガーディオンに成った。

『たぁ！』

ガーディオンは、蟷螂ロボットにバルカン砲を発射し動きを止めた。

『スバル今だ！』

ガーディオンが蟷螂ロボットの後ろに居るスバルに言った。

『ディバインバスター！！！』

スバルの右手のナックルから数個のカートリッチが出て来てそのまま蟷螂ロボットに向けて発射した。

ドォォォォン！！

蟷螂ロボットは、爆発した。

『サンスライサー！！』

ファイバードの胸のエンブレムが取れてロボットのドリルの辺りを壊した。

ファイバードの額が光出した。

『フレイムソード・チャージアップ！！』

剣の刃に炎が纏い怪物目掛けて構えた。

『えええいいいい！！！』

シュパ！！

ドオオオンンン！！

ロボットは、ファイバードの必殺技で爆発し一つの脱出ポットでにげって行った。

無事に血液検査試験管を持ち出そうとした時「ちょっと！」

ビク！

三人は、驚き振り向くとシャマルがいた。

「何でしょうか？」

火鳥がそわそわしていた。

「貴方、人間じゃないでしょう。」

シャマルがはっきりと言った。

「あの！お願いです！この事は、誰にも言わないで『ケンタすまねぇ・・・。』・・え!?」

ケンタが言おうとするとガードファイヤーの声がした。

『じ・・実は・・・「あたしも知っちゃったんです。」すまねぇ・・コイツ等管理局員なんだ・・』

青髪の少女が不味い雰囲気で言いガードファイヤーも彼女の事情を詳しく言った・。

「お願いします！じいちゃんが世界平和をしている事に誰にも言わないで！！」

ウルウルウル

ケンタが捨てられた子犬の様な目でスバルとシャマルに言った。

（（そ・・そんな目で見ないで！！））

二人の心は、ユニゾンしながら思った。

「ね・・ねぇ・・スバル、この事は、なのはちゃん達には、内緒で

良いわよね？」

シャマルは、冷や汗をかきながら言った。

「そうですね・・何だか・・可哀想に思えてきましたし。」

スバルもシャマルと同意見の様らしいく、それを聞いた火鳥達も喜んだ。

「でも何でガードファイヤーが知っている？」

チンクがガードファイヤーに聞いた。

ゴン！

ガードスターがガードファイヤーの頭に拳骨をした。

『この馬鹿、このスバルって言う子が乗っているのを知らないで俺達に通信をかけてきたんだ。』

ガードスターは、呆れながら言った。

『それでその通信を聞いた時には、彼女の悲鳴で私達も驚いてしまったんだ。』

詳しく言えば、スバルがガードチームの通信を聞いてしまって「えええええ！！？」

『『『！！？？』』』

ガードチーム達も驚いて確かめるとスバルがガードファイヤーの中に居た。

ガードスターは、仕方ないのでスバルに一時だけ協力してもらう判断をした。

「そう言うなら仕方ないと思うよ。」

火鳥がみんなの前で言った。

『しかしファイバード！我々の存在は、地球人に知られてはいけないのだぞ！』

ガードレスキューが言った。

「けど、ハカセやドクター達には、知られたじゃないか。」

火鳥が言うとガードチームは、言い返せなくなってしまった。

「それにこの二人にも平和を純粋に思うエネルギーが満ちている。」

火鳥が言うとスバルとシャマルは、言い返せなくなった。

こうしてスバルとシャマルは、なのは達に内緒で宇宙警備隊協力管理局員と成った。

第四話：恐怖の血液ウィルス（後書き）

ケンタ「海の底に怪物が出た！？きっとドライアスの仕業だよ。でも俺達の言う事を信用しないんだぜ！？ああ！海底基地が壊されちゃう！　太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ　第五話　ＳＯＳ　深海三千メートル　次回も世界平和！」

第五話：ＳＯＳ　深海三千メートル（前書き）

ディエチとセインの活躍を載せました。

第五話：ＳＯＳ　深海三千メートル

火鳥は、虫眼鏡でセインと一緒にチャンプを見ていた。

その奥では、天野とジェイルがエースバロンの中を調べていた。

「まったく設計どうりです。」

「見ても何所が、どうやって変形するのかやっぱり分からん！」

ジェイルと天野は、自分達が設計した物がどうやって変形するのか理解できなかった。

「じいちゃん達、設計しておいて良く言うよ。」

「エースバロンもご苦労さんね。」

ケンタとハルカが見ていた。

『いいや、地球の平和を守るためだ。ふはぁ～～・・・』

ポォーー！！

エースバロンが、あくびをすると体から蒸気が吹いた。

「「アチィ！アチィ！！」」

「！」

「うわぁぁ！！」

火鳥とセインは、少しの蒸気熱位大丈夫だがジェイルと天野が熱そうだった。

『あ、すまない！』

「エースバロンさん。テレビ見ますか？」

茶髪の後ろに髪を束ねた女性が尋ねた。

女性は、ディエチと言う。

主な能力は、遠距離からの砲撃と遠くの物を全て見る事が出来る。テレビをかけるとニュースがやっていた。

日本の海域でレアメタルを発見したが怪物がその海域で発見され視察のため日本とミットチルダから教授が派遣され港から出港することになった。

「ハカセ！」

ジェイルは、天野に言うと天野もその怪物の映像を見て驚いた。

「これは、ドライアスのロボット！こうしては、おれん！ワシ等も行くぞ！」

天野達は、急いで港に向かった。

港では、起動六課と警察が合同で警備をしていた。

「佐津田刑事、これも重大な仕事ですね。」

佐津田刑事んも隣に居たティアナが居た。

「そうだ！人知れず人々の為に働く者・・・これも全てお天道様が見てくれる物だ。」

佐津田刑事が空を見ていると（この空が全ての行いを見てくれるんだ。）ティアナは、佐津田刑事の言葉に心を打たれた。

「へぇ～、そうなんですね。」

「そうだ！ん？お、お前は！天野の！？」

佐津田刑事は、火鳥の顔を見て驚いた。

「火鳥兄ちゃん！」

その声に佐津田刑事は、振り向いた。

ギロ！

「あ、天野！！」

佐津田刑事は、天野達を睨んだ。

「げ、佐津田刑事！？」

ケンタは、驚いた。

「コラ！社会の敵！何しに来た！」

佐津田刑事が天野達の方に向かって来た。

「調査団の命を救いに来たんじゃ。Ｄｒ．ジャンゴのロボットがその海域に居るんじゃ。」

天野は、怯まずに言った。

「Ｄｒ．ジャンゴ！？」

佐津田刑事とティアナは、首を斜めにした。

「そうじゃ！調査団の派遣など直ぐにやめさせるんじゃ！」

天野は、真剣に言った。

「ぐはっはっはっはっ！！」

佐津田刑事は、笑い出した。

「何が可笑しい！？」

「そうだ！」

天野とジェイルが佐津田刑事を睨んだ。

ガシッ！

佐津田刑事は、二人の胸倉を掴んだ。

「嘘を付いてまた良からぬ事を貴様等は、企んでいるんだろ！？」

バサッ！

天野とジェイルが振り払って佐津田刑事を睨んだ。

「ハカセの言う事が信じられないのか！？」

ジェイルは、佐津田刑事の胸倉を掴み言った。

「犯罪者の言う事を信じれるか！」

「人聞き悪い事を言うな！」

天野もジェイルと一緒に言った。

そこに船に乗ろうとしている調査団が居てジェイルと天野は、そっちに向かっていった。

「「おーーーいい！！」」

天野とジェイルが調査団の教授たちに手を振ると彼等が振り向いた。

「あれは、変な研究をしていた天野くんじゃないのか！」

日本の教授の一人が言った。

「そこに居るのは、何時も研究で認められなかったジェイルじゃないか！」

ミットチルダの教授が言った。

「何だと！ワシの研究だけじゃなくジェイルくんを馬鹿にしよったな！」

天野は、日本とミットの教授を睨んだ。

「ぐあはっはっはっはっはっはっ！呆れた科学者だなじいさん、あんちゃん！」

佐津田刑事は、ワザ笑いした。

「馬鹿にするな！じいちゃんとにいちゃんは、世界の平和の研究をしているんだぞ！」

ケンタは、佐津田刑事に言った。

「ぐはははは！！どんな研究をしているのかね！？」

教授達が天野に聞いてきた。

すると・・・・・

「今・・・ドクターとハカセを馬鹿にしたな・・・！」

ギロロ！！

そこには、同行していたトーレの目が瞳孔を開いていた。

「ひぃ！」

タッタッタッタッ！！

教授たちは、逃げるように船の中に入って行った。

「トーレ！ディエチ！行くぞ！！」

不愉快な顔をしてジェイルは、車に戻った。

「そのとおりじゃ！行こうケンタ、ハルカ、火鳥！」

みんな行こうとするとトーレが、佐津田刑事の前に立った。

「おい・・ゴリラ！今度ドクターとハカセの悪口を言ったら貴様の大好きなお天道様が見られなくなるからな・・・！」

その威圧感で何時もの佐津田刑事なら

「公務執行妨害」っと言うがトーレの前で言ったらもう後が無いと直感して動けなかった。

「ん？（あ、スバル姉ちゃん！あれ？）」

ケンタは、車に乗る前に警備をしていたスバルに会ったが隣の人物を以前知っているかの様に思い出していた。

「ん？」

金髪の女性は、ケンタが見たので振り向いた。

（この人…フェイト先生に似ている様な…）

ケンタは、学校のフェイト先生が眼鏡を掛けて長い髪を後ろに丸く束ねていたが別人だと思って車に戻った。

Ｄｒ．ジャンゴが研究所で作戦会議室に居た。

「馬鹿モン！あれほど見つかるなと言っただろが！」

ジャンゴは、見つかった原因のゾルを叱った。

しかし、ゾルは、反省の顔を見せなかった。

「仕方ねぇだろ！あんなデカいメカを見つけ難くするのは！基地の中に有るんだぞ！」

ゾルは、言い返した。

「ふん！力馬鹿は、頭も使えないのか！？」

「何だと！？」

レジアスは、ゾルを馬鹿にするとゾルも向きに成った。

『止めんか！此処で仲間割れをしている場合か。』

ドライアスの声でゾルは、改まった。

「そうだ！もっとコイツに言ってやれ！メカの資金をしているのは、私だと言う事を！」

「その通りだ！ワシの命令に従う様に言え！」

レジアスとＤｒ．ジャンゴは、ドライアスに言った。

『貴様等は、作戦と資金援助をしていれば良い…命令を下すのは、このドライアスだ！』

ドライアスの威圧感にＤｒ．ジャンゴとレジアスは、何も言えなく成った。

「一度しか言わないからよく聞け！」

Ｄｒ．ジャンゴは、説明を始めた。

海底基地の地下に火山活動誘発ミサイルを撃ち込み火山の噴火、及び大地震、大津波が起き更には、大量の火山灰が地上に降り光が無い闇の世界に成る作戦だ。

「それを見つかった挙げ句オメオメ戻ってきおって！」

Ｄｒ．ジャンゴは、ゾルを睨んだ。

「分かったよ！頭を使えば良いんだろ！」

ゾルは、海底基地に向かって行った。

海底基地では、ミットと日本の教授達に作業員らが怪物の写真を見せた。

しかし、日本の教授も地球の環境上この生物が居るとは、考え難いと判断しミットの教授等も同じ意見だった。

「ん？何だあれは！？」

海底基地の窓から作業員の一人が巨大な海蛇の様な怪物が此方に向かって体当たりして来た。

ガコン！ギィン！

怪物は、海上と繋ぐケーブルを遮断し海底基地の外に穴を開けた。

「大変だ！浸水して来たハッチを閉めろ！」

作業員等は、ハッチを閉めると同時に避難した。

それを計りゾルが海底基地の指令室に戦闘ロボット数体を連れて火山活動誘発ミサイルをセットをした。

「後は、人間が作った機械にお任せだ！ぐっはっはっはっはっ！」

ゾルは、指令室で笑っていた。

「じいちゃん、ジェイルにいちゃん。機嫌を直してよ。」

ケンタは、研究所でまだ機嫌の悪い二人を説得していた。

「ドクター…」

「機嫌を直してください。」

他のトーレ以外のナンバーズもケンタ同様に言った。

「仕方ないわよ。あんな事を言われたら誰だって怒るわ。」

ハルカは、二人の気持ちを理解した。

ディエチがテレビを点けると臨時ニュースがやっていた。

「ただいま緊急ニュースが入りました。先ほど海底基地に行っていた調査団の通信が途絶え最後に作業員が怪物が…っと言う通信で途絶えてしまいました。」

「じいちゃん！ジェイルにいちゃん！」

ケンタが二人に言うが振り向かない。

「ワシ等は、知らん！」

「…」

二人は、強情に研究の合同作業をしていた。

「「出来た！」」

二人は、何かを作り上げてケンタ達に見せた。

「何これ？」

不思議なカプセルにケンタ達は、聞いた。

「これは、通常の酸素ボンベの１００本分に匹敵する物じゃ。」

天野は、ケンタ達に説明した。

「それじゃ！」

海底基地の人々を助ける為とケンタ達は、思った。

「待て待て！使うとは、一言も言っておらんぞ！」

天野とジェイルは、頑固に言ったが周りのケンタ達が悲しい顔をしてジェイルも
「仕方ないです」と言う顔で天野を見た。

「仕方ない！持って行け。」

天野が言うとケンタ達は、喜んで現場に行く準備をした。

エースバロンに乗った火鳥達は、海底基地に着いた。

「ん！？」
基地の外には、怪物が徘徊していた。

「エースバロンは、此処で怪物と戦ってくれ！ディエチ、君は、ドリルバロンの中で待機だ。」

『了解！』
「わかった」

火鳥は、エースバロンを怪物と闘う様に指示しディエチもドリルバロンの中で愛用の武器イノーメスカノンを持って待機していた。

火鳥とケンタとセインは、ファイヤーバロンに乗り換えて基地の中に入った。

「ん！？」

ドタ！

「「わぁあ！」」

ケンタとセインは、戦闘ロボットが前の窓ガラスに行き成り出て来て驚いた。

「ケンタ、セイン！掴まっていろ！」

ファイヤーバロンで戦闘ロボットを何とか振り払った。

「けど何処に科学者達は、居るのかな？」

「前方１０メートルの先に生命体の熱反応を確認した。」

火鳥が熱反応のする方にファイヤーバロンを向かわせた。

「だ…誰か助けてくれ！」

「無駄だ…此処は、海底３０００メートルの場所だ。…？」

何かがシェルターの壁の裏から聞こえてきた。

ガコン！

シェルターの壁を壊して中に入った。

「急いでこの車に乗ってください。」

火鳥達の指示で教授達と作業員らをファイヤーバロンの中に乗せた。

エースバロン達が怪物と戦闘をしていると怪物は、基地に向かって突進した。

ガコン！

ゴオォォォ！

マリンバロンが怪物の作った巨大な穴で吸い込まれそうに成っていた。

『マリンバロン！ん！？』

ゴオォォォ！

怪物が基地に巨大な穴を作ってしまった。

『ファイバード！大変だ！怪物が巨大な穴を開けて基地の中は、もう直ぐ大量の水圧が入って来る！』

「何だって！？」

火鳥は、エースバロンから脅威の連絡を聞いた。

火鳥達は、脱出ポットの前にファイヤーバロンを止めた。

「さあ、早く中に入ってください。」

「早く入って！」

火鳥とセイン、ケンタは、教授達や海底基地の作業員らを脱出ポットに誘導した。

「酸素も無くなるのも時間の問題だぞ！」

「心配ないよ！」

ケンタは、手に持っている物を見せた。

「この酸素ボンベは、一個に普通の酸素ボンベの百個分が入っているんだから！」

「だったら尚更、そんなのをこんな水深で使ったら爆弾一個と同じ位だぞ！」

教授の一人が言った。

（もうじいちゃんとジェイルにいちゃんのドジ！）

ケンタは、ジェイルと天野に心の中で文句を言った。

「外から司令室から操作出来れば良いんですが…」

「外から出てやってみます。」

火鳥は、外に向かった。

「無茶だ！今の水圧だとからだがペチャンコになるぞ！」

「心配しなくても大丈夫だよ。」

ケンタが言うと火鳥は、ニコニコしながら海中を泳いでいた。

「そろそろ火山活動誘発ミサイルがマントルに到達するな、そろそろ噴火するな。そうなれば、オレも只じゃすまないな。」

水面から火鳥がゾルの前に出て来た。

「聞かせて貰ったテメェー等の悪事。」

火鳥がゾルに向かって言った。

「この野郎！」

ゾルが腰から銃を取り出した。

バン！

「てりゃ！」

火鳥は、避けてゾルの頭に横蹴りをしゾルは水の中に落ちて行った。

ウィィィン　ウィィィン

火鳥は、司令室のサイレンに気づいて見るとミサイルがマントルに到達していようとしていた。

火鳥は、外で戦っているエースバロンに連絡した。

『なるほど、奴等の狙いはそれか。ドリルバロン、ディエチ！マントルに進行しているミサイルを破壊しろ！』

「分かった！」

ドリルバロンは、地下に潜った。

火鳥は、脱出ポットを切り離す装置を見つけて作動させた。

「ケンタ脱出が出来るぞ！」

火鳥は、ビスターを使って連絡した。

「本当！」

『ファイヤーバロンに手伝わせる！』

火鳥が言うとファイヤーバロンが変形して外に出た。

「兄ちゃん駄目だよ！何処かが引っ掛かっていて動かないよ！」

ケンタは、慌てていた。

『落ち着くんだケンタ。何か方法がある筈だ！』

火鳥が励ました。

「ケンタ！あたしが行くよ！この酸素ボンベを使えば！」

ケンタの後ろに居たセインが言った。

セインが壁に向かった。

「ＩＳ発動ディープダイバー！」

セインは、壁をすり抜けた。

そして手元にあった酸素ボンベをポットの切り離す部分に付けてケンタ達の元に戻った。

地下に居るドリルバロンは、ミサイルの進んだ通路に入りディエチがイノーメスカノンを持って外でミサイルに標準を合わせていた。

「ＩＳ発動ヘヴィバレル！」

ボォォォォン！！

ドカン！

ミサイルは、見事に破壊に成功した。

「よくやった！ドリルバロン、ディエチ！」

ミサイルの反応がなくなった事を見てディエチとドリルバロンを火鳥は、誉めた。

「ケンタ、そっちは、どうだ！？」

火鳥がケンタに聞いた。

「きっと上手く行くよ！」

ケンタ達は、伏せていた。

バッバッバッバッバッ！！

そしてファイヤーバロンは、セインが設置した酸素ボンベを撃った。

ポン！！

脱出ポットは、見事に海底基地から離れた。

「やった！ん！？」

怪物が脱出ポットに向かって体当たりして来た。

『そうは、させん！』

エースバロン達が怪物に攻撃しながら脱出ポットを海上まで護衛した。

海上に上がった脱出ポットは、ジェットバロンがジェット機：ビークルモードに変形して捜索の為に向かっていた舟の上に乗せた。

セインとケンタは、脱出ポットから出て船の上で火鳥の安否を心配していた。

ブシャァァァァ！

火鳥が海上からジャンプして出て来た。

「ファイヤー・・・ジェェェェット！！」

火鳥は、空からファイヤージェットを呼び変形し巨大なロボットに変わり火鳥も変化したファイヤージェットに向かって宙を飛び体が火の鳥の様に成りロボットの中心に乗り移った。

『チェェェンジィィ・ファイバード！！』

火鳥は、ファイバードと成った。

『フォームアップ！五体合体サンダーバロン！』

エースバロンは、サンダーバロンに合体した。

『フレイムブレスター！！』

ファイバードは、腕を空に翳すと空からフレイムブレスターがやって来た。

フレイムブレスターがファイバードの真下に下りると合体した。

『フォームアップ！武装合体ファイバード！！』

ファイバードは、後ろから剣を取り出した。

『フレイムソード！！』

ファイバードは、剣を持って構える。
海底では、サンダーバロンが海蛇のロボットを回転させ海上の投げた。
『ファイバード今だ！』
ファイバードの額が光出した。
『フレイムソード・チャージアップ！！』
剣の刃に炎が纏い怪物目掛けて構えた。
『えええいいいい！！！』
シュパ！！
ドオオオンンン！！
ロボットは、ファイバードの必殺技で爆発し一つの脱出ポットでにげって行った。
「タイミングピッタリ♪」
ケンタは、ファイバードとサンダーバロンのコンビネーションに驚いた。
そしてファイバード達は、またそらの彼方に行ってしまう所を見た
佐津田刑事は、「名も告げずに去って行く。我々警察官も見習いた

いな～。」

佐津田刑事は、そう考えるのであった。

（すごかったな～火鳥さん達。）

スバルは、ファイバードを見てそう思った。

翌朝、新聞でファイバードの写真が出ていた。

『あれだけ出て私の記事は、無いのか？』

エースバロンは、少しガッカリの様らしい。

「謎のヘルメット少年って…」

「壁潜り娘…」

ケンタとセインは、こんなあだ名を付けられてショックの様だった。

「仕方ないよ。ケンタくん、セイン。」

ジェイルは、二人を慰めた。

「そうじゃ！それがワシ等と宇宙警備隊の宿命じゃ。」

天野は、みんなに言った。

「ケンタ、セイン、ディエチ。そんな事は、無いよ。僕達の行いは、お天道様が見てくれているよ。」

火鳥は、朝日を見ながら言った。

第五話：ＳＯＳ　深海三千メートル（後書き）

ケンタ「今日は、久しぶりの休日だ。でもハルカが家計が大赤字に成りじいちゃんを睨んできた!?　う～～こぇ～～…。でもそんな時にジェイルにいちゃんが外に出た。何だろ?普通出ないのに?太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒＳ　第六話　ジェイルの恩返し　次回は、ちょっとお休み♪」

第六話：ジェイルの恩返し（前書き）

ジェイルが天野の為に発明品を作ります。今の環境問題の事も交えて書きました。更新遅れてすいません。

第六話：ジェイルの恩返し

天野平和科学研究所の一日は、ハルカがウーノに朝食が出来たので天野達を起こす事を頼まれてから始まる。

ガチャ

ウーノは、身仕度を整えた姿のままケンタや天野、ジェイルの部屋に一人づつ入って行く。

ケンタは、ジェイルや火鳥が研究所にやって来てから空き部屋に住んでいる。

「ケンタくん。朝よ。起きて。」

ウーノは、ケンタが寝ているベットを揺らしたが

「う…う〜ん…後五分…」

ケンタは、起きないがそれが何時もの日常である。

「ケンタくん…遅刻しちゃうわよ。」

「う…え!?もうこんな時間！って今日は、休日じゃない。」

ケンタは、ウーノの言われた事で驚いたが今日が休日である事に気付いた。

しかし、もう目が覚めてしまって眠れなかった。

「ふふ、おはようケンタくん。」

ウーノは、寝ぼけているケンタに挨拶をした。

「ウーノ姉ちゃん…何時もだけど冗談キツいよ…」

ケンタがホッとしながらウーノに言った。

「じゃあ、顔を洗ってリビングに行ってね。」

ウーノは、ケンタの部屋を後にした。

次にジェイルの部屋にウーノが行った。

ガチャ

「ドクターおはようございます。」

ウーノは、ジェイルの部屋に入るとジェイルがもう身仕度を整えて何時もスーツの上の白衣を着てベットに座っていた。

「おはようウーノ。」

ジェイルも挨拶をした。

ジェイルは、リビングに向かった。

そして天野の部屋に向かって行った。

ガチャ

「ハカセおはようございます。朝ですよ。」

ウーノが部屋を開けると床には、様々な発明品が散らかっていて天野は、ハンモックに寝ていた。

「ぐがぁ〜〜」

天野は、いびきをかいて寝ている。

ウーノは、ハンモックの下の有るボタンに向かった。

ポチ！

シュン　ドタン！

天野の寝ているハンモックが回転し真下に落ち下に有るクッションで受け止められた。

「いてぇてて…あ、おはようウーノ。」

天野は、リビングに向かった。

ウーノもリビングに向かう時、火鳥と赤いショートカットの娘と後ろに髪を挟んだ娘が来た。

「おはようウーノ。」

火鳥がウーノに挨拶をした。

「おはようウーノ姉。」

「おはようッス♪ウーノ姉。」

二人も挨拶をした。

ショートカットの娘は、ノーヴェ。

主な能力は、拳や足を使う格闘能力に優れていた。

後ろに髪を挟んだ娘は、ウェンディ。

主な能力は、運搬や空中戦で有している。

「おはようございます。火鳥さん。おはようノーヴェ、ウェンディ。」

ウーノは、三人に挨拶をした。

火鳥は、ロボットなので寝る事が無い。

その為、目覚めたノーヴェ、ウェンディに研究所の案内をしていた。

ウーノ達は、リビングに向かった。

朝食を取ってジェイルと天野は、研究を始める頃ハルカが郵便ポストから手紙が来る頃で取りに行った。

「!?こ・・これは、何なの!?」

ハルカが驚いた紙には、天野が鉄や精密な部分を取り寄せた請求書だった。

ドッドッドッドッドッ！！

バダン！

「おじいちゃん！！」

ハルカがすごい剣幕で天野を睨んだ。

「？ハルカどうしたんじゃ？」

天野もハルカが睨んでいる理由に分からないでいた。

「この大量の請求書の山は、何なの！？」

ハルカの両手には、大量の紙があった。

「何を言っているんじゃハルカ。世界平和には「世界平和と家計の赤字に何の関係が在るのよー！！！」

ハルカの勢いに天野だけじゃなくジェイルやケンタ、火鳥、ナンバーズをも震えた足せていた。

「こ・・怖い・・」

ケンタが言うとナンバーズも

「怖いな・・」「怖いッス。」「怖いわハルカちゃん・・」

トーレ、ウェンディ、ドゥーエもケンタと同意見だった。

ギロ！

ハルカがケンタ、トーレ、ウェンディ、ドゥーエを睨んだ。

「「「「いいえ！何でもありません！！」」」」

その日から家計の事でハルカに関わるのをナンバーズとケンタは、触れると怖いと言う事に気付いた。

「ハカセ・・・」

ジェイルは、自分で恩があるハカセに何も出来ない自分が恥ずかしくなった。

その日は、ハルカが天野に請求書の細かい事で尋問されていた。

「じいちゃん・・」

ケンタは、非難して天野の心配をしていた。

「お気の毒に・・」「じいさん・・」「けど、ハルカ今は、怖いモン。」

ウーノ、ノーヴェ、セインも天野を助けてあげたいがハルカの怖さに何も言えなかった。

「ケンタくん、火鳥くん、みんな、私は、少し用事を思い出したからしばらくの間は戻れないから。」

ジェイルは、白衣のまま外に出かけた。

「どうしたんだろドクター？」

「ノーヴェ！私達も行くッスよ。」

「おい！ウェンディ！しっかたないな～。」

ノーヴェは、ジェイルを追ったウェンディの後を着いて行った。

此処は、消防署の駐車場でスバルがガードファイヤー、ガードレスキューの洗車をしていた。

「気持ちいいガードファイヤー？」

スバルは、スポンジに泡をたて二人を洗っていた。

『ああ、気持ちいいぞ。スバル。』

ガードファイヤーは、足ツボマッサージされている口調でスバルに言った。

『けど、良いのかスバル？久しぶりの休暇なのに私達の洗車をして？』

ガードレスキューがスバルに気を遣った。

「良いの、良いの！私、これでもお姉ちゃんやお父さんが管理局で何時も居ないから家の車の洗車をよくしていたから！さあ！これで終わりだよ。」

スバルがホースから水を出し二人の付いた泡を洗い流した。

『ありがとな！』

『久しぶりに洗車をして気持ち良かったよ。』

二人は、スバルにお礼を言った。

「ん！あれって！？」

道路を見るとジェイルが何所かに向かっていた。

「ケンタくんトコのドクターさんだ。」

『スバル・・・まだ名前を覚えていなかったのか？』

ガードレスキューは、ジェイルが可哀相だと思った。

「！？何だろ？」

スバルは、ジェイルの後ろから二人の自分と同じ年位の少女達がジェイルを気付かれない様に歩いていた。

『スバル、俺も一緒に行こうか？この中は、少し飽きた所だ。』

そう言いガードファイヤーは、スバルを乗せると二人の少女とジェイルを追った。

『こら、スバル、ガードファイヤー！ったく仕方ないな・・・』

ガードレスキューも皆の後が心配なので追って行った。

ジェイルは、町を外れてゴミ処理場に向かった。

「う～～…この機械の部品は、使えるな・」

ジェイルは、クーラーやテレビ等のスクラップを見て考えていた。

「何やっているッスかドクター？」

「ドクターさん何しているんだろうね。」

ウェンディとスバルは、不思議そうにジェイルを隠れて見ていた。

「つーか！何なんだよ！お前ら！」

ノーヴェとウェンディは、ジェイルを尾行していたが、スバルとガードファイヤーとガードレスキューも付いて来た事に町の中で気付かれた。

スバルとウェンディは、意気投合してジェイルの尾行をしていた。

『良いじゃねぇか？別に減るものじゃねーし。』

「一々口を挟むな！妖怪消防車！」

ノーヴェは、ガードファイヤーを睨んだ。

『何だと！？このツンデレ娘！』

「うるせえぞ！」

ノーヴェとガードファイヤーは、口喧嘩していた。

「落ち着くッスよノーヴェ。」

『そうだぞ、落ち着けガードファイヤー。』

ウェンディとガードレスキューは、二人を宥めた。

「さてと！」

ゴソゴソ

ジェイルは、白衣から工具を出した。

「少し大掛かりに成るな…」

ジェイルは、口を動かしつつ作業を続けた。

機械の使えない部分も他の機械で補う事で使える様に連結した。

「さて出来た！」

ジェイルは、複雑なコアの様な物が中央部分に取り付けて形は、不細工だが支障無い機械を作り上げた。

「何かドクターすごい事しているッス…」

「これが科学の力なのかな…？」

スバル達は、ジェイルの発明品に唖然としていた。

※ジェイルは、今まで言わ無かったが天野よりも発明の天才です。ただ天野の意識を尊重している為あくまでサポートをしている。

「チェックもＯＫみたいだし。」

ジェイルは、白衣から何かまた取り出した。

「よっし！それ！」

ポイ！シュドォォォン！

ジェイルは、小さいカプセルの様な物を出して投げると煙が出て来て軽車タイプのワゴン車が出て来た。

「『（（（（（（これじゃあ某アニメの携帯カプセルじゃないの！？））））））』」

スバル達は、ジェイルの実力に驚いた。

ジェイルは、発明品を軽車のトランクに積んで乗った。

「それじゃあ行くか！」

ブゥゥゥン！

ジェイルは、また何処かに行った。

隠れていたスバル達が車の後を追いかけてガードファイヤーとガードレスキューにそれぞれ乗った。

「さて着いたな…」

ジェイルは、車を止めてある建物の前に降りた。

「ドクター何で此処に止まったッスか？」

「此処って…！？」

スバルとウェンディは、ガードファイヤーの中で座って見ていた。

スバルが建物の看板を見て驚いた。

【慈善団体アーク】と書かれた建物だった。

ピンポーン！

『はい。どちら様でしょうか？』

インターホンから女性の声がした。

「すいません。私、Ｊと申します。御社の社長様は、今おられるでしょうか？」

『どの用な御用件でしょうか？』

女性がジェイルに聞いた。

「貴方方にも私にも得する用件です。騙されたと思い社長様に合わせて貰えないでしょうか？」

ジェイルが言うと建物の入り口が開いた。

ジェイルは、発明品を持って中に入った。

「って中に入ったぞ！どうするんだ！？」

ノーヴェがガードレスキューに聞いた。

『落ち着いて私達は、建物の中も聞こえる事も出来る。』

ガードレスキューがそう答えた。

ガードレスキューやガードファイヤーは、それぞれの通信機から中

の様子を音だけでスバル達に聞かせた。

『私が社長の○○です。』

社長らしき人の声が聞こえた。

『私は、Ｊと申します。』

ジェイルの声も聞こえた。

『では、我々にも貴方にも得する話を聞かせて下さいますか?』

社長が言った。

『はい。まず私が発明したコアレインを説明します。』

ジェイルが発明したコアレインは、砂漠化したアフリカ等の貧困地帯に雨を降らせる物である。

『それは、本当ですか!?』

社長は、驚いた口調だった。

『はい!でしたら今から砂漠化した地帯に行き試して見ますか?』

ジェイルも自信いっぱいだった。

こうしてジェイルは、砂漠化した地帯に行くためヘリで空港に向かった。

『けどどうやって行くんだ?俺達飛べないんだせ?』

通信を聞いていたガードファイヤーは、スバル達に聞いた。

「だったら大丈夫ッスよ!」

ウェンディは、笑顔で答えた。

「エースバロン、ウェンディッス聞こえるッスか?」

ウェンディは、研究所の案内の時に火鳥から小型のエースバロン対応の通信機を持たせていた。

『ああ、大体の事情は、二人が通信機を使ってからわかっている。研究所からジェットバロンを出すから三人は、先回りが出来るぞ。』

エースバロンは、研究所からジェットバロンを出した。

しばらくすると、ジェットバロンがスバル達の待機している場所に向かって来た。

「それじゃあ行くッスよ♪」

ウェンディは、ジェットバロンに乗りスバル、ノーヴェも乗ってアフリカに向かった。

「ん？（さっきジェットバロンが居た様に見えたけど…疲れているのかな？）」

ジェイルは、飛行機の中でジェットバロンらしき物を見たが幻覚と思った。

「J氏？どうしたのですか？」

社長がジェイルに聞いてきた。

「いえ、何でもありません。」

ジェイルは、飛行機でアフリカに向かっている最中だった。

「ふっ～～バレて無いッスよね…？」

ウェンディは、誤ってジェイルの乗っている飛行機に近寄りすぎてノーヴェが変わって何とか気付かれずに済んだ。

「ってバカ！こんなに近寄りすぎたドクターに気付かれるだろが！それに当たったらあたし達も死ぬだろうが！」

ノーヴェも少し顔に汗が一滴流していた。

スバルは、口から泡を出して気絶していた。

スバル達は、ジェットバロンをジェイルが装置を設置しそうな場所まで行った。

「此処がアフリカッスか?何か砂漠しか無い厳しい場所ッス。」

ウェンディは、砂漠化地帯に来てそう感じた。

ブゥゥゥン!

後ろから車がやって来た。

「おい!隠れるぞ!」

ノーヴェが言った言葉通りにジェットバロンを隠している場所から車が来るので隠れた。

車からジェイルが出て来て車の後ろからコアレインをアークの従業員が設置しジェイルが指示した。

「J氏?本当に成功するのでしょうか?」

社長がジェイルの隣で言った。

「大丈夫です。必ず成功します。」

ジェイルは、コアレインを設置した事を確認すると装置の前に立った。

「それでは、始めます。」

ジェイルが装置のレバーに手を置き引いた。

ガチャ！

ウィィィィン！

コアレインが音を唸りながら上空の雲の気流が急激に変わって行く。

「うわ！何ッスか！？今まで雲が少ししか無かったのにいきなり雲が多く成ったッス！」

ウェンディが驚くとスバル、ノーヴェも口では、言わないがかなり驚いた表情に成っていた。

雲が空の彼方まで光が見えない位まで集まった。

そして…

ピッチャン！

乾いた砂漠の土に一滴の水が落ちた。

ポット　ポットポット！ジャーーー！！

雨に成り乾いた大地を潤し始めた。

「せ…成功だぁー！！」

社長も雨の中で服が濡れたが、それよりも今まで人工の雨を降らせた事に喜んでいた。

ジェイルも誇らしげに笑った。

「ありがとうございます！貴方のお陰で貧困地帯だった砂漠地帯も農業が出来る様に成りました！」

社長が雨の中ジェイルの両手を握り締めて握手した。

「私は、君に御礼がしたい何でも言ってください。」

社長は、ジェイルに御礼がしたいらしい。

「でしたら…」

ジェイルの発明品が成功したのを見てスバル達は、ジェットバロンで日本に帰って行った。

空港内で社長とジェイルが別れの挨拶をしていた。

「これがこのコアレインの設計図と操作の説明書です。会社に帰ったらしっかりと作ってください。それとお金は、スイスの銀行に天野平和科学研究所宛てに毎月送ってください。」

ジェイルは、あの時社長が御礼をしたいと言うので支援のお金を毎月送って来る条件で合意した。

「貴方に出会えて良かった。さようなら。」

社長が別れの挨拶をジェイルにした。

「それでは…」

ジェイルは、空港を後にした。

ガチャ！

「ただいま戻りました！」

ジェイルは、天野平和科学研究所を開いたらみんなテレビの釘づけだった。

「ドクター、おかえりなさいませ。」

ウーノは、ジェイルをおかえりの挨拶をしに来た。

「ただいまウーノ。みんな、どうしたんだい？」

ジェイルがウーノに聞いた。

「はい。何でも雨の降らないアフリカで倒産仕掛けた企業が開発した機械で雨を降らせたと言うニュースが流れいます。」

ウーノがジェイルに説明した。

「ジェイルにいちゃん、それも開発した人は、名も告げずに去っちゃったんだって！」

ケンタが言った。

「ワシも見習いたい位じゃ。」

天野は、関心していた。

ジェイルがウーノに聞いた。

「ところでウーノ。あの後、どう成ったんだい？」

「はい。一時間前までハルカちゃんの尋問がありましたが途中、郵便屋さんが来て小切手を渡して来ました。それもかなりの金額が振り込まれていました。」

そのお陰で家計の赤字が無くなりハルカは、天野を尋問するのを止めた。

「そうか！それは、良かった。」

ジェイルは、嬉しそうに言った。

「「（ドクターってスゴいな（ッス）！）」」

ノーヴェとウェンディは、ジェイルを今まで以上に尊敬した。

しかし、ジェイルの活躍を知っているのは、三人の少女と宇宙警備隊の三人だけであった。

第六話：ジェイルの恩返し（後書き）

ケンタ「世界中の科学者の会議にじいちゃんも行く事に成った。けど招待状も無いのに行っても大丈夫かな？えっ！リニアモーターカーが止まらない！？大変だ！　太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒＳ　第七話　激突！　弾丸列車　次回も世界平和！」

第七話：激突！　弾丸列車（前書き）

益々面白くします。

第七話：激突！　弾丸列車

天野平和科学研究所では、天野とジェイルが門の前で待っていた。

「いい？俺が支えているからしっかり自転車を動かしてね火鳥兄ちゃん。」

ケンタが火鳥の乗っている自転車を支えて言った。

「どう兄ちゃん？」

「車輪の遠心力でバランスが取れるわけか。」

火鳥は、自転車から離れたケンタ無しで一人で乗っていた。

「そうそう！上手いわ火鳥さん！」

ハルカも初めて自転車に乗る火鳥を誉めた。

「はっはっはっ、自転車って面白いね！」

火鳥は、自転車を乗っていたが大道芸人の様な乗り方で言っていた。

「ハカセ、ドクター何しているんです？」

入り口で手紙を待っている天野とジェイルに火鳥が聞いた。

「郵便を待っているんじゃ。」

天野は、郵便が来ないのかイライラしていた。

「何を待っているんですか？」

「世界科学者会議の招待状だよ。って火鳥くん何て乗り方をしているんだ！？」

ジェイルが驚くと天野も驚いた。

火鳥は、後ろを見ないで乗っていると茶髪のロングヘアーの娘とショートの少年の様な娘が木の下に居る蟻を見ているが火鳥は、気付かない。

「「キュウ～～～～～・・・」」

二人は、火鳥を下敷きに目を回していた。

目を回している二人の内ロングヘアーの娘がディード。

主な能力は、双剣を使った格闘と飛行能力を持っている。

ショートの髪の娘は、オットー。

主な能力は、フィールドの操作能力である。

しかし結局世界科学者平和会議の手紙は、来なかった。

「どう言う事じゃ！ワシに招待状の手紙も出さんとは！！」

天野は、不満に成っていた。

「こうなったらコッチから乗り込んでやるわい！！」

天野は、着替えの仕度をしていた。

「ちょっと招待状も無いのに会議に行くの！？」

ケンタは、驚いた。

「世界の平和を乱すマイナスエネルギーが増え続けておるんじゃ！そのことを世界中の科学者達に言わねば成らん！」

「けど！おじいちゃん。現に招待状がきてないじゃない。」

ハルカも言った。

「現にドライアスが現れとるじゃないか。これは、ワシの義務じゃ！」

「ハカセ！すばらしいです！」

「感動しました！」

ジェイルと火鳥が天野に拍手をした。

「そうじゃ！ワシが行かなくては！」

天野は、仕度をしていた。

「会議のある場所ってリニアモーターカーが在るんだよな・・じゃあ俺も行く！」

「あたしも行く！！」

ケンタとハルカも出かける用意をしてしまった。

「？？」

火鳥は、ケンタ達が興味ある物が気になった。

Ｄｒ．ジャンゴの研究所では、ジャンゴが世界科学者会議に対しての作戦をドライアスに伝えていた。

『ほぅ。恨みでもあるのか？』

ドライアスは、ジャンゴに聞いた。

「ふん！そんな生易しい言葉じゃない！奴らをこの世から葬り去れば地球の科学は、衰退して暗黒の世界が到来するのじゃ！」

ジャンゴは、恨みある目であった。

『では、作戦を聞こうか…』

ドライアスも作戦が聞きたかった。

世界科学者会議を通っているリニアモーターカーは、世界科学者会議場の司令室がコントロールしている。その司令室を占領して、リニアモーターカーの減速出来ないまま世界科学者会議場のエネルギー源でもある原子力発電所を壊せばその周りの建物や生物は、一瞬で消滅する。

Ｄｒ．ジャンゴは、ドライアスとレジアス中将に説明した。

「なるほど。そうすれば、我々の管理局の犬を育て安い易い訳でもあるな。」

レジアス中将は、不適に笑った。

「そう言う事じゃ。」

Ｄｒ．ジャンゴも不適に笑った。

『面白い。その作戦、必ず成功させろ！』

Ｄｒ．ジャンゴ、ドライアス、レジアス中将の笑い声が響いた。

リニアモーターカーの中では、タキシードを着た天野と火鳥、ケンタ、ハルカ、ウェンディが乗っていた。

「いかん！」

天野は、緊張のあまり席を立った。

「じいちゃん。またトイレ？」

ケンタは、天野が１０分に一回トイレに行く事に気付いた。

「もう直ぐ世界中の注目を浴びるかと思うとワシは、緊張して来たんじゃ！」

天野は、トイレに駆け込む。

「まだ注目されるか解らないのにね。」

「大丈夫ッスか？ハカセ？」

ウェンディとハルカは、不安に成って来た。

世界科学者会議場では、起動六課も警察と合同で警備していた。

「佐津田刑事、警備の方の確認終了しました。」

ティアナが佐津田刑事に報告した。

「ご苦労！」

佐津田刑事は、報告をしに起動六課の隊長の八神はやてほの元に行った。

「警備の配置、終わりました。」

「ご苦労さん。」

はやても佐津田刑事の確認をして状況を把握出来た。

「君が警備主任の一人かね?」

世界科学者会議の主催者の管理局の上層部の男が言った。

「はっ!任務光栄に思っております!」

佐津田刑事は、敬礼した。

「熱心なのは、良いが・・・やり過ぎんでくれよ。」

上層部の男は、佐津田刑事をあまり良い印象には、思っていなかった。

「「しかしですね!現にドライアスが現れているご時世なのですよ。」」

それを聞いた佐津田刑事とティアナは、一緒に反論した。

「はっはっはっ!心配要らんよ。此処は、世界中の科学者が集まる会議場だよ!何の関係があるのだね?」

上層部の男は、自身満気に言った。

「ですが!「佐津田刑事、此処は、落ち着いて!」「そうだぞ!上が言っているんだから!」良いのか?どうなっても知らんぞ!」

佐津田刑事をなのは、ヴィータが抑えた。

佐津田刑事は、ティアナを連れて外の見回りしに行った。

リニアモーターカーの指令室では、作業員が減速の指示を出していた。

ウィィン

「！！何だ君達は！？」

作業員の一人がゾルと戦闘ロボットを見て驚いた。

そんあ事も知らずにリニアモーターカーの中に居る火鳥達は、乗っていた。

ウィィィン　ウィィィン！

天野の両手に持っている携帯マイナスエネルギー探知機が反応している事に火鳥とウェンディは、気付いた。

「ハカセ！起きるッスよ！」

ウェンディは、席で寝ている天野を起こした。

「・・ん！何！？マイナスエネルギー探知機が反応している！」

天野が心配していると次の駅に近いのにリニアモーターカーが減速しない。

「おかしいわ！各駅止まりのリニアモーターカーが駅に止まらずに通り過ぎるなんて！」

『ハカセ！どうしましたか！？』

天野が研究所と繋がる通信機をウェンディが借りてジェイルに連絡した。

「ジェイルくんか！？行き成りリニアモーターカーが減速しなくなったんじゃ！」

天野が説明をした。

「フッフッフッ！どんどんスピードを加速しろ！」

平和科学者会議場の指令室でゾルが不適に笑い作業員達も不安に成っていた。

リニアモーターカーの一番後ろから乗組員が操縦席に向かっていた。

「どうしたんじゃ？」

天野が乗組員に聞いた。

「そ・・それが・・・「それがじゃ、解らん！」コントロールが効かなくて・・・」

乗組員が衝撃の真実を伝えた。

「どう言う事ですか？」

火鳥も聞いて来た。

「止まらないんです・・・」

それを聞いた時、他の乗客も戸惑っていた。

「落ち着いて！こうしても止まらん！ワシをコントロールルームに！行くぞ！火鳥、ウェンディ！」

「「はい（ッス）！」」

火鳥とウェンディは、天野の後を追った。

「部外者は、立ち入り禁止です！」

コントロールルームから別の乗組員が天野達を通さずにコントロールルームに行った。

「この天才科学者をコケにしよって！」

天野は、悔しかった。

「指令室との連絡が途絶えた・・・」

火鳥は、奥のコントロールルームの乗組員の声が聞こえていた。

「原因不明・・すべても装置の制御不能・・・更にスピードが上がっている・・・このままでは、駅に激突！」

火鳥が全ての言葉を天野達に伝えた。

「え！？激突！？」

ケンタも驚いた。

「駅に激突すれば、科学者会議場のエネルギー源でもある原子力発電所に打つかってしまえば、町全体が消滅してしまう！こうしては、おれん！ジェイルくん！」

天野は、通信機を使って研究所に居るジェイルに連絡した。

「解りました！今すぐエースバロンを向かわせます！エースバロン！」

ジェイルがエースバロンに言った。

『解った！今すぐに行く！』

エースバロンは、リニアモーターカーが走っている地点に向かった。

『ファイバード！今、エースバロンの通信を聞いた！俺は、今、世界科学者会議場に居る！』

ガードスターがファイバードの通信に出た。

『会議場の人達を非難する様にしてみる！』

「頼んだぞガードスター！」

火鳥は、通信を切った。

『さって・・・ん！？』

「どうしたのガードスター？」

いつの間にかスバルが居た。

『スバル！頼みがある！世界科学者会議場の人達を非難させてくれ！もう直ぐリニアモーターカーが駅を激突してしまうんだ！』

「わかった！何とかしてみるよ！」

スバルは、会議場に向かった。

「ったく人が真剣に仕事をしていれば、真面目に仕事をするなってどういう事だ！」

「まったくです！」

佐津田刑事とティアナは、不満のままガードスターに乗った。

ウィィン　ウィィン

通信機に応答があり佐津田刑事が出た。

「こちら佐津田刑事！」

［本部より緊急連絡！リニアモーターカーが暴走している！至急会議場の人々を非難させてくれ！］

「な・なんだと！行くぞティアナ！」

「はい！」

佐津田刑事とティアナは、会議場に向かった。

「これで安心だね！」

ケンタが言った。

「いや、いくらエースバロンでも少しずつスピードを緩めていくならともかく・・・行き成りスピードを止めたら線路から外れてしまうって危険じゃ！会議場の指令室の緊急ボタンを押さんことには・・・」

「ハカセ！俺が行くます！」

「しかし！後、１５分には、終着駅に激突するんじゃぞ！」

天野は、不安に言った。

「火鳥兄ちゃん大丈夫なの？」

「ああ！」

火鳥は、リニアモーターカーのドアを開けて飛び降りた。

飛び降りると近くの女性達が乗っていた自転車が会って駆け寄った。

「ちょっとお借りします！」

ビュウウウウウウウッ！

火鳥は、自転車を勢い良く走らせた。

「うおおおおおおお！！！」

火鳥の自転車の走りは、車以上に速かった。

そしてリニアモーターカーの隣に並ぶと火鳥の真上にファイヤージェットが居て前の車にフロントアップをしながら上に飛び自転車を捨てファイヤージェットのコクピットに入った。

ファイヤージェットの後ろからエースバロンが来た。

「遅かったじゃねぇか！」

『無理言うなこれが限界だったんだ。』

「後は、頼んだぜ！」

『了解！』

火鳥は、会議場に向かった。

会議場警備室では、佐津田刑事とティアナが上層部の男とはやてに報告していた。

「馬鹿な！そんな報告は、聞いておらんぞ！」

「本部からの連絡が会ったんです！早く非難させないと大変な事になりますよ！」

佐津田は、懸命に言った。

「ティアナ！」

はやては、通信機を渡した。

「はい！佐津田刑事！」

ティアナは、佐津田刑事に渡した。

「こちら佐津田刑事だ！リニアモーターカーが暴走している！至急、会議場の人々を非難させろ！」

佐津田刑事は、連絡した。

「貴様！何をしているのか解っているのか！？」

上層部の男が一喝した。

「自分の任務を遂行しただけです！」

佐津田刑事もはやてもティアナも同じ意見だった。

「早くしないと会議場が！」

スバルは、急いでなのは達に報告しに向かっていた。

「スバルどうしたの？」

なのはとシグナム、ヴィータも一緒に見回りをしていた。

「あ！大変何です！リニアモーターカーがこの会議場に激突します。急いで非難させて下さい！」

スバルは、肩で息を吸いながら言った。

「けどよ。また佐津田刑事の勘違いかもしれねんだぞ！」

ヴィータがスバルに言った。

「なのはさん、ヴィータ副隊長、シグナム副隊長…来て下さい！合わせたい人がいます！」

スバルは、今の状況を理解していないと判断し三人を外に連れて行った。

「スバル！いったい何処に合わせたい奴が居るんだ？」

ヴィータは、周りを見ても人の声も形も無い状況だった。

「この人です！」

スバルがパトカーを見せた。

「スバル…少し頭をひやそうか…」

「付け上がる様に成ったか…スバル…！」

「ふざけるなぁ！」

三人がスバルに制裁をしようとする時

『彼女の言っている事は、本当だ！』

ガードスターが三人に話し掛けた。

「「「……えっ、ええーー！！」」」

三人は、パトカーが喋った事に驚いた。

『チェンジ！ガードスター！』

ガードスターがロボットの姿でなのは、シグナム、ヴィータの前に現れた。

『脅かしてすまない。私は、ガードスター。宇宙警備隊の者だ！今は、それよりもリニアモーターカーの激突を防ぐ事をしなければならない！急いでくれ！間も無くリニアモーターカーが最終駅に激突してしまう！』

「お願いします！なのはさん、シグナム副隊長、ヴィータ副隊長！」

スバルとガードスターが三人に頼んだ。

「スバル！これからリニアモーターカーの激突を防ぎに行くよ！」

なのはは、この状況を理解してスバル達に指示を下した。

「はい！」

四人は、デバイスでバリアジャケットに変身し暴走しているリニアモーターカーの地点まで向かった。

火鳥は、会議場に着きファイヤージェットから降りて司令室に向かった。

「？！」

司令室の入り口には、ドライアスの戦闘ロボットが見張りをしている事に気付いた。

「やっぱり貴様等の仕業か！！」

バッバッバッ！！

火鳥の声に反応した戦闘ロボットは、銃を火鳥に撃った。

ピュッ！

ドカ！ドン！

「てぃりゃああ！」

火鳥は、戦闘ロボットの銃を交わし蹴りや正拳で倒した。

ウィィン

「貴様は！？」

司令室に居たゾルは、入り口が開いた事に気付き振り向くと

「テメェー等が悪さをしていたのか！」入り口に火鳥が立っていた。

「フンンン！ハァ！！」

ゾルは、スーツを破り火鳥に襲い掛かって来た。

しかし、火鳥は、ゾルの攻撃を交わして次々と戦闘ロボットを倒していった。

「早く緊急停止ボタンを！このままでは、この最終駅に激突してしまいます！」

作業員が指で緊急停止ボタンを指した。

火鳥は、急いでボタンに触ろうとするが

ガシッ！

「そうは、させねえ！」

ドン！

「ぐぁ！」

ゾルは、火鳥の腕を片手で掴んみもう一つの片手で殴り飛ばした。

ガァァン！

ゾルは、両手を組んだまま緊急停止ボタンの付いた機械ごと壊した。

「グッハッハッハッ！もうリニアモーターカーは、止まらない！」

ゾルは、不適に笑った。

「たぁぁぁ！」

「うりゃゃゃ！」

火鳥が掛かろうとし、ゾルも殴り掛かろうした。

ピュッ！

火鳥は、ゾルの真上に来て後ろに飛んだ。

「逃げる気か！！」

「テメェーと遊んでいられねぇんだよ！」

火鳥は、司令室を後にした。

火鳥は、外で止めて在るファイヤージェットに駆け寄った。

「ファイヤー・・・ジェェェェット!!」

火鳥は、空からファイヤージェットを呼び変形し巨大なロボットに変わり火鳥も変化したファイヤージェットに向かって宙を飛び体が火の鳥の様に成りロボットの中心に乗り移った。

『チェェェンジィィ・ファイバード!!』

火鳥は、ファイバードと成った。

空にいるサンダーバロンにファイバードが乗った。

『エースバロンどうだ!?』

ファイバードがエースバロンに聞いた。

『駄目だ!このままでは、駅に激突してしまう!』

エースバロンも止めようとしているが駅まで止まらない。

「なら我々も加勢する!」

ファイバードの後ろから女性の声がした。

「行くぞ!スバル!高町!ヴィータ!!」「おうよ!」「はい!」

「私達が防御魔法でリニアモーターの速度を一緒に止めます。」

【プロテクション】

リニアモーターに結界を張り中に居る人々に影響しないように全力で防御魔法を張った。

『ぐおおお！！』

「うう！」

「止まれぇ！」

キュウウウウンンンン・・・・・・・

リニアモーターは、ギリギリで駅に止まった。

「と・・止まった！」

リニアモーターの中に居るケンタがホッとした。

『エースバロン。』

『大丈夫だ！リニアモーターも動かない。』

エースバロンがリニアモーターを空中に浮かせてファイバード達に言った。

ピュウウウウ！！

突如リニアモーターの前に強い風が吹いた。

空からコマの様なロボットが現れた。

「こうなったら貴様らごと始末してやるぜ！！」

ロボットに入っているゾルがこっちに向かってくる。

『このままでは、着陸出来ん！』

エースバロンは、リニアモーターを吊らしていて素早く動けない様だ。

『バトルアップ！チェンジ！ガードスター！』

ガードスターがロボットに変形した。

『私が相手だ！』

バン！バン！

ガードスターは、ガードブラスターでロボットの軸の辺りを攻撃した。

「飛竜一閃！！」

シグナムがガードスターの加勢に入った。

しかし、軸の高速でガードスターとシグナムの攻撃をはじき返された。

『フレイムブレスター！！』

ファイバードは、腕を空に翳すと空からフレイムブレスターがやっ

て来た。

フレイムブレスターがファイバードの真下に下りると合体した。

『フォームアップ！武装合体ファイバード！！』

『とりゃ！』

ファイバードは、肩から砲撃をしたがまったく効いていない。

『奴の弱点は！？』

ファイバードが探すとロボットの軸に目を当てた。

ファイバードは、後ろから剣を取り出した。

『フレイムソード！！』

ファイバードは、剣を持って構える。

『てりゃぁぁ！！』

キィン！

ファイバードは、フレイムソードで軸を斬った。

ロボットは、体勢を崩した。

『今だ！』

エースバロンは、リニアモーターを地上の安全な場所に置いた。

「この！」

ロボットは、変な鉄の塊に鎖が付いたのでファイバードを絞めた。

『この！』

ガードスターとシグナムは、攻撃を仕様とした。

ガン！

『「ぐああ！」』

二人は、別の鉄の塊で吹き飛ばされた。

『いかん！』

エースバロンがファイバードの所に行った。

『フォームアップ！五体合体サンダーバロン！』

エースバロンは、サンダーバロンに合体した。

ピュン！ピュン！

サンダーバロンは、両肩のビーム砲でファイバードに巻かれた鎖を壊した。

『ヨシ！』

ファイバードの額が光出した。

『フレイムソード・チャージアップ！！』

剣の刃に炎が纏い怪物目掛けて構えた。

『えええいいいい！！！』

シュパ！！

ドオオオンンン！！

ロボットは、ファイバードの必殺技で爆発し一つの脱出ポットでにげって行った。

「私達は、スバルから聞いたんだけど・・」

スバルをなのはが見ていた。

「ごめんなさい！スバル姉ちゃんには、俺達が口を止めたんだよ！だからスバル姉ちゃんを責めないで！」

ケンタがなのはとシグナム、ヴィータにも言った。

「まあ、それは良いけど・・あたし達は、局員だし火鳥って言ったか?管理局に連行しなくちゃな・・・」

ヴィータも深刻そうな顔に成った。

「お願い!兄ちゃん達を連れて行かないで!」

ケンタは、泣きそうに成っていた。

「(こら!ヴィータ!)」

シグナムは、ヴィータを睨んで念話をした。

「(そうだよヴィータちゃん!子供相手に可哀相だよ!)」

なのはも念話で言った。

「(それにケンタくん達は、悪い人間には、見えませんよ。)」

スバルも念話で言った。

「うう!わかったよ!けど知っているのは、あたしとシグナム、なのは、スバル、シャマルだけだろ!だったら見守る事にしたらどうだ?」

ヴィータも骨が折れて諦めた。

こうしてヴィータ、なのは、シグナムも宇宙警備隊管理局協力隊員

に成ってしまった。

第七話：激突！　弾丸列車（後書き）

ケンタ「火鳥兄ちゃん、スバル姉ちゃんん達に連れられてミットチルダに来てしまった。羨ましいな～ってええ！管理局で火鳥兄ちゃん達宇宙警備隊の処分会議が行われているの！？ミラクルまずいよ！　太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒＳ　第八話　勇太郎と起動六課　次回も世界平和！」

第八話：勇太郎と起動六課（前書き）

太陽の勇者ファイバードのキャラクターにオリキャラとオリジナルロボットを書き込みました！！

第八話：勇太郎と起動六課

「今日もいい天気だ。」

火鳥は、買い物の為に町に出て来ていた。

「あれ？火鳥さん！」

火鳥が振り向くとスバルが居た。

「あれ、スバル。おはよう。」

火鳥は、笑顔で答えた。

「スバル？どうしたの？」

スバルの後ろから声がした。

「あ！貴女は！」

火鳥も顔を知っている人物だった。

「高町さん！おはようございます。」

火鳥が気づいたのは、高町なのはだった。

「あ、貴方は、この前お世話に成った火鳥さん。おはようございます。」

なのはは、火鳥に挨拶をした。

「この前の事件は、ありがとうございました。」

なのはは、火鳥にお礼を言った。

世界科学者会議の暴走リニアモーター事件で火鳥達宇宙警備隊には、お世話に成っていた。

「そうだ！火鳥さん。私達のミットに行きませんか？勿論、シャマルさんの新しい助手と言う形で来てくれませんか？」

なのはも火鳥の事を気に入っていた。

「え？けど・・お買い物に行かないと。」

「大丈夫です。私が地球に帰る時に買物を買いに行った時間で帰しますから。」

なのはが火鳥を説得をした。

「わかりました。」

火鳥は、行く事になった。

「それじゃ！此処じゃあ何なんで人の居ない場所で。」

なのは達は、場所を変えた。

「レイジングハート！」

なのはがデバイスを空に翳した。

ピィィィン

空が行き成り光だし消えると別の場所に来ていた。

此処は、なのは達起動六課の本部だった。

「此処が、魔法の世界ですか。」

火鳥は、見る物が無い乗り物や建物があり興味があった。

「火鳥さん。此処からは、私が施設の中を案内しますね。」

スバルが火鳥に言った。

「それの方が良いね。スバル、私は、これから本局で会議が在るから火鳥さんを頼むね。」

なのはは、スバルに任せた。

「はい！お気を付けて行って来てください。」

「お気を付けて行って来てください。」

火鳥とスバルは、なのはを入り口から見送った。

管理局ミット本部では、なのはが上層部にこの前の事件の報告をしていた。

「以上が報告です。」

なのはが大体の説明を伝えていた。

「しかし、このロボット達が我々の見方と言う証拠は、無いぞ。」

上層部の体格の良い長い髭を偉そうに生やした男が言った。

「それに我々の事を利用しようとしてワザと見方の振りをしているのでは？」

上層部の一人も揚げ足を言った。

「しかし！彼らは、一度だけじゃなく何度も我々の手助けをしてくれました。それを今更処分は、余りにも軽率な行動と思います！」

なのはは、火鳥達を信じたのであった。

「まあまあ！落ち着いて下さい高町一等空尉。私も彼女の意見に同

感です。」

一番奥に管理局の三特提督のミセットの隣に座る眉毛が長く目が見えなく胸まで髭を長く伸ばした七十代の老人が言った。

「ノルウェール一等空将。」

なのはは、改まった。

「その通りね。」

「ミセット提督。」

ミセットは、ノルウェールの上司で幾つ物の戦いを彼のお陰で此処まで生きたので相棒の言葉を信じていた。

「しかし！もしも我々の大事に触る可能性があったらどうするのですか！？」

ノルウェールの左隣の席に座るレジアス中将は、反発の口調で言った。

「とにかく、此処は私に責任を全て委ねると言う形で良いでしょうか？」

ギロ！

静かな口調から気配でレジアスを睨むノルウェールであった。

レジアスは、その威嚇に何も言えなかった。

「では、この会議は、白紙と言う形で終わりにしましょうか？皆さん。」

こうして火鳥達の処分は、無効と言う結論に成った。

「あの！ノルウェール一等空将！」

なのはがミセットの後ろ居るノルウェールを止めた。

「何でしょうか高町一等空尉？」

ノルウェールは、右手に持っている杖を止めてなのはを見た。

「先ほどは、ありがとうございました！」

なのはは、お辞儀をした。

「いやいや！私は、君の言う方が正しいと思っているよ。同じ管理局員としてお礼を言わせてもらうよ。」

ノルウェールは、さっきの威嚇とは違いなのは達の事を孫扱いしていた。

「それでは、私達は、これで。」

ノルウェールとミセットは、帰って行った。

それからスバルに機動六課の中を案内してもらい、シャマルの居る救護室に入った。

ガチャ！

「あら！お帰りなさいスバル・・・って火鳥さん！？どうして此処に！？」

シャマルは、火鳥が来た事に驚いていた。

「はい！なのはさんとスバルに誘われまして。」

火鳥が正直にシャマルに言った。

「シャマル先生・・・ちょっと・・」

スバルは、部屋の隙でシャマルを連れて行った。

「え！火鳥さん達の処分会議が本局で行われているの！？」

「しー！聞こえますよシャマル先生！なのはさんが本局の人達を説得しているので何とも言えません。」

二人は、小声で会話をしていた。

「あの！どうかしましたか？」

ビク！

「「何でもありませんよ！！」」

二人は、火鳥に聞かれてはいけないのであった。

「？」

火鳥は、不思議そうに見ていた。

「あ、そう言えば！」

火鳥が二人の勘に気付いたのかと思っていた。

「もう昼食の時間だ！」

ズゴン！

スバルとシャマルは、扱けた。

「あ！でも今日は、ティアやフェイト隊長もまだ地球に居ますよ？料理は、誰が？」

そう、なのはとスバルは、今日が機動六課の待機の日で居ないのは、ティアナとフェイトだけだった。

「じゃあ、僕が料理をしますよ。」

火鳥が二人に言った。

「そうですか？じゃあお願いします。」

スバルは、火鳥の料理が食べてみたくなった。

火鳥は、厨房に行き材料を取り出した。

「ん？シャマル先生。」

厨房で火鳥が作業をしているとシャマルが入り口に居た。

「あの・・火鳥さん？」

「何ですか？」

火鳥は、聞いてきた。

「私も料理一緒にして良いですか？」

シャマルは、言い難そうに火鳥に言った。

「良いですよ。」

火鳥が笑顔でシャマルに言った。

「え・・？でも私・・料理得意では、無いんですけど・・・」

「大丈夫ですよ。シャマル先生の作った料理僕も食べてみたいです。」

こうしてシャマルと火鳥のこの世で最強最悪の料理が始まった。

食堂では、スバル、キャロ、エリオ、シグナム、ヴィータ、はやて、ヴァイスなどの起動六課メンバーが席に着いていた。

「お待たせしました。」

火鳥とシャマルが料理を持って来た。

料理が運び終わると

「ただいま戻ったよ！」

なのはも帰ってきた。

「なのはさん。ちょうど良かった！僕が作った料理なんです。どうぞお食べに成ってください。」

火鳥がなのはに料理を誘った。

「そうですか。喜んで食べます。」

バタン！

食堂の方から二人の男女が来た。

「よぉ！久しぶりだな！」

「皆さん。こんにちわ！」

男は、５０代位であり、女は、スバルと同じ位の青い髪をしてロングヘアーであった。

「ギン姉！お父さん！」

スバルが二人を見て言った。

「お父さん？ギンネェ？」

火鳥は、スバルの言った言葉が気に成った。

「火鳥さん！この人達は、私の姉のギンガ・ナカジマと父のゲンヤ・ナカジマです。」

スバルは、二人を火鳥に紹介した。

「初めまして。僕の名前は、火鳥勇太郎と申します。スバルさんには、お世話になっています。」

火鳥は、礼儀正しく二人に言った。

「おいおい！そんなに畏まるよ！」

「いえいえ！こちらこそ、スバルがお世話になっています。」

二人も火鳥に挨拶をした。

皆揃い（ティアナとフェイト以外）が手を合わせた。

［いただきま～す！］

パク！

火鳥とシャマルは、食べて行くが他のメンバーが一口目で動かなくなった。

ガクガク・・・ブルブル・・・・バタン・・・

エリオ、キャロ、スバルが席から倒れて他のメンバーは、洗面所に向かった。

「おかしいな・・栄養の配合量を間違えたかな？こんなに美味しいに。」

火鳥は、皆の残した料理を食べて処分した。

「本当に美味しいのに。」

シャマルは、美味しそうに言った。

「「「「それは、お前の味覚がおかしいからだ！」」」」

シグナム、ヴィータ、なのは、ゲンヤが言った。

ミットの管理局のレジアス中将の事務室では・・・・

「くそ！今一歩の所でアノ爺に！」

レジアスは、机を叩いて悔しがった。

「ほほう・・そんなに悔しいのか？」

レジアス一人しかいない筈の部屋に聞き慣れた声に気が付いて振り向くとＤｒ．ジャンゴがいた。

「キサマ！何時の間に！？」

レジアスは、ジャンゴに居る事も気付かなかったので驚いた。

「お主が悔しい気持ちをこのワシが晴らしてやる。」

ジャンゴは、不適に笑った。

「何だと!?」

レジアスは、その言葉に驚いた。

「まず、お主ら陸上部隊が所有しているアインヘリアルを何かの原因で動かせば、それを宇宙警備隊の原因に仕立て捕まえて、更にお主が嫌いな奴も倒せる!これで一石二鳥じゃ!」

レジアスに作戦を説明した。

『その作戦・・・使えるな・・・』

通信機の画面からドライアスとゾル、シュラが現れていた。

倉庫にシュラとゾルを転送させ、中に在るアインヘリアルに居る局員が見回りをしていた。

「誰だ!」

ドン!

局員の一人がゾルに気付いてデバイスを構えるがゾルが局員に向かって突進した。

ゾルとシュラは、戦闘ロボット達をアインヘリアルの中に居れ自動遠隔操作の装置を設置した。

「ふっふっふっ・・これで、適当に壊せば！」

「ガッハッハッハッ！楽しむだぜ！」

シュラとゾルは、笑っていた。

起動六課の昼食後、火鳥に事務仕事を一緒にしていた。

「終わりました。」

ドン！

はやてとシグナムに山の様な書類を渡した。

「え!?もう終わったん?」「おい!火鳥!本当に大丈夫なのか?」

はやては、火鳥の速さに驚き、シグナムも本当に間違いないのか心配であった。

パラパラ・・・・・

二人は、火鳥の書いた書類に目を通した。

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

黙々と全部をチェックしていった。

「あ・・合っている・・・」「たった4分で・・・これだけの書類を!」

二人は、火鳥の凄さに唖然とした。

「そうだ!火鳥さん。スバル達の方も頼んでいいかな?特にスバルを。」

はやては、火鳥に頼んだ。

「わかりました!」

火鳥は、スバル達の仕事場に向かった。

「あーー!全然解らないよ~~~!!」

はやての言う通りに成っていた。

「スバルどうしたんだい？」

火鳥は、心配そうに言った。

「えっ！火鳥さん！？どうしたんですか！？」

いつの間にか火鳥がいて驚いていた。

「『あーー！全然解らないよ～～～！！』からいるけど・・・どうしたの？」

「あ・・あの・・・・実は、此処の所が解らなくて・・・」

スバルは、火鳥に書類を渡した。

「ここは、こうやって・・・ここも・・・」

火鳥は、スバルにアドバイスをしてあげた。

「え！？うっそー！！」

スバルは、火鳥のアドバイスで簡単に解けていった。

「わかったかい？」

「はい！ありがとうございます！！」

スバルは、火鳥にお礼を言った。

「「火鳥さん～～こっちもお願いします。」」

エリオとキャロが火鳥に助けを求めてきた。

「ああ、今行くよ！」

火鳥は、エリオとキャロの元に来てスバルと同じ方法で教えた。

「「ありがとうございます！！」」

こうして、三人の面倒を見た火鳥であった。

ピュドーン！！！！！！

「「「「「「！！！？？？」」」」」」

火鳥達は、窓から見るとミットの町にアインヘリアルの砲撃がビルに直撃した。

「これは・・・！？」

火鳥も驚いていた。

「スバル！エリオ！キャロ！行く【その必要は無い！】・・・！？」

火鳥達は、知らない声が介入してきた事に驚いた。

「レジアス中将！！」

なのはがそう言った事で火鳥は、フッと思い出した。

以前ウーノからマイナスエネルギーを発散している人物の名前だと解った。

【この男が装置を遠隔操作していたと局員の連絡があった。我々に身柄を渡したのちに、この男を軍法会議にかける！！】

レジアスは、強い口調で言った。

「待ってください！【これは、命令だ！！】

レジアスの理不尽になのはも不満に成っていた。

しばらくして、レジアスの部隊の者達が乗り込んできて火鳥の身柄を拘束して管理局に向かった。

管理局に入ると、牢の前でピンクの髪の女性が火鳥を拘束した局員

達の前に現れた。

「何だお前は！？」

局員の一人が女性に聞いた。

「はい！レジアス中将の命でここから先は、自分がこの男を牢に連れて行きます！」

女性は、敬礼しながら局員達に言った。

「はっ！失礼した！後は、頼んだぞ！」

局員達は、女性に火鳥の身柄を渡した。

しばらくして女性が牢に連れて行くと人の居ない場所に来た。

「ドゥーエ？何でこんな姿に変身しているんだ？」

「あら♪ばれた！」

女性の髪は、ピンクから茶髪に変わり、声の種類も変わっていた。

「でも、どうしてドゥーエがいるんだい？」

火鳥は、ドゥーエに聞いた。

「ああ、以前からドクターに頼まれていて管理局でレジアスの動きを探っていたの。でも、火鳥は、何でこんな場所にいるの？」

「買い物の途中でスバルにあってからミットに。」

火鳥は、細かい事をドゥーエに説明した。

「なるほど・・そうすると、ドライアスが絡んでくるわね・・」

ドゥーエは、能天気な顔から困った顔に変わった。

「ドライアス！どういう事だ！？」

「う～ん・・私も詳しくは、解らないけどアインヘリアルって兵器を使ったって言う目撃は、嘘だと思う。私もその局員に聞いたら二人組みの大男とノッポの男達が変なロボットと一緒に居たって言っていたけど・・・」

つまり、ドライアスの組んだ作戦らしい。

「それと火鳥！アンタに合わせたい人達が居るの。ちょっと来て！」

ドゥーエが火鳥を連れて牢とは、違う場所に向かった。

ドゥーエは、ある一室の前に止まった。

コンコン！

ドゥーエがドアにノックした。

「あ！お爺ちゃん！私よ！ドゥーエよ。」

ドゥーエは、ある人物をドアから呼んだ。

「はい、どうぞ。」

一室の方から声がしてきた。

ガチャッ！

すると一室に二人の老人と武装局員の数名が居た。

「やあ！来ると思っていたよ。」

老人の一人がドゥーエと火鳥に微笑んだ。

「火鳥。ここは、アンタの事で気にしていたノルウェール一等空将だよ。」

ドゥーエがノルウェールを火鳥に紹介した。

「君が火鳥勇太郎・・・いや、ファイバード久しぶりだな。」

ノルウェールは、火鳥の事をファイバードと読んで懐かしく言った。

「貴方は、もしや・・・フレイムナイト！」

火鳥は、予想もしない人物に会って驚きと喜びに成っていた。

「何で貴方が此処に居るのですか？！」

火鳥には、解らなかった。

「火鳥。お爺ちゃんとは、知り合いなの？」

「え？ああ、この人は、ガードファイヤーの兄のフレイムナイト。私の剣の先生だよ。」

火鳥は、ドゥーエに説明した。

「って事は、お爺ちゃんもロボットなの？」

ドゥーエは、驚いて見ていた。

「いいや、私は、ロボットでは無く。生身の人間に乗り移っているんだよ。」

ノルウェールは、ドゥーエの質問に答えた。

「？」

ドゥーエは、疑問に成った。

「それよりも、今までどうしたんですかフレイムナイト。もう７０年間も連絡が無かったんで心配しました。」

火鳥は、心配していた。

「それは・・・・」

今から、７０年前

その時宇宙警備隊は、ドライアスと同じ強敵を捕らえる為に時空で戦っていた。

しかし、その敵は、時空に穴を開けて逃げようとしていた。

その時フレイムナイトが時空の穴に乗り込んで行き消息が不明と成った。

フレイムナイトの着いた世界では、その敵の力で暗黒に化そうとしていた。

フレイムナイトは、時空の穴に入ったせいでその時の仮初の肉体を壊してしまいエネルギー体のままでこのミットの旧西暦の世界に迷ってしまった。

初めて、地を見た所に死に掛けていた武装局員が倒れていた。

その武装局員から平和を強く思うエネルギーに満ちていて彼：ノルウェールの肉体に乗り移った。

そして、今の火鳥の様に別の乗り物からロボットと成ってその敵を討ちミットを平和にした。

「それじゃあ、お爺ちゃんにも乗り物が有るの!?」

ノルウェールは、頷いた。

バタン!

ドアから勢い良く武装局員の一人が開けた。

「心配いらない。私の部下だ。どうした?」

「ノルウェール一等空将!大変です!起動六課のメンバーがレジアス中将の部隊に捕まりました!」

武装局員から信じられない報告に一同が戸惑った。

「落ち着いて!起動六課のメンバーは、今何処に?」

ノルウェールが武装局員に聞いた。

「はい。今、ミット本部に連行されました。」

武装局員が答えた。

「みんな！」

火鳥がドアに向かおうとした。

「ファイバード！火鳥勇太郎よ落ち着け！」

ノルウェールが火鳥を止めた。

「何故です！このままでは、起動六課の人達は！」

火鳥も戸惑っていた。

「私とミセットがレジアスに直接会って話す。もしも駄目でドライアスの手先が出て来たら起動六課のメンバーの救出に私の部下達と共に行くんだ。」

ノルウェールは、火鳥を説得した。

ノルウェール達は、ミット本部に着くと二手に別れた。

一つ目は、ノルウェールとミセットと部下の4、5人をレジアス中将に会い話し合うグループ。

もう一つのグループは、連行された起動六課のメンバーを救出する班に火鳥、ドゥーエ、6、7人の部下を出した。

「レジアス中将に会わせて貰えるか？」

ノルウェールがレジアス中将の部屋の門番は、レジアス中将に連絡した。

「どうぞ、お通り下さい。」

門番は、素直に通した。

「（これは、何か有るみたいね！）」

「（そうだな…）」

ミセットは、念話でノルウェールに言うと深刻な顔に成った。

一方、火鳥とドゥーエ達は、外から連行された起動六課のメンバーの救出に向かっていた。

ドン！

火鳥は、素早く見張りの武装局員を次々に倒していった。

コクン！

火鳥が頷くとみんな火鳥の後に続いた。

「ん！？」

火鳥は、何かに気付いた。

「ドゥーエ達は、此処で、隠れていろ！」

タッタッタッ！

火鳥は、気付いた場所に向かった。

ダン！

火鳥は、気付いた物をチョップで叩いた。

ドタン！

「これは、ドライアスの戦闘ロボット！」

火鳥は、倒した物がドライアスの戦闘ロボットである事に驚いた。

「火鳥！？」

ドゥーエが駆け寄った。

「これは！？」

ドゥーエが驚くと火鳥は、頷いた。

「ああ。アインヘリアルによる遠隔操作は、全てドライアス達の仕業だったようだ！」

火鳥達は、ドライアスの仕業と確信した。

「誰なの！？」

近くからなのはの声が聞こえた。

「なのはさんですか！？」

火鳥も気付きなのはの声がする方を探した。

「此処です！」

火鳥は、声のする方を自分の体に内蔵された音波探索機でなのは達の場所を探し当てた。

すると壁からなのはの声が聞こえた。

「退いて下さい！ここは、我々が！」

武装局員達がデバイスを構えた。

ピュ―ン！！

緑の光線が壁を貫いた。

ドカーン！！

壁は、見事砕けてしまった。

「火鳥さん！」

なのは達は、魔法封じの手錠をかけられていた。

「はあ！」

ピュン！　グシャ！！

火鳥は、次々に手錠を手刀で壊していった。

レジアス中将の事務室でミセットとノルウェールが話し合いに成っていた。

「いい加減にして下さい！！」

レジアス中将がミセットとノルウェールに一喝した。

「ならば、行き成り起動六課のメンバーを連行するのは、どうかと思いますよ。」

ノルウェールは、レジアスの一喝を無視して話を続ける。

「おいおい！もう良いだろ！レジアス。」

ドアからゾルとシュラが現れた。

「ゾル、シュラ！貴様等！！」

レジアスは、二人が自分で二人を話し合いで追い出そうとしたが予想外の事が発生した。

「（ノルウェール！）」「（ああ！ファイバード！起動六課のメンバーを！！）」

ノルウェールは、火鳥に念話で通信した。

火鳥は、ノルウェールの念話を聞いて動き出した。

「分かりました！さあ！みんな非難するんだ！」

火鳥は、みんなに指示した。

「ドゥーエ！みんな頼む！」

火鳥は、ドゥーエに頼んでノルウェールの居る部屋に向かった。

「火鳥さん！？」

なのはは、火鳥が別の場所に向かう事に気付いた。

「ぐあああああ！！」

ノルウェールとミセットの側にいた武装局員達は、ゾルとシュラの攻撃に倒れていった。

「待ちやがれ！！」

ヒューン！

火鳥がドアを蹴って入って来た。

「ドライアスの手下共！今度は、この俺が相手に成ってやる！！」

火鳥は、ゾルとシュラに言った。

「なのはさん！はやて部隊長！私達も火鳥さんの加勢に！」

非難したスバルがなのはに言った。

「私となのはちゃんシグナムとヴィータ、スバルで行くからエリオ、キャロは、待機している様に！」

はやてが指示を出してデバイスで変身しまた基地の中に入っていった。

戦闘ロボット達が火鳥に襲い掛かった。

「雑魚共は、引っ込んでやがれ!!」

火鳥は、戦闘ロボットを倒して行った。

「そこまでだ!」

シュラの声に火鳥が止まった。

見るとノルウェール達の方にゾルとシュラが銃を構えていた。

「こいつ等がどうなっても良いのか?」

火鳥は、動けずにいた。

「クロスファイヤーシュート!!」「飛竜一閃!!」「オウラァァァァ!!」「リボルバーシュート!!」

次々とシュラとゾルに攻撃が当たった。

「火鳥さん!大丈夫ですか!?」

なのは達がバリアジャケットを着た状態で火鳥に話かけた。

「加勢に来たぞ!」「今です!火鳥さん!」

シグナムとスバルが火鳥に言った。

「恩にきるぜ!!」

ドォォン！！

火鳥は、シュラに向かって回し蹴りを食らわせた。

「決着は、後で付けさせて貰うぞ！！」

ゴォォン！！

壁から巨大なロボットの手が伸びてゾルとシュラは、それに乗った。

「なのは！みんなを非難させてくれ！！」

火鳥は、最上階から跳び落ちた。

「火鳥さん！！？」

はやては、火鳥がミット本部の最上階から飛び降りた事に驚いた。

「はやて部隊長、大丈夫です！」

「え！？」

はやては、スバルの言った言葉の意味が解らなかった。

「ファイヤー・・・ジェェェェット！！」

火鳥は、空からファイヤージェットを呼び変形し巨大なロボットに変わり火鳥も変化したファイヤージェットに向かって宙を飛び体が火の鳥の様に成りロボットの中心に乗り移った。

『チェェエンジィィ・ファイバード！！』

火鳥は、ファイバードと成った。

『望み通り決着を付けてやるぞ！！』

ファイバードがロボットに向かって言った。

ギィガガガ！！

『！？』

ロボットは、変形してアインヘリアルに変わった。

ウィィィン　ウィィィン！！

アインヘリアルは、砲撃をチャージしていた。

そして・・・・・・

ウィィィィィィン！！！！

ヒュッ！！

ファイバードは、砲撃をかわすと砲撃の当たった所が焦土と化した。

ピュン　ピュン！！

アインヘリアルは、次に町をチャージ無しでも可能なビームを放った。

それが、なのは達の方にも当たりそうに成るとき

ブォォォン！！

下から別のビームが弾いた。

『バトル・アップ！チェンジガードファイヤー！！』

ガードファイヤーが変形してなのは達の方に向かって飛び乗った。

「ガードファイヤー！」

スバルは、ガードファイヤーが居る事に気付いた。

「間に合った様ね・・・・」

ドゥーエは、以前にガードチームに連絡していた。

『大丈夫か？スバル。』

ガードファイヤーがスバルに言った。

「久しぶりだな。ガードファイヤー・・・」

ノルウェールは、ガードファイヤーに言った。

『兄貴！？』

「え、エッーーーーーー！！？」

スバルは、驚いた。

「ミセット！私も行ってくる！」

ノルウェールが言うとミセットは、頷いた。

町から何か音が聞こえる。

「あれは！？」

スバルは、その向かって来る乗り物に驚いた。

ボォォォォォ！！

汽笛を鳴らした真っ赤なＤ５１であった。

「フレイムライナー！！」

ノルウェールは、叫ぶと彼の体が火鳥同様に光り出してフレイムライナーに吸い込まれていった。

『チェェェンジ！フレイムナイト！！』

フレイムライナーは、変形して深紅のロボットに成った。

ガジン！

ファイバードは、アインヘリアルに踏まれていた。

『ファイバード！！』

また後ろから声が聞こえた。

『バトルアップ！チェンジ！ガードレスキュー！』

『バトルアップ！チェンジ！ガードスター！』

他のガードチームも現れた。

『ガードスター！ガードレスキュー！』「加勢する！」「よお！」

フレイムナイトとガードファイヤーとシグナム、ヴィータが現れた。

『『フレイムナイト！！』』

二人も驚いた。

『行き成りだが行くぞ！！』

「「『『『おう！！』』』」」

ガードチームとフレイムナイトは、アインヘリアルに突進した。

ドタン！！

「くそ！」

ゾルは、アインヘリアルからビームをファイバード達に放った。

『『『メットオン！！』』』

ガードチームは、メットを装着した。

『ストロングホース！！』

ガードファイヤーは、腕からホース状の物でアインヘリアルの片手を縛った。

『ハイデンションバンテージ！！』

ガードレスキューも腕から巨大な包帯をアインヘリアルの片手に縛った。

『スターブラスター！！』『フレイムマグナム！！』「飛竜一閃！！」「おうらぁぁぁぁ！！」

バッバッバッバッバッバッ！！

ガードスターとフレイムナイトは、自分達の腰から銃を取り出して攻撃しシグナムとヴィータも同じ様にしていた。

ビリ！　ピュン！　ピュン！！

『『『『『「「グアアアアアア！！！」」』』』』』

アインヘリアルは、縛っていた物を破りファイバード達に攻撃した。

ビュン！

『ぐあああ！！』

ドン！

アインヘリアルの砲撃を食らいファイバードが倒れた。

「ファイバード！」

スバルは、叫んだ。

「スバル～～～！！」

なのはが飛行魔法でスバルの元に来た。

「なのはさん。大変です！火鳥さんが！」

「落ち着いて！これをシャマルさんから渡された物を火鳥さんに届けて！」

なのはがアル物をスバルに渡した。

「なのはさん！これって・・・・・」

「いいから！早く！」

「はい！ウィングロード！！」

スバルは、ウィングロードでファイバードの元に急いだ。

「フッ！これで終わりだ！」「食らうがいい！！」

アインヘリアルの砲撃のチャージが完了してファイバードに向かって攻撃をしようとしていた。

『ファイバード！くぅ！』

ガードチームとフレイムナイトとシグナム、ヴィータは、動けずにいた。

「火鳥さん！これを！」

ファイバードの真上にスバルがアル物を下に居るファイバードに渡した。

「食らえ！！」

ピュドーン！！！

アインヘリアルの砲撃が放たれた。

ガシッ！

ファイバードは、アル物を片手に持ち砲撃の前に翳した。

ピュウ！ドーン！

砲撃がアル物に全て吸収されアインヘリアルに跳ね返って来た。

「「ぐあああああ！！」」

ゾルとシュラの乗っていたロボットに直撃した。

『フレイムブレスター！！』

ファイバードは、腕を空に翳すと空からフレイムブレスターがやって来た。

フレイムブレスターがファイバードの真下に下りると合体した。

『フォームアップ！武装合体ファイバード！！』

ファイバードは、後ろから剣を取り出した。

『フレイムソード！！』

ファイバードは、剣を持って構える。

ファイバードの額が光出した。

『フレイムソード・チャージアップ！！』

剣の刃に炎が纏い怪物目掛けて構えた。

『えええいいいい！！！』

シュパ！！

ドオオオンンン！！

ロボットは、ファイバードの必殺技で爆発し二つの脱出ポットでに

げって行った。

（良かった！って火鳥さんに渡したのって・・・確か・・・女子のお風呂場の鏡だよね・・・・）

まさか、自分達の使っている鏡がアインヘリアルに役立つとは、思っていなかったスバルであった。

「「「火鳥さんありがとうございました！！」」」

スバルとエリオ、キャロは、火鳥にお礼を言った。

「じゃあ！火鳥行こうか！」

ドゥーエは、自分がこのミットに来る為にジェイルから渡された転送装置を使った。

「じゃあね！お爺ちゃん！また遊びに行くからね♪」

ドゥーエが手を振るとノルウェールも手を振り替えした。

どうやらドゥーエは、またミットに行くみたいだ。

こうして、火鳥と起動六課の活躍でアインヘリアルの活用停止と廃

棄処分に最終決定された。

レジアスは、ドライアスとの関係の証拠がアインヘリアルのビーム攻撃のせいで無くなってしまった。

第八話：勇太郎と起動六課（後書き）

ケンタ「感動だって！世界平和に役立つって・・・え！？世界中の花が枯れ始めた？きっとドライアスの仕業だ！　太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ　弟九話　花よ蘇れ！　次回も世界平和！！」

弟九話：花よ　蘇れ！（前書き）

なのはとエリオ、キャロが出てきます。

弟九話：花よ　蘇れ！

天野平和科学研究所の庭の世話は、トーレの日課の一つであった。

「うん。みんな、今日も元気だな！」

嬉しそうにお花達と会話するトーレ。

「おはよう、トーレ。」

窓から火鳥が顔を出した。

「火鳥か。丁度良かった。見てみろ。」

「うわぁ♪」

花達が朝日の光を浴びて咲いた。

「素晴らしい！」

火鳥も花が咲いた所を感動した。

「そうだろう！花が咲く瞬間に私も美しいと感じさせられる。」

トーレは、花にお世話をして言った。

バタン！

火鳥は、天野の部屋に入った。

「ハカセ！見てください！すごいんエネルギーです！感動しました。」

興奮した口調で火鳥は、天野に言った。

「う・・・まだ、五時じゃないか・・・」

天野は、眠いらしい。

「ハカセ！これは。世界平和の役に立ちそうです。」

「何！？世界平和じゃと！」

ドン！

天野は、ハンモックから落ちた。

「あっはっはっはっはっ！」

その後ケンタ達に火鳥が言うとケンタとハルカが笑った。

「何がおかしいんだい？」

「だって花が咲いただけじゃないか。」

ケンタ達は、花の事で話す火鳥が面白かった。

「そんな事は、無いよ。火鳥くんが花が咲く瞬間に感動する心が大事なんだ。」

それを聞いていたジェイルが、トーレと一緒に花を持って言う。

「そうじゃ。火鳥のそう言う心が世界平和に大きく役立つからのぉ。

火鳥の発見は、意味あるものじゃ。」

天野も花を見ながら言った。

「そうだ！今、世界中の花を集めたフラワーフェスティバルって言うイベントをやっているの。今度見に行きましょ。」

ハルカが言うと火鳥とトーレも興味あった。

此処は、町の中でエリオとキャロが居た。

今日は、起動六課の休日を使って二人がデートをしていた。

「エリオくん・・・」

「どうしたのキャロ？」

エリオは、顔を真っ赤にしながらキャロに聞いた。

「（よっし！）キャ、キャロ！」

ササ！

エリオは、キャロに花束を渡した。

「／／／／／エリオくん！！？」

突然のプレゼントにキャロも真っ赤に成った。

「こ・・これ、僕からの・・・」

エリオも勇気を出して言った。

「／／／／／エリオくん・・・」

キャロは、エリオに男性に花束を貰うのが初めてであった。

「ん！？何だあれは！？」

町の人がある物に気付いた。

地面から黄色い角の様な物が出てきた。

ピィィィン！！

角が光出すと花が萎れて枯れてしまった。

そして角は、地面の中に戻って行った。

「え・・エリオくんの・・エリオくんの花が！！」

キャロの持っていた花も枯れてしまった。

バタン！

キャロは、気絶してしまった。

「キャ・・キャロ！！」

ガシッ！！

気絶して倒れようとしていたキャロをエリオが支えた。

一方、喫茶店翠屋でもなのはも眼鏡をかけた青年といた。

「な・・なのは！」

ササ！

「／／／／／っえ！ユーノ君？」

なのはは、眼鏡の青年：ユーノ・スクライヤに花束を渡された。

「僕の気持ちだよ。」

ユーノは、笑顔でなのはに言った。

「／／／／ユーノ君・・・・」

なのはは、その花束を大事に持っていた。

奥の方で、なのはの幸せを願う母と姉の姿があり、そしてユーノに対して殺意を燃やす父と兄の姿もあった。

すると地面が揺れ始めた。

「何なの！？」

なのはは、混乱していた。

外の地面からまた角が現れた。

ピィィィィン！！

角が光り出すと外道の花もなのはの持っている花も枯れ始めた。

「は・・花が・・ユーノ君が私の為に・・・・為に・・・」

ガクン！

なのはは、膝を床に落とした。

「なのは！しっかりして！なのは！！」

ユーノがなのはの意識を確認してもショックを受けていた。

天野平和科学研究所の格納庫に火鳥達がいた。

『花畑が襲われた！？』

エースバロンは、火鳥とケンタから衝撃の真実を告げられた。

「うん！もしかしたらドライアスがまた何か企んでいるんじゃないかな？」

ケンタがエースバロンに言った。

『しかし、花畑を襲ってどうするつもりなんだ！？』

「私は、分かるわ。ドライアスは、花が嫌いなのよ。」

「そうだな。」

ハルカとトーレが言った。

「あ！それは！」

そしてトーレの手には、花を持っている事に火鳥が気付いた。

「此処は、機械だけで味気ないでしょ？だからトーレさんに頼んで花を持って来て貰ったの。」

トーレがエースバロンの側に花を置いた。

『ほお！綺麗だね。』

エースバロンも心が和んだ。

「うん！感動だ！」

火鳥も感動していた。

「大変じゃ！今度も花畑が襲われておる！」

天野が火鳥達に伝えた。

「「「「え！？」」」」

火鳥達は、驚いた。

ケンタ達は、指令室に向かった。

「今度は、何処が襲われたの！？」

「フランスの植物園だよ。」

ジェイルが答えた。

「こうしては、おれんぞ！今度、襲われそうな所と言えば！」

「「「「フラワーフェスティバル！！」」」」

火鳥、ケンタ、ハルカ、トーレは、揃って言った。

火鳥達は、フラワーフェスティバルに向かった。

「ええーーーー！！このバラ一本が８千円ですって！？」

ティアナは、花屋に寄ると驚いた。

「はい・・世界の各地で花畑が荒らされていて花も数が減って来ているんですよ・・」

花屋の店員が申し訳なさそうに言った。

「なるほど、数が減れば値段が上がるか・・・」

「！？佐津田刑事！」

ティアナは、後ろに佐津田刑事が居る事に気付かなかった。

「花を荒らしてぼろ儲けをしようとしてる奴ってのは、誰だろうな！」

ギロ！

佐津田刑事は、花屋の店員を睨んだ。

「え！？」

ガシッ！

佐津田刑事は、店員の胸倉を掴んだ。

ドドドド！！！

地面が揺れた。

「「！！？」」

ティアナと佐津田刑事は、驚いた。

すると地面から角の様な物が出てきた。

『この振動は！？』

道に駐車しているガードスターも驚いた。

ピィィィン！！

角が光出すと花が萎れて枯れてしまった。

ギシシシン！！

角からロボットが出て来た。

「「花荒らしの犯人はお前か！！」」

二人は、そう言った。

『バトルアップ！！チェェェンジ！！ガードスター！！』

ガードスターが青いロボットに変形した。

ドン！

ガードスターがロボットを空中から蹴って倒れた。

『貴様！何でこんな酷い事をするんだ！』

ガードスターが聞いた。

「人間が花を愛し、心が和む事が虫唾が走るんだよ！地球上の花を滅ぼして人間の心にダメージを与えてやるのさ！」

ロボットに乗っていたシュラが言った。

『そうは、させるか！』

ガードスターが腰から銃を取り出した。

ピュン！

ロボットが銃を弾いた。

『しまった！』

ガードスターは、銃を取るがロボットから光が出て消えてしまった。

ガードスターは、フラワーフェスティバルに向かって居る火鳥達に連絡した。

『ファイバード！ドライアスの手先に花市場が襲われた。』

「なに！」

『残念ながら逃げられてしまった。』

「そうか・・俺達は、フラワーフェスティバルに向かっている。次に狙われるのは、其処だ。」

火鳥がガードスターに伝えた。

『そうか、俺も其処に向かう所だ。』

「わかった！向こうで集合しよう！」

火鳥は、急いでフラワーフェスティバルに向かう為に車を加速させた。

フラワーフェスティバルでは、佐津田刑事がティアナや他の警官達を連れて見回りをしていた。

そんな中で火鳥達がフラワーフェスティバルの会場にいた。

「ん！？あれ、佐津田刑事達じゃないの！？」

ケンタとハルカは、火鳥とトーレを草が生い茂る場所に隠した。

火鳥とトーレは、草の茂みを移動して道に出た。

「「うわ！」」

火鳥達の目の前には、幼稚園児が居て園児達が驚いた。

「君たち、花を見て感動しているかい？感動は、エネルギーなんだよ。」

「花は、命の美しさだぞ。」

火鳥とトーレは、笑顔で言った。

ドドドドド！！

行き成り揺れが始まった。

「佐津田刑事！」「ああ！来やがったな！！」

すると地面から角が見えてロボットが現れた。

ピィィィン！！

角が光出すと花が萎れて枯れてしまった。

「ドライアスの野郎！大事な感動に向かってなんて事しやがる！！」

「可愛い花達を！！」

火鳥達は、ロボットを睨んだ。

そして佐津田刑事達は、会場に居る人々非難をさせていた。

「!?」

ガシ!

佐津田刑事は、一人逃げようとする警官を捕まえた。

「貴様!警察官が敵に後ろを見せるとは、何事だ!」

「ですが!あんな化け物に手錠をかけられません!!」

警官が言うと佐津田も理解していた。

「くっそ!ティアナ!会場の人々が非難したら俺達も撤退だ!」

「佐津田刑事・・・・」

ティアナは、悔しそうな佐津田刑事の気持ちをわかっていた。

ケンタは、ビスターで天野に連絡した。

「じいちゃん！ドライアスが現れたよ！」

「何！？ジェイル君！バロンチームを向かわせてくれ！」

天野は、ジェイルに指示した。

「はい！バロンチーム出動！」

ジェイルは、格納庫のエースバロンに伝えた。

エースバロンは、フラワーフェスティバルの会場に向かった。

会場の中では、幼稚園児達が逃げ遅れていた。

ドーン！

ロボットの光線が幼稚園児達の居る建物に当たった。

「「ああ！」」

園児達の絶対絶命ピンチだった。

「ＩＳ発動ライドインパルス！！」

トーレが瞬時に下敷きに成りそうな園児達を安全な所まで高速移動した。

「大丈夫か？」

トーレが言うと園児達は、トーレに泣き付いて来た相当怖かったと感じられる。

「火鳥！園児達は、救出したぞ！」

「わかった！ケンタ達も連れて非難してくれ！」

火鳥は、ロボットの居る方に向かった。

するとエースバロンもやって来た。

エースバロンは、分離してロボットに変形した。

『俺達も居るぜ！』「私も手伝います！」

ガードチームとスバルも来た。

『バトルアップ！チェンジ！ガードファイヤー！！』

『バトルアップ！チェンジ！ガードレスキュー！』

『バトルアップ！チェンジ！ガードスター！』

ガードチームも変形した。

「ファイヤー・・・ジェェェット！！」

火鳥は、空からファイヤージェットを呼び変形し巨大なロボットに変わり火鳥も変化したファイヤージェットに向かって宙を飛び体が火の鳥の様に成りロボットの中心に乗り移った。

『チェェェンジィィ・ファイバード！！』

火鳥は、ファイバードと成った。

「すごいや！」「かっこいい！」

それを見ていた幼稚園児達は、言った。

『フォームアップ！五体合体サンダーバロン！』

エースバロンは、サンダーバロンに合体した。

『ガードチーム！フォームアップ！』

ガードスターが胸の辺りに変形しガードファイヤーが胸を収める部分と両腕、両腿に変形しガードレスキューが両足に変形して装着した。

『三体合体！ガーディオン！！』

ガーディオンに成った。

『ドライアスの手先め！この宇宙警備隊が成敗してくれ「「「ちょっと待ったぁーーー！！」」」・・・えっ！？』

ファイバードがロボットに言ったら空から声が聞こえた。

それは、デバイスを着たなのはとエリオ、キャロだった。

「な・・・何なんだ貴様ら！！」

シュラは、なのは達に言った。

「人の恋路を邪魔したのは、君ね・・・」

なのはが冷徹な表情で言った。

「う！それがどうしたんだ！？」

シュラは、なのは達の睨みに少し引いた。

「僕が・・・キャロの為に買った花を・・・！！」

エリオが鬼の形相に成っていた。

「エリオくんの・・・愛を・・・・」

キャロも同じだった。

ギラ！！

「ひぃ！」

シュラも怖くなってきた。

『おい！スバル、なのは達って怒ると怖いな・・・』

コクン・・

スバルは、ガーディオンに頷いた。

「火鳥さん・・・一緒にアイツを倒しても良いですよね？」

どうやらなのははは、エリオとキャロにも火鳥達の事を話したらしい。

「「火鳥さんお願いします！」」

エリオとキャロも表情が怖く成っていた。

『は、はい！一緒にお願いします！！』

ファイバードもなのは達に逆らってはいけないと直感した。

『フレイムブレスター！！』

ファイバードは、腕を空に翳すと空からフレイムブレスターがやって来た。

フレイムブレスターがファイバードの真下に下りると合体した。

『フォームアップ！武装合体ファイバード！！』

バッバッバッバ　ドーン　ドーン！

「くそぉ！」

ガーディオンとサンダーバロンの攻撃でロボットも動けない。

『『ファイバード！エリオ！なのは！キャロ！今だ！』』

ファイバードは、後ろから剣を取り出した。

『フレイムソード！！』

ファイバードは、剣を持って構える。

ファイバードの額が光出した。

なのは、エリオ、自らの必殺技の構えに成りキャロは、召還魔法を構えた。

『フレイムソード・チャージアップ！！』「スターライト・ブレイカー！！」「ヴォルテール！！」「紫電一閃！！」

剣の刃に炎が纏い怪物目掛けて構えた。

『「「「ええええいいいい！！！」」」』

シュパ！！　ピュドーン！　ボウ！　シュン！！

ドオオオンンン！！

ロボットは、ファイバード、なのは、エリオ、キャロ（ヴォルテール）の必殺技で爆発し一つの脱出ポットでにげって行った。

『ん？』

ガーディオンが何かに気付いた。

『まだ生きていたか！』

倒したはずのロボットがまだ動きそうに成っていた。

『待って！これは、使えるかもしれない。』

ファイバードは、ロボットの花を枯れさせる装置の部分を持って天野平和科学研究所に向かった。

結果、花を枯れさせる装置の仕組みを理解した天野とジェイルは、その逆の花を蘇らせる事が出来ると発見して世界中の花も蘇っていった。

弟九話：花よ　蘇れ！（後書き）

ケンタ「アキラが火事を起こしちゃった！怪我は、何とも無くて済んだんだけど、ガードファイヤーがスバル姉ちゃんと自分に酷い事したって言って怒っちゃった！え！？ダムの水が竜巻に襲われて無くなっちゃった！？　太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ第１０話　燃えよガードファイヤー　次回も世界平和！」

第十話：燃えよ！ガードファイヤー（前書き）

スバルが管理局の入った理由を変えてみました。
六話関連も書き込みました。

第十話：燃えよ！ガードファイヤー

夏の季節になると水不足が問題になる。

だが、首都の各地のダムで謎の水不足に成り、その前兆として竜巻が起こったら何時の間にかダムの水が無くなると言う現象が発生していた。

火鳥とケンタとハルカは、ガードファイヤーとガードレスキュー、スバルの勤める消防署に来ていた。

『いったいどうなっているんだ？』

ガードファイヤーは、疑問になっていた。

『仕方ないだろ。自然現象だ。』

『うるせい！救急車のお前に消防車の俺の気持ちがわかるかよ！』

だがガードファイヤーは、不満だった。

「水不足で心配なのは、火事だもんね。」

「うん。」

「大丈夫だよ！ガードファイヤー。今、天野ハカセが雨を降らせる機械を開発しているって言うから。ねっ、ケンタくん。」

スバルは、ガードファイヤーを慰めた。ケンタも頷いた。

「心配しなくても「おい、ケンタ！」　ビク！　！？」

ケンタは、後ろを振り向くとケンタの学校のクラスメートの一人のアキラがいた。

「何やっているんだ？消防車に話しかけて？」

アキラは、ケンタに聞いた。

「え！？そ・・それは・・「ケンタくんって消防車が大好きなんだよ。だから独り言を言うだよね？」え！？そうそう！」

スバルがケンタのフォローをした。

「こんな、ダッセー車のどこが良いんだよ！」

ヴィン！

ガードファイヤーのライトが光ったのを見たケンタとスバルは、アキラにばれない様にライトの部分を後ろから隠した。

「どうしたんだよケンタ？」

アキラが聞いてきた。

「え？いや、何でも無いから！」

ケンタは、誤魔化した。

「?そうか?まっ良いか。じゃあな。」

アキラは、帰って行った。

ブォォォォン!ブォォォォン!

ガードファイヤーは、マフラーから大量の排気ガスを出していた。

『何だ!アノ、ガキは!』

『シッ!大声を出すな!』「落ち着いてガードファイヤー!」

ガードレスキューとスバルは、ガードファイヤーを抑えた。

『ああ言うのが、火遊びで火事に成るんだよ!ケンタ、友達は、選んだほうが良いぞ!』

ガードファイヤーは、アキラが気に入らなかった。

「わかった!わかったから落ち着いて!」

ケンタは、ガードファイヤーを宥めて天野が発明が出来ているのかを見るため一旦火鳥達は、帰った。

天野平和科学研究所では、天野とジェイルが雨を降らせる機械を開発していたが、未だ完成出来ずにいた。

「そーでもない・・・あーでもない・・・」

天野の眼球は、血管が浮き上がっていた。

「あの、・・・・ハカセ・・・」

助手でいたウーノが天野に聞いた。

「そろそろ、休憩にしませんか？」

「そうですわぁーん。体を壊したら元もありませんしぃ・・・」

クアットロも心配していた。

「駄目じゃ！駄目なんじゃ！！ワシの才能は、何処に！！」

天野の何時もの事にクアットロとウーノは、呆れていた。

ジェイルは、心配していた。

「ただいまー！」

火鳥達が帰って来た。

「あの栄光の日々は、何処にいったんじゃー！」

天野は、火鳥に泣きついた。

「！？これは、どうしたんだい？」

火鳥は、ウーノ達に聞いた。

「ええ・・色々っと・・・」

「何時もの事が始まったんですよぉ。」

ウーノ達は、火鳥に言った。

「また、始まったんだ・・・・」

「おじいちゃん、しょうがないわね・・・」

ケンタとハルカは、ウーノ達が言いたい気持ちが理解した。

「ワシの才能は、もう枯渇してしまったのかぁぁぁ！！」

天野は、火鳥に更に泣き喚いた。

「コカツって何なんだい？」

「渇いて干からびる事だよ。」

ジェイルが火鳥に説明した。

「そうか・・・ハカセも水不足に成ったんだな・・・・」

火鳥は、慰めた。

だが、火鳥は、その例えの意味が理解していなかった。

一方、アキラの家では・・・・

「よっし！完成だ！」

アキラは、火を使って接着するプラモを作り完成していた。

「やっぱ、かっこいい！コレクションに入れよう！」

グラ！

アキラは、火を消さずにコレクションの入ってある棚に向かったが起き上がった衝撃で火を付いているガスランプが落っこちてしまった。

しかし、アキラは、気付いていなかった。

天野平和科学研究所では、ケンタ達がテレビを見ていると臨時ニュースが流れた。

〔〇〇市××町%丁目で火事が起こりました。〕

「此処ってアキラの家じゃん！」

ケンタは、驚いて火鳥とハルカを連れてアキラの家に向かった。

その頃、消防車や救急車が来ている大惨事に成っていた。

「アキラ！アキラ！！」

「奥さん！危険です！！」

アキラの母親が火事に成っている家の中に入ろうとしたが消防隊員により止められた。

家の中では、アキラがプラモを持って非難しようとしていた。

『ああ、くそ！じれったい！スバル！俺が梯子を出すからお前は、アキラってガキを頼む！』

「うん！」

スバルは、ガードファイヤーの指示に従った。

ウィィィ！　ドン！

梯子がアキラの家に当たり、その結果アキラのプラモが火で燃えた。

「ああ！俺のプラモが・・・・」

「早く！こっちに来て！」

アキラの家からスバルがアキラを引っ張って行こうとしたが「離せ！俺のプラモが！」全くスバルに感謝をしていなかった。

「ガードファイヤー！アキラは！？」

ケンタ達もアキラの家に来た。

『ああ、大丈夫だ！だけど、あのガキ、自分の命よりもプラモの事しか考えていないぜ！』

ガードファイヤーは、呆れていた。

梯子からスバルがアキラを連れて来た。

ドン！ドン！

「お前とこの消防車のせいだ！！」

アキラは、両腕でスバルの胸を強く叩いてガードファイヤーも蹴った。

『あのガキ！スバルを！』

ガードファイヤーは、怒ったが「ガードファイヤー落ち着いて！」火鳥に抑えられた。

「ちょっとアキラ！アンタ、スバルさんが命がけで助けたのに何よ！その態度！」

ハルカがアキラを止めた。

「アキラくん・・・ごめんね・・」

スバルは、今にも泣きそうに成っていた。

「いけない！さあ、早く救急車に！」

現場に居たシャマルがアキラの手が酷い火傷に成っていて救急車に乗せた。

火事の件も終わりガードファイヤーとガードレスキューは、消防署にいた。

『アキラくんは、軽い火傷で明日に退院するそうだ。』

ガードレスキューは、ガードファイヤーとスバルに伝えた。

「そうなんだ・・」

スバルは、基本的に子供が好きだが嫌われるのも嫌いだったのでテンションが下がった。

『スバル・・・』

ガードレスキューは、スバルが可哀想に思った。

『へっ！あんなガキ、一回大怪我した方が良い薬に成ったんだ！』

『そう言うな・・・あの子にとってあの玩具は、宝物だったんだろ。』

『だからって俺とスバルに当たる事ないだろ！ああ！くっそー！』

ガードファイヤーは、消防署を出ようとしていた。

『何処に行く気だ！ガードファイヤー！』

ガードレスキューは、聞いた。

『あのガキに一言言わないと気が済まない！』

ブゥゥゥゥン！！

ガードファイヤーは、消防署を後にした。

『まったく！世話の掛かる奴だ・・・スバル、私と一緒に来てくれ！』

ガードレスキューは、スバルを乗せてガードファイヤーがアキラの居る病院に向かった。

アキラの居る病院では、ガードファイヤーの他にガードレスキュー、ガードスター、スバル、ウェンディ、ノーヴェも居た。

『何で、お前等まで居るんだよ！』

ガードファイヤーがみんなに聞いた。

『まあ、心配だからな・・』

ガードスターが言った。

「あたし達は、ガードレスキューに連絡があって来たッス」

「お前、カルシウムが足りないと思って来た。」

ウェンディ達もガードファイヤーが心配で来たらしい。

『大丈夫だよ!まったく心配し過ぎたな。』

ガードファイヤーは、アキラが寝ている病室に向かった。

アキラが居る病室では、アキラが隠れてプラモを作る為に火を付けようとすると

ヒュュュ!

病室の窓がいきなり開いた。

『ま~だ~こ~り~て~ね~の~か~…よっ!昼間の~相棒の~礼に来たぜ…』

ガードファイヤーは、幽霊の様な口調で話した。

「わっ！しゃ、喋った！？お化け消防車！」

アキラは、かなり驚いていた。

『そんな事言うなよ。俺は、只の普通の梯子車だぜ。』

しかし、アキラの居る病室は、かなり高めの階に在った。

ガードファイヤーは、梯子を使って最上階の屋上まで伸ばして此処に来た。

それを見ていたガードスター達は

『あのバカ！何処が只の普通の梯子車だ！』

ガードスターは、呆れていた。

『さっきは、言いたい事を言ったな。俺は、消防車と消防隊員を代表して来た。』

ガードファイヤーが言うとアキラは、戸惑った。

『俺達は、お前の命を助けてやったのに文句は無いだろ。』

「えっ？それは、俺のプラモを壊したからだろ？」

『坊主、俺達、消防車やパトカー、救急車いや…それだけじゃねえ。

それに働く人達は、一生懸命に成って命を助け様としているんだ。
ソイツ等の気持ちも考えなくてどうするんだ?』

ガードスター達は、ガードファイヤーの話を通信で聴いていた。

『アイツの口からまともな事言うとはな。』

「ガードファイヤー…」

「言うじゃないか。」

「感動したッス。」

ガードスター達は、ガードファイヤーに感心していた。

『俺が言いたい事は、それだけだ。邪魔したな…』

ガードファイヤーは、下に降りようとすると
「ちょっと待って!」アキラの声にガードファイヤーは、止まった。

「あの…さっきは、悪かったよ…それとあの消防隊員のお姉さんにも悪かったって伝えてくれないかな?」

アキラは、ガードファイヤーの説教で反省して言った。

『そうか。いい子だ坊主!姉ちゃんからは、俺がしっかり伝えとく。
また、火事に成ったら助けてやるからな!』

ガードファイヤーが去るとシャマルがアキラの部屋に来た。

「アキラくん。どうしたの？」

「先生！今、消防車が居たんだ！」

アキラがシャマルに伝えた。

「？」

シャマルが外を見るとガードファイヤー達が帰る所を少し見えた。

「誰もいないわよ？」

「あれ？おかしいな・・・」

アキラが外を見た時には、ガードファイヤー達が居なかった。

「（うふっ！ガードファイヤーったら。）さあ、寝ましょう。」

シャマルは、アキラをベッドに寝かしつけた。

「あっはっはっはっ！ついにやったぞーーーー！！！」

朝、天野平和科学研究所で天野が喜んでいた。

火鳥達は、天野の声を聞いて研究所に来ると小さい雨雲が出来て天野が喜んでいた。

＊以前のジェイルのコアレインをジェイルが天野が他の装置を作っている最中に取り付けた。

「何なのこれ？」

ケンタは、天野に聞いた。

「ケンタ！ワシの才能は、健在じゃ！」

ゴロゴロ！

雨雲から雷の音が雨の音と一緒に聞こえた。

「名づけてミラクル低気圧発生装置じゃ！後は、高い所でこのマシーンを作動させるだけじゃ！・・・ん？ウーノ、クアットロどうしたんじゃ？」

天野は、何故か火鳥の方に居た。

「あの、ドクター、ハカセ！危険ですよぉ！」

「早く非難してください！」

二人は、天野とジェイルに火鳥達の方に来る様に言った。

「「？」」

ピカー！

「「ギヤァァァァァァァ！！！」」

しばらく経ってから火鳥達が天野とジェイルの治療をした。

ケンタ達は、アキラの居る病院に面会をしていた。

「え？消防車が会いに来た？」

「多分夢だよ！」

アキラは、夢と思っていた。

「いや、アイツかなり怒っていたもの。会いに来ていても無理は、ない。」

「？」

アキラは、火鳥が変な事を言っているので不思議に思った。

「奴なに「勿論夢に決まっているじゃない！」「そんな夢を見るって事は、アキラの心が消防車とスバルさんにすまないと思っていたからよ！」

ケンタとハルカは、火鳥の口を防ぎ誤魔化した。

「じゃあな！」

「ああ、じゃあな！」

ケンタ達は、アキラに別れを告げて病院の屋上に居る天野とジェイルの方に向かった。

「ハカセ、ドクター。お待たせしました。」

天野とジェイルは、ミラクル低気圧発生装置をセッティングしていた。

「あっ！火鳥くん、ケンタくん、ハルカちゃん。もうすぐ済むから

待っていて。」

ジェイルが火鳥達に教えた。

「どお？上手く行きそう？」

「勿論じゃ！」

天野は、ケンタに向かって自信気に言った。

「いよいよ、偉大な一瞬じゃぞ！ジェイルくん！」

「はい。ハカセ！」

ポチ！

ウィィィン！

ミラクル低気圧発生装置は、光り出して空に放射すると雨雲が発生した。

「見たか！ワシとジェイルくんの才能を！」

二人も達成感に成っていた。

「これで水不足の心配もしなくていいのよね？」

『そいつは、困る！』

「「「「「！！？」」」」」

いきなりの声に火鳥達は、驚いた。

ブウウウウンンン！！

地面から竜巻が起こって雨雲が無くなった。

「こ！？これは！？」

「何なんじゃ！？」

ジェイルと天野も解らないでいた。

『ふっはっはっはっはっはっはっ！！』

下から扇風機の様な物を付けたロボットが現れた。

「その声は、ゾル！」

火鳥は、ロボットに乗っているのがドライアスの手先の一人ゾルと見抜いた。

「そうか！水不足の原因は、お前等の仕業だったのか！」

天野達は、ゾルを睨んだ。

『ぶっはっはっはっはっはっ！その通りだ。人間を日干しにしようとする計画だ！』

ゾルは、ロボットを下の地面に着けた。

「ハカセ！ハルカ！ドクター下がって！ケンタは、ガードチームに連絡してくれ！」

火鳥の指示で行動した。

ケンタの通信を聞いたガードチームは、急いで病院に向かった。

『病院と言うとアキラくんが居るな。』

ガードレスキューは、フッと思い出した。

『よくよく。あの坊主とは、縁がありやがる。』

「アキラくん。」

ガードファイヤーの中に乗っていたスバルも心配していた。

火鳥達は、ロボットの疾風の攻撃に遭っていた。

「吹き飛ばされるな！」

火鳥も他のケンタ達に言った。

ケンタ達も力一杯しがみ付いていた。

『はっはっはっ！二度と余計な真似が出来ない様にしてやる！』

ゾルがミラクル低気圧発生装置を壊そうとした。

ウィーン！

ロボットの横から光線が放たれた。

『バトル・アップ！チェンジガードファイヤー！』

『バトルアップ！チェンジ！ガードレスキュー！』

『バトルアップ！チェンジ！ガードスター！』

ガードチームが来た。

「火鳥さん大丈夫ですか！？」

スバルは、バリアジャケットに成っていた。

『俺達が相手だ！』

ロボットの周りには、ガードチームとスバルが居た。

『ええい！邪魔くせぇい！』

ビューン！

ロボットは、ガードチームとスバルに攻撃をした。

ドーン！

ロボットは、病院にも攻撃を当てて来た。

『いかん！ガードレスキュー、スバル。中に居る人達を頼む！』

『わかった！ガードスター！』

ガードレスキューは、スバルと共に病院に向かった。

「ひぃ！」

益々、激戦に成る中で天野とジェイルは、作業をしていた。

「ハカセ！ドクター！今の内に非難してください！後は、俺がやります。」

火鳥は、天野達の代わりに作業をした。

「ガードレスキュー、スバル！ハカセ達を頼む！」

『解った！』「はい！」

スバルがウィングロードで行き、ガードレスキューも細長いワイヤーで天野達を運んで行った。

「いててて・・・腹が痛かった。ん？」

病院の中でお腹が痛くてトイレに行っていたアキラは、病院に誰も居ない事に気付いた。

ボウ！

ロボットがガードスターとガードファイヤーに炎で攻撃をしてきた。

『『ぐあああ！！』』

二人も動けないで居た。

ドン！

ケンタ達の非難が完了したガードレスキューがロボットに蹴って病院の方に炎が向いた。

『しまった！・・・？あれは！？』

ガードレスキューは、病院の方見るとアキラがいた。

『何グズグズしてやがったんだ！』

ガードファイヤーが病院に向かった。

ズシン！

ロボットが病院に向かうガードファイヤーの前に立っていた。

『何！？』

ボウ！

『ぐあああああ！！』

『『ガードファイヤー！』』

二人もガードファイヤーを見た。

ボウ！

『『ぐあああああ!!』』

二人もガードファイヤー同様に攻撃に当たって動けなかった。

すると

ゴロゴロ

空が雨雲が現れた。

『何?しまった!』

ゾルは、ガードチームの攻撃をやめて雨雲に向かって竜巻を起こそうとしていた。

『ガードチーム!フォームアップ!』

ガードスターが胸の辺りに変形しガードファイヤーが胸を収める部分と両腕、両腿に変形しガードレスキューが両足に変形して装着した。

『三体合体!ガーディオン!!』

ガーディオンに成った。

『とお!』

ドン!

ガーディオンは、ロボットに飛び蹴りをして竜巻を起こすのを防い

だ。

「もう駄目だ！」

病院の中では、アキラが諦めていた。

「大丈夫！？」

スバルがウィングロードで炎に包まれた病院に来ていた。

「お姉さんは！？」

アキラは、バリアジャケットを着たスバルに見惚れた。

「掴まっていて！」

スバルが言うとアキラは、頷きスバルに掴まって病院を脱出した。

屋上にいた火鳥も空全体に雨雲を確認した。

「ファイヤー・・・ジェエエット！！」

火鳥は、空からファイヤージェットを呼び変形し巨大なロボットに変わり火鳥も変化したファイヤージェットに向かって宙を飛び体が火の鳥の様に成りロボットの中心に乗り移った。

『チェエエンジィィ・ファイバード！！』

火鳥は、ファイバードと成った。

『ファイヤーブラスター！』

バッバッバッバッ！！

ファイバードは、ロボットに攻撃をした。

『命の源である水を奪い人々の平和な暮らしをかき乱す奴は、この私が許さん！』

ファイバードは、指をロボットに指して言った。

『フレイムブレスター！！』

ファイバードは、腕を空に翳すと空からフレイムブレスターがやって来た。

フレイムブレスターがファイバードの真下に下りると合体した。

『フォームアップ！武装合体ファイバード！！』

『フレイムキャノン！！』

ファイバードは、両肩からフレイムキャノンでロボットに攻撃した。

ビュウウウウウ！！

しかし、ロボットの起こす竜巻で攻撃を弾かれた。

『ぐあああ！』

ファイバードは、竜巻の攻撃に当たり倒れた。

『死ね！』

ゾルが止めを刺そうとした。

『ガードブラスター！！』

バッバッバッバッ！　ボン！

ガーディオンがロボットの扇風機を壊した。

ファイバードは、後ろから剣を取り出した。

『フレイムソード！！』

ファイバードは、剣を持って構える。

ファイバードの額が光出した。

『フレイムソード・チャージアップ！！』

剣の刃に炎が纏い怪物目掛けて構えた。

『えええいいいい！！！』

シュパ！！

ドオオオオンンン！！

ロボットは、ファイバードの必殺技で爆発し一つの脱出ポットでにげって行った。

ファイバード達の戦いが終わると歓声の声が響いた。

「やった！ハックシュン！！」

「あれ？アキラもしかして風邪引いたの？」

アキラの隣に居たハルカが言った。

ポツン！

空から雨が降って来た。

その後、アキラは、無事に退院してプラモを作らなくなったのだが・・・・・・

「ケンタ見ろよ！リリカルなのはストライカーズのスバルだぜ！カッコいいよな！」

どうやらアキラは、プラモじゃなく人形を集める様になったそれもボーイシュなヒロインのをだ。

「「はぁ～～～～～～～・・・・・」」

ケンタとハルカは、好奇心な人の意欲に言葉が無かった。

消防署では、ガードファイヤーとスバルが居た。

『なあ、スバル。』

「何、ガードファイヤー？」

スバルがガードファイヤーの顔を見ながら言った。

『お前何で管理局に入ろうと思ったんだ?』

ガードファイヤーは、スバルの動機を知りたくなった。

「私ね。昔、１０歳の頃に空港で火事に巻き込まれちゃったんだ。そしたら、消防車が空港を貫抜いて私とお姉ちゃんを助けてくれたんだよ。消防車の中の人は、現れなかったんだけど・・・「目を瞑っていろ」とか言っていたけどその時の事は、今でも覚えているんだ。」

『へぇ～～～そうなのか・・・』

ガードファイヤーは、スバルがその人に憧れて管理局に入った事を知った。

だが、この話は、また別の話で後ほど解る事に成るのであった。

第十話：燃えよ！ガードファイヤー（後書き）

ケンタ「Ｄｒ．ジャンゴがテレビに出ている！ノーベル賞を遣せって乗り込んで来たんだ！賞を渡さなかったらガジェットって言う機械や町を溶かすロボットに襲わせるって大変だ！　太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ　第十一話　ワシがＤｒ．ジャンゴだ！　次回も世界平和！」

第十一話：ワシがＤｒ．ジャンゴだ！（前書き）

ドライアスの一部のロボットが最後で登場します。

第十一話：ワシがＤｒ．ジャンゴだ！

Ｄｒ．ジャンゴの研究所でゾルとシュラがドライアスに呼ばれていた。

「ドライアス様。御呼びでしょうか？」

『ジャンゴの奴が出かけて来よった・・・・』

ドライアスは、気に成るらしい。

「奴め。何を遣らかす気だ？」

ゾルは、ジャンゴがくだらない事をまた考えて思った。

『必要とあらば、手を貸してやるがよい。』

「「ははっ！」」

天野平和科学研究所では、火鳥が新聞を読んでいた。

「えーっと、ノーベル賞受賞者選考会議が行われる。」

「「「？」」」

ケンタ、ハルカ、ウーノは、火鳥が何を読んでいるのか火鳥の後ろに回り込んで見てみた。

「火鳥さん何処を呼んでいるんですか？」

「此処だよ。」

火鳥は、指で指した。

「やだ。読み方違うわよ。」

「え？」

火鳥は、ハルカの指摘に驚いた。

「ここは、ノーベル受賞者を決める選考会議が北欧のアカデミーホールで開かれており今日がその発表があるって書いてあるんです。」

「受賞者じゃなく受賞者って読むんだ。」

火鳥は、漢字に別の読み方がある事を教えられた。

「ノーベル賞って何なんだ？」

ズコン！

三人は、火鳥のボケに転んだ。

「ノーベル賞もしらないの？」

「ノーベル賞と言うのは、世界平和に貢献した人に貰える名誉ある賞の事よ。」

ハルカが教えた。

「だったら、ハカセやドクターは、貰えるんだろ？」

「じいちゃんとにいちゃんが！？」

「貰えるわけ無いじゃない。」

ハルカとケンタは、当然の事解っていたが、ジェイルには、その紙を貰ったが行くつもりは無い。

＊ジェイルは、コアレインを発明しており環境賞をもらえる位地球に貢献しているが、天野に失礼なので出席しない。

「ハックション！」

ジェイルは、クシャミをしていた。

「どうしたんじゃ？ジェイルくん？」

「いえ・・・風邪でしょうか？」

ケンタ達が噂をしていたのも彼は、知らない。

「ハカセ、今度は、何を発明しましたのぉ？」

クアットロは、天野が寝ながらバナナを機械に運んでもらっていた。

「見れば、解るじゃろ？寝たきりの病人の為に開発した物じゃ。そこの牛乳を入れてくれ。」

天野は、クアットロに指示した。

「はぁーい。」

クアットロは、牛乳を試験管の中に入れた。

試験管から管に伝わり天野は、牛乳を飲んでいた。

「天野ハカセならノーベル賞も取れるんじゃないんですか？」

「え！ぶっーーーー」

天野は、驚き管が抜いてしまって顔にかかった。

「「（これが、無かったらな・・・・・）」」

ジェイルとクアットロは、少し残念であった。

此処は、北欧のアカデミーホールでは、ノーベル賞の選考会議の発表が行われていた。

「では、発表しますノーベル物理学賞。
「待てぇーーーー！！」！？何だ君は！？」

司会の人は、老人が来て驚いた。

老人は、黒と赤の裏表に成っているマントを着けて片手に杖を持ち、左目に赤い眼鏡をかけていた。

「ノーベル賞の受賞者じゃ！」

老人は、司会の人の持っているノーベル賞受賞者のリストを奪った。

「ふむふむ」

老人は、リストに自分の名前が載っているかを見たが乗っていなか

った。

「何でワシの名前が載っていないんだ！」

ジャンゴは、文句を言ったがジャンゴが載らないのも当たり前だった。

「お前達！何を基準にノーベル賞を決めているんじゃ！」

老人は、基準を決めた審査員に文句を言った。その後、警備員達が来て取り抑えようとしたが、戦闘ロボット達が力で警備員達を倒して行った。

「いいか、馬鹿共よ！このＤｒ．ジャンゴは、宇宙皇帝ドライアスと手を結び認めた科学者Ｄｒ．ジャンゴ様だ！全てのノーベル賞を貰うのに相応しいのは、このＤｒ．ジャンゴ様だ！」

この老人が悪の天才科学者Ｄｒ．ジャンゴだった。

火鳥達は、テレビを見てＤｒ．ジャンゴを始めて見た。

「Ｄｒ．ジャンゴってコイツの事だったのか！」

ケンタも以前天野からマイナスエネルギーを発散している人物の名前を聞いた事があった。

「ハカセ！此方へ！」「急いで下さい！」「おじいちゃん早く！」

ハルカ、ジェイル、ウーノは、天野をテレビに連れて来た。

「何じゃい、何じゃい？ああ！」

天野は、ジャンゴの顔を見て思い出した。

「おじいちゃん知っているの？」

ハルカは、テレビに出ているジャンゴを指した。

「知っている処か、ワシの研究論文を方端から盗んで行った悪事に置いては、天才な奴じゃ！」

天野は、憎く言った。

ジャンゴがリモコンで会場に映像を写すシートと機械を出した。

映像から二つの映像が左右別々のが出てきた。

一つ目は、ビルに戦闘ロボットが戦車に乗りビルの周囲を囲んでいた。

二つ目は、内戦中の国に無数の四角型のロボットが無数にいた。

ジャンゴは、一つ目の映像を指で指した。

すると

ブシュゥゥゥゥ！！

戦車の砲からピンク色の液体がビルに向かって放射した。

ジュゥゥゥゥゥ・・・・・

ビルは、見る見る内に溶けて無くなってしまった。

〔！！！〕

会場の人々は、驚いた。

「ビルの解体にダイナマイトや削岩機を使っているなんて時代遅れじゃ！これが、ジャンゴＧＰ液じゃ！そして！」

ジャンゴは、二つ目の映像を指した。

二つ目の映像のロボット達が動き出すと内戦中の兵士達も驚き攻撃した。

しかし、ロボット達は、見えない壁を出し防いだ。

ビューン！

ロボット達は、銃と同じ速度の光線を出すと当たった所の数十メートルに居る兵士達を攻撃してきた。

「今時、人間同士が殺し合わなくても機械に全て戦争を任せておけば良い！これがガジェットじゃ！」

「!?これは!」

天野平和科学研究所のテレビを見ていたジェイルが驚いた。

「ドクターどうしました?」

ガジェットの映像を見たジェイルが驚くのを見たウーノは、彼が何か知っていると思った。

「私の発明した物が何故在るんだ!」

ジェイルは、目を疑った。

「どう言う事じゃ?」

「はい!以前、私が防衛力の無い国の為に開発した低コストで設計図があれば大量生産出来るガジェットと言う物です。ですが・・・あまりの破壊力と殺傷力が強いので設計図だけでいたのですが・・・数年前に設計図が何者かに盗まれてしまったのです!」

ジェイルは、恐々と言った。

「じゃあ!にいちゃんの発明した物がジャンゴに盗まれたの!」

コクン

ジェイルは、何も言えなくなり頷いた。

会議場では、人々が文句を言っていた。

「もしも、ワシを全てのノーベル賞を貰わせなかったら・・・・あの液体とガジェットを世界中に襲わせるぞ！二時間だけ待ってやる！」

ジャンゴは、会場を後にした。

「ひでぇ！」「なんて自分勝手な！」

テレビを見ていた火鳥達は、許せなかった。

「許せねぇ！行って叩き述べしてやる！」

火鳥の正義の心に火が付いた。

「「待て！」」

天野とジェイルが火鳥を止めた。

「会場の人達は、人質に取られているんじゃ！迂闊に事を荒立てては、いかん！」

「それに奴の言う事が正しければ、大量のガジェットを用意して居る筈だよ！助ける前に人質を殺されてしまう！」

二人は、火鳥達を説得した。

「じゃあ！あんな奴に全部のノーベル賞を渡せっての！？」

ケンタもジャンゴにノーベル賞を渡したくなかった。

「んな事は、言っとらん！」「その通りです！」

二人は、自分の部屋から分厚い本を火鳥達の前の持ってきた。

「ハカセ！ドクター！それは？」

「ＧＰ液の中和剤じゃ！」「これがガジェットの機能を狂わせる錯乱機だよ！」

「え！？中和剤と錯乱機？」

火鳥は、二人に詳しく聞くとそう答えた！

「ジャンゴが自分で作った様に言っていた物は、昔ワシが生み出した物何じゃ。元々、」

「ジャンゴめ！私だけで飽き足らず！ハカセの発明にまで悪事に利用するとは！！」

ジェイルは、錯乱機の作り方を書いたページを探しながらジャンゴに対する憎しみを増していた。

「これじゃ！これじゃ！ＧＰ液の成分表が残っておるから中和剤を作る事は、可能じゃ！火鳥！北欧に行って会場内に居る人の救出しろ！」

「中和剤と錯乱機は？」

火鳥は、二人に聞いた。

「完成次第サンダーバロンに運ばせるよ！」

火鳥とケンタは、ファイヤージェットで北欧に向かった。

GP液を放つトンボのロボットにパトカーを溶かして地元の警察も手が出せない状態で起動六課も出動していた。

「なのはさん！このままでは、人質を救出する前に防御魔法まで溶かす液体に私達がやられます！」

しかし、苦戦に成っていた。

「それに、さっき勝ったロボットを倒しましたが苦戦でした！また、奴等が現れたらどう対処しますか？」

エリオとスバルが状況が不利な事は、なのはも解かっていた。

「このままじゃ、人質も私達も共倒れね！どうすれば良いの！？」

なのはも策が無く困っていた。

そしてパトカーで別のルートに進んでいた佐津田刑事とティアナも自分達が通っているルートの周りもトンボのロボットに溶かされていて驚いた。

トンボのロボットが佐津田刑事達の事に気づいてGP液を放射した。

『いかん！』

ガードスターは、ドリフトをして佐津田刑事とティアナを外から強制的に下ろした。

火鳥達も北欧に着き着陸するとなのはから通信があり出た。

［火鳥さん来たんですね！］

「ああ！酷い事になっている！」

火鳥とケンタは、町がどんどん溶かされている所を見て唖然とした。

「俺が中に入って人質の救出をするなのは達は、囮でワザと敵の目を向かしてくれ！」

［わかりました！］

なのは達は、火鳥の指示に従った。

「ケンタは、此処にいろ！」「うん！」

火鳥が会場の中に入って行った。

会場の中でジャンゴに恐怖した人々は、ノーベル賞を全てジャンゴに渡す事にした。

「本年度、ノーベル物理学賞。及び平和賞、文学賞他全ての賞をＤｒ．ジャンゴ氏に認定します・・・」

司会の人も残念な口調で言った。

そして全ての賞を渡す時「ちょっと待った！」その声に司会の人が渡すのを止めた。

会場の入り口に火鳥が立っていた。

「そんな奴にノーベル賞をやっちゃならねぇ！」

火鳥の姿を見て戦闘ロボット達が襲って来た。

「雑魚共は、引っ込んでやがれぇ！」

火鳥は、次々に倒して行った。

「ドライアスと手を組みやがって！そんなに名誉が欲しいのかい！」

火鳥は、ジャンゴを睨んだ。

「舐めるな！」

ジャンゴも負けずと睨み返した。

「天才科学者だと？笑わせるんじゃねぇえ！」

「何度でもほざけ！ワシの科学は、そん所そこ等の軟な科学ではない！この世を全て暗黒の世界にし全人類がワシに跪くそんな世界を実現させる科学じゃ！」

「シャラクセイ！お前の面を朝晩拝めだと？冗談じゃねぇ！お前の顔を一秒だって見たかねぇやい！」

火鳥の圧力にジャンゴも恐れて下がった。

「黙れ！ワシを怒らせるとこうだ！」

ボン！

ジャンゴは、煙幕を投げた。

「くそ！待ちやがれぇ！」

火鳥は、ジャンゴを屋上まで追いかけたが空からトンボのロボットがジャンゴを回収した。

「ファイヤー・・・ジェェェェット！！」

火鳥は、空からファイヤージェットを呼び変形し巨大なロボットに変わり火鳥も変化したファイヤージェットに向かって宙を飛び体が火の鳥の様に成りロボットの中心に乗り移った。

『チェェェンジィィ・ファイバード！！』

火鳥は、ファイバードと成った。

ファイバードは、ジャンプしてトンボのロボットの後ろに乗った。

『はぁ！』

ガシン！

ファイバードは、トンボのロボットに攻撃をした。

「小癪な！振り下ろしてくれる！」

ジャンゴは、ファイバードを振り落ろそうとした。

しかし、ファイバードは、振り落ちない。

「これならどうだ！」

ジャンゴは、トンボのロボットの尻尾からビームを発射させファイバードも地面に降りた。

『フレイムブレスター！！』

ファイバードは、腕を空に翳すと空からフレイムブレスターがやって来た。

フレイムブレスターがファイバードの真下に下りると合体した。

『フォームアップ！武装合体ファイバード！！』

『サンスライサー！！』

ファイバードの胸のエンブレムが取りトンボのロボットに投げた。

しかし、トンボのロボットは、かわして攻撃に移った。

バッバッバッバッバッ！！

『ぐあああ！』

ファイバードは、動けなくなった。

『とあ！』

ファイバードは、ジャンプしてトンボのロボットに乗った。

「こうなれば自棄だ！」

ブシュゥゥゥゥ！！

ジャンゴは、トンボのロボットからＧＰ液を会議場の入り口に放射した。

『まずい！』

ファイバードは、迂闊にも会場の入り口にＧＰ液が放射された事で人質の脱出が出来なくなった。

ブシュゥゥゥゥ！！

トンボのロボットは、次に会場場の屋上からも放射した。

『しまった！』

ファイバードと起動六課は、絶望をした。

『俺に任せろ！』

ボン！

空からサンダーバロンが中和剤を会議場の溶けている部分当てて溶けるのを止めた。

「こんな筈では！」

ジャンゴも驚いていた。

『遅くなってすまん！天野ハカセの中和剤効くじゃないか！』

『これ以上被害を広げない様にしてくれ！』

『わかった！』

サンダーバロンは、町のＧＰ液とガジェットの方に向かった。

ウィウィウィィィィィィィィンンンンン！！

サンダーバロンは、別のハッチからスピーカーを取り出すと極微量の音が流れた。

すると

ズシン！ズシン！

ガジェット達が次々と動かなくなり倒れた。

「た・・たすかったの・・？」

いつの間にかガジェットが動かなくなりなのは達もホッとした。

更にサンダーバロンは、中和剤を撒き散らした。

見る見る内に溶けるのが止まって行った。

ファイバードは、後ろから剣を取り出した。

『フレイムソード！！』

ズバ！ズバ！

ファイバードは、トンボのロボットの翼を斬って地面に落とした。

ファイバードの額が光出した。

『フレイムソード・チャージアップ！！』

剣の刃に炎が纏い怪物目掛けて構えた。

『ええええいいいい！！！！』

シュパ！！

ドオオオオンンン！！

ロボットは、ファイバードの必殺技で爆発し一つの脱出ポットでにげって行った。

一方、会場の前に来た佐津田刑事とティアナは、入り口が溶け止まっていたが硬くて開かなかった。

『バトルアップ！チェンジ！ガードスター！』

ガードスターがロボットに変形した。

『任せろ！』

その声にティアナと佐津田刑事は、向いた。

ビュン！　ドーン！

ガードスターは、スターブラスターで固まった入り口を壊した。

入り口から人々が出てきた。

「急いで急いで！」「こっちです！」

二人は、人質を誘導した。

「「お仕事、お疲れです！」」

二人は、ガードスターに敬礼した。

『此方こそ！ん！？』

ガードスターが二人の後ろを見ると戦闘ロボットがまだ会場の中に居て二人を撃とうとしていた。

バーン！

ガードスターは、速やかに戦闘ロボットを圧勝した。

「「さすが！俺（あたし）の部下（相棒）にしたい位だ（だわ）！」」

益々、ガードスターが二人は、気に入った。

『ん！あれは！』

ガードスターは、ジャンゴの乗った脱出ポットを見た。

「くそ！このままじゃ！［ティアナ！Ｄｒ．ジャンゴは、ティアナの辺りに居るんだね！］え？フェイト隊長！はい、そうです！」

ティアナは、デバイスからのフェイトの通信に答えた。

上空では、バリアジャケットのフェイトが飛んでいた。

「行くよバルディッシュ！！ソニックフォーム！」

【了解マスター！ソニックモード発動！】

フェイトのバリアジャケットの姿が変わり一瞬でＤｒ．ジャンゴの前まで来た。

「ひぃぃ！」

ジャンゴも驚いていた。

「Ｄｒ．ジャンゴ！貴方を戦争勃発罪及びテロ未遂の容疑で逮捕します！」

フェイトがバルディッシュをザンバーモードに切り替えて言った。

『そうは、させん！』

ビューン！

「！？」【プロテクション！】

ビーム砲はフェイトの方に当たったが間一髪でバルディッシュの防御魔法で何とか防いだ！

ビュウ！

微かに巨大な鷹の様なロボットが見えたと思ったらジャンゴの乗っているポットが無くなっていた。

「何て速さなの！？」

フェイトのソニックフォームよりも速いのがあった事に驚いた。

それを見ていたファイバードは、驚いた。

『あれは、ドライアス！』

ドライアスは、この星で最も強い肉体を持ってしまったのだ。

天野平和科学研究所に戻って火鳥は、天野とジェイルに報告をした。

「そうか！ジャンゴがドライアスに手を貸していたか！兎に角奴の野望を阻止出来て良かった！ってあれ？ジェイルくんは？」

「ジェイルさんなら用事があるから部屋に行ったわよ。」

ハルカが天野に教えた。

ジェイルは、部屋で考え事をしていた。

「（もしも、盗んだのがＤｒ．ジャンゴだとしたら・・・まさかな・・・）」

数年前に盗まれた物は、ガジェットの設計図だけじゃなくもう一つのある設計図も盗まれていた。

それは「タイプ・ゼロシリーズ」の設計図・・・つまりナンバーズの原型の設計図であった。

「（何事も無ければいいのだが・・・）」

ジェイルは、今後の未来が不安になった。

第十一話：ワシがＤｒ．ジャンゴだ！（後書き）

ケンタ「ミラクル大変だ！ミットチルダがドライアスに乗っ取られちゃった！人間を奴隷にしてこき使うなんて何を考えているんだろ？あれ？何あのロボットファイバードよりデカイぞ！もしかして、あれがドライアスの正体なの？　太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ　第十二話　ミットチルダ征服宣言　次回も世界平和！」

第十二話：ミットチルダ征服宣言（前書き）

ヴィヴィオが少しだけ登場します。

第十二話：ミットチルダ征服宣言

ミットチルダ政治本部

「ん？何だ！あれは！？」

政治本部に巨大な輪の様な物が現れた。

地球：天野平和科学研究所

「自動モーニング機の完成じゃ！」

天野は、面白い物を開発していた。

「ジェイルくんスイッチを。」

「はい、ハカセ！」

ポチ！

ウィィィ

自動モーニング機のスイッチを押すと天野が座っている場所で機械が天野に歯磨きをさせながら新聞を運んで来た。

「これで朝は、歯を磨きながら新聞も読める。食事も・・・え？ちょ、ちょっと待ってわあーーーー！！」

自動モーニング機が作業を同時にして天野の口にコーヒーやパスタやサラダを歯磨きをしているのにも関わらず行った。

「ハカセ！」

ジェイルは、スイッチを切った。

「ふぅ～～～助かった・・・・」

また発明が失敗してしまった。

「じいちゃん！ん？何しているの？」

ケンタがコーヒーのシミやらが付いているので聞いた。

「いや、何でもない・・。それよりどうしたんじゃ？」

ケンタが天野の言葉でハッと思い出した。

「大変なんだ！ミットで数時間前から通信が入らなくて地球中が大

騒ぎに成っているんだ！」

「何じゃとぉ！」

天野とジェイルは、ケンタに連れられてリビングのテレビに向かった。

「どうなっているんじゃ！？」

天野達は、リビングに居たハルカやナンバーズ達も映像が映らなくて気になっていた。

「さっきまでは、テレビが映っていたの！」

ハルカから詳しく聞くと数時間前からミットとの連絡が取れなくなった地球政府は、救援の為に飛行機を送ったがミットに時空ワープすると全く連絡が取れなくなり電波が遮断されてしまった。

「ハカセ調べてみます。」

ジェイルが天野に言った。

「うむ。その方が良さそうだ。「待って！」！？」

ハルカの声に一同がテレビを向いた。

［ただいま、ミットチルダの政治本部から通信が入りました。どうぞ、ご覧ください。］

テレビにアナウンサーが出て来て画像を変えるとミットチルダの大統領が映っていた。

［ミットチルダの国民の皆さん。そして、地球の皆さん・・・重大な発表をします。］

火鳥達は、テレビを見ていた。

「この人って！」「そうだよ！ミットチルダの大統領だよ！」

ハルカの言葉にジェイルが返した。

［我がミットチルダは、・・・］

大統領がその続きを言うのを躊躇った。

［何をしておる！さっさと宣言しおんか！］

大統領と違う声がそれも火鳥達が聞いた事ある声だった。

［宇宙皇帝ドライアスに・・・［様を付けろ！］宇宙皇帝ドライアス様に無条件降伏して今後、ドライアス様の意思に［御意志だ！］御意志に従う事に成りました。］

大統領は、申し訳なさそうにお辞儀をした。

「何じゃと！」

天野達は、驚いた。

［グ八八八八八！！そう言う事だ！］［地球の馬鹿者達も降伏するんだな！］

Ｄｒ．ジャンゴと覆面を被った男がテレビに映っていた。

「Ｄｒ．ジャンゴ、レジアス中将！」

火鳥は、覆面の男の姿が解かった。

［これよりミットチルダ国民は、我々の奴隷としてコキ使ってやるから覚悟しておれ！］

［逆らえば、殺すぞ！ふっはっはっはっはっ！！！］

レジアス中将が笑うとＤｒ．ジャンゴとゾル、シュラの姿があった。

「ミットチルダの国民を奴隷じゃと！人口五千億人の国民をどうやって奴隷にする気じゃ！」

天野は、そんなに人を奴隷にして何を企んでいるか解からなかった。

タッタッタッタッタッ！！

火鳥は、ファイヤージェットの方に行きケンタも行った。

「火鳥！こうしてはおれん！ジェイルくん！バロンチームにも！」

「はい！ハカセ！」

ジェイルは、天野の指示でエースバロンに連絡した。

「バロンチーム！火鳥くん達と一緒にミットチルダに向かってくれ！」

『了解！』

ジェイルがエースバロンに連絡した。

火鳥達は、ファイヤージェットに乗りエースバロンと共にミットチルダの時空の亀裂に入り向かった。

「時空管理局からの要請ですか？」

警察署で佐津田刑事とティアナがはやてに呼ばれていた。

「解かりました！この佐津田刑事とティアナは、ミットチルダの国民を救出してみせます！」

佐津田刑事とティアナは、ミットチルダ専用の時空移動空港に向かって出発した。

「（ティアナ！）」

フェイトが念話でティアナに話した。

「（フェイト隊長どうしましたか？）」

「（私達機動六課は、先にデバイスで向かうからティアナは、このまま佐津田刑事と共に行って敵の偵察をして。もしも、何かあったら躊躇しないでデバイスを使って！後、シャマルも一緒に行くから。）」

「（はい！わかりました！）」

ティアナとフェイトの念話は、終わった。

火鳥達は、ミットチルダの辺りに着くとノルウェールが通信してきた。

［ファイバード！］

「フレイムナイト！どうしたのですか？」

火鳥は、聞いた。

［私達の戦艦もミットチルダに帰る最中だったがドライアスに襲われてようやくこのミットチルダに帰って来た！それよりもお前達の方角から北東の辺りの町がドライアスに襲われている急いでくれ！私達は、南西の方角に向かう最中なんだ！］

「了解！急行します！」

火鳥達は、北東の方角に向かった。

研究所では、天野とジェイルがこんなに大量のガジェットや戦闘ロボットをどうやって来たのか検討が着かなかった。

「それにしてもあのテシターは、何処から来たのかしら？」

「「テシター？」」

天野とジェイルは、ハルカの言葉が理解できなかった。

「戦闘ロボット達の名前よ。ドライアスの手下だからテシター。」

ハルカが説明した。

ドライアスのテシターとガジェットの製造工場の暗い路地裏で少女が逃げていた。

こわいよ・・・たすけて・・ママ・・・パパ・・・

少女の服装は、古い布を着ていたが金の髪に緑と赤のオットアイをしていた。

「何だと！居なかった！？どう言う事だ！」

レジアスは、工場に居たゾルに聞いた。

「ふん！仕方ねぇだろ！俺も他の場所の占領があったんだよ！何であんなガキを必要としているんだ！？」

ゾルは、レジアスに聞くと動揺した。

「何を企んでいる？」

「くそ！もういい！」

レジアスは、工場を後にした。

北東の町では、人々を連行して中央部に連れて行く車がありビルの頂上には、虎とドラゴンのロボットがいた。

『！』

虎のロボットは、空からファイバード達が来た事に気が付いた。

『ファイバード！人々が連行され様としているぞ！』

「駄目だ。下手に動けば、人質が多すぎる。このままでは、人質が殺される。」

火鳥は、冷静に言った。

『くそ！黙って見てられるか！』

エースバロンは、人々の連行している車の方に向かった。

ビューン！　ヒュ！

それを見つけた虎のロボットは、エースバロンにビーム砲を撃ったがかわされてしまった。

『チェェェンジ！！人質を解放しろ！』

エースバロンは、分離してロボットに変形した。

「エースバロンやめろ！敵が多すぎる！」

火鳥が通信で止めた。

『！？』

エースバロンが見ると車から人質がテシターやガジェットに攻撃されようとしていた。

「エースバロン。一旦フレイムナイトの居る地点まで戻るんだ。」

『ぐうう！解かった・・』

エースバロンは、ビークルモードに成り北東の町を火鳥と共に撤退した。

ミットチルダ専用機は、ミットチルダに到着した。

しかし、空港には、誰も居ない。

ガチャ！

空港の滑走路の飛行機を点検する乗り物からテシターやガジェットが出てきた。

「シャマルさん！」

「ええ！グラールヴィント！！」

シャマルとティアナは、バリアジャケットに変身して佐津田刑事と共に銃とデバイスを構えていた。

「何だあれは！」

佐津田刑事が空を見ると鷹のロボットが現れた。

ガシン！

鷹のロボットは、飛行機を持ったまま空を飛んだ。

『何だ！何が起こっているんだ！』『ドライアスか！？』

飛行機の荷物置き場の中に居たガードレスキューとガードスターは、脱出に急いだ。

パッ！

鷹のロボットは、空中で飛行機から離した。

ドーン！

飛行機が爆発した。

飛行機の落ちた場所からガードレスキューとガードスターは、間一髪で脱出した。

『バトルアップ！チェンジ！ガードレスキュー！』

『バトルアップ！チェンジ！ガードスター！』

二人は、変形した。

『『メットオン！』』

二人は、メットを装着した。

『ガードレスキュー人々を頼む！』

『了解！』

ガードレスキューは、人々の元に行った。

ガードスターは、腰からガードブラスターを出した。

バンバン！

攻撃したが鷹のロボットの速さの前では、軽々とかわされてしまった。

『レスキューグネード！！』

ガードレスキューは、片腕からミサイルを出してテシターやガジェットをやっつけて行く。

『さあ！今の内に安全な場所に！』

「すなねぇ！」

佐津田刑事達は、安全な場所まで向かった。

ビリビリ！

鷹のロボットは、頭から電撃をガードレスキューに当てた。

『ぐあああ！』

ガシン！

ガードレスキューは、倒れた。

ビリビリ！

『ガードレスキュー！ぐあああ！』

バン！

ガードスターの武器のガードブラスターが電撃で壊れ倒れた。
佐津田刑事達もテシター達を倒していったが数が多すぎた。
「くそ！どこから沸いて出てくるんだ！」
佐津田刑事にも疲れが見えて来た。
「佐津田刑事！あれを！」
ティアナが指で指すと空港から変な飛行機からがジェットやテシターが出てきた。
「アクセル・シュート！！」
白い光の光弾がテシター達を壊していく。
「シャマルさん！ティアナ！佐津田刑事！大丈夫ですか！？」
空から機動六課が全員集合していた。
「はい！何とか！」
ティアナも少し内心ホッとした。
ガードスターとガードレスキューも電撃でまだ動けない。
すると

ブシュウウウウウ！！

鷹のロボットに放水が当たって怯んだ。

『バトル・アップ！チェンジガードファイヤー！』

ガードファイヤーも変形してロボットに成った。

『すまねぇ！遅くなった！大丈夫か！』

『ああ！それよりも奴は、強い行くぞ！』

『『おう！』』

ガードチームは、鷹のロボットに向かって行った。

『ガードチーム！フォームアップ！』

ガードスターが胸の辺りに変形しガードファイヤーが胸を収める部分と両腕、両腿に変形しガードレスキューが両足に変形して装着した。

『三体合体！ガーディオン！！』

ガーディオンに成った。

ノルウェールは、火鳥達が来た事に気付きファイヤージェットとエースバロンを回収した。

「そうか・・・それでは、戻って来て仕方ないな・・・」

ノルウェールは、戻って来た火鳥から事情を聞いた。

「火鳥！居るか！？」

ファイヤージェットの通信をノルウェールの戦艦と繋いでいた。

「ハカセどうしたのですか？」

「実は、お前さん達に頼みたい事があるんじゃ！」

火鳥は、重要な事だと思った。

「テシターを一体確保して研究所に運んで来てもらいたいんじゃ！」

ミットチルダには、大量のテシターやガジェットが存在している。

そこで、テシターを一体捕まえて体の仕組みを知ろうとすれば弱点が見つかるかも知れないと考えた。

「今、ジェイルくんが超大型錯乱機を開発している。そこで問題は、

これからじゃ！もしも、ガジェットを全て倒したとしてもテシターが居る様では、形成が逆転できない。だからこそ、テシターの体を調べれば弱点がわかるかも知れんのじゃ！それと、ドライアスが空港に向かったらしい急げ火鳥！」

「解りました！ケンタ行くぞ！」

火鳥達は、空港に向かった。

ガシン！

『ぐうう！！』

ガーディオンが鷹のロボットの電撃で倒れた。

「ガーディオン！リボルバーシュート！！」

スバルは、鷹のロボットに当てようとしたが素早くかわした。

「飛竜一閃！」

シグナムもデバイスを使い鷹のロボットを当てようとしたがスバルと同じ様にかわされた。

空からファイヤージェットとエースバロンがやって来た。

「ケンタは、テシターの確保を！」

「わかった！」

火鳥は、途中でケンタを降ろした。

「ファイヤー・・・ジェェェット！！」

火鳥は、空からファイヤージェットを呼び変形し巨大なロボットに変わり火鳥も変化したファイヤージェットに向かって宙を飛び体が火の鳥の様に成りロボットの中心に乗り移った。

『チェェェンジィィ・ファイバード！！』

火鳥は、ファイバードと成った。

エースバロンもビークルモードから分離して変形して他のバロンチームもロボットに変形した。

『フォームアップ！五体合体サンダーバロン！』

エースバロンは、サンダーバロンに合体した。

『大丈夫かガーディオン！』

『ああ・・助かったぜ・・・』

『ふふふ・・』

空を見ると鷹のロボットが居た。

『起動六課と宇宙警備隊がようやく揃った様だな・・・』

ファイバード達が見ると右にドラゴンのロボットが左に虎のロボットが居た。

『貴様等に俺様の邪魔は、させん・・』

三体のロボットから同じ声が聞こえた。

『なんだと!』「何なの貴方は!」

サンダーバロンとなのはが聞いた。

虎のロボットが右半分の体に成り、ドラゴンのロボットが左半分の体に成りそして鷹のロボットが胸部と頭部に変形して合体した。

『三獣合体!ドライアス!!』

合体を終わるとドライアスは、宇宙警備隊の中で大きいファイバードやフレイムナイトよりも大きかった。

ビューン!

ドライアスは、両肩のキャノンから砲撃を放った。

ファイバード達は、回避した。

『フレイムブレスター！！』

ファイバードは、腕を空に翳すと空からフレイムブレスターがやって来た。

フレイムブレスターがファイバードの真下に下りると合体した。

『フォームアップ！武装合体ファイバード！！』

『フレアミサイル！』

バッバッバッバッ

ファイバードは、両膝からミサイルをドライアスに放った。

「プラズマ・スマッシャー！！」

「エクセリオンバスター！！」

「リボルバーシュート！！」

「飛竜一閃！！」

「紫電一閃！！」

「クロスファイヤー・シュート！！」

「ラーケンフォルム！！」

『とぁ！』

『はぁ！』

宇宙警備隊と起動六課は、ドライアスに小細工の技が効かないと感じて全力で攻撃した。

『はぁあ！』

ドシン！

『「「「「ぐあああ！」」」」』

ガズン！！

『「「「「ぐふ！！！」」」」』

ドライアスは、軽々とファイバード達の攻撃をかわし目にも止まらない速さで攻撃した。

『ホラーハーケン！！』

ギン！

ドライアスの肩のドラゴンと虎の首がファイバード達を襲った。

『があ！』

『ぐう！』

次々にドライアスの前で倒れていった。
最後にファイバードとなのはが残った。
『おのれ！』「よくも皆を！」
なのはとファイバードがドライアスを睨んだ。

ドン！　バコーン！
ケンタは、ターザンのマネをしてテシター一体を倒した。
「やった！ファイバード！テシターを確保したよ！」
しかし、ビスターにファイバードは、出なかった。
「ファイバード！ファイバード！！」

ケンタは、不安に成った。

「きゃあ！」

なのはもドライアスにやられた。

ファイバードは、後ろから剣を取り出した。

『フレイムソード！！』

『デスブレード！！』

ドライアスは、左手から盾を出し盾かた巨大な剣を出した。

ファイバードの額が光出した。

『フレイムソード・チャージアップ！！』
剣の刃に炎が纏い怪物目掛けて構えた。
『えええいいいい！！！』
『デビルフォーン！！』
ドライアスのデスブレードから強大な暗黒エネルギーが溢れていた。
『はあ！』
キン！
ドライアスがファイバードの必殺技を受け止めた。
キィィィィィィィィィィィンンンンンンン！！！！！！！！！！
フレイムソードとデスブレードが共鳴した。
『何だ！この共鳴は！？か・・体が砕ける！！グアァァァァァ！！』
ドン！！
ファイバードは、デスブレードに押されて倒れた。
「火鳥さん！レイジングハート！！」【了解！プロテクション！！】
ガシィィィィ・・・

なのはがファイバードが砕けない様に防御魔法を張った。

『どうした？もう懸かって来んのか？』

ドライアスは、挑発して来た。

『お・・おのれぇ・・・・』

『いかん！このままでは、人質を助けられない！』

サンダーバロンがファイバードを止めた。

ファイバード達が見ると佐津田刑事等の地球から救援に来た人々もテシターやガジェットに拘束されていた。

『ぐ！退却するぞ！』

『「「「「「「「「「！！！！！」」」」」」』

サンダーバロン以外のスバル達が驚いた。

『退却！？』「そんな佐津田刑事は、どうするの？！」

ボォォォォォ！！

空港から赤い列車が来た。

『チェンジ！フレイムナイト！！』

列車は、変形した。

『フレイムナイト！』

ファイバード達は、驚いた。

『ファイバード！此処は、私に任せて早く撤退しろ！』

フレイムナイトがドライアスの前に立った。

『待ってくださいフレイムナイト！このままでは、幾ら貴方でも強力な肉体を持ったドライアスの前では！』

『解かっている！私は、時間稼ぎをしている！その間に早く撤退しろ！』

フレイムナイトも今のドライアスには、勝てないとわかっていたが囮に成ると確信した。

『すいまない！』

ファイバードは、ファイヤージェットに戻りテシターを捕まえたケンタを回収した。

サンダーバロンもビークルモードに成りガーディオンを乗せて去った。

なのは達も飛行魔法で撤退した。

一同は、天野平和科学研究所に向かった。『フレイムナイトよ…貴

様一人で何が出来る？』

ドライアスは、デスブレードを構えた。

『ソウルユニバース！』

フレイムナイトは、大地に両手を翳した。

『ヒィィィン！』

パカラパカラ！

深紅の赤い一角獣が時空から召還された。

ソウルユニバースは、腕と足そして頭に変形した。

フレイムナイトは、胴体に変形して合体した。

『フォームアップ！炎馬合体フレイムナイト！』

フレイムナイトは、炎馬合体フレイムナイトに成った。

『ソウルブレード！』

フレイムナイトは、左肩から盾を出して剣を出した。

『さあ！かかって来いフレイムナイト！』

ドライアスは、デスブレードにエネルギーを流し込んだ。

『行くぞォォォォ！（ファイバードよ！早く新たな仲間を呼んで来い！）』

『『ハァァ！！』』

二人の戦いが始まった。

第十二話：ミットチルダ征服宣言（後書き）

ケンタ「火鳥兄ちゃん達がドライアスに負けちゃった！そんな時、宇宙警備隊から応援が来るんだってその名もガードウィング！でもエリオとキャロは、コイツがあまり好きじゃないぽい。太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ　第十三話：ミットチルダ奪還作戦　次回も世界平和！」

第十三話：ミットチルダ奪還作戦（前書き）

前回の戦いでドライアスに負けてしまったファイバード達は、一体どうなるのか？

第十三話：ミットチルダ奪還作戦

前回の戦いでドライアスに敗れたファイバード達宇宙警備隊と起動六課は、天野平和科学研究所でそれぞれの治療を行っている。

「ウェンディ！そこの包帯をよこしてぇ！」

治療担当のクアットロは、なのは達の治療が急がし過ぎて他のナンバーズにも手を貸していた。

「わかったッス！」

ウェンディは、包帯を取りに倉庫に急いだ。

チラ

クアットロは、なのは達の様子を見て元気が無かった。

「はぁ～～・・・」

無理も無いこんなに怪我をして敗れれば元気も無くす方が普通だとクアットロは、思った。

「ちっくしょう！これからどうなるの火鳥兄ちゃん？」

しかし、火鳥は、黙々とバロンチームとガードチームの修理をしていた。

考えている様にも見える。

『弱気に成るなケンタ！思いは、みんな同じだ！』

「そうだよ！今こそ起動六課と宇宙警備隊を必要としている時なんだよ。」

ガードスターと片目に包帯をしているスバルが言った。

『そう思うだろファイバード！』

エースバロンが聞いた。

「ウボヨウワカナ。」

火鳥は、自分の星の言葉でエースバロンに答えた。

『ナ・・・イナトシレソ。』

エースバロンは、その言葉を理解した。

火鳥は、外に向かった。

「火鳥兄ちゃん！」

「僕も」

「私も」

ケンタと左腕に付帯をしてエリオと松葉杖で歩くキャロ、スバルも火鳥の後を追った。

外に向かうと火鳥は、左手に光を溜めていた。

「はぁ！」

ピィィィィン！！

空に向かって火鳥の溜めていた光が放射した。

「火鳥さん・・・？」

「今のは、何？」

ケンタ達は、驚いて何をしたのか解からないでいた。

「警備隊に向けたスクランブルだ。」

火鳥は、ケンタ達を見て答えた。

「仲間が来るって事だよケンタくん。」

スバルが説明した。

「仲間ですか！？」

「応援が来るの！？」

「けど・・何時頃来るんですか？」

エリオとケンタが喜んでいたがキャロは、肝心の仲間が何時来るの

か不安だった。

「今日中には、着くよ。」

火鳥は、キャロに答えた。

天野の個人の研究所では、ケンタが捕まえたテシターの分析の為に分解をしていた。

「これがテシターの中枢回路じゃな・・」

天野は、ようやくテシターの中枢回路の分解に成功した。

「こいつの機能を止める事さえ出来れば全て形成が逆転出来る。」

だか、中枢回路の分析は、予想以上に難しい構造に成っていた。

「ハカセ。これでは・・」

天野の側にいたウーノが心配に成って来た。

「いや！ここで諦めては、ミットチルダおの人々が今にも苦しんでいるんじゃぞ！今日は、徹夜で何としても解析せねば行くぞウーノ！」

「はい！」

二人の作業は、徹夜をしに入った。

そして夜が明けて朝に成った。

「最後の太陽光線を使う分析で・・・」

カチ！

ウィィィィィ

バン！

テシターの中枢回路は、壊れた。

「ハカセやりましたね！」

「そうか！太陽の光か！」

二人は、テシターの退治策を見つけた。

「これからミットチルダに向かうで！」

はやて達がデバイスを使おうといすると・・・

「エリオ・・キャロ・・貴方達は、天野さんの研究所で待機ね・・・」

なのはがエリオとキャロに言った。

「どうしてですか！？はやて部隊長！」

エリオが聞くとなのはがエリオの左腕を触った。

「っ！！」

エリオは、痛いが我慢した。

「これじゃあ、ストラーダを使えないしキャロも足が完治出来ていないからだよ。」

なのはは、火鳥に二人を預けた。

「火鳥さん。エリオ達をお願いします！」

「わかった！だが、俺達も向かう。」

火鳥は、承知した。

「応援は、まだ来ないの？」

コクン

火鳥は、頷いた。

「火鳥！」

天野が格納庫から来た。

「ハカセ。どうしたんですか？」

「少し手を貸して貰いたいのだが、ケンタと後二人程欲しいんじゃ！」

どうしても手が借りたいが火鳥も直ぐにミットチルダに向かってしまう。

「天野さん！お願いがあります！」

なのはが天野に寄って来た。

「エリオとキャロを手伝いに出してください！」

なのはが頭を下げて頼んだ。

「わかった！」

天野は、了承した。

「火鳥。仲間を呼んだそうだな？どの位かかるんじゃ？」

「今日中には、着くと思います。」

「そうか・・ならワシとジェイルくんの作った物をそいつに運ぶとして・・・さあ来い来い！」

天野は、ケンタ達を連れてジェイルやナンバーズが今、対テシター用の太陽エネルギー装置の作業をしている所まで向かわせた。

「それじゃあ私達も起動六課と一緒に行くぞ！」

火鳥は、ファイヤージェットに乗り、エースバロンと共に向かう時ガードチームがガーディオンに成りエースバロンに乗ってなのは達の飛行魔法を使いミットチルダに向かった。

ミットチルダでは、ドライアスに負けたフレイムナイトが人々の建造されている塔に縛られていた。

その中で佐津田刑事達の姿もあった。

そして上空から虫のロボットが人々の作業している場所に着陸すると足の部分が開きテシター数体とＤｒ．ジャンゴと覆面を被ったレジアス中将そして大統領が来た。

「さあ大統領！お前さんにも一仕事してもらうぞ！」

「歩け！」

ドン！

レジアスが大統領を足で蹴って前へ進ませた。

「そうだジャンゴ！」

フッと思い出したかの様にレジアスが言うとジャンゴも止まった。

「どうした？」

「奴等の中に抵抗をしても無駄だと言う事を示す為に公開処刑をしたらどうだ？」

レジアスの言葉にジャンゴも愉快に成った。

「よし！」

「待ってくれ！」

ジャンゴが行おうとすると大統領が声をだした。

「殺すなら私だけにしてくれ！」

大統領は、自分のせいで人々をこんな状況にしてしまって庇った。

「そうは、いかん！後数名を公開処刑に加えてやるわい！」

大統領と佐津田刑事の他の４人も公開処刑の為に連れて行かれた。

「（早く来て火鳥！）」

その中でミットチルダに潜って変装をしていたドゥーエが火鳥達を待ちながら塔の作業をしていた。

「此処もドライアスに占領されたのか・・・」

フェイトは、ミットチルダで占領されていない場所を探していたが殆どの村や町もドライアスによって人々が居なかった。

「ん！」

フェイトが見ると一人の少女が道に倒れていた。

「大丈夫！」

フェイトは、少女に駆け寄った。

少女は、気絶していた。

［フェイトちゃん！］

なのはの通信が入った。

「なのは！？」

［今からドライアスの居る地点まで行くから応援お願い！］

「うん！わかった！」

フェイトは、通信を切り少女を抱えたままなのは達が向かっている地点まで向かった。

「さあ！連れて行け！」

レジアスが言うとテシター達が人々を連れて行く。

ピューン！

空からビーム砲がテシター達を攻撃した。

「何！？」

レジアスが空を見るとファイヤージェットとサンダーバロンとガーディオンそして起動六課が居た。

「ファイヤー・・・ジェェェエット!!」

火鳥は、空からファイヤージェットを呼び変形し巨大なロボットに変わり火鳥も変化したファイヤージェットに向かって宙を飛び体が火の鳥の様に成りロボットの中心に乗り移った。

『フレイムブレスター!!』

ファイバードは、腕を空に翳すと空からフレイムブレスターがやって来た。

フレイムブレスターがファイバードの真下に下りると合体した。

『フォームアップ!武装合体ファイバード!!』

ファイバード達は、地面に着地した。

『宇宙警備隊、起動六課が来た!』

ファイバードが堂々と言った。

「さあ!今の内に大統領!」

佐津田刑事が大統領を誘導しながら他の奴隷と成った人々を非難させた。

虎のロボットが右半分の体に成り、ドラゴンのロボットが左半分の体に成りそして鷹のロボットが胸部と頭部に変形して合体した。

『三獣合体！ドライアス！！』

ドライアスに成った。

『ドライアス！人々を使って何をしようとしているんだ！』

『お前達には、関係ない！』

『！？』

ファイバードがドライアスに質問すると横から虫と首長竜のロボットがファイバード達に襲い掛かった。

「急いで！急いで！はっ！」

佐津田刑事が人々を非難させているとガジェットとテシターの大群に囲まれた。

彼らの前にジャンゴとレジアスが居た。

「宇宙警備隊と起動六課の者共よ！此方を見るがいい！！」

ジャンゴの声にファイバード達は、見ると人々が殺され様としていた。

『大人しくするんだな。』

シュラの声が首長竜から聞こえた。

『卑怯な！』「ぐうう！」

サンダーバロンとティアナは、怒った。

『よせ！』

ファイバードは、二人を止めた。

『私達は、どうなっても良い。人々の命を助けてくれ！』

ファイバードは、ドライアス達に頼んだ。

「ティ・・・ティアナ・・」

ファイバード達の方に居るティアナを佐津田刑事は、心配した。

『ふっふっふっ・・やれ！』

『はっ！』

シュラは、首長竜のロボットの口の辺りからバインドに似た物で宇宙警備隊と起動六課は、縛られた。

『貴様らには、フレイムナイトと一緒にデビルの塔の生贄に成って貰う。』

『デビルの塔だと！？』

ファイバードがドライアス達がデビルの塔を作る為に人々を奴隷にしたのだった。

「出来たぞ！」

天野は、ナンバーズとケンタ達の御陰で対テシター用の太陽エネルギー装置と超大型錯乱機が完成した。

「ハカセ！今、レーダーで上空に反応がありました！」

ウーノが天野に伝えた。

天野達は、対テシター用の太陽エネルギー装置と超大型錯乱機を運びながら外に出た。

其処には、ジャンボ機が此方に向かって来た。

「きっと火鳥さんが呼んだ仲間よ！」

ハルカが言うとケンタとエリオ、キャロがジャンボ機に近寄った。

『何だ。小僧、譲ちゃん、チビ。オレに何か用か？』

ジャンボ機は、態度悪そうに言った。

「チビ？」「小僧？」「譲ちゃん？」

ケンタ達は、それが自分達の事だと気付いた。

「俺は、チビじゃない！ケンタって名前があるんだ！」

「僕もエリオ・モンディアルって名前があるんだ！」

「私は、キャロ・ル・ルシエだよ！」

三人は、ジャンボ機に文句言った。

『悪かったな・・チビ、小僧、譲ちゃん。』

ジャンボ機は、謝ったが反省の色を見せなかった。

「お前！キャロをキャロって呼べ！」

エリオは、まだジャンボ機に腹が立っていた。

『オレから見れば、チビと小僧と譲ちゃんなんだよ！』

「何だと！」

エリオは、まだ不服らしい。

「止すんだ！エリオくんも君も！」

ジェイルが二人を止めた。

『オレは、君なんて名前じゃねぇ。ガードウィングって名前があるんだ！』

ガードウィングは、ジェイルに言った。

「そんな事よりも早く対テシター用の太陽エネルギー装置と超大型錯乱機を運んでくれ！」

天野は、もう時間が無い事を知っていた。

こうして、ケンタ、エリオ、キャロは、ガードウィングの中に乗っていた。

『ドライアスだと？ファイバード達は、まだあんな奴に手間取っているのか？』

余裕そうにガードウィングは、言った。

「ふざけるな！火鳥さん達でもあんな敵に敵わなかったぞ！」

『ってファイバード達は？』

ガードウィングは、エリオの話を無視してケンタに聞いた。

「ミットチルダだよ！次元でワープが終わったらミットチルダの上

空で作業をするから！」

ケンタがガードウィングに言った。

ファイバード達は、フレイムナイトと同様に塔に縛られていた。

「ティアナ！くそ！」

佐津田刑事は、デビルの塔に向かった。

ドスン！

「ぐう！」

バタン！

佐津田刑事が向かおうとしたらレジアスに膝で腹部を強く蹴り動け

なくなった。

「佐津田刑事！あんた佐津田刑事に何て事を！！」

ティアナは、レジアスを睨んだ。

ファイバード達の目の前にドライアスが来た。

『暗黒の神々よ・・これらの生贄を捧げる。我等に更なる暗黒エネルギーを与えよ！』

ドライアスの前で人々は、神に願うしか他に方法が無かった。

ガードウィングがミットチルダに来て宇宙に近い所まで来て発射した。

それをカメラで見ていた天野達は、確認した。

「ソーラーパネルオープン！エネルギー充電開始！」

「ソニックシステム・オン！」

天野とジェイルは、同時にボタンを押した。

装置が作動して周りからソーラーパネルと巨大なスピーカーが出て来た。

「エネルギー充電完了！」

「ミットチルダに居るテシターとガジェット共を吹っ飛ばせ！」

更に天野は、レバーを引いた。

ウィィィィィィィィィィィ

装置から光と微弱な超音波を地上のミットチルダに向けて発射した。

ズシン！　ズシン！

ミットチルダに居たがジェットとテシターが次々に倒れる。

「ハカセ！やりました！」

「おお！成功じゃ！成功じゃぁ！！ジャンゴとレジアスの鼻を明かしてやったぞ！」

二人は、喜んでいた。

『こ・・これは!?』

ドライアスも何が起きているのか解からなかった。

そして人々は、逃げて行った。

『捕まえろ!』

『はっ!』

ゾルとシュラは、ドライアスの命で動き出そうとしていた。

ピューン!

空からガードウィングがやって来てゾルとシュラに撃った。

『チビ!小僧!譲ちゃん!邪魔だ!』

ガードウィングは、行き成り三人の席から天井から追い出した。

「「うわあああああああ！！！！」」

三人は、驚いたが直ぐにパラシュートが出て来た。

『バトルアップ！チェンジ！ガードウィング！』

ガードウィングは、赤と白と青のロボットに変形した。

『まだ余計なのがいたか・・・「一人だけじゃない！」！？』

空からフェイトも遣って来た。

ファイトは、直ぐにケンタの元に来た。

「エリオこの子を頼むね！」

フェイトは、エリオに少女を渡した。

「はい！」

「えええ！！フェイト先生！？」

フェイトは、聞き慣れた声に向いた。

「その声は、ケンタ君！？」

フェイトは、何で学校の自分の生徒が此処に居るのか解からなかった。

「仕方ない！バルディッシュ！」

【了解マスター！】

フェイトは、ファイバードの救出に向かった。

『はあ！』

ビューン！

ガードウィングは、ファイバード達の縛りを壊した。

『すまない！』『助かったぜ！』

ファイバードとガーディオンは、お礼を言った。

『世話を焼かすぜ！』

ガードウィングは、照れて言った。

『デスブレード！！』

ドライアスは、左手から盾を出し盾かた巨大な剣を出した。

ファイバードは、後ろから剣を取り出した。

『フレイムソード！！』

ファイバードは、剣を持って構える。

『ソウルブレード！』

フレイムナイトは、左肩から盾を出して剣を出した。

『えええいい！！』

ドライアスは、デスブレードをファイバードとフレイムナイトに振った。

『『はあぁぁぁ！！』』

ガシン！

二人は、デスブレードをフレイムソードとソウルブレードで防いだ。

『食らえ！』

ガードウィングは、他のゾルとシュラをサンダーバロンとガーディオン達と一緒に攻撃していた。

「リボルバーシュート！！」

「クロスファイヤー・シュート！！」

起動六課は、宇宙警備隊の援護にいた。

『おのれ！』

ゾルが虫のロボットを動かして空に出た。

ガードウィングは、変形して空に向かった。

『このオレにそれで挑むとは、なあ。』

ガードウィングは、軽々と虫のロボットの攻撃をかわしていった。

『食らえ！』

ガシン！

ガードウィングは、虫のロボットを蹴りデビルの塔に叩き落した。

ドン！

虫のロボットは、倒れる。

『今だ！ガーディオン！』

ガードウィングがガーディオンに言った。

『ガードブラスター！！』

バッバッバッバッバッバッ！！

ドーン！

デビルの塔は、崩れていった。

『おのれ！』

それを見たドライアスは、不満に成った。

『残念だったな！デビルの塔を使い。真の邪神に成る貴様の計画も

崩れたな！』

フレイムナイトがドライアスに言った。

ビューン！

首長竜のロボットがファイバード達に攻撃した。

『ドライアス様！此処は、一旦お引き上げを！』

シュラが言うとドライアスは、空に飛んだ。

『ファイバード！この借りは、必ず返す！』

ドライアスは、巨大なジェット機に成りミットチルダを後にした。

ファイバードの額が光出した。

『フレイムソード・チャージアップ！！』

剣の刃に炎が纏い首長竜のロボット目掛けて構えた。

『ええええいいいい！！！』

シュパ！！

ドオオオオンンン！！

ロボットは、ファイバードの必殺技で爆発し一つの脱出ポットでにげって行った。

ジャンゴとレジアスも逃げようとした時、ケンタ達の側に少女が居た。

「此処に居たのか聖王！」

レジアスは、少女に向かって走り寄った。

「いけない！ケンタくん！」

スバルは、気付きケンタの元に来た。

「邪魔だ！」

ブビュゥゥゥゥゥ！！

レジアスは、懐からジャンゴに貰ったＧＰ液をスバルに発射させた。

ヒュッ！

スバルは、４人を瞬時に抱き抱えて非難した。

「ぐうう！」

バタン！

スバルが倒れた。

「スバル姉ちゃん！」

「「スバルさん！」」

４人は、駆け寄るとスバルの二の腕からＧＰ液の一滴が付いていた。

「「「！！？」」」

エリオ、キャロ、ケンタは、更に驚く物を見てしまった。

少し解けたスバルの二の腕から機械の様な物が現れた。

『スバル！』

ガーディオンが気付きスバル達に駆け寄った。

「くそ！ん？これは！？」

ジャンゴは、スバルの二の腕を見た瞬間に驚いた。

「まさか！タイプゼロシリーズが！？」

ジャンゴとレジアスの前にドライアスが来て二人を乗せて行った。

『大丈夫かスバル！』

ガーディオンは、合体を解除してガードレスキューが見様とした。

『！！？これは！？』

ガードレスキューは、驚いた。

スバルの体の半分以上が機械で出来ていた。

ガードレスキューは、応急処置をして天野とジェイルをミットチルダに呼んだ。

第十三話：ミットチルダ奪還作戦（後書き）

ケンタ「スバル姉ちゃんがレジアス中将の使ったＧＰ液に触れてしまってミラクル大変だ！そしてフェイト先生が俺に宇宙警備隊を辞めろって言ってきた。　太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒＳ第十四話　フェイト先生の過保護！？　次回も世界平和！」

第十四話：フェイト先生の過保護！？（前書き）

※お知らせ

家業の都合で書けませんでした。すいません。

1ヶ月に一、二回は、書き込みます。

誠に身勝手で申し訳ありません。

第十四話：フェイト先生の過保護！？

天野とジェイルは、ガードウィングに乗り急いでミットチルダに向かった。

（まさか…ガードレスキューの言っていた事じゃなければ良いんだが…）

ジェイルは、通信でガードレスキューからスバルの身体の半分以上が機械だと伝えられ不安だった。

「スバル姉ちゃん！スバル姉ちゃん！！」

ケンタは、なのはと一緒にガードレスキューに乗り病院に向かった。

「ケンタくん。落ち着いて。」

なのはは、興奮しているケンタを宥めた。

「ごめんよ！俺が足手まといだったせいでこんな目に……」

ケンタは、泣きながら自分を責めた。

「ケンタくん…」

なのはは、ケンタに対して慰めの言葉が見つからなかった。

ガードレスキューが止まると病院に着き後ろのドアからゲンヤと眼鏡を付けた白衣の若い女性もいた。

「っ！早く治療室に運んで！急いで！！」

女性もスバルの様態を見てスバルを運ぼうとするとタクシーが病院に止まり天野とジェイルがケンタの方に来た。

「ケンタ！」

二人は、ケンタの様子がおかしい事に気付いた。

「にいちゃん……じいちゃぁぁぁぁん！」

ケンタが天野に泣きついた。

「スバル姉ちゃんが俺達を庇ってジャンゴのＧＰ液に……」

天野とジェイルは、ケンタの言いたい事を理解してジェイルが女性に近寄った。

「すいません。」

ジェイルが声をかけると女性は、振り向いた。

「何ですか貴方は!?」

行き成りジェイルに声をかけられ何だ?と思った。

「私も彼女の治療の手伝いを一緒にしても良いですか?彼女の身体が普通の人間でない事は、承知しています!」

「貴方…何でそれを!?」

女性は、スバルの身体の事を知っているのが父親のゲンヤと姉のギンガと女性、そして亡きスバルの母親のクイント以外知らない筈だが、そんな事を彼に聞いている暇が無かった。

「判りました!来てください!」

ジェイルと女性は、急いで治療室に向かった。

「シグナム、シャマル、ヴィータ!何でケンタくんが宇宙警備隊にいるって言わなかったの!!!」

デビルの塔の跡でフェイトは、シグナム、ヴィータ、シャマルに怒

鳴った。

『おいおい！黙って聞いて居ればそんな言い方無いだろ！』

ガードファイヤーがシグナム達の前に立った。

「貴方は、黙ってください！」

フェイトは、ガードファイヤーにも怒鳴った。

『何だと！『よせ！ガードファイヤー！』

サンダーバロンがガードファイヤーを止めた。

「落ち着いてください。」

火鳥もフェイトを宥めたが全く頭に血が昇っていて火鳥の話を聞こうとしなかった。

「あの子は、まだ幼い子供ですよ！本当なら普通に学校に行っている平凡な子供なのに……」

フェイトは、デビルの塔を後にした。

シグナムが火鳥の前に立った。

「火鳥…許してやってくれ…過去に色々あってな。」

シグナムは、フェイトの考えを理解してか火鳥に謝った。

病院のスバルの治療を終えてケンタは、なのはと天野とゲンヤに付き添われている。

更に奥の会議室でジェイルが女性と話をしていた。

「私の名前は、マリエルと申します。何故、スバルの身体の事を知っていたのですか？」

ジェイルは、マリエルに聞きかれ少し言い辛く成った。

これは、自分が犯した取り返しのつかない事だ！と思い口を開けた。

「Ｄｒ．ジャンゴが数年前に私の研究所からサイボーグの設計図を盗まれた事から始まります。」

ジェイルは、これまでの話をマリエルに説明した。

「それじゃあ、ガジェットも貴方が作った物をＤｒ．ジャンゴが利用していたのですか！？」

ジェイルは、マリエルの質問に頷くしか出来なかった。

「私は…償えない物を彼女に背負わせてしまった…だからこそ、Ｄｒ．ジャンゴとレジアス中将の野望を阻止しなければいけない！」

ジェイルの世界平和を守る気持ちがマリエルにも伝わった。

「私は、誤解していました。貴方が自分の欲望の為にあの子をあんな身体にしたので無く良かったです。」

マリエルは、ホッと安心した。

「そう言う事か！」

「「！！？」」

ジェイルとマリエルが振り向くとレジアス中将達の部隊がいた。

「レジアス！」

ジェイルは、レジアスを睨んだ。

「久しぶりだなジェイル・スカリエッティ…まさかこんな再会に成るとはな！」

レジアス中将は、ジェイルを小馬鹿にする様に笑った。

「ジェイル・スカリエッティ！貴様をミットチルダでガジェット大量の生産及びテロ未遂の容疑で逮捕する！」

レジアス中将が手で合図をすると部下の一人がバインドを使った。

「待ちなさい！」

連行されるジェイルの目の前にノルウェールの部隊もいた。

「ノルウェール一等空将！」

マリエルも彼の顔を見ると立ち上がり敬礼した。

「レジアス中将。これは、一体どう言う事ですか？」

ノルウェールは、冷静な口調だが目に殺気が合った。

「ノルウェール一等空将！これは、この男がテロに関わると思い取り調べの為に連行します。」

レジアス中将は、冷汗を流しながらノルウェールの顔を見た。

「彼は、このミットチルダを救ってくれた恩人ですぞ？それをこんな仕打ちは、些か酷いのではないですか？」

ノルウェールの言葉にレジアス中将達は、固まった。

「し…失礼しました。」

レジアス中将達は、病院を後にした。

「大丈夫ですかな？」

ノルウェールは、威厳のある顔から優しいお祖父ちゃんの顔に変わ

った。

「ノルウェール一等空将ありがとうございます！」

マリエルは、また敬礼した。

「いやいや、私は、只のノルウェールとして宇宙警備隊とこの若者に感謝している老人なんですよ。」

ノルウェールは、マリエルに言ってジェイルの所まで来た。

「ありがとうございます。貴方達の御陰で多くのミットチルダの国民を助かりました。」

ノルウェールは、ジェイルの両手に握手した。

「貴方の様な局員に早く出会っていれば良かった。」

ジェイルの目から涙が溢れた。

「ジェイルくんどうしたんじゃ？」

天野となのはとゲンヤがやって来た。

「ハカセ、ケンタくんは？」

「今は、少しそっとさせている。」

ケンタは、自分を責めているので天野達が少し一人にさせておこうと考えた。

「ハカセ！皆さん少し場所を変えて話したいのですが…よろしいでしょうか？」

ジェイルの真剣な目に話したいので場所を変えて会議室に向かった。

ケンタは、病院の控え室にいた。

「ケンタくん…」

ケンタは、目の前にフェイトが立っていた。

「フェイト先生…」

学校で見るフェイトとは、まるで違う雰囲気をしてケンタを見ていた。

「ケンタくん…あのね…私達管理局と宇宙警備隊に関わるのを辞めなさい！」

フェイトがケンタに対してとんでもない言葉を放った。

「え！？けど…俺…」

「いい！ケンタくん！貴方は、まだ子供で平凡な暮らしをするべきなんだよ！」

フェイトは、ケンタに管理局と宇宙警備隊から足を洗って欲しかった。

「嫌だ！先生は、そう言うけど…俺は、火鳥兄ちゃん達の手助けをしたいんだ！」

「いい加減にしなさい！あんな危ない人達と一緒にいたらケンタくんが駄目に成るんだよ！！！」

フェイトは、ケンタに一喝してケンタも脅えた。

フェイトともケンタに対して一喝した事にハッと我に返った。

「っ！ご…ごめんなさい…ケンタくん。でも先生は、ケンタくんの事を「先生の方が火鳥兄ちゃん達を解っていないじゃないかぁ！！」ちょ、ちょっとケンタくん！」

ケンタを捕まえようとしたがフェイトは、ケンタに対して納得する言葉が出せなくその場で足を止めた。

ポタ…ポタ…

（私…なんて最低な女なの！！）

フェイトは、近くに在る椅子に座り声を殺しながら泣いた。

会議室でジェイルは、深刻な顔に成りながら天野達を見た。

「私とレジアス中将と出会ったのは、今から十年前に成ります。」

ジェイル・スカリエッティは、十数年前に神童と呼ばれて１２才でミットチルダの大学に進むと僅か２年で全ての学科を取得して１５才で個人の研究室を持つ様に成った。

ガチャ！

ある日の事、研究を行っていると管理局員の制服を着た体格の良い男と数人の武装した局員が行き成り研究室に土足で入って来た。

「な…何ですか貴方方は！？」

ジェイルは、困惑して管理局員達を睨んだ。

「私は、管理局のレジアス中将だ！貴様の研究を我々に提供しないか？」

レジアスは、ジェイルの研究がどうしても欲しかった。

「目的は、何ですか？」

ジェイルは、レジアスの目的が理解出来なかった。

「黙って研究を我々に渡せば良いんだ！」

レジアスは、理不尽に研究を奪おうとしたがジェイルがレジアスの腕を掴んだ。

「止めて下さい！」

ジェイルも行き成り来てこんなやり方に我慢成らなかった。

「離せ！」

レジアスの腕力には、ジェイルも適わなかった。

「やれ！」

レジアスが命令すると部下達がジェイルに蹴りや殴りで痛めつけた。

「そこで何をしている！」

研究室からスキンヘッドの眼鏡を付けた老人が来た。

「ガルドマン教授…」

ジェイルは、顔に青あざや白衣がボロボロに成った状態でガルドマン教授を見た。

「ガルドマンか…」

レジアスもジェイルの研究に手を付ける前にガルドマンを見た。

「民間人に暴行するのが管理局員のする事か！」

ガルドマンがレジアスに寄って来て言った。

「なら貴様の研究を渡すのであれば大学から去ろう。」

レジアスは、威嚇した。

「くっ！良いだろう！」

ガルドマンは、悔しそうにレジアスの要求に答えた。

ガルドマンは、スーツから一つのディスクを取り出してレジアスに渡した。

レジアス達は、勝ち誇ったの様に大学を去った。

「ジェイル大丈夫か！？」

ガルドマンは、倒れたジェイルを起こした。

「はい…何とか。ですが教授。貴方の研究を「気にするな若者の命に比べれば安い物だ。」教授…」

ガルドマンは、笑顔で答えた。

「オレの研究室に治療箱があるから行くか？」

ジェイルは、頷いてガルドマンの肩に乗せられてガルドマンの研究室に向かった。

ジェイルは、傷薬とバンソーコーで治療された。

ジェイルが白衣を着ようとすると机にガルドマンとジェイル同じ年の女性の写真が飾っていて笑顔だった。

「教授。この人は？」

「オレの死んだ娘のウーノだ。美人だろ？死んだ母親に似て優しくて子供が好きな子だった。」

ガルドマンは、嬉しそうに言った。

数週間後、ガルドマン教授は、管理局の近くの裏路地に死体で発見された。

そして死因は、心筋梗塞と管理局の会見で伝わった。

「嘘だ！」

会見の広間にジェイルが抗議をした。

「教授は、昨日まで健康だった！何故心筋梗塞なんだ！」

会見で騒ぎを聞いた武装局員の手によりジェイルは、留置所で2ヶ月間の拷問をされ釈放された。

大学に帰ってジェイルは、ガルドマン教授の再調査を求めて大学の教授達に声をかけたが教授達は、誰一人動かなかった。

それ処か、レジアスの圧力で口止めされていた。

ジェイルは、研究を誰一人として認めようとしなかったのがレジアスの力が大学に及んでいた為だった。

そして天野達と出会うまで大学で片身が狭い思いをしていた。

「これがレジアスとの関わりです。」

ジェイルが己の天野に出会う前の事を説明した。

「だからこそレジアスの野望をくい止めなければいけません！」

ジェイルのレジアスを憎む気持ちが天野達にも伝わった。

「管理局を代表して謝罪をします。すいませんでした！」

ノルウェールがジェイルに謝罪をした。

「いいえ。貴方は、私をハカセと同様の扱いをしてくれました。お顔を上げて下さい。」

ジェイルは、笑顔でノルウェールに言った。

「その通りじゃ！悪いのは、悪に荷担しているレジアスとジャンゴじゃ。ノルウェール、アンタのせいじゃない。」

天野もノルウェールを励ました。

病院からケンタが出て来てガードレスキューと目が合った。

『どうしたんだケンタ？』

ガードレスキューは、心配そうにケンタを見つめた。

「えっ？ガードレスキュー、何でも無いから。」

ケンタは、目に溜まった涙を腕で拭き去った。

『おい！ケンタ！』

ガードレスキューがケンタを呼び掛けようとしたがケンタは、病院を走り去って行った。

「ケンタくんに謝らないと。ケンタくん！」

病院からフェイトがケンタを探していた。

『（あの女性は、確かスバルの上司のフェイトと言う人だな…）』

ガードレスキューは、以前スバルからフェイトの事を聞いていた。

『どうしたんですか？』

「え！？誰ですか？何処に居るんですか？」

フェイトは、周りを見たが救急車しか無かった。

『此処です。』

フェイトは、声のする方向を見ると救急車から声がした。

「貴方も宇宙警備隊何ですか？」

フェイトは、スバルの運んだ救急車も宇宙警備隊だと知り戸惑った。

『はい。私は、ガードレスキューです。』

ガードレスキューは、フェイトに自己紹介をした。

『もしやケンタを探しているんですか?』

フェイトは、ガードレスキューの質問に驚いてしまった。

ガードレスキューは、救急車のドアを開けた。

『乗ってください。』

「何でですか?」

フェイトは、睨んだがガードレスキューにも考えがあるらしい。

ガードレスキューにフェイトが運転席に乗って道を走り出した。

『ケンタと喧嘩したのは、我々宇宙警備隊の原因ですか?』

ガードレスキューは、冷静に聞いた。

「すいません…」

フェイトは、ガードレスキューに対して謝った。

『ケンタは、悪い奴じゃありません。この世界と地球をドライアスの魔の手から一緒に戦っている掛け替えの無い仲間です。理解してください。』

ガードレスキューは、言い方を変えて言った。

「ガードレスキューさん!」

『ガードレスキューで良いですよ。』

「ガードレスキューは、ケンタくんに助けられたの？」

フェイトの質問に驚いた。

『ええ、ミットチルダの人々の救出には、ケンタやエリオ、キャロの手助けが無かったら今此処にいません。』

ガードレスキューの感謝の気持ちがフェイトに伝わった。

『ですからケンタに無理に言うんじゃ無く見守ってあげてください。』

「そうですね…私は、ケンタくんに間違った教え方をしそうに成っていました。」

フェイトは、管理局員である前に人である。

人は、過ちを犯す生き物である。

『さあ、早くケンタに会って謝りましょう。』

「そうだね。」

フェイトとガードレスキューは、ケンタを探し始めた。

ケンタは、公園のベンチに座っていた。

「ケンタ～！どうしたんだ？」

火鳥がベンチに座っているケンタを見付けて寄って来た。

「火鳥兄ちゃん。」

ケンタも火鳥の声に気が付いて振り向いた。

「病院で何かあったのか？」

火鳥は、心配そうにケンタを見た。

「火鳥兄ちゃん。俺ってみんなの役に立っていないかな？」

ケンタは、フェイトに言われた事がショックだった。

火鳥は、頭を横に振った。

「いや、そんな事は、無いさ。ケンタやハカセ、ハルカ、ドクター、みんなの御陰でドライアスの野望を阻止して来た。ケンタは、必要不可欠な仲間の一人さ。」

火鳥は、ケンタに真実を語った。

ケンタも火鳥の言葉を聞くと勇気が湧いて来た。

「火鳥兄ちゃんサンキュー！俺、フェイト先生にもう一度話し合って来るよ！」

ケンタは、ベンチから立ち上がった。

ゴッゴッゴッゴッゴッ！！！

突然、地響きが発生した。

「火鳥兄ちゃん！」

「解っているドライアスだ！」

火鳥は、地響きが病院の方に向かっていた。

『こ、これは！？』

「何なの！？」

公園の近くを運転していたガードレスキューが止めてフェイトも驚

いた。

「ガードレスキュー！」

公園から火鳥とケンタが出ようとするとガードレスキューが居て火鳥は、ガードレスキューを呼んだ。

『ファイバード、ケンタ！』

ガードレスキューが後ろのドアを開けた。

火鳥とケンタは、ガードレスキューの中に入った。

「フェイト先生!?」

「ケンタくん!?」

ガードレスキューの中には、フェイトが乗っている事にケンタが驚いた。

「ケンタは、他の宇宙警備隊に連絡を！」

「わかったよ！」

ケンタは、ビスターで他の宇宙警備隊に連絡した。

「ガードレスキュー、急いで病院に向かってくれ！」

火鳥が言うとガードレスキューは、急行で向かった。

病院でめ地響きがしていて天野達も驚いていた。

「佐津田刑事！何しているんですか！」

「はっ、離せティアナ！」

病院でレジアスに受けた怪我であまり動けない佐津田刑事が病室を抜け出そうとしてティアナに止められた。

「肋が骨折しているんですよ！下手に動いたら死んでしまいます！」

ティアナは、病院の医師から肋が骨折しかけていると言われていた。

「くっそー！無念だ！」

佐津田刑事は、肋の痛みを耐えながら他の病人と一緒にティアナの指示で非難した。

病院の入り口辺りの地面からモグラのロボットが現れた。

「聖王は、何処だ！？」

レジアスは、モグラのロボットに乗って聖王の子供を探していた。

ヴィィィン！

モグラのロボットの目からビームを放って病院の一部を壊して探していた。

「こ…これは！？」

病院に向かう道でガードレスキューに乗っていた火鳥達がモグラのロボットが病院を襲っていて驚いた。

「ガードレスキュー！急いで未だ病院の中に居る人達の救助をしてくれ！」

『了解！』

ガードレスキューは、病院に向かった。

『バトルアップ！チェンジ・ガードレスキュー！』

ガードレスキューは、ロボットに変形した。

『レスキューガーゴ！』

ガードレスキューは、両腕が変形して籠状に成り逃げ遅れた人達に向けた。

『さあ、これに乗って下さい。』

人達は、ガードレスキューに運ばれて安全な場所に非難させた。

バン！

病院から火が着いた。

『！？いかん！『オレ達も居るぜ！』

ガードレスキューの後ろから他のガードチームが現れた。

『バトルアップ！チェンジ・ガードファイヤー！』

『バトルアップ！チェンジ・ガードスター！』

『バトルアップ！チェンジ・ガードウィング！』

他のガードチームのロボットに変形した。

『ガードファイヤーは、消火作業を！ガードウィングは、俺と一緒にドライアスのメカ獣をくい止めるぞ！』

『『了解！』』

ガードファイヤーは、病院の消火作業を行い。

ガードスターとガードウィングは、モグラのロボットと交戦した。

『スターブラスター！』

『食え！』

バッバッバッバッバッバッ！！

二人の銃撃がモグラのロボットに当たった。

「小賢しい蟻共め！」

レジアスは、モグラのロボットで二人を振り払った。

ガキン！

『『グアアアア！』』

二人は、モグラのロボットに振り払われて地面に倒れた。

「ん？あれは！？」

ケンタが病院から見ると屋上にレジアスが聖王と呼んでいた子供が脅えて動けないでいた。

「火鳥兄ちゃん！屋上に子供が居るよ！」

「何だって！？」

火鳥も屋上を見ると子供が居た事に気付いた。

火鳥とケンタは、屋上に向かった。

『ストロングホース！』

『ハイデンションバンテージ！』

ガードファイヤーとガードレスキューは、自分達の作業が終わりガードスターとガードウィングの加勢に来た。

『大丈夫か！？』

ガードファイヤーは、二人に聞いた。

「洒落臭い！」

ブチ！

ガキィィン！

『『『グアアア！』』』

ガードチームは、飛ばされた。

『合体た！』

『『おう！』』

ガードスターが答えるとガードファイヤー、ガードレスキューが頷いた。

『ガードチーム！フォームアップ！』

ガードスターが胸の辺りに変形しガードファイヤーが胸を収める部分と両腕、両腿に変形しガードレスキューが両足に変形して装着した。

『三体合体！ガーディオン！！』

ガーディオンに成った。

ガシン！

ガーディオンは、モグラのロボットを抑えて病院に近づけさせない様に止めた。

「食らえ！」

ポチ！

レジアスは、操縦席にあるボタンを押した。

キュゥゥゥンン！！！

モグラのロボットの鼻がドリルに成りガーディオンに襲い掛かった。

『何！？』

ピューン！

空からモグラのロボットをガードウィングが攻撃した。

『オレも居る事を忘れるな！』

ガードウィングは、空からガーディオンのサポートをしていた。

病院の中では、ケンタと火鳥が屋上の少女を救出に向かっていた。

「うわ！あぶねぇ！」

病院の中は、火が消えていたが今にも倒壊しそうな感じがした。

「気をつけろケンタ。」

「うん・・・」

火鳥もケンタを励ましたがケンタの内心は、不安だった。

火鳥達は、次々と障害物を通り越して屋上に出た。

ギィィ

屋上の扉を開けると少女がモグラのロボットとガーディオン達の交戦の中に居て動けないでいた。

「ケンタは、此処から動くな。」

ケンタは、頷いて火鳥が少女の方に向かった。

「さあ。もう大丈夫だよ。」

少女は、火鳥を見ると安心したのか火鳥に抱きついてきた。

レジアスもガーディオン達の交戦で少し手こずっていた。

「くそ！ちょこまかと！」

ヴィィィィン！！

ガーディオンは、ビーム砲を避けた。

ガシャ！

ガーディオンの避けた方にケンタの近くだった。

「うわぁぁぁ！！」

建物が一部崩壊してケンタは、崖に成っている方に掴まっていた。

『しまった！はっ！』

ガーディオンがケンタの方に行こうとするとモグラのロボットが突進して来て身動きが出来ない状況だった。

「ケンタ！」

火鳥も助けに向かったが下手に動けばその振動でケンタが落ちてしまう。

『チビ待っていろ！』

ガードウィングがケンタの方に向かった。

「そうは、させるか！」

モグラのロボットは、片手を伸ばしてガードウィングを捕まえて地面に叩きつけた。

ゴン！

『ぐお！』

ガードウィングが地面に落ちた振動でケンタの手が離れて落ちた。

「うわあああああああああ！！！」

「ケンタぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

火鳥もケンタを助けようとするが間に合わない。

「バルディッシュ！ソニックフォーム！」

【了解マスター。ソニックモード発動！】

フェイトは、バリアジャケットを着てソニックフォームに成った。

ピュ！

「？あれ・・？」

目を開けるとケンタは、無事で誰かに抱き締められたまま地上にいた。

「ケンタくん！大丈夫！？」

ケンタは、振り向くとフェイトが助けてくれたと思った。

「良かった・・・本当に良かった・・・」

フェイトは、ケンタが死ななくて安心した。

「ケンタ！」

火鳥も屋上から退避してケンタ達の方にいた。

「大丈夫か？」

火鳥も心配した。

「うん！俺は、フェイト先生に助けられて平気だよ。」

ケンタの元気な姿を見たフェイトは、少しホッとして火鳥も見た。

「よくも私の生徒を！」

ギロ！

フェイトは、モグラのロボットに睨んだ。

「ケンタは、その子を連れて安全な場所に！」

火鳥は、ケンタに少女を渡すとケンタも指示に従った。

「許せない！ケンタくんを・・・私の可愛い生徒を殺そうとする人は・・・カトリ・・私も戦わせて！」

火鳥は、フェイトがケンタを大切な人だと確信した。

「ファイヤー・・・ジェェェット！！」

火鳥は、空からファイヤージェットを呼び変形し巨大なロボットに変わり火鳥も変化したファイヤージェットに向かって宙を飛び体が火の鳥の様に成りロボットの中心に乗り移った。

『チェェェンジィィ・ファイバード！！』

火鳥は、ファイバードと成った。

『とりゃ！』

ガキン！

ファイバードは、モグラのロボットに蹴ってガーディオン達を助けた。

『己の欲望の為に罪も無い人々を犠牲にする者は、このファイバードが許さん！』

「また五月蝿い蝿が来たな！」

『フレイムブレスター！！』

ファイバードは、腕を空に翳すと空からフレイムブレスターがやって来た。

フレイムブレスターがファイバードの真下に下りると合体した。

『フォームアップ！武装合体ファイバード！！』

後ろからフレイムソードをファイバードは、出しフェイトもバルディッシュを構えていた。

ファイバードの額が光出した。

フェイトもバルディッシュからカートリッチが数弾外に出た。

『フレイムソード・チャージアップ！！』

「プラズマ・スマシャー！！！」

バルディッシュから大量の電気を放出した。

剣の刃に炎が纏い怪物目掛けて構えた。

『えええいいいい！！！』

シュパ！！ビリ！

ドオオオオンンン！！

ロボットは、ファイバードとフェイトの必殺技で爆発し一つの脱出ポットでにげって行った。

「火鳥…いやファイバードやみんな…ありがとう。君達にまた助けられたね。」

ノルウェールは、宇宙警備隊に御礼を言った。

「そうだ！今日から2日間は、このミットチルダに滞在していかないな？地球に居る天野さんの家族も呼んで。」

ノルウェールは、どうしても彼等に御礼をしたがった。

「本当か！？」

天野は、嬉しそうに言った。

「ええ！起動六課の宿舎を利用してください。」

ノルウェールの言葉を聞いた天野は、なのは達の方に来た。

「悪いんじゃが…お前さん達の移動魔法でハルカ達も呼びたいんじゃが良いか？」

「はい。大丈夫ですよ。」

なのはは、移動魔法でハルカ達に伝えて連れて来た。

その夜は、盛大なパーティーが起動六課の宿舎で行われた。

第十四話：フェイト先生の過保護！？（後書き）

ケンタ「ミットチルダに滞在している俺達は、ミラクル楽しい。えっ？俺と火鳥兄ちゃんが助けた女の子が居なく成っただってミラクルまずいよ！エリオとキャロは、レジアス中将の部隊に絡まれた！
太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒＳ　第十五話　少女の名前は、ヴィヴィオ　次回は、ちょっとお休み」

第十五話：少女の名前は、ヴィヴィオ（前書き）

お久しぶりです。今回の話は、雑談や文章に成っていないかもしれませんがご理解お願いします。

第十五話：少女の名前は、ヴィヴィオ

その夜、火鳥達宇宙警備隊と天野達は、起動六課のパーティーにいた。

「いや～アンタも良い飲みっぷりじゃな！」

「はっはっはっ！じいさんも良い飲みっぷりだぜ！」

天野は、お酒を飲んでゲンヤと意気投合していた。

「全く、しょうがないわねおじいちゃん…」

「恥ずかしいわ…」

ハルカとギンガは、二人に呆れていた。

「すいません！すいません！」

ウーノは、起動六課の人達に謝った。

他のナンバーズも豪華な料理に興奮しながら食べてワイワイガヤガヤと楽しんでいた。

「ケンタくんも飲もうよ！」

なのは酔っ払ってケンタにお酒を渡した。

「なのは！ケンタくんになんて物飲ませようとしているの！」

フェイトがケンタとなのはの間に入ってなのはを止めた。

「もうフェイトちゃんは、頑固なんだから！」

なのはは、ケンタの近くに居るフェイトのガードが強くて困っていた。

「フェイト先生！俺、スバル姉ちゃんの所に行ってパーティーの食べ物を渡してくるよ」

ケンタは、お皿にパーティーの食べ物を沢山乗せてスバルの寝ている部屋に運びに行った。

「ところでティアナは、何処に居るんだ？」

ヴィータは、ジュースを片手で持って隣でパーティーの食べ物を食べているシグナムに聞いた。

「ティアナは、未だ入院中の佐津田刑事の付き添いだ。」

シグナムは、パーティーの前にティアナからどうしても佐津田刑事の看護をしたいとお願いしてきた。

無論、佐津田刑事には、何時もお世話に成っている人なのでなのは達もティアナに佐津田刑事の看護に行って良いと許可した。

「アイツ、佐津田刑事に可愛いがられていたからな。」

そう言いながらジュースを飲むヴィータ。

『スバル、大丈夫か？』

スバルの部屋には、スバルとガードファイヤーが居た。

スバルの部屋は、上の階なのでガードファイヤーが梯子を使い屋上に引っ掛ける形でスバルと話していた。

「うん。少し良く成ってきたって、マリエルさんが言ったからもう大丈夫なのにガードファイヤーったらなのはさん達にお願いしてしばらくは、休ませてくれって頼むから一週間も部屋の中に居る事に成っちゃたよ。」

スバルが答えるとガードファイヤーは、ホッとした。

『何言ってやがる！お前は、俺達宇宙警備隊と同じで体が資本なんだから完治するまで休むのは、当然だろうが。』

ガードファイヤーは、一週間外に出られないスバルの話し相手をしようとしていた。

「プッ！」

ベッドで寝ているスバルが突然笑い出した。

『な！何だよ！行き成り笑い初めてどうかしたのか？』

「ううん。ガードファイヤーって何かお兄ちゃんみたいだなって思えて。」

スバルは、愉快な顔をして答えた。

『お前な…俺達、エネルギー生命体は、人間の２０才が俺達だと１２０００才だぞ。』

「ええっ！そ…そうなの？」

スバルは、ガードファイヤーの実年齢が自分の父親よりある事に驚いた。

「じゃあ…ノルウェール一等空将も？」

『そりゃそうだろ？兄貴は、俺達の中でも一番年上だしエースバロンが二番目だからな。』

スバルは、呆然とした。

『まあ、そのじいさんでも結構兄貴に耐える肉体だから今まで乗り移ってられたけどな。』

ガードファイヤーの言葉にスバルも納得した。

ガチャ

スバルの部屋のドアが開いた。

「スバル姉ちゃん！ご飯持って来たよ。」

ドアからケンタがスバルの部屋に入って来た。

「ありがとうケンタくん。」

スバルは、テーブルに食べ物を置いたケンタに御礼を言った。

「体の方大丈夫？」

ケンタが心配でスバルを見た。

「うん！大分良くなってきたよ。」

スバルは、何時もの様に元気な表情だった。

「スバル姉ちゃん！俺も自分の分の食べ物を持って来たんだ一緒に食べて良い？」

ケンタは、片手に自分の食べ物のお皿をテーブルに置いた。

「良いよ。」

こうして、ケンタとガードファイヤーは、スバルの顔を見て安心した。

一方、ノルウェールの家では、八神はやてが来ていた。

「ノルウェール一等空将、お疲れ様です。」

はやては、ノルウェールに敬礼した。

「ノルウェールのおじいちゃん、お疲れ様です。」

はやての隣には、小さい妖精のユニゾンデバイス、リィンフォースツヴァイが居た。

リィンフォースツヴァイは、はやてのデバイスである。

「リィン！それで言ったらあかんて言っているやろ？」

はやてがリィンに叱りリィンもショボンとしていた。

「良いんですよ。私をおじいちゃんと呼んでくれて大歓迎ですよ。」

ノルウェールは、はやてを説得させた。

「え！？で…でも…」

「はやてさんも私をおじいちゃんと呼んで下さい。」

ノルウェールは、はやてにおじいちゃんと呼んで欲しかった。

「ノ…ノルウェール一等空将？」

「……」

はやてが聞いてもノルウェールは、無視した。

どうしてもノルウェールは、はやてにおじいちゃんと呼んで貰いたかった。

「お…おじいちゃん」

ニコニコ

「何ですか？はやてさん？」

はやては、ノルウェールの意志に負けた。

「八神一佐、ノルウェールの言うことは、あまり気にしないで。」

ミセットがはやてを慰めた。

「そうだ！リィンちゃんこれを。」

ノルウェールがリィンに小さい赤い箱を渡した。

「開けてご覧。」

リィンは、ノルウェールの箱を開け始めた。

「うわぁ♪」

箱を開けると小さな赤と白の洋服だった。

「おじいちゃん、着て良いですか？」

リィンは、喜びながらノルウェールに聞いた。

「良いですよ。」

リィンは、早速洋服を着始めた。

「おじいちゃん、ありがとうございます。」

はやては、ノルウェールに御礼を言った。

「はやてちゃん、これピッタリですよ。」

リィンは、着替え終わるとはやてに見せた。

「可愛いな～。」

「可愛いわね～。」

「可愛いですよ。」

はやて、ノルウェール、ミセットは、リィンの着替えた洋服を見てノホホンとした。

「外の武装局員の人達にも見せて良いですか？」
リィンは、はやてに聞くと「良いで。」と答えた。
外の武装局員の人達もはやて達と同様にノホホンとした顔に成った。
「はやてさん、もう十年経ったんですね…」
ノルウェールは、目の色を変えてはやてに言った。
「やはり、火鳥…いやファイバードに彼に会った事を言わなくて良いのですか？」
しばらくはやては、黙り込んだ。
「はい…わたしは、エクスカイザーに命を助けてくれました。地球に危機が来た時に火鳥さんに全てを話します。」
ノルウェールは、はやてにも何か考えがある様に見えた。
火鳥は、今日助けた少女の側にいた。
少女も安心したのか眠ってしまった。

火鳥が少女の寝ている部屋を出ようとすると上着に何かが掴んでいたので見ると少女が眠りながら小さな手で掴んでいた。

「!?」

「パパ…ママ…」

少女は、眠りながら寝言を言った。

火鳥は、部屋を去らずに少女の側にいた。

起動六課の外では、エリオとキャロが月夜を見ていた。

「月が綺麗だねエリオくん。」

キャロは、久しぶりにエリオと訓練や任務以外エリオと一緒にプライベートで居る事は、無かった。

「綺麗だよ。」

キャロは、エリオの視線が自分に向けている事に気付いた。

ドキン！

「／／／／エ…エリオ…くん？」

キャロの心臓は、バクバク鳴っていた。

グラ！

キャロは、戸惑って両足を支えている松葉杖から倒れた。

「キャロ！」

ガシ！

エリオは、片腕が包帯で固定されていたので反対の腕でキャロを掴もうとした。

バタン！

「うわっ！」

「きゃっ！」

二人は、体が重なる様に倒れた。

「「／／／／！！」」

二人は、お互いの顔を見合って顔を真っ赤にした。

『どうしたんだ？小僧、嬢ちゃん？』

ガードウィングが二人の後ろから声をかけた。

ヒュッ！

「な！何だよ！！」

エリオとキャロは、咄嗟に離れてエリオが顔を真っ赤に成りながらガードウィングに文句を言った。

『ん？オレは、空を飛んでいたら偶然お前らを見て此処に着地したんだ。ところで小僧と嬢ちゃんは、出来ているのか？』

エリオとキャロは、お互い顔を真っ赤にした。

「う…五月蝿い！」

エリオが声を上げた。

ガードウィングは、ニヤリと笑った。

『図星か？』

二人は、ガードウィングにバレていた。

『じゃあな！』

ガードウィングは、空に飛んで行った。

ガードウィングが去った後もエリオとキャロは、顔を真っ赤にして

この場を動けないでいた。

「イテッテッテッ！」

病院の中では、佐津田刑事の声が響いていた。

「佐津田刑事！未だ治っていないのに動かさないで下さい。」

ティアナが佐津田刑事を止めた。

「いいや！警察官たる者、こんな怪我如きに…いったーい！！」

佐津田刑事は、肋を抑えた。

「良いですか！！完治するまで安静にして下さい！」

佐津田刑事は、ティアナの圧力に従わざる得なかった。

翌朝、火鳥達は、なのはの案内でミットミルダの観光に出ようとしていた。

「き…気持ち悪い…」

起動六課の隊舎の入り口で顔を真っ青にしている天野とゲンヤの姿があった。

「全く、じいちゃん飲み過ぎだよ…」

「お父さんも加減が成っていないわよ…」

ケンタとギンガは、呆れていた。

他の起動六課のフォワードは、火鳥達の観光案内なので休暇に成っている。

ジェイルは、マリエルと一緒に何かを探すと言い出し観光に来れない。

シグナムとヴィータは、起動六課で待機。

シャマルは、ミッドチルダの病院で奴隷にされていた人達の治療で留守だった。

したがって、観光に行くのは、火鳥、ケンタ、ハルカ、ナンバーズ全員である。

なのはは、観光案内でフェイトがドライバーである。

「さあ、この車に乗って下さい。」

なのはが火鳥達を車に乗せようとした。

ガシッ！

火鳥は、上着を掴む感覚に気付き下を見ると少女がいた。

「いっちゃイヤだー！」

少女の目から涙目に成り火鳥を見つめていた。

「君の名前は？」

火鳥が少女の前でしゃがみ込んで聞いた。

「ヴィ…ヴィヴィオ…」

少女は、答えた。

「ヴィヴィオか…僕の名前は、火鳥勇太郎。よろしくね、ヴィヴィオ。」

火鳥は、笑顔でヴィヴィオを見た。

「なのはさん！ヴィヴィオも連れて行って良いですか？」

火鳥は、ヴィヴィオを連れて行きたくなのはに聞いた。

「良いですよ。」

なのはは、了承した。

「さあ、行こうヴィヴィオ。」

「うん。」

ヴィヴィオは、火鳥に抱き付いた。

こうして、火鳥達は、ミッドチルダに観光に車で向かった。

「「き…気持ち悪い…」」

「大丈夫ですか?天野さん。お父さん。」

ギンガは、この二人の付き添いに成った。

火鳥達は、なのはとフェイトの観光案内で充実した日に成った。

「そろそろお昼にしましょうか。」

運転をしているフェイトが言うとなのはも頷いた。

近くのレストランに停めた。

みんな次々車から降りた。

「？」

最後に降りる筈の火鳥は、腹部に動かない違和感を感じた。

「火鳥さん？」

最後の二番目に降りる筈のウーノが火鳥の様子が変な事に気付き振り向いた。

「すぅぅ…すぅぅ…」

ヴィヴィオが火鳥の腹部辺りでスヤスヤ寝ていた。

「あら♪あら♪」

ウーノもヴィヴィオの寝顔に微笑んだ。

「ウーノ？どうすれば良いんだい？」

火鳥も戸惑った。

「火鳥さん。少し良いですか？」

ウーノが火鳥の耳元でヴィヴィオが起きない様に小声で言った。
ウーノは、そっとヴィヴィオを抱き上げてケンタ達が待っている方に静かに歩き出した。
「～～♪～～～♪」
ウーノは、眠っているヴィヴィオに子守唄を歌った。
「（何て優しい唄声何だ…）」
火鳥は、ウーノの唄声に感動した。
「優しい唄声だなウーノ姉ちゃん…」
ケンタ達も別の世界に行き成り来たかの様にウーノの唄声を聴いた。
「ママ…ママ…」
ヴィヴィオは、寝言でママと言った。
どうやら、夢の中でヴィヴィオは、お母さんと出会っている夢の様だった。
パチン
ヴィヴィオは、目を覚ました。
「気が付いたの？」

ウーノは、優しくヴィヴィオに聞いた。

「起きたのかい？」

火鳥も優しくヴィヴィオに聞いた。

「パパ…ママ…」

ヴィヴィオは、二人を見て言った。

「え？」

「／／／／」

火鳥は、パパとママと言う言葉の意味に理解していないがウーノが顔を真っ赤にした。

「ケンタ？パパとママって何なんだい？」

近くに居たケンタに火鳥は、パパとママの意味を聞いた。

ケンタも困惑した。

「えーっとそれは、ヴィヴィオのパパに火鳥兄ちゃんが…でもってウーノ姉ちゃんがヴィヴィオのママって事だよ…多分。」

ケンタもパパとママの深い意味を分かっていなかった。

「と…とりあえず…レストランに入りませんか？」

なのはが勇気を持ってこの場の空気を変えなければウーノと火鳥が困ると判断した。

一向は、レストランに入って行った。

ミットチルダの公園では、エリオとキャロが休暇を使ってデートをしていた。

「澄んでいる空だな…一昨日までドライアスがミットチルダを征服していた何て嘘みたいだ。」

「改めて平凡の大切さを感じるねエリオくん。」

二人は、公園のベンチに座りながら今この時が一番幸せだった。

「キャロ？喉乾いた？」

「え？うん…少し。」

「じゃあ僕、買って来るよ…　ドン！　「おい！気を付けろ！」

エリオがベンチから起き上がると数人の男に打つかった。

エリオが正面を見るとレジアス中将の部隊の武装局員達がいた。

「ん？コイツ等、起動六課の連中のじゃないか？」

武装局員達の一人が二人の存在に気付いた。

「あぁ？そうか…コイツ等がか？」

武装局員の二人目が笑った。

だが、不気味な表情だった。

ドン！

「うぅ！」

武装局員の二人目がエリオの頭を持ち上げてベンチの角に頭を叩き付けた。

「エリオくん！やめてください！私達、同じ管理局員なのに何故こんな酷い事を！？」

キャロは、涙目に成りながら武装局員達に言った。

「あぁ！？お前等三等陸士だろ？俺達は、陸漕だから先輩の言う事を聞けば良いんだよ！」

エリオを傷付けた武装局員は、理不尽にキャロを脅した。

バッバッバッバッ！

空から武装局員達の方にバルカン砲が発射されて武装局員達も驚いた。

『バトルアップ！チェンジ・ガードウィング！』

空からガードウィングがロボットに変形した。

「な…何なんだ!?」

武装局員達は、ガードウィングの存在に驚いた。

『テメェー等…自分達より弱い奴らを虐めて楽しいのか?』

ガチャ!

ガードウィングは、銃を武装局員達に構えた。

「き…貴様!此処で銃を発砲したら…『オレの録画機能は、優秀でな…さっき小僧を傷付けた場所から今まで録画してある。オレが銃を発砲したのは、正当防衛だろうな。』うぅ…」

ガードウィングは、武装局員達の理不尽な映像を見せた。

「退くぞ!」

武装局員達は、公園を去った。

「エリオくん!」

キャロは、頭から血を出しているエリオを心配した。

『おい!大丈夫か小僧!?くっそ!嬢ちゃん、アイツ等は何なんだ?』

ガードウィングは、エリオを心配しながらさっきの武装局員達を聞いた。

「レジアス中将の部隊の人達だよ。管理局からもあまり評判の悪いから他の局員の人も近寄らないんだよ。」

『そっか…。』

ガードウィングは、飛行機に変形した。

『このまま病院に向かうぞ。』

「え？」

キャロは、驚くとガードウィングが飛行機の中から動くロープを二人に巻き付けて中に乗せた。

『それじゃあ行くぞ！』

「うわあああああ！！」

ガードウィングの中に居るキャロは、ガードウィングの行き成りの加速に驚いた。

火鳥達がレストランに入るとなのははは、ウェイターの人にノルウェールから借りたブラックガードを見せてウェイターも改まって席を案内した。

「今日は、ノルウェール一等空将から何でも好きな物を食べていいからね。」

【うわ～～～い♪】

なのはの一声でみんな喜んだ。

「じゃあ俺は、ハンバーグ！」

「あたしは、ナポリタンッス！」

「あたしは、チャーハン。」

「私は、ピザ。」

「蕎麦で。」

「カレー…」

「ステーキにしますわぁ～ん。」

等ナンバーズとケンタ達は、遠慮無く注文した。

「ヴィヴィオは、何にするんだい？」

火鳥は、レストランのメニューをヴィヴィオに見せた。

「これ！」

ヴィヴィオがメニューを見て指を指したのは、オムライスだった。

「じゃあ僕もこれで。」

火鳥は、オムライスを食べた事が無かったので興味を持った。

「以上でお願いします。」

フェイトは、ウェイターに注文を告げた。

「かりこまりました。」

ウェイターは、厨房に注文した食べ物を伝えに行った。

数分後…

全員の食べ物が揃いみんな食べる気満々だった。

「ヴィヴィオ。食べる時は、手を合わせていただきますって言うのよ。」

火鳥とウーノの間に居たヴィヴィオにウーノが食べる時の言葉を教

えた。

「うん♪」

ヴィヴィオは、笑顔でウーノに答えた。

【いただきます！】

みんなそれぞれ注文した食べ物を食べながらワイワイ喋っていた。

「う～～…」

ヴィヴィオが食べている最中に苦い顔に成った。

「ヴィヴィオどうしたんだい？…ん。」

火鳥がヴィヴィオの異変に気付くとオムライスの具に使われたピーマンが入っていた。

「大丈夫よ。身体に良い物だから。」

ウーノもヴィヴィオに言った。

「にがいの～～…」

ヴィヴィオは、ピーマンが苦手らしい。

「ヴィヴィオ、ピーマンを食べないとウーノみたいに綺麗に成れないよ。」

「／／／…！」

ウーノは、火鳥に言われて顔を真っ赤にした。

「うん♪ヴィヴィオ、ママみたいに成りたい。」

ヴィヴィオは、ピーマンが苦手でも食べた。

「ウェンディ！」

ウェンディの隣に居るノーヴェが睨んだ。

「うっ！」

見るとナポリタンの具にタマネギが入っていて、それをフォークを使ってノーヴェの皿にタマネギを乗せている事にウェンディは、顔を真っ赤にした。

ウェンディは、タマネギが嫌いらしい。

「わ…わかったッス…しくしく…」

ノーヴェもウェンディにヴィヴィオのお姉ちゃんとしての自覚の為泣く泣くタマネギを食べた。

しばらくして全員が食べ終わりみんな一息した。

「ヴィヴィオ。顔を貸して。」

ウーノは、ハンカチを取り出すとヴィヴィオの口の周りにオムライ

スのケチャップの跡があり拭いた。

「これで良いわよ。ヴィヴィオ。」

「うん♪」

他の人から見ると母娘に見えた。

「ケンタも！」

ケンタの隣に座っていたハルカがケンタにお絞りを渡した。

「わ…わかったよ…」

ケンタは、ハルカに渡されたお絞りで口の周りの汚れを拭いた。

火鳥達は、レストランから出て車で起動六課に向かった。

管理局のマリエルの研究室では、ジェイルと二日酔いしている天野もマリエルと一緒に居た。

「新しい機体の手伝いを私にですか？」

マリエルは、予想もつかない言葉を天野達から聞かされた。

「うむ。そうじゃ…火鳥がドライアスと戦った時に全く刃が立たなかった。そこで、奴等がもし宇宙やミットチルダに世界征服の計画に行動したら…万が一取り返しのつかない事態に成る。そこでワシとジェイルくんで密かに開発している『ファイヤーシャトル』を一刻も早く完成する為にマリエル、アンタの他に後3人の手助けが必要じゃ。」

天野は、ドライアスの予想を読み火鳥達が行った後にゲンヤに頼みノルウェールを説得させ地球に4人送る事になった。

「マリエルさんは、今の技術を生かして火鳥くん達宇宙警備隊のメンタル状態を見る役で…後一人がもうすぐ此処に来るから　「お待たせしました。」

研究室から眼鏡を付けた茶髪のロングヘアーの女性が天野達の前に現れた。

「はじめまして、シャリオ・フィニーノです。シャーリーと呼んでください。」

シャーリーは、天野達に挨拶をした。

「シャーリーも？」

「え？マリエルさんもですか？」

二人は、天野達に選抜された事に驚いた。

「で…シャーリーは、主にワシとジェイルくんと一緒にファイヤーシャトルの制作を手伝ってもらう。」

天野は、シャーリーに天野とジェイルと同じ発明馬鹿の匂いがした。

ジェイルがファイヤーシャトルの設計図をシャーリーに見せた。

「うわ～～～～♪スゴいですね！」

「そうじゃろ！そうじゃろ！シャーリーくんもワシ等と同じで理解してくれると信じていた。」

「我々の仲間がまた一人出来て嬉しい限りですハカセ！」

シャーリー、天野、ジェイルの三人は、意気投合した。

（私…慣れるかな？あの三人に…）

マリエルは、不安に成った。

夕方、火鳥達は、起動六課に戻り地球に帰る準備をしていた。

ガシッ！

帰りの準備をしている火鳥の前にヴィヴィオが来た。

「火鳥さん、少し良いですか？」

後ろからなのはがやって来た。

「何ですか？」

「ヴィヴィオの事何ですけど…このまま身元引受人が居ないと管理局の施設に送る事に成ります。どうしますか？」

帰りの準備をしていた一同も固まった。

「なのはさん。ヴィヴィオを引き取っても良いですか？」

一同は、火鳥の言葉を聞いた時安心した。

「本当ですか？ありがとうございます！」

なのはは、嬉しそうにヴィヴィオを見た。

「ヴィヴィオちゃん。今日から火鳥さんがパパでウーノさんがママだよ。」

「火鳥…パパ。ウーノ…ママ。」

ヴィヴィオは、嬉しそうに呟いた。

こうしてヴィヴィオを火鳥とウーノが引き取る事に成った。

地球に帰る際にシャーリー、ギンガ、ゲンヤ、マリエルも天野達と一緒に行く事に成った。

ゲンヤとギンガ、シャーリー、マリエルは、天野平和科学研究所の居候に成った。

第十五話：少女の名前は、ヴィヴィオ（後書き）

ケンタ「神隠しって言葉を知っている？俺の町の近くでも神隠しがあって俺と火鳥兄ちゃんが調査に行ったけど火鳥兄ちゃんとはぐれてしまったんだ！ミラクルマズいよ！　太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ　第十六話　スーパーガーディオン登場！　次回も世界平和！」

第十六話：スーパーガーディオン登場（前書き）

明けましておめでとうございます！個人的な事情も解決しましたのでこれから頑張って連載再開にします！

第十六話：スーパーガーディオン登場

神隠しと言う言葉に注目したい。

神隠しとは、古来より突然人が消える怪現象である。

ミットチルダから地球に行く飛行機に乗った佐津田刑事とティアナは、飛行機の中のムービーサービスで『怪奇！神隠し！』と書かれたホラーＤＶＤを見ていた。

「「うわあああああ！！」」

二人は、実はかなりの怖がり。

「お客様。機内での騒ぎは、お控えください。周りのお客様は、寝ているので。」

二人の隣にスチュワーデスさんが注意した。

「「す…すいません…」」

二人は、恥ずかしくなり顔を真っ赤にした。

「しかし…神隠し何て物があるんでしょうか？」

「馬…馬鹿な事言うなティアナ…そんな非科学的な事が起きるワケが無いだろうが！」

「お・客・様！お・静・か・に！」

スチュワーデスさんが佐津田刑事に威圧感を出して睨んだ。

ティアナは、このスチュワーデスさんがキレた時のなのはに似て怖いと感じた。

ごっごっごっごっごっ！

突然飛行機の中が揺れ始めた。

「な！何なんだ！？」

「佐津田刑事！」

「ん？どうした？」

ティアナは、動揺しながら飛行機の窓を指差した。

ピカッ！

『ガアアア！』

窓から不気味な光が唸っていた。

「「で、出たー！！」」

二人は、抱き付いて叫び上げた。

ザー！ザー！

天野平和科学研究所の窓からケンタは、雨を見ていた。

「ケンタお兄ちゃん。何なのお空から水がふっているの？」

隣にいるヴィヴィオがケンタを見ていた。

「ヴィヴィオ。これは、雨って言うモノだぜ。」

「へーっ。」

ヴィヴィオは、雨を見た事が無い様に珍しく見た。

「ヴィヴィオ、雨を見た事無いのか？」

「うーんっとね。ヴィヴィオ、あめ見るの始めて♪」

ヴィヴィオは、笑顔で答えた。

ケンタは、雨を知らなく見るのも始めてに驚いた。

ケンタとヴィヴィオの近くでジェイルと天野にシャーリーが何かの作業をしていた。

「こうすれば良いと思うんじゃが…」

「ハカセ、私は、これをこうすれば良いのでは?」

「私は、この方が昔のやり方ですけど効率が良いと思いますよ。」

三人は、何かの発明の作業をしながら話し合っていた。

「じいちゃん、にいちゃんにシャーリーねぃちゃん?今度は、何してんだよ?」

ケンタは、ヴィヴィオを連れて来て三人に聞いた。

「おお!ケンタか。」

三人が作業をしているのは、一つのトランシーバーだった。

「今、磁場が強い場所でも通信出来るトランシーバーを開発している所だよ。」

ジェイルがケンタに説明をした。

「これが有れば、日本の富士山の様に山で遭難した人々の為に役立つのよ。」

目を輝かせているシャーリーをケンタは、そこの二人と同じ発明馬鹿と認識した。

「名付けてミラクルトランシーバーじゃ。」

三人は、このトランシーバーにもうそんな名前を付けている。

「天野さん大変です！」

ギンガが天野達に駆け寄った。

「ギンガ？どうしたんじゃ？」

「い…今、ニュースでミットチルダから地球の成田行きの飛行機が行方不明に成りまして…その飛行機の乗客の中に私の知人でスバルの友人のティアナが乗って居たんです！」

「な、何じゃと！？」

天野達は、緊急ニュースがやっているテレビに向かった。

テレビの前には、火鳥達も見ていた。

「昨日の夜に地球行きのミットチルダの飛行機の消息が消えミットチルダの時空管理局と日本の警視庁が緊急態勢が取られ捜索をしていますが未だ消息が解らない状況が続いております。」

緊急ニュースで報道されていた。

「火鳥、急いでミットチルダの飛行機の消息が断たれた場所に向かってくれ！ケンタ、一応これを。」

天野は、ケンタに完成したミラクルトランシーバーを持たせた。

火鳥とケンタは、急いでファイヤージェットでミットチルダの飛行機の消息が断たれた場所に向かった。

起動六課のメンバーも警察と共同でティアナと佐津田刑事の捜索を飛行機が消えた谷間に居た。

「ヴィータちゃん。そっちは、どう？」

なのはは、飛行魔法で周囲を確認すると先に捜索していたヴィータ達、守護騎士（ヴォルケンリッター）達が戻って来た。

「ダメだ！全くそれらしき物は無いぞ。」

「ああ、私達も隅々まで探してもこの電波で通信も使えない状態だからな・・・」

谷間から強力な電波の原因でヴィータ達も危うく遭難しかけた。

「あ！」

なのは達の正面からガードウィングが来た。

『何だ？お前等は？』

ガードウィングは、なのは達を確認すると止まった。

「貴方は、火鳥さんの。」

『ああ・・ファイバードと同じ宇宙警備隊だが？』

「協力してもらえ・・『嫌だね。』・・・えっ！？」

ガードウィングは、去ろうとした。

「おい！待てよ！」

ヴィータの声にガードウィングは、止まった。

『何だガキ？』

「あたしは、ガキじゃねぇ！ヴィータって名前があるんだ！覚えて

おけ！」

『あいよ・・・チビ・・・』

ブチッ！

ヴィータの顔に血管が浮き上がった。

「っだと！打ち述べしてやろうか！」

「落ち着けヴィータ！」

ヴィータの隣に居るシグナムは、グラーフファイゼンを構えるヴィータを抑えた。

『んじゃあなチビ。』

ガードウィングは、空の彼方に消えた。

「あ！待ちやがれぇ！」

ヴィータは、追いかけたかったがシグナムに抑えられて行けなかった。

『はぁ・・』

なのは達の下から見ていたガードスターがため息をした。

谷の奥の山に洞窟があり其処から光が見えた。

光の向こうには、工場の様な物が存在していた。

其処では、テシター達が行方不明に成った人々を扱き使っていた。

指令室には、ゾルとシュラ、そしてレジアスが覆面をして口論をしていた。

「まったく・・お前のお陰でとんだ大騒ぎだ！」

「どうする気だ。」

シュラとレジアスは、佐津田刑事の乗った飛行機まで誘拐したゾルに怒っていた。

「ふん！作業員を増やしただけだ！」

ゾルは、反省の色を見せない。

「此処は、ドライアス様の地球侵略の為の秘密おの拠点に成るんだぞ。」

「だったら、基地を作動させて山の中の人間を皆殺しにすればいい。」

「馬鹿か！宇宙警備隊と機動六課に知られたいのか！」

「今は、連中と遊んでいる暇はねぇんだよ！」

レジアスとシュラは、言い返した。

ゾル達の後ろには、佐津田刑事達が檻に閉じ込められていた。

「くっそ！警察官たる者が何も出来ないとは！・・ん？ティアナ？」

檻の中で自分の無力を恨んで居ると隣に居た筈のティアナの姿が居なくなっていた。

（待っていて下さい佐津田刑事！）

ティアナは、バリアジャケットに成ると脱出口を探しにステルスモードで探し始めた。

火鳥とケンタは、バリアジャケットを着たスバルの姿を発見してその場にファイヤージェットを着地した。

「何だ!?この奇妙なエネルギーは!?」

「兄ちゃん?」

「どうしたんですか?」

ケンタとスバルは、何かに察知した火鳥に聞いた。

「妙な力を感じる・・・何か得体の知れない者が居る。」

「あははは・・神隠しだったりして・・　ピカァ!　ひぃ!」

ケンタは、雷の音を聞きスバルの後ろに隠れた。

「「ん!?」」

ヒュッ!

「ケンタくん!此処に居て!」「待っているんだケンタ!」

スバルと火鳥は、瞬時に後ろから感じた気配を追った。

「兄ちゃん！スバル姉ちゃん！」

ケンタは、一人に成ってしまった。

スバルと火鳥は、二体のテシターを確認した。

「はぁっ！」「とりゃ！」

火鳥は、飛び蹴りをスバルもリボルバーシュートを放った。

二体のテシターは、動かなくなった。

「火鳥さん。」

「ああ、ドライアス！」

この神隠しの騒動の原因は、ドライアスの物だった。

ケンタは、スバルと火鳥が居なくて心細かった。

ザザ・・

ケンタは、後ろから音が聞こえて振り向くとテシターが襲い掛かった。

「うわあぁぁぁ！！」

ピカッ！

雷がテシターの頭に落雷してその衝撃でケンタは、崖に転落した。

火鳥達が戻るとケンタは、居なくショートしたヘルメットとテシターが倒れていた。

「チックショー！あのクソ飛行機！」

ヴィータは、ガードウィングの悪口を言っていた。

『すまん・・』

ガードスターは、ヴィータに謝った。

「なのは！」

向こうからガードレスキューに乗っているエリオとキャロとフェイトが来た。

「フェイトちゃん、そっちは？」

なのはが聞くとフェイトは、頭を横に振った。

「そう・・」

なのは達もお手上げだった。

ザザッ！

「！」

草むらから微かだが音が聞こえた。

草むらから泥まみれで軽い捻挫をしたケンタが現れた。

『ケンタ！』

ガードレスキュー達は、泥まみれのケンタに驚いた。

「ケンタくん！」

フェイトは、ガードレスキューから降りて駆け寄って来た。

「フェイト先生・・」

「どうしたのその怪我は！？」

フェイトは、怪我したケンタを抱きかかえてガードレスキューの中に乗せた。

「エリオ、キャロ。ケンタくんの治療を手伝って！」

「「はい！」」

エリオ達もガードレスキューの中から道具を取り出した。

「ケンタくん。何でこんな所に？」

応急処置を施したケンタにフェイトが心配な表情で聞いた。

「それは・・その・・」

ケンタは、言いたくなさそうだった。

「兎に角、今は、休んでいなさい。エリオ、キャロ、後はお願い。」

フェイトは、大体理解してガードレスキューの中から出て行った。

『何かあったのか？』

ガードレスキューが治療を終えたケンタに聞いた。

「うん。それがさあ・・ん！？」

正面の遠くからテシター達が洞窟に行こうとしていた。

「「「テシター！」」」

エリオとキャロ、ケンタは、驚いた。

『やはりドライアスが。ケンタ、エリオ、キャロ！掴まって居ろよ！』

キュウウウウ！！

ガードレスキューが急発進した。

「えっ！」「な・・何だ！」

機動六課一同は、急発進するガードレスキューに驚いた。

「お、おい！」『どうしたんだ？』

ガードスターは、ガードレスキューを追った。

テシター達は、洞窟から開かれる扉に入りガードレスキューも閉まるギリギリの所で何とか入った。

『す、すまない大丈夫か？』

「うん・・」「大丈夫・・」「怖かった・・・」

三人は、無事の様だった。

「アレ何だろ？」

キャロが洞窟の中を指差した。

『ドライアスの秘密基地だ。』

「え・・」「ドライアスの基地？」

三人は、困惑した。

「誰！？」

ガチャッ！

誰かが銃を構えていた。

「「「！？」」」

「エリオにキャロ？それにアンタは・・・」

三人は、聞き覚えの在る声に向いた。

「「ティアナさん！」」

エリオとキャロは、佐津田刑事と共に飛行機で行方不明に成ったティアナを見て驚いた。

「何でアンタ達まで此処に居るの？」

ティアナは、デバイスの構えを解いた。

ティアナは、事情をケンタ達に説明した。

ティアナ達の乗った飛行機は、神隠しの噂に成っている谷を通った時にドライアスのメカ獣に誘拐されて此処で兵器を作らされていた。

ティアナは、佐津田刑事達を助ける為に隙を見て牢屋から抜け出し脱出口を見つけている最中にケンタ達と遭遇した事を説明した。

「やっぱり、ドライアスに捕まっていたんだ・・」

『ファイバード達に連絡が取れない。キャロ、エリオ、デバイスは？』

エリオとキャロは、横を振る。

「オレも通信が出来ない・・・あっ！」

ケンタは、ポケットに在る物に思い出した。

『ケンタそれは？』

「じいちゃん達が発明した物だけど・・・これも駄目だ・・」

『妨害電波か・・・それの出何処を壊さないとな・・・』

ガードレスキューは、コンピュータで妨害電波の出所を検索した。

『見つけたぞ・・しかし、どうすれば行けるんだ？』

ガードレスキューは、考えていた。

ティアナ達が戦えば少しは、時間を稼げるがゾル達が出て来たら一発で負ける。

『ん？』

奥からテシターが此方に気付いていないで近くの倉庫を開けた。

倉庫が開くと十数体位のロボットが並んでいた。

『ケンタ、エリオ、キャロ、ティアナ。アレを使うんだ。』

「「「「「え！？」」」」」

火鳥達は、なのは達と合流するとガードウィングとガードファイヤーも来た。

『バトルアップ！チェンジ・ガードファイヤー！』

『バトルアップ！チェンジ・ガードスター！』

『バトルアップ！チェンジ・ガードウィング！』

三人は、変形した。

『ガードレスキューがドジ踏んだって？』

『エリオとケンタとキャロを乗せたままドライアスの基地に向かったらしい。』

ガードスターが火鳥達に報告した。

「必ずこの山の何処かに居る。」

『そこいら辺に一発ぶち込めば良いじゃないか。』

ガードウィングは、銃を出した。

「駄目だ！まずケンタ達を救い出す事が先決だ。」

火鳥がガードウィングを止めた。

ケンタとティアナとエリオは、倉庫に入ったテシターを壊すとロボットの中に乗った。

「へーっ。ゲームセンターと同じ感覚だな・・」

「なるほど・・・」

エリオとケンタは、大体の操縦を理解した。

「うーーー！」

しかしティアナは、仁王構えのまま操縦が解らなかった。

「そんじゃあティアナさん。オレ達は、妨害電波を壊して来るから騒ぎの方は任せたよ。」

エリオとケンタは、妨害電波の場所まで向かった。

「えっ？ちょ、ちょっと待ちなさいよ！　ピカ　え！？」

ズコ！ズコ！

ロボットの動かし方が解らないティアナは、戸惑っていた。

しかし、それが騒ぎに成っていた。

「は・・始まった・・」

ガードレスキューに乗っているキャロは、怯えた表情だった。

ドカーン！

ガードレスキューは、ミサイルを発射し明かりの電源を壊した。

「ん!?何の騒ぎだ!」

工場で監視をしていたゾルが明かりが消えた事に警戒した。

「ど・・どうしよう・・」

『大丈夫。私がついている。』

「うん・・」

ガードレスキューは、走り出した。

ゾルは、何かが此方に来るのに気が付いた。

「あれは!?」

工場で働かされている佐津田刑事が驚いた。

「佐津田刑事。助けに来ました!」

「ティアナ!」

ティアナがロボットを操縦している事に驚いた。

「貴様何処から!?」

ゾルは、どうやってロボットを持ち出したのか検討出来なかった。

其処にガードレスキューが来た。

「みなさん此方です。」

「急いで！急いで！」

キャロが誘拐された人々を誘導すると佐津田刑事も誘導した。

エリオとケンタも妨害電波の発信源を見つけた。

「これが発信源・・」「行くぜ！」

ケンタ達は、発信源に目掛けて攻撃をしようとした。

「其処までだ！」

「「！？」」

正面にバズーカを構えたシュラが居た。

「小僧供、よくも引っ掻き回してくれたな！礼を言うぜ！」

「ビスター！」

ケンタは、ビスターを投げるとビスターはシュラに目掛けて体当たりした。

ドーカン！

ケンタ達に狙おうとしたバズーカが外れて電波の発信源を壊した。

「ぐうう・・おのれ・・」

シュラは、悔しそうに睨んだ。

ケンタ達は、急いでガードレスキューに連絡をした。

【ケンタ！ケンタか！？】

ビスターの通信に出たのは、火鳥だった。

「この山自体がドライアスの基地なんだ。行方不明だった人達も此処に捕まっているよ。」

【良くやった！直ぐに助けに行くぞ！】

火鳥は、通信を切った。

ガードレスキュー側も人質を非難させていた。

「ははは・・逃がさねぇ！」

正面からロボットに乗ったゾルが来た。

「アッカンベー！」

するとケンタ達も来てケンタがゾルを挑発をした。

『ケンタ、みんなを頼む！』

「オッケー！」

ケンタは、佐津田刑事達を連れて脱出口を探しに行った。

しかし、エリオとキャロは、ケンタ達と一緒に非難しなかった。

『エリオ、キャロ！早くケンタ達と「僕も一緒に戦わせてください！」「足手まといには、成りませんから！」エリオ、キャロ・・・』

エリオとキャロもデバイスを構えた。

『バトルアップ！チェンジ！ガードレスキュー！』

ガードレスキューは、ロボットに変形した。

「え！？行き止まり！？」

ケンタ達は、脱出口が見当たらなかった。

「貴様等・・・もう許さねぇえ！」

暗闇からシュラが現れて隣には、銃を持ったテシター達が居た。

ドカン！

天井から何かが降ってきた。

「待てぇ！」

火鳥が現れた。

「火鳥兄ちゃん！」

ケンタも不安が消え去った。

「ドライアスの秘密基地など、この俺が作らせん！」

火鳥は、シュラに言い放った。

次々と天井から機動六課と宇宙警備隊が破って来た。

「フェイト先生、キャロとエリオがまだガードレスキューと一緒に戦っているよ。」

「え！？」

「紫電一閃！」「フリード！」『とあ！』

ドン！

三人の同時攻撃にゾルは、瓦礫に埋もれた。

『やったか！？』

ガチャン！

ゾルが瓦礫の中から出てきた。

「この野郎供！やりやがったな！」

ゴッゴッゴッゴッ！！

「「『！？』」」

基地の中が揺れ始めた。

バグ！

「「『うわぁぁ！』」」

三人は、巨大な鯨のロボットに銜えられた。

シュラと戦っている火鳥は、その間に他のメンバーに人々の非難を頼み戦っていた。

「お・・おのれ・・！」

シュラは、圧倒的に火鳥に押されていた。

ピカ！

シュラの額が光るとケンタが乗っていたロボットが変形して合体した。

そしてムカデのロボットに成った。

「ファイヤー・・・ジェェェェット！！」

火鳥は、空からファイヤージェットを呼び変形し巨大なロボットに変わり火鳥も変化したファイヤージェットに向かって宙を飛び体が火の鳥の様に成りロボットの中心に乗り移った。

『チェェェンジィィ・ファイバード！！』

火鳥は、ファイバードと成った。

『フレイムブレスター！！』

ファイバードは、腕を空に翳すと空からフレイムブレスターがやって来た。

フレイムブレスターがファイバードの真下に下りると合体した。

『フォームアップ！武装合体ファイバード！！』

「此処ならもう安全だ。」

ガードチームに運ばれた人々は、谷から離れた位置に避難をさせていた。

ゴッゴッゴッゴッゴッゴッ！

谷の方から揺れていると地上から巨大な鯨のロボットがガードレスキューとエリオとキャロを銜えていた。

『ガードレスキュー！』

「エリオ！キャロ！」

フェイトとガードスターが言うのと同時にガードウィングが鯨のロボットに向かって飛んだ。

『ガードレスキュー達は、テメェーなんかの餌には上等すぎるんだよ！！』

ドン！　パカ！

鯨のロボットが口から三人を離すとガードウィングは、エリオとキャロ、フリードを掴んで安全な場所まで避難させた。

『ガードチーム！フォームアップ！』

ガードスターが胸の辺りに変形しガードファイヤーが胸を収める部分と両腕、両腿に変形しガードレスキューが両足に変形して装着した。

『三体合体！ガーディオン！！』

ガーディオンに成った。

キュウウウ！！

鯨のロボットは、ガーディオンを口から吸収して口に銜えた。

『ぐあああ！』

更にとんでもない位の圧力でガーディオンを壊そうとした。

『野郎！離せ！』

エリオ達を非難させたガードウィングは、ガーディオンを助け様とした。

『くそ！宇宙警備隊が食べられてお陀仏何て情けねえぞ！仕方ねぇ、ガーディオン！こうなったら奥の手だ！』

何と！ガードチームには、まだ奥の手が存在していた。

『よーしっ！行くぞ！』

ガーディオンは、瞬時に合体解除してロボットの口から開放してまたガーディオンに合体した。

『フォームアップ！』

ガードウィングは、叫ぶと足のパーツと胴の部分に変形してガーディオンに装着し更に頭の部分も変形した。

『四体合体！スーパーガーディオン！』

スーパーガーディオンに合体した。

「四体合体だって！ミラクルスゲー！」

非難していた場所からケンタは、ガードチームの見た事ない合体姿に感動していた。

そして谷からムカデのロボットを追いかけていたファイバードとスーパーガーディオンがお互いの後ろを預けていた。

『大丈夫か！？』

『このまま、やられてたまるか！』

スーパーガーディオンは、性格がガードウィング見たいに成っていた。

『行くぞ！』『おう！』

お互いの正面からムカデと鯨のロボット来る。

『『はぁ！』』

ドン！

ファイバードとスーパーガーディオンが二体のロボットを同時に叩き付けた。

『フルバースト！』

ファイバードは、ムカデのロボットにミサイルを大量に撃って倒し

た。

ピカ！

スーパーガーディオンの額が光構えた。

『ガードフラッシュ！』

ドーン！

鯨のロボットは、爆発した。

行方不明の人々の救出して火鳥とケンタが帰ろうとするとフェイトが火鳥に寄って来た。

パァン！

【！！？】

その音を聞いて一同は、その音のした方を向いた。

「火鳥さん！ケンタくんがあの位の怪我で済んだから良いものの、もしかしたらケンタくんが死んでしまう所だったんですよ！」

フェイトは、火鳥に平打ちした左手が真っ赤に成りながら怒鳴った。

「フェイトちゃん落ち着い「なのはは黙っていて！」

フェイトを止めようとしたなのはも怒ったフェイトを止められなかった。

「先生・・・ごめんなさい・・・」

ケンタが泣きながらフェイトに謝った。何度も・・・

「ごめんなさい・・ケンタくん。私は、理解した筈なのに理解出来なく成っちゃった・・・」

フェイトは、飛行魔法で先に帰って行った。

第十六話：スーパーガーディオン登場（後書き）

「もう直ぐキャンプに火鳥兄ちゃんと一緒に行くんだ！けど・・・フェイト先生も心配で行く事に成っちゃった！ああ！？森の奥に変な花が咲いている。もしかしてドライアスの花畑なの！？　次回太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒＳ　第十七話　恐るべき宇宙植物　次回も世界平和！」

第十七話：恐るべき宇宙植物（前書き）

今回は、ナンバーズが活躍します。

第十七話：恐るべき宇宙植物

ケンタと火鳥とハルカにナンバーズは、なのはの父：士郎の役員をしている町内会運営のキャンプに来ていた。

カコン！

火鳥は、士郎と一緒に薪割りをしていた。

「はっはっはっ！本当に助かるよ。キャンプに来てくれる若い男の人が居なくて困っていたんだ。」

「いやぁ～ハカセやドクターの代わりに来ただけですから。」

火鳥の隣には、なのはの父士郎が居た。

ジーーーッ！

ビクッ！

火鳥は、後ろのフェイトが監視をしている様に見ている気がして体を震わせた。

ケンタと士郎のサッカー倶楽部に所属している男の子達と一緒にご飯を作っていた。

「良いか？ご飯が炊けたらさぁ。飯盒を逆さまにして蒸らすんだ。」

「蒸らす？」

サッカー倶楽部の子供の一人が『蒸らす』と言う言葉に疑問に成った。

「その位キャンプをする時の常識だよ。「何知ったかぶりしてんのよ。それってさぁ、出かける時おじいちゃんとジェイルさんが教えてくれた事じゃない。」っちぇ！ハルカの奴余計な事を！」

「こっちのカレーの用意は、出来たわよ。」

ハルカ達女の子は、カレーを作っていた。

「じゃあ俺達も」

ケンタ達もご飯の方が出来たらしい。

グラ！

「アチィ！」

ケンタとサッカー倶楽部の子の身長は、違いケンタより身長が大きかったサッカー倶楽部の子が持った事によりケンタの手に高温の鉄が当たり焚き火に数個在る飯盒を落としてしまった。

「ケンタくん大丈夫！？」

フェイトがケンタの指に水と掛けて包帯を巻いた。

「ん？」

「どうしたんッスか？」

「焚き火の中に飯盒が在ります。」

コッ！

【！！！？】

火鳥とウェンディとオットーは、高温も在る飯盒を素手で持った。

「確か・・ハカセとドクターは、飯盒を逆さにするって言っていたな・・」

「そうッスね。」

「やりましょう。」

コッ！

「ふぇ？」

最初にみんなの視線に気付いたのは、ウェンディだった。

「ウェンディ！」

「オットー！」

ディードとノーヴェは、二人の名前を呼んだ。

「火鳥くん達熱く無いのか？」

士郎が心配そうに見つめていた。
そこに居たケンタとハルカになのはは、困った顔に成った。
「あっ！考えもしませんでした。」
「あたしもッス！」
「考えませんでした。」
三人は、笑って誤魔化した。

その頃天野平和科学研究所では・・・
「痛ったたっ・・・」

「失敗してしまいましたね・・・」

「元気に成りたい・・」

天野とジェイルとシャーリーは、発明の研究中に体を打撲して動けなかった。

その為、クアットロ、ギンガ、マリエル、ゲンヤ、ウーノ、ヴィヴィオは、心配で看病をしていた。

昼食を終えたケンタ達は、森の方に向かおうとした。

「ケンタくん！」

後ろには、フェイトが居た。

「注意事項を忘れないでね。遠い所や危険な場所には、絶対に行かない事。良いね？」

「「「「はーい！」」」」

ケンタ達は、森の中に向かった。

ジー！

ビクッ！

ケンタ達が行くとフェイトは、火鳥の行動を監視し始めた。

「火鳥？彼女は、一体何でお前を睨んでいるんだ？」

火鳥の右隣でカレーを食べているトーレが聞いてきた。

「あの気迫は、尋常では無いぞ。」

左隣でチンクが言った。

「けど、あたし達もあの女に睨まれているんだが・・・」

ノーヴェは、フェイトが火鳥だけでなく自分達ナンバーズも睨んでいる事に気付いた。

トーレ達も彼女に睨まれている理由が解らなかった。

ジー！

「フェイトちゃん？」

フェイトの隣でカレーを食べているなのはも勇気を持ってフェイトに声を掛けた。

「どうしたのなのは？」

「フェイトちゃん・・まだアノ時の事を気にしているの？」

なのはは、フェイトが火鳥達を睨んでいるのはケンタを普通の道から外そうそしていると考えていた。

何故なら前回、火鳥は、ケンタに目を離して大怪我させてしまった事も在り火鳥達宇宙警備隊とナンバーズに目を光らせていた。

久しぶりの休暇を貰ったなのはは、実家に帰ると士郎が困っていた。

町内会のキャンプに着いて来てくれる男の人が居なくて困っていた。

そこでなのはは、天野平和科学研究所に向かったが天野達は研究の事故で行けないので代わりに火鳥に来て貰った。

しかし、何処から情報を貰ったのかフェイトも着いて来ていたのだった。

「火鳥くん。」

士郎がカレーを持って火鳥達のテーブルに座った。

「どうだいキャンプは？」

「はい。ハカセやドクターは、自然は人間にとって大切と言っていましたが此処に来て解った気がします。」

火鳥は、笑顔で答えた。

「はっはっはっはっはっはっ！そうか！そうか！君が気に入ったよ！どうたい？なのはのお婿さんに成らないかい？君は、とっても気に入ったよ。」

「お父さん！」

なのはは、顔を真っ赤にしながら怒鳴った。

「すいません。僕、結婚しているんですよ。」

「そうか・・それは、残念だな・・・」

士郎は、ショックを受けた。

「「「「「「「「「「ふぅ～～～～・・・・」」」」」」」」」」

トーレ達は、ホッとした。

もしも、ウーノとヴィヴィオが居たら士郎は、殺されると感じていた。

「ハックシュン！」

天野平和科学研究所では、ウーノがクシャミをしていた。

「ウーノママ、大丈夫？」

ウーノの傍に居たヴィヴォオが心配した。

「大丈夫よヴィヴィオ。（誰かが噂をしているのかしら？）」

ウーノは、他の姉妹が噂をしているのも知らなかった。

「何だこれ？」

ケンタ達が森で遊んでいると看板が在り『立ち入り禁止』と書かれた物だった。

「別に工事現場ってワケでも無いよな・・」

ケンタ達は、奥を覗いても工事の音もしなかった。

「もっと先に行って見ようぜ？」

サッカー倶楽部の一人がケンタ達に聞いた。

「やめた方が良いよ。フェイトさんだって言ってたじゃない。危ない所には、行っちゃ駄目だって。」

「行って危ない様だったら戻れば良いじゃないか。」

「うん！そうだよな。ちょっと位スリルが無いと面白くないよな。」

「行こう。」

「おお。」

ケンタ達は、『立ち入り禁止』の看板の向こうに行った。

「うわっ！」

ドスン！

先頭を歩いていたサッカー倶楽部の一人が段差のある場所で落っこちた。

「何だ!?あれ!?」

「「「!?」」」

落っこちた子が奥に指を指した。

巨大な蕾の周りに沢山の紅い花が在った。

「何だアレ?」

「行ってみよう。」

段差を下るとケンタ達は、紅い花の場所に向かった。

巨大な蕾から無数のライトが花々を照らすと益々成長していった。

「ん?伏せろ!」

ケンタ達は、誰かが来ると感じて隠れた。

巨大な蕾に向かって来るのは、テシターを引き連れたシュラと覆面を付けたレジアス中将だった。

「ドライアスのシュラとレジアス。」

ケンタは、何故こんな森の奥に二人が居るのか解らなかった。

「このメカを使えばデビルフラワーは、あっと言う間に成長する。」

「後は、実が熟すのを待つだけだ。」

二人は、デビルフラワーが熟すのを楽しみにしていた。

ザッザ！

ケンタ達が逃げようと動いた時に急いでレジアスとシュラが聞こえる音だった。

「誰だ！そこに居るのは解っている。」

「無駄な抵抗は、やめて姿を見せろ！」

シュラとレジアスは、ケンタ達の隠れている方に向かって言った。

ケンタ達は、姿を見せた。

「チェッ！ガキか！」

レジアスとシュラは、ケンタ達を睨んだ。

「ご・・ごめんなさい・・・」

「ゆ・・許して下さい！」

サッカー倶楽部の少年達は、命乞いをした。

「別に取って食おうってワケじゃねえよ。」

「お前ら地球人は、我々の奴隷に成るのだからな・・丁度良い、貴様等をその実験台にしてやる！」

シュラとレジアスは、不適に笑った。

「「「「！？」」」」

ケンタ達は、シュラ達が何を言っているのか解らなかった。

「デビルフラワー・・これはな、地球で言えば宿木みたいな物だ。」

シュラが周りに咲いているデビルフラワーを一本取って言った。

「だが、只の宿木じゃない！」

「「「「！？」」」」

デビルフラワーは、実に成り種が出来る。

種に成ると弾けてタンポポの様に飛び人間の体温に引き寄せて寄生する。

種は、人間の頭の中まで生き脳に根を張り人間を完全に支配していまう。

ケンタ達は、その事実を知り恐怖を感じた。

「死ぬよりは、奴隷として管理局とドライアスの奴隷に成る方がマシだろ？」

レジアスは、不適に笑いながらケンタ達に近寄った。

「だ・・だったら、お前だって人間だぞ！」

「威勢の良いガキだ。良い事教えてやろう。管理局の科学力を使えばデビルフラワーの種は、寄生しないんだ。」

レジアスは、ケンタに威圧感を露にした。

一方火鳥達は、キャンプで寛いでいた。

「良いな・・・生命が溢れている。」

「静かで良いね。」

火鳥とトーレ達は、キャンプを楽しんでいた。

「ねっ！来て良かったでしょ？」

「ホントー最高だな・・・」

ノーヴェは、ロッジで寝転がってハルカに答えた。

「ハカセ達も来れば良かったの・・！？」

火鳥は、何かを感じた様に立ち上がった。

「火鳥？」

「どうしたんッスか？」

トーレ達は、火鳥の異変に驚いた。

「ケンタから発信があったのにビスターに応答が無いんだ。行って来る！」

火鳥が走り出すとトーレ達も走り出した。

「火鳥さん！みんな！待ってよ！」

ハルカも火鳥達の後を付いて行った。

シュラとレジアスに捕まったケンタ達は、近くの木に縛られていた。

ケンタは、縛れている手からビスターの起動させるスイッチを押した。

腕時計モードからロボットモードに成ったビスターがケンタの肩に乗った。

「ビスター、ロープを解いてくれ。」

ケンタが小声で言うとビスターは、瞬時にケンタの縛っているロープを解いた。

ケンタは、小声で他の子にもロープを解いて脱出のチャンスを伺った。

「フェイトちゃん。もう火鳥さんを許してあげなよ。」

キャンプ場では、なのはがフェイトを火鳥と和解させたかった。

「・・・・・」

しかし、フェイトは、火鳥を許さない様だった。

「ん？」

なのはは、火鳥達が森の方に向かう所を発見した。

「どうしたんだろ？」

「まさか！ケンタくん達に何か！？」

フェイトは、火鳥達の向かった方に走り出した。

「フェイトちゃん！待ってよ！」

なのはも後を追った。

「！？こ、これは！」

火鳥は、ケンタの発信があった場所まで来ると驚いた。

このデビルフラワーを火鳥は、知っていた。

「火鳥これは、何だ！？」

トーレ達もデビルフラワーを見て驚いた。

「デビルフラワー・・・」

「！？」

トーレ達は、この花を解らなかったが危ない物だと勘で理解した。

バッバッバッバッバッバッバッバッ！！

花畑からテシター達が銃を火鳥達に発砲した。

火鳥達は、交わしトーレ達も普段着から戦闘服に変身した。

火鳥達は、次々にテシターを倒していく。

ケンタ達の方に居るテシター達も火鳥達の騒ぎに気付き向かった。

その間にケンタ達は、安全な場所まで避難したがケンタはこっそりと火鳥達の方に行った。

フェイト達もやっと火鳥達が到着した場所までたどり着いた。

「こんな所に花畑が！？」

フェイト達もこんな場所に花畑が在る事は、知らなかった。

火鳥達は、大体のテシターを倒した。

「火鳥さん！」

丁度良くハルカが来た。

「おーい！火鳥兄ちゃん！」

ハルカの来た反対の方からケンタが来た。

「みんなは？」

「大丈夫！逃げた。」

「良かった。」

火鳥は、ホッとした。

「それより、早くこの花を！種が始める前に何とかしないと人間は奴隷にされちゃうよ！」

「えっ！？」

ハルカ達は、驚いた。

「解っている。」

火鳥もこの花を何とかしたかった。

「この計画の邪魔は、させねぇ！」

巨大な蕾から声が聞こえた。

蕾の頂上にシュラとレジアスが立っていた。

「現れたな！ドライアスのシュラ！レジアス！」

火鳥は、シュラ達を指差した。

「ケンタ！ハルカ！安全な場所に！」

トーレが言うとケンタ達は、避難した。

なのは達は、火鳥達の様子を近くの木の影で見ていた。

「何を話しているんだろ？」

「・・・・・」

なのは達は、火鳥達の話を聞いていた。

「この花をオレが知らないとでも思っているのか！」

「地球人でないお前なら解るわな！」

「この美しい地球を利用し人間をお前等の奴隷にしようなど、このオレ達が絶対に許さん！」

「そうッス！」

「自然を悪に加担させるな！」

トーレ達も火鳥に同感だった。

「美しい自然だぁ？ふん！だったらこの星をデビルフラワーで満たしてやる！」

「我々には、地球とミットチルダと奴隷が手に入れば良いのだから

な！」

レジアス達は、欲の突っ張った顔で言った。

「愚かな！」

チンクが怒鳴った。

「この山に生えている木一本にだって草花にだって命が宿っているんだ！その名も無い命が栄えてこそ、この星達を地球とミットチルダと呼ばれるんだ！」

「そんな事も解らない貴様何かに、負けるワケにはいかねぇ！」

火鳥が言うとノーヴェも言った。

「・・・っ！」

フェイトは、火鳥達の言葉を聞いて彼等も違った生き物でも同じ平和を願う者だと思った。

「せいぜい喚いてろ！」

レジアス達は、蕾の中に入って行った。

ガチン！

蕾が花のロボットに変形した。

「くたばれ！」

コクピットに入ったレジアスが蔓状の物で火鳥達を攻撃した。

シュッ！

火鳥達は、交わした。

「ファイヤー・・・ジェエエット！！」

火鳥は、空からファイヤージェットを呼び変形し巨大なロボットに変わり火鳥も変化したファイヤージェットに向かって宙を飛び体が火の鳥の様に成りロボットの中心に乗り移った。

『チェエエンジィィ・ファイバード！！』

火鳥は、ファイバードと成った。

『私達の命がある限り貴様等の思い通りにはさせん！』

「これでも食らえ！」

ビューン！

シュラがレーザー砲を放った。

『ファイヤーバスター！』

ファイバードは、両腕からガドリングを放った。

バッバッバッバッ！

シュルッ！

花のロボットは、ファイバードの攻撃をかわした。

クルルルル！　ズシン！

『「ぐあああああ！！！」』

ロボットの回転しながらの体当たりがファイバード達に当たった。

シュルルル！！

ロボットは、蔓状の物でファイバード達に巻きついた。

「食らえ！」

ビリビリビリ！！

『「ぐあああああああ！！！」』

ファイバード達は、蔓から出る電撃で動けなかった。

ロボットの後ろでは、デビルフラワーの成長させる光が出ていた。

「ふっふっ！ファイバード、目の前でデビルフラワーが実を結ぶのを見るが言い！！」

「はっはっはっはっ！！」

レジアスとシュラは、小馬鹿にしていた。
見る見る内にデビルフラワーが実を結んでいった。
「リボリバーシュート！！」
ビュン！　バーン！
実に成る寸前でロボットに何かが攻撃してきた。
『バトルアップ！チェンジ・ガードウィング！』
『バトルアップ！チェンジ・ガードレスキュー！』
『バトルアップ！チェンジ・ガードファイヤー！』
『バトルアップ！チェンジ・ガードスター！』
「火鳥さん大丈夫ですか？」
なのは達がガードチームとスバルに連絡していた。
『すまない、ガードチーム。スバル。』
ファイバード達は、スバル達に感謝した。
『ガードチーム！フォームアップ！』
ガードスターが胸の辺りに変形しガードファイヤーが胸を収める部

分と両腕、両腿に変形しガードレスキューが両足に変形して装着した。

ガードウィングは、叫ぶと足のパーツと胴の部分に変形してガーディオンに装着し更に頭の部分も変形した。

『四体合体！スーパーガーディオン！』

ガードチームは、スーパーガーディオンに合体した。

『フレイムブレスター！！』

ファイバードは、腕を空に翳すと空からフレイムブレスターがやって来た。

フレイムブレスターがファイバードの真下に下りると合体した。

『フォームアップ！武装合体ファイバード！！』

ファイバードも合体した。

「ふん！合体しても、もう遅い！」

レジアスとレジアスが笑った。

シュウウゥゥゥ！！

ロボットは、風を起こし実が熟したデビルフラワーに向かって噴射し種が宙に舞い上がった。

『まずい！』

『オレ達に任せろ！』

スーパーガーディオン達は、種の方に向かった。

「ＩＳ発動！ライドインパルス！」

「ＩＳ発動！ランブルデトネイター！」

「Ｉｓ発動！スローターアームズ！」

「ＩＳ発動！レイストーム！」

「ＩＳ発動！ブレイクライナー！」

「ＩＳ発動！ベヴィバレル！」

「Ｉｓ発動！エリアルレイヴ！」

「ＩＳ発動！ツインブレイズ！」

「リボルバーシュート！！」

『フリージングトルネード！！』

種を燃やしたり凍らせたり斬ったりして種や他のデビルフラワーを壊した。

「「何！？」」

レジアスとシュラは、驚いた。

『サンスライサー！』

ファイバードは、胸のエンブレムをロボットに投げた。

シュッ！

ロボットは、回転しながら避けてレーザーを放った。

『『ぐああ！』』

ファイバード達は、レーザーで動けなかった。

「はぁ！」

ディードが瞬時にロボットの近くに行って剣を振った。

スパッ！　ガキン！

「「うわあああああ！！！」」

クルクルクルクル！！！

斬られた花びらの一部が無くなるとロボットは、動けなくなりコクピットのレジアスとシュラだけが回っていた。

「ファイバード今だ！」

チンクが叫んだ。

ファイバードは、後ろから剣を取り出した。

『フレイムソード！！』

ファイバードは、剣を持って構える。

ファイバードの額が光出した。

『フレイムソード・チャージアップ！！』

剣の刃に炎が纏い怪物目掛けて構えた。

『えええいいいい！！！』

シュパ！！

ドオオオンンン！！

ロボットは、ファイバードの必殺技で爆発し二つの脱出ポットでにげって行った。

その夜のキャンプでみんながキャンプファイヤーしている時にケンタやトーレ達は、驚いた。

何故か昼間は、睨んでいたフェイトが火鳥と一緒に仲良く歌っていた。

「あれ？ケンタくんどうしたの？一緒に歌おうよ。」

何故かスバルもキャンプに参加していた。

「え？ああ、うん！」

ケンタは、心配そうでもあるがスバルと一緒に歌いだした。

（はっきり感じた。火鳥の優しい心を。正義の人だって事に。）

フェイトは、火鳥と自然に和解していた。

第十七話：恐るべき宇宙植物（後書き）

「誘拐事件発生！ジェイルにいちゃんの友達のグレイ教授の研究を狙ってドライアスが起こした事件なんだ！研究データを渡せば娘返してやる何て言うんだ。絶対に許さないよ！セリカちゃん！待っていて！必ず助けてあげるからね！　太陽の勇者ファイバードＳＴＲＩＫＥＲＳ　第１８話　四人の科学者　次回も世界平和！」

第十八話：４人の科学者（前書き）

今回は、ウェンディとセインが活躍します。

第十八話：４人の科学者

アメリカ：グレイ教授の自宅

グレイ教授の一人娘のセリカがグレイ夫妻の目を離した少しの間に行方不明に成った。

グレイ教授は、警察に通報してしばらく経つと電話が鳴った。

ガチャッ！

グレイ教授は、電話に出ると［娘は、預かった。返して欲しければ、貴様の研究データを渡せ。］電話は、切れた。

地元の警察に電話の事を知らせるとまた同じ声の者が電話をして来た。

警察は、ドライアスの仕業と見て日本から佐津田刑事とティアナを派遣した。

グレイ教授は、妻と一緒に娘の写真を見ながら心配していた。

佐津田刑事は、キョロキョロと歩いていた。

どうやら未だに犯人からの電話が掛からないからだ。

ティアナも同様だった。

トゥルルルルルッ！！

電話が鳴り響いた。

「「！」」

グレイ夫妻は、その電話に緊張した。

「ティアナ！」

「はい！逆探知お願いします！」

ティアナは、隣に居る地元の警官に逆探知の用意をさせた。

警官も逆探知の用意をした。

グレイ教授は、電話に出ようとすると佐津田刑事が出てきた。

「いいですか、グレイ教授？出来るだけ話は、引き伸ばしてください。」

グレイは、頷いた。

グレイは、電話に出た。

「もしもし・・［やあ、グレイ。久しぶりだね。私だ、ジェイルだ。］

「「ジェ・・・ジェイルだと（ですって）！？」」

ティアナと佐津田刑事は、その名前に聞き覚えがあった。

ガチャ！

ドアが開いた。

「久しぶりだね。グレイ！」

ドアから火鳥と天野と携帯電話を持ったジェイルが居た。

「ジェイル・・「コラー！社会の敵一体何の用だ！さては、貴様等誘拐の片棒を」ジェイルーーー！！」

グレイの言葉にティアナと佐津田は、驚いた。

ガシッ！

グレイは、ジェイルの近くに行き握手をした。

「久しぶりだね！」

「懐かしいね！」

「「！？」」

ティアナと佐津田刑事は、どうなっているのか理解できなかった。

「私は、親友の娘が誘拐されたと聞いて、慌てて来たんですよ。」

「気の毒にのぉ。でも、ワシ等が来た限りは、もう安心じゃぞ。」

「ジェイル、この人達は？」

グレイは、ジェイルの後ろに居る二人を聞いた。

「今、研究でお世話に成っている天野ハカセと火鳥勇太郎くんだよ。」

「でも・・嬉しいが・・・トゥルルルルルッ！　「「「「！？」」」」」

電話の音に一同に緊張が走った。

グレイは、その電話に出た。

［グレイだな？］

「ああ、そうだ。娘は？娘は、無事なんだろうな？」

［ふっはっはっ。今の所はな。要求を伝える。良いか？一度しか言わないぞ。お前が完成させたスーパーコンピューターのデータを寄こせ。ガキは、データと引き換えだ。断れば、娘を殺す。二時間の猶予をやるから、それまでに結論をだせ。「待ってくれ！その前に娘の声を　ガチャッ！　トゥ・・・トゥ・・・トゥ・・・

電話は、理不尽にも切れた。

「逆探知は！？」

ティアナが聞くと警官は、横を振った。

「今の声は、ドライアスのゾル。」

「そんな事は、解っとる！だから、ドライアスに詳しい俺達が派遣されてきたんだ！」

「しかし、佐津田刑事。何で犯人は、お金では、無く教授のデータなのでしょうか？」

ティアナが火鳥に文句を言っている中で聞いてきた。

「ん？それもそうだな・・・」

佐津田刑事は、考えた。

グレイは、アタッシュケースからディスクを取り出した。

「データなら此処にあります。セリカが助かるのなら、データ何て欲しくはありません。」

グレイは、苦悩の表情で言った。

「グレイ落ち着くんだ。」

「その通りじゃ。子供の命とデータも助かる最良の策を考えるのが先決じゃ。」

天野とジェイルは、グレイを説得した。

「教授。警察は、万全の「犯人は、こんなアホが敵う相手では無い。」

佐津田刑事の話に天野が割り込んできた。

「ワシ等が何とかする。心配するな。」

「ア・・アホだと!?「佐津田刑事落ち着いて!」はっ、離せ!ティアナ!」

ティアナは、佐津田刑事を抑えた。

「!」

火鳥は、今ガードスターの中に乗っているケンタとセインの通信に気付いた。

[ケンタ、セイン?どうしたんだ?]

「今、ガードスターが電話の逆探知に成功したらしいよ。」

[良くやった。ガードスター。]

『な~に軽いもんさ。』

「ケンタ、ガードスター!警官が来たよ!」

見張りをしていたセインが言うとケンタとセインが隠れてガードスターもパトカーのふりをした。

火鳥は、ジェイルと天野に逆探知に成功した事を伝えた。

「え！グレイ！君の娘を助けに行くぞ！」

グレイがジェイルの言葉に驚き振り向いた。

「助けるって言っても一体？」

ジェイル達は、グレイを連れてガードスターに乗った。

「ちょっと借りていくぞ！」

天野の声が聞こえた。

キィィィンンン！！

ガードスターは、急速にアジトに向かった。

「「コラー！！パトカードロボー！！」」

佐津田刑事とティアナの声が響いていた。

『ドライアスめ！誘拐とは、卑劣な手段だ！オレは、絶対に許さんぞ！』

「だ・・誰の声何だ！？」

グレイは、ガードスターの声に驚いた。

「この車だよ。」

「え！？」

グレイは、ジェイルの言っている意味が解らなかった。

『宜しく！教授！娘さんは、オレが助けるぜ！』

グレイは、唖然とした。

「色々、びっくりさせてしまったのぉ。説明しなくちゃ成らんな。ワシ等はな・・「宇宙警備隊だよ～～！！」

セインが元気良く言った。

「セ・・セイン・・あまり動かないでくれ・・動くと・・い・・息が・・」

セインは、ジェイルの隣に居て動いた為窓側のジェイルの息が出来なかった。

後ろの席は、ギュウギュウだった。

「そうじゃ。この車も含めてな・・」

苦しくて話せないジェイルの代わりに天野が答えた。

「Ｄｒ．ジャンゴとレジアス中将の事は、知ってますね？」

火鳥がグレイに聞いた。

「ああ・・レジアスの方は・・・学生時代に何時も研究データを横取りされた覚えがあるが・・まさか！」

「はい！」

「セリカを誘拐しお前さんのデータを狙っとるのもジャンゴとレジアスなんじゃ・」

グレイは、戸惑った。

「ドクター！ハカセ！火鳥！来たッスよ～～～～～！！！！！」

移動中のガードスターの真上にフェイヤージェットとライディングボードに乗ったウェンディが来た。

ガードスターは、止めて火鳥とケンタが乗りファイヤージェットのワイヤーでガードスターを乗せた。

その間にセインが助手席に乗り天野も運転席に乗った。

「あれも・・・仲間なのか？」

「いいや、飛行機がハカセの作品だよ。この子達が私の創ったアンドロイドだ。」

ジェイルが説明した。

「ところで、ジャンゴやレジアスの狙っているスーパーコンピューターって何なの？」

ファイヤージェットに乗っているケンタがグレイに聞いた。

「簡単に言えば、経済問題を解決させる機械だよ。これが開発されれば今起きている問題も解決するわけだよ。」

「ミラクルすごい発明だね！」

ケンタは、スーパーコンピューターの内容に驚いた。

「けど、何でレジアスとジャンゴは、それをどうするつもりなんだろ？」

セインは、ジャンゴとレジアスの目的が解らなかった。

「奴等の事じゃ。人類の平和の役に立つ物を悪用したり壊したりしたいのじゃろ。」

「ジャンゴにレジアスめ！」

ジェイルは、レジアス達を許せない気持ちで一杯だった。

『アソコか！』

ガードスターが目的地を見ると驚いた。

マヤ文明のピラミットの中から反応がした。

『突っ込むぞ！ファイバード！』

ガードスターは、早くセリカを助けたかった。

「ガードスター慌てるな。人質の安全を確認してからだ。」

火鳥は、冷静に指示した。

「おお！打倒ジャンゴとレジアスの秘策を思いついたぞ！」

天野が閃くとジェイルとグレイは、振り向いた。

「偽のデータを渡すんじゃよ。」

「ええっ！ばれたらどうするんッスか！？」

天野の秘策に失敗を恐れたウェンディが聞いた。

「な～に、バレるもんか。ワシとジェイルくんとグレイは、時間を稼ぐ。火鳥とケンタは、その間にセリカを救出してくれ。セインとウェンディは、ガードスターと一緒に待機していてくれ。」

「解りました。」

「は～い！」

「わかったッス～～！」

ファイヤージェットがガードスターを地上に下ろすとウェンディもライディングボードで着地した。

火鳥とケンタが乗ったファイヤージェットは、別の場所に着地して別行動をする事になった。

「ケンタ、ワシの持っている超小型マイクで声をビスターに送るからよ～く聞いとれよ。」

「うん、解った。じいちゃん達も頑張ってね。」

ケンタは、天野達の様子を知る為ビスターを常にＯＮにしていた。

ピーッ！ピーッ！ピーッ！

ピラミットの中のモニター室では、警報音に気付いたゾルが来た。

「ん？」

モニターを見るとアジトの位置を知らないグレイが写っていた。

更にグレイだけでは無く天野とジェイルも居る事に気が付いた。

「どうして此処に？まあ良いか！こっちは、データが手に入れば良いんだからな！」

ゾルは、違う部屋に向かった。

「おーい！人攫い供！出て来ーい！」

「逃げも隠れもしないぞーーーー！！」

遺跡のからジェイルと天野の声で響き渡っていた。

ヒュッ！ヒュッ！ヒュッ！

周りからテシターが銃を構えていた。

「セリカは、何処だ？」

グレイが聞くとテシターの一人が手で合図してピラミットの中に三人を案内した。

天野達がピラミットに入るのを見ると火鳥とケンタは、裏に回りこんで隠し通路を探していた。

火鳥の目で隠し通路を開かせる装置を発見した。

「此処だ！」

火鳥が煉瓦の一部を横に引くと装置が出てきた。

ポチッ！ウィィィン！

隠し通路の扉が開いた。

「行くぞ！」

「うん！」

ケンタと火鳥は、入って行った。

天野とジェイルとグレイは、テシター達に案内されて広い部屋に入るとゾルが待ち構えていた。

「よく、このアジトが解ったな。」

「ふん！ワシ等を見くびるなよ！」

天野とジェイルは、強気の構えを見せた。

一方火鳥達は、天野達の様子をビスターから聞いていた。

［お前等は、誰だ！］

［私は、グレイの親友のジェイルだ。］

［そしてワシがジェイルくんと一緒に研究している天野じゃ。］

［人質のセリカちゃんを返してもらおうか？］

［頼む！娘を返してくれ！］

グレイは、娘に会いたくて仕方なかった。

［データが先だ！］

［大人しく渡せ！］

ビスターの通信から別の声が聞こえた。

それも聞き覚えのある。

［ジャンゴ！］

［［レジアス！］］

火鳥達は、その名前を聞いて驚いた。

「ジャンゴとレジアスも居るんだ！」

火鳥達も天野達の心配でしょうがなかった。

「久しぶりだな！グレイ！」

部屋の奥から覆面を被ったレジアスとジャンゴが居た。

「「ん！」」

レジアスとジャンゴは、天野とジェイルを見て驚いた。

「貴様は、天野！」

「ジェイル！」

ジャンゴとレジアスは、二人がこんな場所に居るとは思っていなかった。

「ジャンゴ！この悪魔め～～～！！！」「レジアス！この人で無し～～～！！！」

天野とジェイルは、ジャンゴとレジアスに飛び掛ったがテシターによって邪魔された。

「これは、面白い！こんな所で貴様と会えるとはな！」

「ぐっはっはっはっ！」

ジャンゴとレジアスは、小馬鹿にして天野とジェイルに言った。

「三人供抹殺してくれるわ！」

ジャンゴとレジアスは、三人を抹殺したかった。

「待ってくれ！娘を！娘を返してくれ！」

グレイは、自分の命よりも娘を返して貰う事しか考えられなかった。

「はっはっはっはっ！良いだろう！」

「ガキの顔位は、見せてやれ！」

ジャンゴとレジアスは、ゾルに命令するとモニターに椅子で座って泣いているセリカを写した。

「セリカ！」

グレイは、娘の安否を益々心配した。

［娘の！娘の声を聞かせてくれ！］

［贅沢言うんじゃなぇよ！］

「聞こえる・・・」

ビスターで通信を聞いていた火鳥は、通路の遠くから少女の泣き声を感じた。

「どうしたの？」

何かに感じた火鳥にケンタが聞いた。

「女の子の泣き声が聞こえる。」

「セリカちゃんの声だよ！」

火鳥がダストから聞こえる事を確認した。

「ビスターを使おう兄ちゃん。」

「よっし！俺がビスターの音をフォローしよう。そうすれば、その子の居る場所までたどり着けるぞ。」

「うん！ビスター。セリカちゃんの居る所まで案内して。」

ケンタがビスターに話しかけるとビスターが腕時計から小型ロボットに変形した。

ビスターがダストに入ると火鳥達もビスターの位置を確認しながら向かった。

「スーパーコンピューターを一体どうするつもりだ？」

グレイは、レジアスとジャンゴに尋ねた。

「教えてやろう。貴様の開発したデータを逆利用して世界中の経済を混乱させるのだ！」

「そして、スーパーコンピューターを我が時空管理局の発展の為に利用して、経済危機に陥った国や企業に技術提供する代償として管理局の犬を作らせるのだ！」

「「「何！？」」」

天野達は、レジアスとジャンゴのとんでも無い計画に驚いた。

「その為には、データが必要なんだ！人類の為に開発した物が逆に人類を滅ぼす愉快じゃあないか！」

「「ぐっはっはっはっはっはっ！」」

ジャンゴとレジアスは、経済危機が自分達の理想の世界に成ると考えて笑い始めた。

「「卑怯者めぇ～～！」」

天野とジェイルは、ジャンゴとレジアスを睨んだ。

「五月蝿い！さっさとデータを渡せ！」

ゾルが怒鳴った。

「解った。ただし娘は、無事に返して貰えるんだろうな？」

グレイは、ジャンゴとレジアスに尋ねた。

「わかった、わかった。欲しいのは、データだ。」

「無事に帰すと約束してやろう。」

レジアスとジャンゴは、約束した。

「よぉ～し、そう言う事なら・・・ほれ！持って行け！」

近くに居たテシターがデータを取ってゾルに渡した。

「ぐっはっはっはっ！案外素直じゃねえか！」

ゾルは、データを手にして喜んだ。

「データを渡したんだ！約束通りセリカを返してくれ！」

［データを渡したんだ！約束通りセリカを返してくれ！］

ビスターがセリカを捕らえている牢の前に立った。

「パ・・・パパ・・・？」

セリカもダスト口からグレイの声が聞こえて驚いた。

「近いぞ！ビスター見つけた。」

「本当！？」

火鳥達は、セリカの捕まっている位置に向かった。

「ゾル！データを確認しろ！」

「「待て！」」

ゾルがデータの確認をしようとすると天野とジェイルが喋りだした。

「その前にセリカじゃ！」

「セリカちゃんを返すんだ！」

天野とジェイルは、偽のデータがばれない様に時間を稼いでいた。

「五月蝿い黙れ！」

「邪魔するな！」

ジャンゴとレジアスは、一喝した。

「？」

セリカの肩にビスターが降りてセリカも不思議そうに見ていた。

ザッ！

セリカの正面からテシターがビスターを捕らえようとしたがビスターが逃げ出した。

バッバッバッバッバッバッバッ！

テシターは、銃でビスターに発砲したがビスターはかわしていった。

「きゃーーーー！！」

セリカは、銃の発砲で怯えていた。

ビスターは、出口を発見すると火鳥達の方に戻って行った。

「うわっ、戻って来ちゃった・・・」

「心配するな彼女の場所は、解った。」

［火鳥・・ミラクルヤバイ状況じゃ・・・セリカは、まだ助けられんのか？］

ビスターから天野の声が入った。

「！」

通路を警備していたテシター達が天野の声に気付いて火鳥達を発見した。

「火鳥！どんしたんじゃ！？返事せい！」

「ハカセ・・そのマイク火鳥くん側の声は聞こえませんよ！」

「そうじゃった！」

天野とジェイルのうっかりが出てしまった。

「何だ！こりゃ！？」

ゾルがデータの確認をすると銃を天野とジェイルがレジアスとジャ

ンゴを撃ちまくるシューティングゲームに成っていた。

「これが大発明のデータだって言うのか！？」

「天野、貴様！」

ジャンゴとレジアスは、睨んだ。

「てりゃ！」

ドン！バン！

火鳥は、テシター達を次々に倒していったがきりが無かった。

「じいちゃんとにいちゃんのドジ！こっちまでやばく成っちゃったじゃないか！」

「おりゃぁぁぁ！！」

バン！

それでも火鳥は、テシターを倒していく。

「「焼けクソじゃーーー（だーーー）！！」」

天野とジェイルは、レジアスろジャンゴに飛び掛った。

ドン！

ジャンゴとレジアスの体がすり抜けて天野とジェイルは、壁に激突した。

「バカめ！それは、ワシが作ったホログラフィじゃ！」

「詰めが甘かったな！がっはっはっはっはっはっ！！！」

そうジャンゴとレジアスの本体は、海底研究所にいた。

「レジアス、ジャンゴ頼む！娘だけは！娘だけは！助けてやってくれ！」

グレイは、ジャンゴとレジアスに頼んだ。

「知るか！ワシ等を侮辱した奴等などアジト諸共くたばれ！」

モニターには、ジャンゴとレジアスの怒りに満ちた表情で一杯だった。

ポチ！

ゾルがモニターのボタンを押すと天井から壁が四方に出てきて天野とジェイルとグレイを閉じ込めた。

バン！

牢への扉がテシターが投げられた事によってこじ開けられた。

「てめぇー！その子から離れろ！」

壊れた扉から火鳥がセリカの隣に居るテシターに言った。

ヒュッ！

テシターが火鳥に襲い掛かった。

バン！

「てりゃぁぁぁぁ！！」

火鳥は、テシターに正拳突きをして倒した。

「もう大丈夫だよ。」

「う・・うん・・」

ケンタがセリカに手を伸ばそうとした。

ゴッゴッゴッゴッゴッゴッ！

アジトが揺れた。

「キャーーー！！」

セリカが居る所の床が割れて亀裂に落ちそうになった。

「危なーーーい！！！」

ケンタは、亀裂に落ちそうに成ったセリカの手を掴んだが揺れが激しすぎて引っ張り上げられない。

「ケンタ！・・はっ！？」

正面から壁が降って来て火鳥は、ケンタとセリカを助けられない。

「ぐはっはっはっはっ！アジトごと変形させてみんな巻き込んでやる！」

ゾルは、モニターを使いながら変形させていた。

「これって？」

「何なんッスか！？」

『どうなっているんだ！？』

外のガードスターとセインとウェンディは、遺跡が壊れていくのに驚いていた。

『ファイバード！』

ガードスターは、火鳥に通信した。

［アジトが崩れ始めているぞ！状況を知らせろ！］

火鳥は、壁をケンタ達に当たらないように抑えていた。

「い・・今、手が離せない！セリカとケンタが危ない！応援を頼むぅ！」

［よし！今行く！］

「え・・エースバロンにも連絡してくれぇ！」

『了解！』

ガードスターは、天野平和科学研究所に連絡した。

「はい。此方シャーリー。」

［シャーリー！エースバロンの発進を伝えてくれ！緊急事態だ！］

「解りました！エースバロン！火鳥さん達の所に行ってください！場所は、マヤ文明の遺跡！」

シャーリーは、エースバロンに伝えた。

『エースバロン！了解！待って居ろよ！』

エースバロンは、緊急発進でマヤ文明の遺跡に向かった。

『バトルアップ！チェンジ・ガードスター！』

ガードスターは、ロボットに変形した。

アジトがカメとカニの混ざったロボットに変形した。

『これは・・・！』

「デカイッス！」

「うわっ！」

セインとウェンディとガードスターは、その大きさに驚いた。

「やっと出て来やがったな！捻りつぶしてやる！」

ロボットの操縦をしているゾルがガードスター達に狙いを定めた。

ビューン！

ビームをガードスター達は、避けていった。

『メットオン！』

バーン！

ガードスターは、ヘルメットを出すとスターブラスターでロボットを撃った。

［どうだ！本物を渡す気になったか！？］

閉じ込められている天野達にレジアスが聞いた。

「解った・・データは、渡す！渡すから娘を！」

グレイは、本物のデータを見せた。

［よし！それでいい・・ゾル出してやれ！ゾル！おい！ゾル何している！？］

ジャンゴがゾルに命令しても言う事を聞かなかった。

「わりぃ～な。今忙しくて手が回らねぇんだ。」

ゾルは、ロボットから火炎放射を出してガードスター達に放った。

「「『ぐあ！』」」

ガードスターは、ウェンディ達の盾に成り飛ばされた。

「に・・兄ちゃん・・早くしてい・・痛い・・・・」

ケンタも限界だった。

「ガ・・ガードスター急いでくれ！」

火鳥は、一刻も早く助けが欲しかった。

ピューン！

『ぐうううう・・・』

ガードスター達は、ロボットの攻撃で動けなかった。

『ガードスター！ウェンディ！セイン！』

ピューン！

空からエースバロンが来てビーム砲で援護して来た。

『チェェェンジィィィ！！』

エースバロンは、変形した。

『みんなは！？』

エースバロンは、状況を確認した。

『まだ中に居る。』

『それまで手は出せんな！』

『ファイバード達は、オレとセインとウェンディで助ける。』

『よし！バロンチームは、奴の動きを止めるぞ！』

バロンチームは、ロボットの動きを止めに入った。

「ＩＳ発動！ディープダイバー！」

ウェンデイとセインを掴んだガードスターは、セインのディープダイバーでロボットの中に潜った。

「に・・兄ちゃん！もう駄目だぁぁぁ！！」

ケンタは、握っているのも限界だった。

「頑張るんだ！ケ・・ケンタぁ！」

火鳥も応援していた。

「手が・・千切れちゃう・・・」

ズルッ！

セリカの手が滑った。

「きゃぁぁぁ！！」

セリカは、亀裂の中に落ちた。

「セリカァァァ！！」

ケンタは、亀裂に落ちていくのを見ているしか出来なかった。

スッ！

亀裂の穴の壁から手が伸びた。

ガシ！

「ふ～・・間に合った・・・」

壁からセインが出て来てセリカを掴んだ。

「セイン姉ちゃん！」

ケンタもセインがセリカを助け出してホッとした。

ガッ！

火鳥の壁を押さえている反対側からガードスターとウェンデイが来た。

『待たせたな。』

「大丈夫ッスか？」

ガードスターが壁を代わりに支えていた。

「カードスター！ウェンディ姉ちゃん！」

ケンタ達は、ガードスター達のお陰で助かった。

「おい！火鳥助けてくれ～～～！！」

ビスターから天野の声が聞こえた。

『オレとウェンディに任せろ！君達は、早く脱出するんだ！』

「うん！」

ケンタ達は、セインに掴まってディープダイバーを使って脱出した。

「じいちゃん・・・ジェイルにいちゃん・・・」

ケンタ達は、天野達の安否を心配していた。

ガコン！

ロボットの体からガードスターが穴を開けてウェンディがライディングボードで天野達を連れて出て来た。

『ハカセ達は、助け出した。決着をつけてやれ！』

「頑張るッス～～～～！！」

「パパ！」

セリカも安心した。

「ファイヤー・・・・ジェェェェット！！」

火鳥は、空からファイヤージェットを呼び変形し巨大なロボットに変わり火鳥も変化したファイヤージェットに向かって宙を飛び体が火の鳥の様に成りロボットの中心に乗り移った。

『チェェェンジィィ・ファイバード！！』

火鳥は、ファイバードと成った。

エースバロンもビークルモードから分離して変形して他のバロンチームもロボットに変形した。

『フォームアップ！五体合体サンダーバロン！』

エースバロンは、サンダーバロンに合体した。

『幼い子供をさらってまで悪事を働こうとする輩。無事ではかえさん！』

ファイバードがロボットに指差した。

『フレイムブレスター！！』

ファイバードは、腕を空に翳すと空からフレイムブレスターがやって来た。

フレイムブレスターがファイバードの真下に下りると合体した。

『フォームアップ！武装合体ファイバード！！』

ファイバードも合体した。

バキューン！バッバッバッ！

ロボットは、ファイバード達に攻撃した。

『フレイムバリアー！』

ファイバードは、フレイムソードでバリアーを作った。

『ドリルクラッシャー！』

サンダーバロンは、左手をドリルに変えてロボットに放った。

ガキン！

ロボットの体は、貫通して動けなかった。

ファイバードの額が光出した。

『フレイムソード・チャージアップ！！』

剣の刃に炎が纏いロボット目掛けて構えた。

『えええいいいい！！！』

シュパ！！

ドオオオオンンン！！

ロボットは、ファイバードの必殺技で爆発し一つの脱出ポットで逃げて行った。

ガシッ！

朝日が昇る時、ジェイルとグレイは、握手した。

「私達の為にここまで・・・ありがとう。」

グレイは、ジェイル達に感謝していた。

「いや、当たり前の事をしただけだよ。」

ジェイルは、笑顔で答えた。

チュッ！

ケンタの口に何かが付いた。

セリカがキスをした。

「ありがとう。私、大きくなったらお兄ちゃんのお嫁さんになる。」

「／／／／／／えっーと・・・それは・・・」

ケンタは、行き成り大きくなったら結婚してくれと言われて戸惑った。

「はっはっはっはっ！ジェイルこの恩は一生忘れない。」

セリカの初恋に嬉しくて笑いながらジェイルにお礼を言った。

「それより一つ約束して欲しんじゃが。宇宙警備隊の事は、秘密にして欲しいんじゃよ。」

「特に・・あの日本人の刑事とショートツインテールの子にはね！」

「ああ、他ならぬ君と娘の恩人だ。約束しよう！」

「さあ、早く帰ってママを安心させてやろう。」

こうして少女の誘拐事件は、無事解決した。

第十八話：４人の科学者（後書き）

「俺と火鳥兄ちゃんは、はやてさんの家に招待された。ん？な・・何だ！？この巨大な恐竜達とはやてさん達が写っている写真は！？あれ・・？火鳥兄ちゃん知っているのこの恐竜達の事！？って大変だ！ドライアスがはやてさんの持っている闇の書を奪いに来た！ミラクルヤバイよ！ん？何だ！？あれは！？　太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ　第１９話　俺達は、宇宙海賊ガイスターだ！次回も世界平和！」

第十九話：俺達は、ガイスターだ！（前書き）

ドライアスとダイノガイストの過去を載せました。

第十九話：俺達は、ガイスターだ！

それは、地球から遥か遠い銀河の惑星の話に成る。

キィン！キィン！

巨大な二体のロボットが戦っていた。

一体は、形が違うがデスブレードで戦っているドライアス。

『ふんっ！』

ブン！

もう一体は、巨大な双剣を操る宇宙海賊のダイノガイストだ。

『デビルフォーン！』

ドライアスは、デスブレードの発生する振動をダイノガイストに放った。

キィィィィィィィンンンンンン！！！

『ダーク・サンダーインフェルノ！！』

ドビュゥゥゥゥ！！

ダイノガイストが持っているダイノブレードから漆黒の稲妻がドライアスに放たれた。

バチッ！バチッ！

ダイノガイストとドライアスの必殺技は、互角だった。

『ヌアァァッ！』

『ウグゥゥッ！』

どちらかが隙を見せれば勝負が決まる。

しかし、一向に隙を見せないよりも隙が全く無い。

バチッ！バチッ！ドガーン！！

『『うわあぁぁぁぁ！！』』

バタン！

勝負の結果は、両方供の力が同じで相手の必殺技を直接受けてしまった。

『こ・・この私が押されるとは・・・』

『このオレ様がこんな奴と引き分けとは、認めん！』

ダイノガイストとドライアスは、動けない状態でもなんとか立ち上がり相手を睨んでいた。

『ふふふ・・・アッハッハッハッハッ！！』

ドライアスは、ダイノガイストに向かって笑い出した。

『貴様を配下にしてやる。ありがたく思え！』

ドライアスは、ダイノガイストを自分の配下にしたかった。

ギシッ！

ダイノガイストの拳は、力一杯握り締めた。

『ふざけるなぁぁぁ！このダイノガイスト様は、誰の配下にも成らん！』

ダイノガイストは、怒り狂う様にドライアスに言った。

『ふふふ・・・そうか仕方ない・・』

ドライアスは、デスブレードを構えた。

『そこまでだ！』

『ん！』

ダイノガイストとドライアスの間から声が聞こえた。

ダイノガイストは、その姿に見覚えがあり驚いた。

『エクスカイザー！』

ドライアスとダイノガイストと同じ大きさのエクスカイザー（グレ

ードエクスカイザー様な姿）が真上からやって来た。

『ダイノガイスト！この勝負預けた！』

ドライアスは、ドライアスジェットに似た乗り物に変形すると宇宙の彼方に逃げて行った。

『待て！ドライアス！・・・はっ！』

エクスカイザーは、ドライアスの行った方向を見るとダイノガイストもビークルモードに似た乗り物に変形し隙を見て逃げた。

『はっ！』

ジャンゴの海底研究所でドライアスは、目を覚ました。

「ドライアス様。如何なさいましたか？」

目の前にシュラとゾルが来た。

『いや・・・何でも無い。』

昔の過去を思い出した事を言うのは、くだらないと思い言わなかった。

「宇宙皇帝ドライアス！」

今度は、ジャンゴが来た。

『どうした？Ｄｒ．ジャンゴ。』

「一瞬でこの世を暗黒世界にする方法を見つけた。」

『ほぅ・・・言ってみろ。』

ドライアスは、暗黒世界に出来ると聞き目の色を変えた。

「ロストロギア、闇の書じゃ！」

「？」

「闇の書？」

ゾルとシュラは、聞き覚えの無い『闇の書』と言う物に疑問に成った。

「闇の書に含まれるマイナスエネルギーは、使い方一つで暗黒世界に変わらせる品物じゃ！ただし、その為には、今持っている所持者を洗脳しなくては成らない。」

『して・・今の所持者は？』

「起動六課の隊長八神はやてじゃ！」

Ｄｒ．ジャンゴは、既に調べがついていた。

『よかろう。ゾル、シュラ、行って来い！』

「「ははっ！」」

ゾルとシュラは、ジャンゴが調べた八神はやての今の居場所に向かった。

ケンタと火鳥は、地球にあるはやての家の掃除を手伝っていた。

「ふーっ・・はやてさん。こっちの棚の掃除終わったよ！」

ケンタは、八神家の棚の掃除を全て終わった事を伝えた。

「おおきに！火鳥さん、悪いんですけどそこのカーペットを海苔巻き状にして洗濯機の中に入れて貰えます。」

「わかりました。」

「シグナムは、天井の汚れを拭いておいて。ヴィータ、掃除機でかけた場所を濡れ雑巾で拭いといて。シャマルとザフィーラは、今の内にお昼の買い出ししといて。」

「了解した。」

「わかったぜ。」

「はーい。」

「うむ。」

掃除機をかけているはやてが次々にケンタ達やシグナム達に指示していった。

「ん？」

ケンタは、次の仕事をはやてに聞こうとすると棚の裏に何かが在るのに気付いた。

ケンタが取り出すと一つの写真立てが発見された。

写真には、子供の頃のはやてと今と変わらないシグナム達の姿もあったが写真全体を見て驚いた。

「えっ！これって！」

「ケンタくんどないしたの？あっ！ああ！こんな所にあったんか！」

はやてがケンタの発見した写真立てを見て懐かしく成った。

「はやてさん、この写真って？」

「ああ。ウチの友達のガイスターの人達や。」

「どうかしたのかいケンタ？」

はやてがケンタの方に居るのに気付いた火鳥は、ケンタ達の方に向かった。

「ああ、ガイスター達か。」

火鳥もガイスターと言った。

「兄ちゃん？ガイスターって何？」

「リィンもガイスターの人達について知らないです。」

「ガイスターは、宇宙海賊の名前だよ。」

火鳥が笑顔で答えた。

「う、宇宙海賊なの！？」

はやての友達が宇宙海賊と聞いて驚いた。

「大丈夫だよ。みんな案外良い奴等だから。」

「えっ？」

「ほんまよ。みんな海賊って言っても良い所沢山持っているから。」
はやても答えてあげた。

地球の近くでは・・・・・
『やっと地球に着いたゼ！』

『はやて達元気にしているかな？』

『んな事は、行かなくちゃ解らないだろうが！』

『ヴィータと会える・・・』

地球の近くには、４体の赤いエネルギー体が話していた。

『良いか？今日一日だけだぞ？』

『約束は、守れよな。』

４体の赤いエネルギー生命体達に話かけたのは、青い３体のエネル

ギー生命体達が忠告した。

『当たり前だろうが！』

『オレ達は、はやて達に会いに来たんだぞ！』

『久しぶりにシャマルの料理が食えるゼ！』

『ヴィータとアイスクリーム食べられる・・・・』

4体のエネルギー生命体達は、楽しそうに地球に向かった。

「ヴィータ！シグナム！来て来て！」

「はい。主はやて。」

「どうしたんだよはやて？」

シグナムとヴィータは、はやての方に向かった。

「写真立てがようやく見つかったで！」

「えっ？本当か？」

シグナムとヴィータは、はやてにその言葉を聞いて写真立てを見た。

「もう１０年も経つのか・・・・」

「懐かしくな。」

ヴィータとシグナムは、はやてと同様に思い出に浸っていた。

ガチャッ！

「お昼の食べ物勝って来たわよ・・・ってみんなどうしたの？」

シャマルとザフィーラは、何かを見ているはやて達に気付いた。

「シャマル、ザフィーラ！あの写真立てがケンタの御陰で見つかったらしいぞ！」

ヴィータが言うとザフィーラとシャマルも駆け寄った。

「懐かしいわね・・」

「アイツ等が見たら懐かしがるだろうな。」

はやて達は、ガイスター達に会いたかった。

「あっ！いけない！醤油を買うのを忘れてたわ！」

シャマルがフッと気付いた。

「しゃーないなーウチが勝ってくるから作っておいて。」

はやては、お財布を持って近くのスーパーに向かった。

「じゃあ料理を始めましょうか。」

「ええ！腕を振るいましょうシャマルさん！」

火鳥とシャマルが食材を持ってキッチンに向かおうとするとシグナムとヴィータが来た。

「「ああ！いい！いい！！ここは、私達(アタシ)に任せてケンタとリィンと一緒にソファーに座って居ろ！」」

シグナムとヴィータは、以前ミットチルダに来た時に火鳥とシャマルの料理の下手を知っていたからだった。

「ふ～～～・・醤油も買ったし帰ろうか。」

はやては、スーパーで目的の醤油を買って家に帰ろうとした。

はやての後ろから黒い変な車がゆっくりと追って来た。

バタン！

車のドアが開くとゾルがはやてを車の中に入れてシュラが光線銃の様な物を発射するとバインド状の物がはやてに巻いた。

「た・・たすて　ドン！

はやては、大声で叫ぼうとしたがゾルに頭を手刀で殴られて気絶した。

『はやて達元気かな？』

ガイスター達は、急いで八神家に向かっていた。

『ん？おい！あれはやてじゃないか？』

アーマーガイストは、自分達の真下にはやてが居るのに気付いた。

『おい！待ってよ！何かおかしくねぇか！？』

ホーンガイストが無理やり車に乗せられるはやてを見て驚いた。

『急いでシグナム達のトコに行くぞ！』

『仕切らなくても解っているって！』

『急ぐーーーー！！！』

ガイスター達は、急いで八神家に向かった。

「遅いですね・・・」

八神家に待っている火鳥達がはやての帰りが遅い事に心配していた。

『おーい！誰か居るか！？』

火鳥達は、その声に気付いて窓を開けるとガイスター達の赤い４つのエネルギーが家の中に入った。

「お前達！？」

「一体どうして此処に居るんだよ？宇宙牢獄に居るはずじゃあ？」

シグナム達は、ガイスター達が行き成り来た事に驚いた。

『今はそんな事を言っている場合じゃあねんだよ！』

プテラガイストが深刻な口調で言った。

『はやてが誰かに誘拐された！』

ホーンガイストが言うと火鳥達は、顔の色を変えた。

「リィン！はやてと通信できるか！？」

ヴィータがリィンに聞いた。

「駄目です！はやてちゃんが気絶しているせいで通信に出ません！」

リィンもお手上げ状態でいると火鳥がリィンの正面に立った。

スタッ

火鳥は、自分の手をリィンの頭に置くと逆探知を開始した。

「はやての場所が解った！場所は、海鳴古代博物館だ！」

火鳥達は、海鳴古代博物館に向かった。

（・・・ん？此処は？）

はやては、目を覚ますと鉄の柱に縛られていた。

周りには、テシター達が博物館の中を警備しているのとはやての周りで何かの装置を設置しているのがいた。

「気が付いたか。」

目の前には、シュラとゾルが立っていた。

「何でわたしを誘拐したの。」

「がっはっはっ！洗脳だ！」

「この装置はな。人間の記憶を司る部分を操作する事が出来る品物だ。」

「わたしを操って何を企んどるの！？」

はやては、何で自分が誘拐されたのか理解出来なかった。

「いいだろう教えてやる。お前の持っている闇の書を使って地球を暗黒世界にする計画だ。」

「まあ、諦める事だな。」

ゾルとシュラは、はやての周りのテシター達と一緒に作業に戻った。

火鳥達は、エネルギー生命体のガイスター達と一緒に海鳴古代博物館の草むらで隠れていた。

博物館の入り口には、数体のテシターがいた。

火鳥とシグナムとヴィータで見張りのテシターの隙を伺いそして・・・

「たあっ！」

「はあ！」

「おりゃっ！」

バン！

スパッ！

ドン！

火鳥は、拳でやりシグナムがレヴァンティンで斬りヴィータがグラ

ーフファイゼンで叩き壊してテシター達をやっつけた。

「ケンタ達は、裏から行ってくれ！オレとシグナムとヴィータは、表から敵の注意を引き付ける。」

「わかった！」

「健闘を祈っています。」

「任せたぞ！」

『『『『頼んだぞ！』』』』

「何か言い残す事は？」

シュラが装置のレバーで作動する前にはやてに聞いた。

「わたしは、アンタ達なんかに屈服せーへん！！」

はやては、強気の姿勢で言い放った。

「そうか・・」

ティン！

シュラが指を鳴らすとゾルが装置のレバーに手を掛ける。

「ちょっと待ったぁーーーー！！！」

バン！

扉から火鳥達が入って来た。

バッバッバッバッバッバッバッバッ！

装置の手伝いをしていたテシター達が銃を火鳥達に発砲した。

「「「てりゃぁぁぁぁぁ！！」」」

火鳥達は、テシター達を次々と倒していく。

ケンタ達は、無事に裏から入り裏にもテシターが居たがシャマルとザフィーラのお蔭ではやての居る場所まで来れた。

ゾルとシュラは、火鳥達に目がいってしまってケンタ達まで気付かなかった。

（はやてちゃん！）

シャマルの念話ではやてが気づいた。

（シャマル！？）

はやても念話で話かけた。

（今、火鳥さん達が目を引き付けているその間に助けるから。）

シャマルが伝えるとケンタがはやての縛られている鉄の柱の裏に回った。

「ビスター。はやてさんのロープを解くんだ。」

ケンタの腕時計に成っているビスターがロボットに変形してはやてのロープに向かった。

「動くな！」

ケンタの目の前からシュラが銃を顔ギリギリの位置で構えていた。

「ケンタくん！」

シャマルは、デバイスを使おうとするが

「お前等も動くんじゃねぇ！もしも妙なマネをしたら、このガキの頭に風穴一つ出来るぞ！」

「「「！」」」

シャマル達は、デバイスを解除した。

「ファイバード！これを見ろ！」

ゾルの声に火鳥達は、振り向いた。

ロープで縛られたケンタ達の姿があった。

火鳥達も抵抗すればケンタ達に危ないと感じてシグナムとヴィータは、デバイスを解除した。

「オレは、どうなっても良い。だが他の人達には、手を出すな。」

バコン！

ゾルは、火鳥を殴った。

「兄ちゃん！」

「「「「「火鳥(さん)！」」」」」

「じたばたするな！」

シュラがケンタ達に銃を向けてシグナムとヴィータは、手が出せなかった。

「まだまだこれからだぜ！」

ドン！

ゾルは、倒れた火鳥を踏みつけた。

ドン！ドン！ドン！

更にゾルは、火鳥を踏み続ける。

『クソォ！』

火鳥達の様子を見ていたガイスター達も悔しくなってきた。

『おい！あれを見ろよ！』

アーマーガイストが言う方は、プテラノドン、ステゴサウルス、トリケラトプス、ブラキオサウスルの化石の標本が周りに存在していた。

『成る程な！』

『これは名案だ。』

『戦える！』

ゾルとシュラが火鳥に気を取られている隙に恐竜の標本に向かった。

ピィィィィィィィンンンン！！！

恐竜の標本が光り出した。

「何！？」

ゾルは、何が起こっているのか解らなかった。

ドシン！

トリケラトプスがゾルに突進して飛ばされ、その飛ばされたゾルに

シュラも巻き込まれて吹き飛ばされた。

「ま・・まさか・・！？」

はやては、この種類の恐竜達で思い出した。

『チェェェェンジィィィ！プテラガイスト！』

『チェェェェンジィィィ！ホーンガイスト！』

『チェェェェンジィィィ！アーマーガイスト！』

『チェェェェンジィィィ！サンダーガイスト！』

ガイスター達は、恐竜からロボットに変形した。

『ハヤテ・・大丈夫！？』

サンダーガイストは、人質のはやて達を安全な場所まで運んだ。

「おおきにサンダーガイスト！」

はやては、笑顔でサンダーガイストに返した。

「！？」

バコン！

シュラが立ち上がるとヴィータがグラーフファイゼンで殴り飛ばした。

「うおおおお！！」

ヴィータの後ろからゾルが襲い掛かるが火鳥が二人の間に入った。

「さっきの分まとめて返してやるぜぇ！」

バコ！バコ！バコ！バコ！バコ！

ゾルは、正面から火鳥の拳の嵐を食らった。

「うわあああぁぁぁぁぁ！！」

ゾルは、また倒れた。

サンダーガイストは、はやて達を手に乗せたまま非難するとシュラがテシター達を囲んで構えていた。

「ここから先は、通行止めだ！」

サンダーガイストは、はやて達を両手に乗せたままで戦えない。

『何処見てやガル！』

『オレ達も居るんだぜ！』

『礼は、たっぷりしてやるぜ！』

バコン！バコン！

「ぐあああああ！！！」

次々とテシター達が倒れていきシュラも倒された。

ゴッゴッゴッゴッゴッ！

博物館が揺れ始めた。

モクモク！

博物館の床からライオンのロボットが出現した。

「くそ！貴様等まとめて始末してやる！」

ゾルがロボットに乗って操縦している。

ドカーン！

ライオンのロボットは、鬣の部分からミサイルを発射した。

火鳥は、シグナムとヴィータを抱きかかえて外に非難した。

「ファイヤー・・・ジェェェェット！！」

火鳥は、空からファイヤージェットを呼び変形し巨大なロボットに変わり火鳥も変化したファイヤージェットに向かって宙を飛び体が火の鳥の様に成りロボットの中心に乗り移った。

『チェェェンジィィ・ファイバード！！』

火鳥は、ファイバードと成った。

「噛み砕いてやる！」

途中からゾルが乗り込んで来た。

『ガオオンン！！』

ガキン！

ライオンのロボットは、ファイバードに噛み砕こうとしたがファイバードの腕で抑えられて噛めなかった。

『『合体プテダー！』』

サンダーガイストとプテラガイストが合体して上半身がプテラガイストで下半身がサンダーガイストの恐竜モードのケンタウロスの姿に合体した。

『『合体ホーマー！』』

アーマーガイストとホーンガイストが合体して上半身がホーンガイストで下半身がアーマーガイストの姿に合体した。

『『『『おらああ！！』』』』

ドシン！

サンダーとホーマーは、ライオンのロボットの左右それぞれの側から突進した。

「「ぐあああ！！」」

ライオンのロボットを操縦していたシュラとゾルは、怯んだ。

『フレイムブレスター！！』

ファイバードは、腕を空に翳すと空からフレイムブレスターがやって来た。

フレイムブレスターがファイバードの真下に下りると合体した。

『フォームアップ！武装合体ファイバード！！』

ファイバードも合体した。

ファイバードの額が光出した。

『フレイムソード・チャージアップ！！』

剣の刃に炎が纏いロボット目掛けて構えた。

『えええいいいい！！！』

シュパ！！

ドオオオンンン！！

ロボットは、ファイバードの必殺技で爆発した。

脱出ポットを壊されてシュラとゾルは、地面に倒れていた。

ドシン！

「「ぐあ！」」

シュラとゾルは、恐竜モードに成ったプテラガイスト達の足に踏まれて動けなかった。

『オレ達の許可無くはやて達に手を出すとは、どう言う了解だ？』

『ダイノガイスト様の残した宝だって知っての事か？』

ホーンガイストの次にプテラガイストもゾルとシュラを睨んで言った。

『リンチしようぜ！』

『リンチ！リンチ！』

ゾルとシュラは、プテラガイスト達に今にもリンチされそうな様子だった。

ビリビリビリビリビリ！ドン！

『『『『ぐあああああぁぁ！！』』』』

プテラガイスト達は、空から来たデスイーグルの電撃で吹っ飛ばされた。

「「ドライアス様！」」『見てはおれんわ！』

ガシッ！

ゾルとシュラは、デスイーグルの乗せられて空の彼方に消えて去った。

『１０年ぶりだな…』

『昨日の事みたいだ。』

『楽しかったな…』

『ヴィータと一緒に居て面白かった。』

プテラガイスト達は、はやて達を見て懐かしくて仕方なかった。

「一番印象に残っている思い出は、ヴィータとサンダーガイストがアイスクリームを食べられての喧嘩だな。」

ニヤニヤ

シグナムは、思い出し笑いをしながら語った。

「えっ！そ・そんな事あったけ？」

ヴィータが覚えていなかった。

「ホンマよ～。あの時サンダーガイストがヴィータの一つしかないアイスクリームを食べちゃって喧嘩していたもん。」

『はっはっはっ！そう言えばそんな事があったな。』

アーマーガイストは、笑いながら思い出していた。

『オレも覚えてるゼ。結局シグナムとはやてのカミナリが最後に落ちたんだろ？』

ホーンガイストは、その話のオチを語った。

「ふふふ。けど、ヴィータちゃんとサンダーガイストって昔からアイスクリームを食べる時も一緒。アニメを見る時も一緒だったわね。」

シャマルは、ヴィータとサンダーガイストも喧嘩はするが仲が良い事を知っていた。

『「／／／／」』

ヴィータとサンダーガイストは、昔の事を言われて顔を真っ赤にした。

『つーか・・・姉弟見たいだったな・・』

プテラガイストもその時のサンダーガイストとヴィータが姉弟に見えて仕方なかった。

はやて達は、昔の話に盛り上がっていた。

『おっと!そろそろ時間だ。』

『楽しかったぜはやて。』

『また遊びに来るからな。』

『ヴィータと・・・アイスクリームまた食べたい・・・』

プテラガイスト達が恐竜の標本を博物館に元どうり置くと博物館も元通りに戻した。

そして恐竜の標本から抜け出したガイスター達は、エネルギー体と成って夜空の向こうに帰って行くのをはやて達は、見送った。

第十九話：俺達は、ガイスターだ！（後書き）

「研究施設から隕石が盗まれた！？火鳥兄ちゃんとウーノ姉ちゃんは、その隕石を見たら苦しみ出したんだ！ん！Ｄｒ．ジャンゴとレジアス中将だ！リィンが人質になっちゃうし、どうなっちゃうの！？　次回　太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ　第２０話　デビルストーンの謎　次回も世界平和！」

第二十話：デビルストーンの謎（前書き）

フレイムナイトことノルウェールが久しぶりに出てきます。

第二十話：デビルストーンの謎

ビー！ビー！

その日、天野平和科学研究所のマイナスエネルギー探知機に反応があり天野とジェイルがモニターに見るともう直ぐ人の住んでいない孤島に隕石が追突すると判明したが隕石は、孤島に落下して大きなクレーターが出来た。

「島に調査してきます。」

火鳥は、ケンタを連れて向かおうとした。

「待って下さい！」

火鳥達が振り向くとウーノがいた。

「もしも、落下した隕石に有害な放射能があると取り返しのつかない事に成ります。私も調査に加わります。ドクターよろしいですか？」

ウーノがジェイルに聞いた。

「そうだね、ウーノも一緒に行けば一緒に行くケンタくんが島に降りる前に隕石の状態も確認できて安全だな。ハカセ良いでしょうか？」

「そうじゃのぉ。ケンタに万が一何かあればフェイトと言う娘に何か言われる筋合いも無いじゃろ。」

天野も了承した。

ケンタとウーノと火鳥は、ファイヤージェットで孤島に向かった。

火鳥達は、孤島に向かうと隕石の真上で飛んでいた。

「放射能反応無し、有害物質無し異常ありません。」

「そうか・・・「火鳥さぁーん!!」なのは!」

ファイヤージェットから調査しているなのは達（ティアナは、佐津田刑事と一緒に船で孤島に向かっている）もバリアジャケットの姿で飛行魔法を使いながらファイヤージェットの隣に居た。

「火鳥さん達もこの孤島に来たんですね!どうなんですか隕石に何か異常ありましたか?」

スバルがウィングロードを使いながら火鳥に聞いてきた。

「大丈夫だ。今ウーノが調べたら異常が無いと言っている。」

火鳥達は、そのまま孤島に降りた。

ファイヤージェットは、目立たない場所に着地した。

もしも他の人が来てもばれない様にする為。

火鳥達は、隕石の辺りに近づいた。

「「うっ！」」

火鳥とウーノは、その隕石に近づくと頭を抑えた。

「火鳥兄ちゃん！ウーノ姉ちゃん！」

ケンタが二人の様子が変な事に気が付いた。

「これは・・・！」

火鳥は、その隕石を見て思い出した。

「うううっ！」

しかしウーノは、まだ苦しんでいた。

此処は・・・？

ウーノは、気付くと真っ暗な空間に居た。

［ただいま。］

男の人の声が聞こえるそれも聞き覚えのある様な気がした。

ピカッ！

辺りが光り出すと何処かの暖炉の着いたリビングの中に立っていた。

ガチャッ！

リビングの扉が開くとスキンヘッドの眼鏡を掛けた細い体の４０代位の男がスーツを来てリビングに入って来た。

［お父さん！］

！

ウーノが振り向くと紫の髪をした１０才位の少女が男の元に走り寄って来た。

［今日は、学校どうだっ?］

男が聞くと少女は、笑顔で男に抱きついた。

［うん！今日算数のテスト１００点だったよ！］

少女は、テスト用紙を男に見せた。

［そうか！そうか！偉いぞウーノ！］

えっ！？

男は、自分の名前を少女に向かって言っている事に疑問に成った。

ウーノは、ウーノと呼ばれた少女を見た。

何なの・・？これは・・！？

ピカッ！

また光が出て来て風景が変わった。

今度は、何処かの研究室の中に成った。

［大人しくそれを寄こせ！］

大柄な男が慌てている口調で誰かに言っていた。

［嫌よ！これは、ガルドマンが・・・お父さんが世界平和の為に作った物よ！貴方なんかに渡せない！］

反対側から女性が抵抗していた。

［いいから寄こせ！］

男は、女性に駆け寄ると奪い合いに成った。

［い・・嫌・・嫌ァ！！］

女性は、それでも持っている物を渡そうとしなかった。

バキューン！！

［あ・・・］

男が懐に閉まって置いた銃を出して女性に発砲した。

バタン・・・

女性は、喉を銃で撃ち抜かれて大量の血を流して倒れた。

［ふん！素直に渡せばこんな事に成らずに済んだんだ！］

男は、女性の持っている物を奪って研究所を後にした。

男が去って数分するとまたスキンヘッドの男が研究所に入って来た。

［ウーノ！ウーノォォォォ！！！］

男は、駆け寄ったがもはや虫の息に成って手遅れだった。

［お・・お父・・・さん・・・ごめん・・なさい・・・研究・・・
の物奪われちゃった・・・］

女性は、懸命に喋った。

「解った！もういいから喋るな！」

男は、涙声で女性に言った。

女性は、笑顔に成りそのまま息を引き取った。

「あ・・ああ！うわあああああああ！！！！！！」

男の叫び声（ガルドマン）が研究所に響き渡った。

「・・・えちゃん・・ウーノ姉ちゃん！」

気が付くとウーノは、涙を流していた。

「ケンタくん？」

ウーノは、心配そうなケンタに不思議そうに見ていた。

「どうしちゃったの！？行き成り立ったまま涙を流すんだもん！心配したじゃない！」

ケンタは、ウーノが普通じゃない事に気付いていた。

「火鳥さん、ケンタくん、ウーノさん！隠れて下さい！レジアス中将の部隊が来ました。」

スバルが火鳥達をファイヤージェットの隠してある場所まで急いで連れて行った。

「起動六課！此処から先は、我々の部隊がその隕石を管理局まで輸送する！」

レジアスが言うと部隊の局員達は、隕石を運ぶ。

しばらくしてから佐津田刑事と同行していたティアナも佐津田刑事と一緒になのは達の元に来た。

「何だ？何だ！？」

佐津田刑事もレジアスの部隊を見て一体何が起きたのか予想がつかなかった。

「佐津田刑事。実は・・・」

なのはが佐津田刑事に大体の事を伝えた。

「成る程・・・用済みってワケか・・ティアナ帰るぞ！」

佐津田刑事は、ティアナを連れて船で孤島から退散した。

レジアスの部隊とはやて達（スバルを除く）が隕石を持って孤島から去った。

「火鳥さん、もう大丈夫ですよ。」

しばらくしてスバルがファイヤージェットに隠れている火鳥達を読んだ。

火鳥とケンタが出て来た。

ウーノは、隕石を見た時から気分が優れないのでファイヤージェットの中に居る。

「？火鳥兄ちゃんどうしだの？」

「デビルストーン・・・」

「もしかしてさっきの石の名前ですか？」

「あれは、デビルストーンと言う人間には、害は無いがオレ達からして見れば人間の放射能に近い物だ。」

火鳥の口からとんでもない物だと教えられる。

「とにかくオレは、ケンタと一緒にファイヤージェットで船を尾行する。スバルは、ウーノをハカセ達の所に連れて行ってくれ。」

火鳥は、ウーノがデビルストーンを見て苦しんでいた事を思い出して気遣った。

「解りました。」

スバルは、ウーノを担いでウィングロードを使い天野平和科学研究所に行った。

火鳥とケンタは、ファイヤージェットに乗って船を追った。

海鳴町の服屋に二人の老人が買い物をしていた。

「オーナー何時もの出来ていますか？」

老人の一人は、ノルウェールでオーナーに聞いた。

「はい！出来ておりますノルウェール様。」

オーナーは、小さい箱から人形サイズの白いワンピースをノルウェールに見せた。

「おお！可愛いワンピースだ。」

ノルウェールは、そのワンピースを見て喜んでいる。

「これ何か出来るかしら？」

もう一人の老人は、ミセットが洋服雑誌をオーナーに見せて聞いた。

「はい、数日頂ければ出来上がります。」

ミセットが見せた雑誌には、ジーンズとパーカーの方だった。

「ミセットもリィンさんに洋服を着させたいのですね。」

「ええっ。」

二人には、子供が居て孫も居るが忙しくて会えるかわからないので１０年前から一緒に住んでいるはやて達と暮らしていた。

特にリィンに対しては、孫扱いでもある。

「出来る日が待ち遠しいですね。」

「そうね。」

二人は、笑顔でリィンがワンピースを着た想像をしていた。

火鳥とケンタは、ファイヤージェットで船を尾行していたが全く変わった様子も無かった。

そして船が港に到着すると隕石と思われる物を積んだ箱が港にある貨物車に乗せた。

エリオとキャロとリィンが起動六課代表として貨物車に乗せる隕石の護衛を任せられる事に成る。

「エリオ、キャロ。佐津田刑事達もパトカーから貨物車の護衛に付くけど気を付けてね。」

「「はい！」」

フェイトがエリオとキャロを心配そうに見ていた。

「リィンも無茶したらあかんよ。」

「解りましたです！はやてちゃん。」

はやては、自信満々のリィンが心配に益々成る。

フェイトとはやては、貨物車が出発するとエリオとキャロとリィンを見送った。

『心配するな、はやて、フェイト。』

『私達が付いて居る。任せて下さい。』

ガードスターとガードレスキューも貨物車の後を追いかけた。

「間違いないこれは、ドライアスのエネルギーと対極的なエネルギーだ。」

「成る程な！」

貨物車の隕石を保管場所には、レジアスと下手な変装をしたＤｒ．ジャンゴが妙な機械を隕石に向けている。

「しかもドライアスの波長を滅茶滅茶に狂わす作用がある。」

「これさえ有れば！」

レジアスとジャンゴの想像

『うぐぅぅ！苦しい・・・ジャンゴ・・レジアス・・・止めてくれ・・・何でも言う通りするから・・・止めてくれぇぇぇ！』

ドライアスやシュラにゾルも苦しんでいた。

「「ガッハッハッハッ。」」

二人は、隕石をレプリカの隕石にすり替えようと作業に入る。

「「誰だ（です）！」」

扉から隕石の護衛を任されていたエリオとキャロとリィンが立ってレジアスとジャンゴに言う。

「くっそー！」

覆面を被っているレジアスと変装しているジャンゴは、懐から銃をエリオ達に向ける。

バン！バン！

「うわっ！」

エリオ達は、レジアスとジャンゴの撃った銃を避けると警報装置に当たり警報音と共に貨物車も止まった。

グラッ！

「わぁっ！」

貨物車が急ブレーキをしてジャンゴが持っていたデビルストーンがエリオを方に飛ばされた。

「？」

エリオは、デビルストーンを持っている所をジャンゴとレジアスに

見られてリィンとキャロと一緒に逃げる。

「何だ！？」

貨物車の上空でファイヤージェットに乗っていた火鳥も行き成り貨物車が高山のド真ん中で止まった事に気付く。

『何だ！何だ！？』

反対側の側に走っていたガードスターも貨物車が止まった事に驚く。

『あれは！』

ガードレスキューも止まるとエリオとキャロとリィンが貨物車から出るとレジアスとジャンゴもデビルストーンを奪う為に追いかけて来た。

「寄越せぇぇぇ！」

「嫌だぁぁぁ！」

エリオとレジアスがデビルストーンの取り合いをしている。

スルッ

エリオは、山の崖から落ちた。

「うわあぁぁぁ！！」

「エリオくぅぅぅん！」

キャロは、エリオの落ちた崖までフリードを使って向かう。

「お前も中に入れ！」

「さもないとこの救急車に乗っている奴等から殺すぞ！」

レジアスとジャンゴは、救急隊員達に銃を向けながらリィンもガードレスキューの中に乗った。

ドン！

「ぐあぁ！」

ジャンゴとレジアスは、ガードレスキューに乗っている救急隊員達を外に放り出した。

キィィィンン！

レジアスがガードレスキューを運転してジャンゴがリィンに銃を向けていた。

「佐津田刑事！」

「ああ！緊急配備だ！」

反対側からガードスターに乗っていた佐津田刑事とティアナは、急いで近くの警察と時空管理局に連絡した。

『何？ジャンゴとレジアスが居ない？』

ドライアスは、シュラから何時も居る筈の二人が居ない事を伝える。

『奴等め・・何を企んでいるのやら・・』

ドライアスは、ジャンゴとレジアスがとんでめない事をすると感じていた。

パオオオンン！！

海鳴町に入ったガードレスキューの後ろには、数台のパトカーと管理局員達が追いかけて来ていた。

「ど・・何処に行くんですか？」

リィンは、恐る恐るジャンゴに聞いた。

「近くの海鳴町に行き貴様を人質にする。隕石の交換の為の人質をな！」

「あの崖に落ちた小僧も生きているだろうしな！」

ジャンゴとレジアスは、不敵に言う。

「隕石をどうする気ですか？」

「黙って人質に成って居れば良いんじゃ！」

ジャンゴは、銃をリィンの顔ギリギリに近付けて答えた。

『リィン！掴まって！』

「何！？」

運転していたレジアスは、救急車から声がするのに気付いた。

「は、はいです！」

リィンは、咄嗟に近くの掴まれる物に掴まった。

キィィィンン！

ガードレスキューは、急ブレーキをかけながら左右激しく揺らしながらレジアスとジャンゴの居るのに近いドアを開けた。

「「うわあぁぁぁ！！」」

レジアスとジャンゴは、跳ばされない様にしっかりと握っていた。

『振り落としてやる！』

レジアスとジャンゴは、体が外に出ていたが踏ん張っていた。

「や！やめろ！止めないと大事故に成るぞ！」

レジアスが懐から手榴弾を出す。

「それっ！」

バン！

『うわっ！』

ガードレスキューを追っているパトカーの中のガードスターは、手榴弾に当たらない様にかわして他のパトカーも何とか当たらなかった。

『いかん！』

キィィィンン！

ガードレスキューは、海鳴町の公園の辺りで止まった。

ガードレスキューの周りには、パトカーと管理局員達で包囲されていた。

「バカめ！ワシ等が何の手配もせずに乗り込んで来たと思うのか！」

ジャンゴがリィンに銃を向けながら言う。

「爆弾・・まだ残っているんですね・・・」

「ふふふ・・今度のは、もっと凄いそ。」

「ボタン一つで何千人も死ぬ。」

ポチッ！

レジアスは、腕に付けている爆弾のボタンを押した。

「何て事を！爆弾は、何処に仕掛けたんですか！？」

リィンが二人に聞いても無視して笑っている。

「いいかよく聞け！」

ジャンゴがスピーカーから声を出した。

「貨物車から落ちた隕石を持って来い！そうしないとこのガキどころかもっと死人が出るぞ！」

ジャンゴは、局員と警察に要求を伝えた。

『ご覧の通りだ！ハカセ、ドクター！』

ガードレスキューは、天野平和科学研究所の天野とジェイルに連絡

した。

「おのれ！ジャンゴめ！」

「レジアスめ！ケンタくん！今何処に居るんだい？」

ジェイルがファイヤージェットに乗っているケンタに通信を送った。

「今、崖に落ちたエリオとキャロの救出に向かったよ！」

「う・・う～ん・・・」

エリオは、気付くと大きくなったフリードがクッションに成って助かっている。

「エリオくん！大丈夫！？」

キャロも同様フリードの上に乗っている。

「エリオ！キャロ！」

火鳥が崖の上から下って来る。

「「火鳥さん！」」

エリオがデビルストーンを持って向かう。

「うっ！」

火鳥の様子に異変が起こった。

「うう！」

「火鳥さん？」

エリオも火鳥の様子がおかしい事に気付いた。

「うわあああああああ！！！！」

「火鳥さぁん！！！」

エリオは、そのまま気絶する火鳥をキャロの元に担いで応急処置をした。

「無駄な抵抗は、やめて人質のリィン曹長を解放しなさい！」

「貴様等は、完全に包囲されているんだぞ！」

ティアナと佐津田刑事がスピーカーを片手で持ち交渉をする。

「ふふふ！死人の山を出したい様だな！「駄目です！この人達を刺激しないでください！何処かに爆弾が仕掛けられています！」

リィンがジャンゴの持っているスピーカーからなのは達に伝えた。

「「なっ！何だって（ですって）！？」」

ティアナと佐津田刑事は、リィンからとんでもない事を聞いた。

『くそ！』

キィィィンン！！

ガードスターは、現場を後にして爆弾を探しに行く。

「「誰だ（よ）！この非常時に逃げ出す奴は！」」

ティアナと佐津田刑事は、爆弾を探しに行くガードスターに怒っていると

「あれ!?なのはさん！シグナム副隊長！ヴィータ副隊長!?」

今まで居たなのは達が突然居なく成っている事にティアナは、気付いた。

一方、天野平和科学研究所の天野とジェイルとシャーリーは、ジャンゴとレジアスが爆弾を仕掛ける所を検索している。

「遊園地・・・学校・・・いやいや！アイツ等の事じゃ！もっと派手な所に仕掛けるに違いない。」

「そうですね・・・レジアスもジャンゴと同様に悪知恵がありますから・・・」

しかし全くそれらしい物には、仕掛けていない事を二人も気付いていた。

「空港は！？」

シャーリーが二人に言う。

「そうじゃ！奴等がこの地球に来たなら空港を通らないワケは無い！ジェイルくん！」

「はい！ガードスター聞こえるか！？」

ジェイルは、爆弾を探しているガードスターに連絡をした。

『空港ですね！ハカセ！ドクター！』

[派手好きな奴等の事じゃ！間違いない！]

『了解！』

ガードスターの隣には、ガードファイヤーと上空にガードウィングとなのは達も居る。

『みんなも聞こえたな！』

『おう！』

「解りました！」

『急ごうぜ！』

ガードスター達は、空港に向かった。

「此処は・・？」

火鳥が目を覚ますとエリオとキャロにフリードが心配そうに見ている。

「すいません・・・僕があんな物を持っているせいで火鳥さんに迷惑を掛けてしまって・・・」

「大丈夫ですか火鳥さん？」

「きゅ～う？」

エリオ達は、火鳥を解法していた。

［エリオ！キャロ！返事をして！］

エリオのデバイスにスバルからの連絡が入った。

「スバルさん！どうしたんですか？」

［ジャンゴとレジアスがリィン曹長を人質にしているの！］

「リィンが！？」

火鳥は、リィンが人質にされている事に戸惑う。

［はい！二人が例のデビルストーンを要求しています！］

「ジャンゴとレジアスが！？エリオ、キャロ！隕石は？」

火鳥は、デビルストーンの隠してある場所を聞いた。

「此処にあります。」

「ううっ！」

エリオが茂みに隠してある隕石を見せると火鳥が苦しんだ。

「火鳥さん？」

エリオは、こんなにも苦しんでいる火鳥が初めてだった。

しかし、それでも火鳥は、デビルストーンを触ろうとした。

ビリビリ！

「ぐあ！」

火鳥がデビルストーンを掴もうとしたが電気が発して掴めなかった。

だが、それでもデビルストーンを掴んだ。

「これを・・・持って行かねば・・うっ！」

火鳥は、デビルストーンを持つ事が出来ずに膝を着いた。

「火鳥さん！無理しちゃいけません！」

キャロは、火鳥に肩を貸した。

「僕が持って行きます！」

エリオがデビルストーンを持つ。

「何だか解りませんが・・・コレ・・・僕達には、何でも無い見たいですし・・・」

エリオとキャロは、フリードに乗ってリィンが人質にされている場所に向かい火鳥もファイヤージェットでケンタと一緒に向かった。

リィンを人質にしている場所では、未だ動かないジャンゴ達。

「遅い！後い1分以内に隕石を持って来なければ大爆発だ！」

「ええっ！？」

人質のリィンや包囲しているティアナ達も驚いた。

「隕石は、まだ見つからんのか！？」

佐津田刑事は、通信機で他の警察や局員に聞いても見つからない様だ。

「無理です！貴方達は、命を何だと思っているんですか！」

「ウダウダ言っていないで隕石を持って来ればいいんじゃ「Ｄｒ．ジャンゴ！隕石は、此処だ！」？」

ジャンゴは、声のする方を見るとエリオがデビルストーンを持って火鳥とキャロと一緒にフリードに乗って空から降りて来た。

「それっ！受け取れ！」

シュッ！

エリオがデビルストーンをジャンゴ達に目掛けて投げた。

「ば・・馬鹿者が！」

レジアスとジャンゴは、慌ててデビルストーンを拾いに行った。

「「！？」」

ジャンゴがデビルストーンを拾おうとするとキャロが素早く拾い上げる。

「キャロ！」

ティアナは、目の前に出てきたキャロに驚く。

「爆弾のスイッチと交換です！渡さないとこの石を叩き割ります！」

キャロは、デビルストーンを今にも叩き壊しそうな構えを取る。

「ふん！大したガキだ！」

「良かろう！」

レジアスが爆弾のスイッチを外した。

「どうした？受け取れ・・」

キャロは、レジアスの掴んでいる爆弾のスイッチを握ろうとすると

シュッ！

レジアスが爆弾のスイッチを投げてキャロを捕まえた。

「！？」

火鳥が爆弾のスイッチを拾ってジャンゴ達に疑問になる。

「バカめ！空港に仕掛けた爆弾は、時限式だ！スイッチが無くても、もう直ぐロビーは、爆発だ！」

一同は、驚いた。

クルクル！バン！バン！

「「ぐっ！」」

何かがキャロを捕まえているレジアスの頭に当たった。

「これは・・・杖は・・・！」

リィンは、レジアスに当たった杖に見覚えがあった。

クルクル！ガシッ！

「大丈夫ですかなリィンさん、キャロさん？」

投げた杖がブーメランの様に戻って来て掴んだのは、ノルウェールだった。

「ノルウェール一等空将！」「おじいちゃん！」

リィンとキャロは、ノルウェールの元に非難した。

空港に来たガードスター達は、急いで空港のロビーに居る人達の非難をなのは達に任せて爆弾を探していた。

「爆弾が仕掛けられています！速やかに非難をして下さい！」

「こっちです！急いで！」

なのは達も人々の非難に精一杯だった。

『くそぉ！何処に隠しやがったんだ！』

ガードスター達も必死で爆弾を探している。

『在ったぞ！』

ガードファイヤーとガードスターは、ガードウィングの声のする方を向くと時計塔の中だと知らせた。

『不味い！後5秒しかない！』

『間に合わん！バリアーだ！』

ガードスター達は、時計塔を囲んだ。

バキューン！

空港の外から巨大な火柱が出た。

しかも、その場所だけしか爆発していない。

それは、ガードスター達がバリアーを張った御陰であった。

『な・・何とか間に合ったぞ！』

ガードスターは、ガードレスキュー に間に合った事を伝える。

「皆さん！ご安心ください！爆発は、最小限に食い止められました。」

ガードレスキューがスピーカー声で伝えた。

「ん？何だ！」

警官の一人が空を指を刺すと蝉のロボットがやって来た。

「デビルストーンさえ手に入ればコッチのモンだ！」

ジャンゴとレジアスは、蝉のロボットに入った。

「逃がすな！撃て！撃てぇ！！」

バン！バン！バン！

佐津田刑事が命令するとティアナや他の警察が銃で蝉のロボットを攻撃した。

しかし、蝉のロボットは、銃では倒せない。

ビューン！

蝉のロボットが目からビームを発射して一同は、退避をした。

「ケンタ！リィン達を頼む！」

火鳥は、蝉のロボットの方に向かう。

『立派だったよリィン。これからは、我々に任せてください！バトルアップ！チェンジ・ガードレスキュー！』

ガードレスキューは、ロボットに変形した。

「ファイヤー・・・ジェェェット！！」

火鳥は、空からファイヤージェットを呼び変形し巨大なロボットに変わり火鳥も変化したファイヤージェットに向かって宙を飛び体が火の鳥の様に成りロボットの中心に乗り移った。

『チェェェンジィィ・ファイバード！！』

火鳥は、ファイバードと成った。

「馬鹿め！コレを受けて見よ！」

コクピットからジャンゴが蝉のロボットに取り付けたデビルストーンの波長をファイバード達に放射した。

『『うわ！』』

ファイバード達は、その波長で苦しんでいる。

『フレイムブレスター！』

ファイバードが呼ぶとフレイムブレスターがやって来た。

ビューン！

フレイムブレスターのビームでファイバード達は、蝉のロボットの攻撃をかわせた。

しかし！

ガキィン！

フレイムブレスターは、蝉のロボットの鋏に捕まりファイバードと合体出来ない。

「何時も何時も同じパターンで倒されるワケ無いじゃろが！！」

ジャンゴは、デビルストーンから出る波長を更に強めてファイバード達を攻撃した。

『『ぐあああああ！！！』』

ファイバード達は、苦しくて動けなかった。

「フィッ！フィッ！フィッ！！苦しめ！苦しんで死ぬがいい！！」

「がっはっはっはっ！！」

ジャンゴとレジアスは、ファイバード達が苦しんでいる所が愉快に成る。

ボォォォォォォ！！

汽笛を鳴らした真っ赤なＤ５１が来た。

「「何ぃ！？」」

ジャンゴとレジアスは、真っ赤なＤ５１が来て驚いた。

「フレイムライナー！！」

ノルウェールは、叫ぶと彼の体が火鳥同様に光り出してフレイムライナーに吸い込まれていった。

『チェェェンジ！フレイムナイト！！』

フレイムライナーは、変形して深紅のロボットに成った。

『今度は、このフレイムナイトが相手だ！』

フレイムナイトが蝉のロボットに向かって言う。

「ふん！貴様もファイバード達と同様に苦しませてやる！」

ジャンゴがデビルストーンの波長をフレイムナイトに攻撃した。

シュッ！

フレイムナイトは、素早く避けた。

『フレイムマグナム！』

バン！ドーン！

フレイムナイトは、フレイムマグナムでデビルストーンの辺りを攻撃した。

「に・・・逃げるぞ！」

蝉のロボットは、空に逃げた。

『逃がすか！』

フレイムナイトは、空に両手を翳した。

『ソウルフェニックス！』

『キィィィン！』

バサ！バサ！

蒼い不死鳥が時空から召還された。

フレイムナイトは、両手が足の部分に移動し局部も四角状のベースを変形した。

ソウルフェニックスは、局部の四角状に入り翼が背中に移動して足の部分が肩と腕に成り頭の辺りから新たな頭部に変形した。

『フォームアップ！不滅合体フレイムガンナー！』

フレイムガンナーに合体した。

『行くぞ！』

フレイムガンナーは、翼の部分からブースターが発射されて空に飛んでロボットを追う。

「ふ～～・・此処まで来れば・・・『其処までだ！』「「何！」」

素早く逃げた筈がフレイムガンナーに先を越されて追いつかれてしまう。

『ソウルカノン！』

フレイムガンナーは、胸の辺りが大砲に変化する。

ウィィィィンンン！！

大砲の辺りから粒子が吸収されていく。

『発射（ファイヤ）！！』

ヴォォォォォォォンンンンンン！！！

ドオオオンンン！！

ロボットは、フレイムガンナーのソウルカノンで爆発し二つの脱出ポットでにげって行った。

「本当に無事で何よりです。」

「良かったわ・・・」

ノルウェールは、リィン達の無事を確認してミセットと一緒に安心していた。

「ところでおじいちゃん。どうしてあんな場所に居たんですか？」

ギクッ！

ノルウェールとミセットは、自分達がリィンの洋服の注文の為に地球に寄ってその帰り道に偶然出合った事を言えずにいる。

（成る程なぁ～～・・・）

（目的は、リィンの洋服の注文か。）

（もう過保護なんだから・・・）

はやてやシグナム達は、以前からノルウェールとミセットの買い物を知っていたからだった。

一方、火鳥達は、天野平和科学研究所に戻って来ると未だに顔を出さないウーノに心配していた。

コン！コン！

「ウーノさん・・・気分大丈夫ですか?」

ハルカが夕飯を運びに来た。

「ウーノママ、大丈夫?」

ヴィヴィオもウーノが心配でハルカと一緒にウーノの部屋の前に来ていた。

「ハルカちゃん・・・ごめんなさい・・今日は体調が優れないの・・・ヴィヴィオもゴメンね・・」

「そうなの・・・わかったわ・・・夕飯は、此処に置いておくから食べてくださいね・・・ヴィヴィオ行こう・・・」

「うん、ハルカお姉ちゃん。」

ハルカとヴィヴィオは、リビングに戻った。

(何でだろ・・・ガルドマンって人の事を思い出す度に涙が止まらない・・・)

ウーノは、今日起きた不思議な事に考える度に悲しみで一杯だった。

第二十話：デビルストーンの謎（後書き）

「火鳥兄ちゃんが幻覚を見るって言うんだ。何だか元気も無いみたいだしガードチームやサンダーバロンまでおかしく成って・・・もし悪い病気だったらどうしよう・・・ええっ！原因が見つかった！でもコレ、テレビのコマーシャルソングだよ？ノルウェールさん？何で家に来たんだ？　太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ第二十一話　悪魔の音楽（メロディー）　次回も世界平和！」

第二十一話：悪魔の音楽（メロディ）（前書き）

今回は、ノルウェールさんが活躍します。

第二十一話：悪魔の音楽（メロディ）

ジャンゴとレジアスは、海底基地の研究所にいた。

「苦労して手に入れたデビルストーン・・・対宇宙警備隊用の武器と有効である事は、証明された・・」

「ジャンゴ・・・こんな小さく成ったデビルストーンで奴等が倒せるのか？」

前回のフレイムガンナーとの戦いでデビルストーンの９割以上が壊れてしまった。

しかし、微かな所は、未だに機能している。

「当たり前じゃ。例えこの様な小さな欠片に成っても工夫一つで十分に役に立つわい・・・フィッフィッフィッフィッ・・・」

ジャンゴは、そのまま装置に小さなデビルストーンを入れて完成させた。

研究所の扉からシュラが入って来る。

「ぐあっ！まだやっているのか！？ドライアス様の命令だ！その欠片を早く処分しろ！」

「完璧だ！遂にやったぞ！」

「がっはっはっはっはっはっはっ！！」

ジャンゴとレジアスが喜んでいるが全くシュラに気付いていない。

「ん?何だ・・居たのか・・」

「入る時位ノックをしろ。」

レジアスとジャンゴは、今になってシュラの存在に気付いた。

「何が完璧なんだ?」

シュラは、デビルストーンを見て気持ち悪がりながら二人を見る。

「ファイバードの息の根を止める作戦があるのだ。」

ジャンゴは、シュラに自信満々に笑う。

シュッ!

「コレを装着しておけ!」

レジアスは、手のひらサイズのケースをシュラに投げ渡した。

シュラがケースを開けるとチップが入っている。

「残りは、ドライアス皇帝とゾルの分だ。装着しなければ、お前等の息の根も止まる事になるぞ。」

「!?」

シュラは、ジャンゴの言葉を聞いた瞬間にゾッとした。

火鳥は、1人でファイヤージェットに乗って何処かに向かっていた。

「・・ぃちゃん・・火鳥兄ちゃん!」

火鳥は、ケンタの声が聞こえて振り向くとケンタとヴィヴィオ一緒に買い物に来ていた。

「ケンタ・・ヴィヴィオ・・」

「火鳥パパだいじょうぶ?」

「兄ちゃん。今日は、どうしちゃったのさ?」

ケンタとヴィヴィオは、何時もの火鳥と違う事に気付く。

「ああ・・大丈夫だ。それより買い物を済ませて帰ろう。」

「パパ・・かいものは、おわったよ?」

ヴィヴィオが、スーパーの袋を見せる。

「あっ！そうだった！うっかりしていた。」

「本当に大丈夫？」

ケンタは、益々心配になる。

「平気さ！さぁ帰ろう！」

♪～♪～

すると町の電気屋からＣＭのメロディが流れる。

「ケンタおにいちゃん、またこの歌がながれているよ。」

「あっ！本当だ！」

ケンタもヴィヴィオの見ているＣＭに聞き覚えがある。

ＣＭは、変なマスコットキャラがカップラーメンのＣＭの歌を歌っている物だった。

「ケンタおにいちゃん！このたべものどこでうっているの？」

「そう言えば、このラーメン何処で売っているのかな？見た事無いけど・・」

ケンタとヴィヴィオがＣＭを見ていると火鳥に異変が起こった。

「（おかしい・・・こんな事は、初めてだ・・）・・・うっ！ぐあ

！」

火鳥は、地面に倒れた。

「兄ちゃん！」「パパ！」

ケンタとヴィヴィオは、行き成り倒れた火鳥に驚きケンタがビスターで天野に通信を入れる。

一方町の巡回をしているガードスターにも異変が起きていた。

「♪～♪～」

佐津田刑事がティアナを乗せながら口笛を吹いている。

『・・ん？何だ！？』

ガードスターは、行き成り目眩がしてきた。

ガードスターは、ミットチルダでドライアスと戦った幻覚を見ていた。

『ん!?』

「コラッ!しっかりせんか!」

ガードスターは、気付くと無意識の内に道路の邪魔をする様に阻んでいる。

『オレは、何をしているんだ?』

ガードスターは、今にも自分が何をしているのか解らない状況になる。

「ハカセ順調です!」

「此方のブースター系もチェックが終わりました!」

天野平和科学研究所では、『ファイヤーシャトル』の整備を天野、ジェイル、シャーリーの三人の組み合わせで順調に進んでいた。

「じいちゃん!大変なんだ!火鳥兄ちゃんが病気みたいなんだ!」

ケンタが天野達に急いで連絡を伝えた。

「何じゃと！」

三人は、急いで火鳥の所に向かう。

火鳥は、ケンタがビスターでスバルに連絡をして天野平和科学研究所に運んで貰っていた。

「ぐあああ！！」

火鳥は、ベッドに寝かせれて魘されている。

「はっ！」

火鳥が目を覚ますと天野達が心配そうに火鳥の方を見ていた。

「火鳥さん大丈夫？」

「凄く魘されていたッスよ・・」

「一体どうしたんじゃ？」

「火鳥くん・・・今の気分は、どうだい？」

天野達は、こんな事初めてで解らなかった。

「いえ・・」

「どうした言えん事か？」

「朝から妙な幻覚を見るんです・・」

火鳥は、天野の質問に答えた。

「火鳥くん今まで同じ事が起こった事あるかい?」

「いえ・・こんな事は、初めてです・・・」

ジェイルの答えにも同じ様に答える。

「体の調子は?」

ウーノがメンタル面の方も聞く。

「少し・・体力が落ちている様だ・・・」

「天野さん・・・病気ですかね?」

スバルも天野に聞く。

「検査した方が良さそうだ。」

天野達は、火鳥の検査の為に研究所の地下に向かおうとした。

「ドクター!ハカセ!大変です!」

地下にいるトーレとディードにディエチから通信が入る。

「どうしたんだいトーレ!」

ジェイルがトーレの通信に出る。

［エースバロンが発進しようとしています！］

「何じゃと！ジェイルくん！急いでトーレ達にエースバロンを止めさせるんじゃ！」

「はい！ハカセ！トーレ！ディード！ディエチ！早くエースバロンを止めてくれ！」

［［［はい！］］］

トーレ達の御蔭でエースバロンを止める事が成功したが火鳥同様にエースバロンも幻覚を見ていた事が発覚する。

（ファイバード達には、以前にリィンさんを助けたお礼にメロンで良いかな？）

ノルウェールは、天野平和科学研究所の前で高級メロンを持って向かう。

「ん？」

空を見るとガードウィングが天野平和科学研究所に向かって来る。

「どうしたんだ?」

何時もの動きとは、妙に違うガードウィングの動きに驚いた。

「ガードウィング!どうしたんだ!?」

ノルウェールは、ガードウィングの方に来る。

『か・・体がおかしいんだ・・・何とかしてくれ!』

ノルウェールは、嫌な予感がして研究所の中に入ると天野達が慌てている様子が見える。

「ノルウェールさん!」

ハルカがノルウェールに気付いて此方に来る。

「これは、どうしたんですかな?」

ノルウェールも何が何だが解らない。

「地下に来てください!」

ハルカは、ノルウェールを連れて地下の研究所に向かう。

天野とジェイルとシャーリーとウーノとクアットロは、モニターで火鳥の病気を必死で見つけていた。

「ハカセ大変ですわぁ～ん！火鳥さんの体力が落ちていますぅ！」

クアットロは、天野に火鳥の体力が更に減少している事を伝える。

「いかんな・・幻覚を見る度にエネルギーが消耗している様じゃ・・」

「確かに、幻覚を見る度に疲れが酷く成っています。」

火鳥も疲れる事を自覚している。

「天野さん何とかなりませんか？」

ノルウェールは、天野に聞く。

「物を食べてエネルギーを補給する人間とは、構造が全く違うからのぉ。」

「でも本格的に補給しないと火鳥さん弱っていくだけよ。」

ハルカが天野に言う。

「補給すると言ってもエネルギーを作る方法が・・」

「火鳥くんの生命エネルギーは、熱くも無く冷たくも無い。それでいて太陽の数十倍の明るさを持った強烈な光の様な物。」

「それをどうやって作るかが問題なのよ・・」

「おじいちゃん達は、天才なんでしょ！！」

ハルカが天野、ジェイル、シャーリーに怒鳴る。

「わっ！て・・天才じゃとって何でもかんでも完璧と言うわけには・・・」

天野とジェイルとシャーリーは、ハルカのカミナリに怖がっている。

「完璧に何て言っていないわよ！火鳥さんを少しでも元気にさせてあげられないの？」

「ハカセ・・ハルカちゃんの言うとおりです。」

ジェイルが何かに閃いた。

「おっ！それもそうじゃのぉ・・」

「完璧である必要は、ありませんよ。」

三人は、冷静に話し合う。

「ハルカ、ウーノ、クアットロ！あらゆる電波の周波を調べるんじゃ！」

天野達は、急いで調べる。

「何じゃこれは！？」

天野は、モニターを見て驚いた。

「ハカセ！どうしましたか？」

モニターを見て驚く天野にジェイルが聞く。

「見た事も無いエネルギー波が感知されとるんじゃ・・」

「わかりました！それが、火鳥さん達の正常なエネルギー波を狂わせています。」

「おじいちゃん達！早く！このままじゃ火鳥さん死んじゃうわ！」

ハルカは、火鳥の様態が益々良くなっていない事を気付く。

「わかっとるっといっとるじゃろうが・・！！」

天野達は、急いでその電波を調べる。

♪～♪～

モニターからスーパーの近くで聞いたＣＭが流れた。

「ありゃ？」

「ん？」

「えっ！？」

調べている天野達は、驚いた。

「じいちゃん達！何ふざけているんだよ！」

ケンタが天野達に怒り出す。

「そうよ！こんな時にコマーシャルを流して！」

ハルカも呆れている。

「ふざけてはおらん！火鳥達を苦しめている異常周波を映像に置き換えたんじゃ！」

「え！？じゃあこれって・・・」

ケンタがモニターを見る。

「誰かが火鳥くん達を苦しめる為に何処かで電波ジャックで放送しているんだよ！」

「ドライアスだよ！」

ケンタは、こんな事をするのはドライアス位だと直感する。

「とにかく逆探知します。」

シャーリーが研究所のアンテナを使ってこのＣＭが流されている場所を調べた。

「此処です。」

「案外近い場所から出ているのぉ・・」

「じいちゃん行って何とかしようよ！」

「その前にやる事があるわい！」

天野は、ジェイル達を連れて作業場に向かう。

火鳥は、起き上がろうとしたが・・・

「ファイバード・・」

「フレイムナイト・・・」

部屋から出ようとするとノルウェールが道を阻んだ。

「お前は、エネルギーが消耗しているぞ！」

「しかし、このままではみんなの命に関わります。行かせて下さいフレイムナイト！」

ドン！

「ぐう！」

ノルウェールは、瞬時に火鳥に腹部を拳で殴った。

火鳥は、床に倒れた。

「今日ばかりは、私に任せてもらうぞ・・・」

ノルウェールは、気絶した火鳥を寝かせて外に向かった。

とある丘で変な形のロボットに乗ったシュラが火鳥達に電波ジャックをしている。

ピカッ！

空の彼方から何かが来た。

「来たな・・」

シュラは、ファイバード達と思っている。

ボォォォォォ！！

汽笛を鳴らした真っ赤なＤ５１が来た。

「貴様は！？」

シュラは、来たのがファイバード達で無くフレイムライナーに乗ったノルウェールに驚いた。

「フレイムライナー！！」

ノルウェールは、叫ぶと彼の体が火鳥同様に光り出してフレイムライナーに吸い込まれていった。

『チェェェンジ！フレイムナイト！！』

フレイムライナーは、変形して深紅のロボットに成った。

「食らえ！」

キィィィィンンン！！

シュラがロボットからファイバード達を苦しめる波長を出す。

『ソウルウェーブ！』

キィィィィィンンンン！

フレイムナイトは、地面に右手を置くと見えない波長が彼を守った。

「何！？」

シュラは、フレイムナイトの予想出来ない術に驚く。

『ソウルユニバース！ソウルフェニックス！』

フレイムナイトが両手を空に翳すとソウルユニバースとソウルフェニックスが時空から召喚された。

『久しぶりに本気を見せてやろう！』

フレイムナイトは、地上に居るソウルユニバースと空に居るソウルフェニックスを呼び出す事で真の姿に成ろうとしていた。

ソウルユニバースは、足に変形してソウルフェニックスが両手と両肩に変形した。

フレイムナイトは、そのまま胴体に変形してソウルユニバースとソウルフェニックスのパーツが合わさり頭部に成り合体した。

『フォームアップ！炎天馬合体ハイパーフレイムナイト！』

フレイムナイトは、ハイパーフレイムナイトに合体した。

「こ・・この！」

バーン！バーン！

シュラは、ロボットの大砲をハイパーフレイムナイトに発射した。

ボゥゥゥゥゥ・・・・

煙がハイパーフレイムナイトの当たった場所をまだ残っている。

煙が消えると・・・

『どうした？この程度か！』

「な・・何！？」

シュラは、ハイパーフレイムナイトの体に輝一つも無い事に驚く。

『ソウルグラデュウス！』

ハイパーフレイムナイトは、左肩から盾を出してソウルブレードより大きく厚い剣を出した。

キィィィンン！！

ハイパーフレイムナイトの胸のペガサスの紋章が光り出す。

『ソウルグラデュウス・ブレイクオン！！』

ソウルグラデュウスの刃から炎の天馬が現れた。

炎を纏ったハイパーフレイムナイトは、そのままロボットに向かって走り出す。

『トリャァァァァ！！』

スパッ！

ドォォォォォォンンンン！！！

ロボットは、ハイパーフレイムナイトの必殺技で爆発し一つの脱出ポットで逃げて行った。

「フレイムナイトありがとうございます。」

フレイムナイト・・ノルウェールは、ロボットの戦闘から帰ってくると火鳥達の様態は、回復していた。

「火鳥くん達のエネルギーは、特殊で完璧な物が出来ませんでしたがそれに近い物は出来ました。」

「太陽エネルギーを濃縮して熱さえ取れば似た様な物になる事に気付いたんじゃ。」

天野達が火鳥達のエネルギーに似た物を作ることに成功した。

「ハカセ、ドクター、みんな・・お手数をかけました。」

火鳥達は、天野達に感謝で一杯だった。

「いや、礼には及ばん。」

天野達は、照れ臭く成る。

「それよりもノルウェールさん。どうしてノルウェールさんには、ジャンゴの異常周波に掛からなかったんですか?」

ケンタは、火鳥達が異常を起こしたのならノルウェールにも異常を

起こすと考えていた。

「ああ！それは、これの御蔭だと思いますよ。」

ノルウェールは、ケンタ達に特殊なデバイスを見せる。

「これは、環境が変わっても順応出来る様に作られたデバイスです。」

「成る程・・これの御蔭でお前さんは、ジャンゴの異常周波に掛からなかったと言うワケか・・・」

天野のは、興味を持つ。

「これをファイバード達の為に作って貰えませんか？」

「えっ！？良いのか？」

「ええ。これと同じ物を作れば、ドライアスに同じ攻撃をされても平気な筈です。効果は、さっきまで戦っていた私が証明してます。」

「よっし！それじゃ・・・グゥ～～～！

天野とジェイルとシャーリーは、お腹が大きく鳴る。

バタン・・

三人は、床に倒れる。

「じいちゃん！にいちゃん！シャーリー姉ちゃん！？」

ケンタは、床に倒れた三人を心配する。

「いや・・飯を食う暇も無かったんじゃ・・・・」

「目・・目眩が・・・」

「お腹が空いた・・・」

「もう・・じいちゃん達ったら・・」

ケンタ達は、少しホッとする。

【はっはっはっはっはっはっはっはっ!!!】

火鳥達は、みんな安心して笑い出した。

第二十一話：悪魔の音楽（メロディ）（後書き）

「大変だ！人工衛星が落ちてきた！きっとドライアスの仕業だよ。兄ちゃん、姉ちゃん宇宙に出動だ！あっ！兄ちゃんが衛星に閉じ込められちゃった！？俺とウーノ姉ちゃんだけでどうすれば良いんだよ！　太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ　第二十二話　飛べファイヤーシャトル　次回も世界平和！」

第二十二話：飛べファイヤーシャトル（前書き）

ついに火鳥さんの第二のアレが登場します。

第二十二話：飛べファイヤーシャトル

天野平和科学研究所では、夏休みのケンタ達の為に天体望遠鏡をジェイルと天野とシャーリーがナンバーズ達と共に準備していた。

「ハカセ！望遠鏡の位置は、此処でいいッスか？」

「うむ。大体その位の位置じゃろ。」

「ドクター！ケンタちゃん達の見る時間まで後一時間をきりましたわぁ～ん。」

「ああ、ありがとう。クアットロ。」

「火鳥さん楽しみですね。」

「そうだね！ディエチ。」

天野達も星座を見るのを楽しみにしている。

「じいちゃん！どう調子の方は？」

ケンタが天野達の作業場の様子を伺いに来た。

「慌てるな、あと少・・ビー！ビー！

突然マイナスエネルギー探知機に警報が鳴る。

「「ハカセ！」」

シャーリーとジェイルが作業場にある別の機械に反応があり天野を呼んだ。

「う～む・・・」

天野とジェイルとシャーリーは、その機械の結果を見る。

「何が起こったのじいちゃん?」

「人工衛星が落ちてくるようじゃ。」

「えっ!?」

「ケンタ!」

「うん!」

「いいや。行く必要は無いよ。」

ジェイルがケンタと火鳥を止める。

「「!?」」

二人は、ジェイルの言っている意味が解らなかった。

「そうじゃ。人工衛星は、地上に落ちる前に大気摩擦で燃え尽きるように出来とるんじゃよ。」

「な～んだ・・そうだったのか。」

ケンタ達は、ホッとする。

しかし、この人工衛星の落下がとんでもない事件の幕開けになる事は、まだ天野達も知らなかった。

天野とジェイルとシャーリーは、望遠鏡の設置が終わったので星座を見る前に人工衛星の燃え尽きる所を見せ様とケンタ達を外に連れ出した。

「あまのおじいちゃん。ほんとうにじんこうえいせいがもえつきるところがみられるの？」

ヴィヴィオが興味津々で天野に聞く。

「勿論じゃ。ワシ等の計算に間違いは無い。」

「ああ！アレじゃない！？」

ハルカが夜空に向かって指を指すと赤い光の点が綺麗に輝きながら見える。

「あっ！見えた！」

「ほんとおだぁ～！」

ケンタやヴィヴィオ達も綺麗な点を発見した。

「計算通りですね。でももうすぐ消えますね。」

シャーリーが腕時計を見ながら言う。

「え～！そんな・・」

「ロマンチックなのに・・」

ノーヴェとウェンディは、ガッカリする。

「何を言っているんだい。このまま燃え尽きずに落ちて来たら大変な・・って！あれ！？」

この辺りから人工衛星は、燃え尽きるが・・・燃え尽きなかった。

「な・・何故じゃ！？何で燃え尽きんのじゃ！？」

天野も信じられない事が起きていた。

「く・・来るわ！」

一同は、伏せる。

ヒューン！

人口衛星は、天野平和科学研究所を通り過ぎると近くの無人島に向かう。

ドオオォォォォォォォォォンンンンン！！！！！

無人島から巨大な音と共にキノコ型の煙が発生した。

「ハカセ・・これは、一体・・・？」

「なんちゅう事じゃ・・・」

一同は、見ている事しか出来なかった。

宇宙では、ゾルが人型のロボットを操作して人工衛星を落としている。

［ゾル！一体何処を狙っているんだ！］

［せっかくワシが大気圏突入時に耐えられる特殊コーティング剤を発明してやったのに無駄に使いおって！］

海底基地にいるジャンゴとレジアスがゾルに文句を言うがゾルは、反省していない。

「へっ！人工衛星は、まだ有るんだ！一発位外れたからって・・・［何を言う！数撃てば良いって物じゃないんだぞ！］［これは、世界を暗黒に落とし入れる計画の第一段階なのだ！正確に大都市に落としてこそ意味があるのに今のでファイバード達に気付かれたかも知れんのだぞ！］

『心配はいらぬその時は。』

レジアスとジャンゴが文句を言っている最中にドライアスが割り込んで来て何か策がある様に感じがする。

天野とジェイルとシャーリーは、話し合いをしている。

「ありえん。」

「人工衛星が燃え尽きない筈は、ありません。」

「誰かが細工をしたとしか思えませんよ。」

三人の考えは、一緒だった。

「やっぱり宇宙へ調べるしかないよ。」

ケンタも原因が宇宙にあると思う。

「ファイヤージェットを使えば大気圏脱出は、可能だけど・・・」

「その時に燃料の大半を消費してしまう。その為帰る時にエネルギー不足になる恐れがあるんじゃ。」

ジェイルと天野は、説明した。

「でも、このままにはしていられませんよハカセ、ドクター。」

火鳥の意見に皆も同じ意見だった。

「そうじゃな。」

「ハカセ！例の物を！」

ジェイルが天野に例の物を言う。

「おっ！そうじゃった！」

天野とジェイルとシャーリーは、火鳥達を作業場に連れて行った。

「ウワ～♪」

ケンタがアル物を見て喜んだ。

「コレってスペースシャトルじゃない！」

「そうじゃ！コレには、ファイヤーシャトルと言う立派な名前がある。」

「ただ、まだメンテナンス中で今は、動かせないんだよ。」

早速、ファイヤーシャトルを完成させる為に天野、ジェイル、シャーリー、ゲンヤ、ギンガ、火鳥、マリエル、ケンタ、バロンチーム、ナンバーズは、作業に入る。

「おじいちゃん！大変よ！」

作業場にハルカが急いだ様子で来た。

「世界中の人工衛星からの応答が途絶えているらしいわ！」

「何じゃと！？」

一刻も早く完成させないと取り返しのつかない事態になる。

「兄ちゃん！」

「よっし！」

ケンタと火鳥がファイヤージェットに向かうおうとするが

「ちょっと待て！」

天野は、二人をとめる。

するとジェイルがトランクケースを持って来る。

「コレを着るんだケンタくん。」

それは、宇宙服だった。

「ふっふっふっ・・こんな事もあると思ってハカセとドクターとで作っておいたの。」

シャーリーが何故宇宙服があるかを言う。

ケンタは、宇宙服を着始める。

「どう？」

ケンタは、皆に聞いた。

「ん～・・孫にも衣装ね。」

「面白いカッコッス！」

「案外似合っているぞケンタ。」

「可愛いわぁ～ケンタちゃん。」

「んもう！ウェンディ姉ちゃんやノーヴェ姉ちゃんにクアットロ姉ちゃんまで！」

ケンタは、冗談を言われてムキになる。

「成る程、これが孫にも衣装か・・」

火鳥まで言い出した。

「兄ちゃんまでそんな事・・ん？」

ケンタが言い終わろうとするまでに火鳥は、天野とジェイルとシャーリーの方を見る。

「ハカセ、ドクター、シャーリー。俺も孫にも衣装が欲しいです。」

火鳥は、三人に頼んでいる。

「いいや、そのカッコの方が似合っておるぞ。」

「何時もの服装の方が火鳥くんらしいよ。」

「良いと思いますよ。」

「そうですか？」

「うむ！」

三人は、火鳥がその服装の方が似合っている事を言う。

「そうだ！火鳥くん。」

「ドクター何ですか？」

火鳥がジェイルの方を振り向いた。

「ウーノも調査に加わらせてもらえるかな？ウーノも一緒なら人工衛星の位置や通信にも頼れると思うんだけど。」

こうしてケンタと火鳥そしてウーノは、ファイヤージェットに乗って宇宙に向かった。

「「「あっ！しまった！」」」

天野とジェイルとシャーリーは、フッと思い出す。

「どうしたの？」

ハルカが三人に聞いた。

「大気圏脱出時には、強烈なジーが掛かるんじゃった！」

「火鳥くんやウーノは、アンドロイドとロボットだから大丈夫だけど・・・」

「ケンタくんは、何の訓練も受けていません。」

【え～～～～っ！！】

「うぐうううううう！！！」

天野達の言う事が的中してらしくウーノの前に掴まれているケンタは、大気圏脱出のジーで苦しんでいた。

「ケ・・ケンタくん！？」

「大丈夫かケンタ！？」

二人は、ケンタを心配する。

「だ・・だいじょびゅうじゃにゃい・・・（大丈夫じゃない・・・）」

ケンタは、そのまま気絶する。

「・・・ンタ君。ケンタ君。」

気絶していたケンタは、ウーノの声に反応して目を覚ます。

「うわ・・コレが地球？綺麗だな・・」

ケンタは、宇宙に来るのが始めてで驚きと興奮した。

「体の方は、大丈夫？」

「気分は、悪くないかい？」

ケンタの後ろに居るウーノと火鳥が聞いてきた。

「平気さ。これでも宇宙警備隊員だよ。」

何時ものケンタに取り戻している。

「でも・・宇宙って怖いって位広いんだね。」

「ええ、私も宇宙の事は、聞いた事あるけど実際に見るのは初めてよ。」

ケンタとウーノは、初めての宇宙で言葉があまり出なかった。

「火鳥兄ちゃんの星は、どの方角にあるの？」

「アッチさ。」

火鳥が指を指しても遠くに存在する事を理解していた。

「「！」」

ケンタとウーノは、故郷の星を見ている火鳥を見て悟った。

「やっぱり帰りたい？」

「ケンタくん・・・」

ケンタが火鳥に対して寂しい別れが事にウーノは、可哀想に思えてくる。

「その前にドライアスを倒さなきゃね・・・ビー！ビー！　！」

機内のセンサーが鳴る。

「前方に巨大な質量反応あり！」

ウーノがファイヤージェットのセンサーを見て答える。

「調査するぞ！」

火鳥も目の色を変える。

「燃料は、大丈夫？」

ケンタは、宇宙に来る前の天野とジェイルの言葉を思い出す。

「大丈夫よ。」

「ああ、勿論帰れるよ。」

火鳥達は、ファイヤージェットで質量反応のあった地点に向かう。

火鳥達が向かった先は、人工衛星が山の様に巨大な塊に成っていた。

「じ・・人工衛星がくっついっちゃっている・・・」

「エネルギー反応は、ありますが人の反応はありません。」

ウーノが状況把握を確認した。

「ケンタとウーノは、此処で待っていてくれ！」

ファイヤージェットを巨大な塊の人工衛星に止めると火鳥は、奥に入って行った。

「ぐうう！」

火鳥は、扉の硬く閉まった所を無理やり開けた。

しかし誰も居ない様子だった。

「遅いな・・火鳥兄ちゃん。」

ケンタとウーノは、火鳥の帰りの遅さに心配している。

「えっ!?う・・動いている!?」

ケンタが巨大な塊の人工衛星に動くのを気付くとウーノは、火鳥に通信を繋いだ。

「火鳥さん!聞こえますか!?火鳥さん!?」

しかし何かの磁場のせいか通信に火鳥は出ない。

ビー!ビー!

「「!」」

二人は、センサーを見ると何かがコッチに向かって来る。

別の人工衛星が火鳥の調べている場所目掛けて体当たりして来た。

ドカン！

「ぐあ！」

火鳥の突然のハプニングで驚いた。

『掛かったな！』

人工衛星に隠れていたゾルがロボットを操縦しながら現れた。

「アレは、ジャンゴのロボット！」

ケンタとウーノもロボットの姿を確認した。

ビー！ビー！

また別の物体が向かって来ていた。

それは、ドライアスジェットである。

「そうだ火鳥兄ちゃんを！」

「ええっ！」

二人は、ファイヤージェットを動かした。

「火鳥さん！聞こえますか！？　ドカーン！　「「うっ！」」

後ろからドライアスジェットがファイヤージェットを攻撃してきた。

ケンタとウーノは、何とかドライアスの攻撃をかわす。

『おのれ！チョロチョロと！』

ドライアスジェットは、デスイーグル、デスタイガー、デスドラゴンに分離した。

デスタイガーが右半分の体に成り、デスドラゴンが左半分の体に成りそしてデスイーグルが胸部と頭部に変形して合体した。

『三獣合体！ドライアス！！』

バッバッバッバッバッ！

ドライアスは、両肩のガトリングでファイヤージェットを攻撃した。

ドカーン！

「に・・兄ちゃん！」

ファイヤージェットは、ドライアスの攻撃に当たり追突しそうになる。

「ケンタ！ウーノ！」

火鳥は、閉じ込められている場所から二人の安否を心配する。

ドン！

ファイヤージェットが火鳥の閉じ込められていた空間に亀裂を作り

開けられたがファイヤージェットは、そのまま人工衛星に打つかる。

パリィィンン！

「うわあああぁぁぁぁぁ！！！」

ケンタがコクピットから投げ落とされた。

「ケンタ君！」

ガシッ！

ウーノは、ケンタが宇宙の彼方に飛ばされないように掴むが力がナンバーズの中で弱いウーノもケンタと一緒に飛ばされてしまった。

「ケンタァァァ！ウーノォォォォ！！」

火鳥は、外に出て飛ばされようとしているウーノとケンタの方に向かった。

「よっと！大丈夫かケンタ、ウーノ？」

「助かったよ兄ちゃん。」

「でもファイヤージェットが・・」

ウーノが指を指す方には、ドライアスの攻撃で無残なファイヤージェットがあった。

「よ～し！ファイヤージェット！」

火鳥の呼びかけにファイヤージェットも何とか動くが・・・

『ふっはっはっはっはっ！』

バッバッバッバッバッバッバッ！

「何！？」

突然ドライアスが来てガトリングでファイヤージェットを攻撃し始める。

『こいつが無ければ何も出来まい！』

ドカァァァン！！

ファイヤージェットは、ドライアスの攻撃に耐えられずに動かなくなってしまう。

『次は、お前達の番だな。』

ドライアスが振り向くと火鳥が二人を庇うように盾に成りウーノもケンタを抱きしめたままケンタの盾に成っていた。

『今まで邪魔した分まとめて・・返してくれるわぁぁぁ！！』

ドライアスの拳が火鳥達の方に来ようとしていた。

ドピュゥゥゥゥゥンンン！！

ドカーン！

『ぐお！』

ドライアスは、何か砲撃に当たり怯んだ。

「「「！」」」

三人は、後ろを振り向くとエースバロンに乗ったスーパーガーディオンとファイヤーシャトルの上でイノーメスカノンを構えているディエチとトーレの姿もあった。

「火鳥！ケンタ！ウーノ！」

「助けに来たよ！」

ファイヤーシャトルの中には、天野、ジェイル、クアットロ、シャーリーが乗っていた。

『おのれ！』

ドライアスは、振り返った。

『ドライアス様！』

ゾルがドライアスの元に来た。

『お前は、あの衛星を地上に落とせ！』

『ははっ！』

ゾルは、衛星を落とす作業に取り掛かった。

「ケンタ！火鳥！ウーノ！」

ファイヤーシャトルから天野が宇宙服を着て来た。

「みんな・・たすかったよ・・」

ケンタも少しホッとしていた。

「私達が来た限りは、もう安心だよ。」

ジェイルも天野同様に宇宙服を着ている。

「あ・・あれは・・・！？」

シャーリーも出るとその巨大に成った人工衛星を見て驚いた。

「あんなに人工衛星をくっつけて・・」

「アレを地上に落とそうとしているのか！？」

「そんな事になったら地球上の７０％以上の生き物は、死に絶えます！」

天野、ジェイル、シャーリーは、想像しただけでも恐ろしくなった。

『そんな事は、させん！』

『行くぞ！』

「おう！」

サンダーバロンとスーパーガーディオンそしてトーレは、巨大な人工衛星に向う。

『邪魔は、させん！』

バッバッバッバッバッバッ！

ドライアスは、ガトリングを撃ち放すがサンダーバロン達もよける。

『この！』「食らえ！」

サンダーバロン達もドライアスに反撃をする。

天野達は、無残に成ったファイヤージェットを見て唖然とする。

「これは、酷い。」

「直せる？」

ケンタが天野に聞く。

「とにかく少しでも動ける様にするしかないね。」

ジェイルも天野と一緒に作業に入る。

「ケンタ、お前も手伝え。」

「うん！」

「クアットロ、ウーノ、ディエチ！君達も手伝ってくれ。」

「「「はい。」」」

みんな作業を進めるが火鳥は、他のサンダーバロン達が気に成っていた。

ガシン！

『ぐう！』

ドライアスの懐にスーパーガーディオンが突っ込んだ。

『サンダーバロン！トーレ！衛星の方を頼む！』

「『わかった！』」

サンダーバロンとトーレは、衛星に行く。

『おのれぇぇ！！でりゃ！』

ドカ！

ドライアスは、スーパーガーディオンを蹴り飛ばした。

ガシン！

ゾルは、衛星を地上に落とす様にする為ブースターを付けていた。

『コレで良し！さぁ～て、超特大のプレゼントだ。受け取れ人間供！　ドカーン！　ぐあ！』

ボタンを押そうとしたがサンダーバロンとトーレに邪魔される。

『食らえ！』

バーン！

サンダーバロンは、砲撃したがゾルにかわされる。

シュル！

ロボットの腕がワイヤーの伸びてサンダーバロンとトーレを掴む。

ビリリリリィィィ！！！

「『ぐあああああ！！！』」

サンダーバロンとトーレに大量の電流が流れる。

『苦しめ！苦しめ！』

ゾルは、楽しそうに言う。

バタン！

『ふん！詰まらん手間を貸させよって！』

ドライアスは、時間が掛かったがスーパーガーディオンを倒す。

ブン！ブン！ブン！

『何時かの礼だ！』

ゴン！

ゾルは、サンダーバロンとトーレを回転させながら衛星に叩き付けた。

『衛星諸共地上に落ちてしまえ！』

ゾルは、ブースターのボタンを押して作動させる。

「マズイ衛星が落ち始めた！」

「何じゃと！？」

火鳥が言うと天野達も緊張が走る。

「サンダーバロンとスーパーガーディオンとトーレ姉ちゃんは！？」

ケンタは、サンダーバロン達の心配をした。

「くっそ！やっぱり応急処置では、間に合いません！」

「どうすれば良いんじゃ！」

益々不安と焦りが募る。

『ふっはっはっはっはっ！人間供よ！思い知るが良い！』

衛星が地上に落ちる所をドライアス達は、楽しみにしている。

しかし、衛星は、動くのを止めた。

『ん！？』

ドライアスが見るとトーレが一人で衛星が地上に落ちないように止めていた。

「うおおおおおおおっっ！！！」

トーレは、この地球に存在する木々や花をこんな身勝手で理不尽な者達の手によって命を奪われたくないと言う気持ちで一杯だった。

『『うおおおおお！！！』』

スーパーガーディオンとサンダーバロンもトーレの加勢に入る。

『まだ邪魔する力が残っていたか！』

ドライアス達は、トーレ達の方に向かう。

『死ねぇぇぇぇぇ！！』

バッバッバッバッバッバッ！！

トーレ達は、ドライアスの攻撃に耐えていたが衛星が落ちるのも時間の問題だった。

「「『ぐあああああ！！！』」」

（助けたい！みんなを・・この地球を・・・）

火鳥は、ファイヤーシャトルとディエチのイノーメスカノンに目を

やった。

キィィンンン！！

火鳥は、目を瞑るとファイヤージェットが光り出す。

そしてイノーメスカノンも光出して近くのファイヤーシャトルに吸い込まれて行った。

「これは、一体！？」

「ハカセ、ドクター、シャーリー、ディエチ。ファイヤーシャトルとイノーメスカノンを借ります。」

火鳥は、ファイヤーシャトルに乗ってトーレ達の方に行く。

バッバッバッバッバッバッ！！

「『『ぐあああああ！！！』』」

トーレ達もドライアスの攻撃に耐えるのは、時間の問題だった。

ドーン！

『何！』

ドライアスは、攻撃された方向を見るとファイヤーシャトルに乗った火鳥の姿があった。

「このオレが居る限り貴様等の好きにはさせん！」

『ほざけ！』

ピューン！

「とあ！」

ヒュッ！

ゾルの攻撃を火鳥は、かわす。

「ファイヤァァァァ・・・シャトルゥゥゥゥ！！」

火鳥の呼びかけにファイヤーシャトルは、先端のコクピットが脚部に成りウィング辺りが両肩腕に変形して大きいウィングの左辺りに窪みのあるロボットになった。

「とうぁ！」

火鳥は、火の鳥に成って大きいウィングの左辺りの窪みに入る。

『チェェェンジィィィ！！グランバード！』

火鳥は、グランバードに成った。

「な・・何だアレは！？」

トーレが新しいロボットが現れた事に驚く。

「兄ちゃんがファイヤーシャトルと合体しちゃった！」

ケンタも火鳥が他の乗り物とでもロボットになった所を始めて見る。

『今度は、このグランバードが相手だ！』

『グランバードだと！？』

ドライアス達もファイバードにこんな奥の手がある事を知らなかった。

「グランバード・・？」

『今の内にブースターを外すんだ！』

『おう！』

トーレ達は、衛星に付けてあるブースターを外す作業に取り掛かる。

『シャラクセェ！』

『はあ！』

ドシン！

ゾルは、グランバードに向かって突進するがグランバードに押し返されてしまう。

『デスブレード！！』

ドライアスは、左手から盾を出し盾かた巨大な剣を出した。

『ブレスタージェット！』

グランバードは、手を翳すと別のサポートメカが現れる。

バッバッバッ！！

ブレスタージェットは、ミサイルをドライアスにお見舞いした。

ブレスタージェットは、グランバードの正面に装着する。

『フォームアップ！ジェット合体グランバード！！』

バッバッバッバッ！！

ドライアスは、グランバードに攻撃をするがグランバードの方がスピードが速いので当たらない。

『てりゃ！』

ドシン！

『うっ！』

ドライアスは、グランバードのスピード重視の攻撃に後ろへ下がった。

両腿辺りの部分が開くとライフルの様な武器を出した。

『グランキャノン！』

このグランキャノンは、ディエチのイノーメスカノンの別の姿である。

ヴィィィィィィ！！！！

グランバードの中央の宝石に素粒子が吸収されていく。

ピッピッピッピッピッ！

グランキャノンのバレルにドライアスを照準する。

キラッ！

グランバードの目が光った。

ピュウウウウウウウウ！！！

ドライアスは、瞬時にかわしゾルの乗っているロボットに当たる。

ドカァァァァンンンン！！！

ロボットが爆発すると一つの脱出ポットが逃げて行った。

『グランバード！覚えていろ！』

ドライアスは、ドライアスジェットに変形すると逃げて行った。

ガチャ！

トーレ達は、素早くブースターを取り外した。

『これでこの衛星は、動かない。』

『グランバードか・・・』

「頼もしいのが登場したな。」

こうしてジャンゴの衛星落とし作戦は、グランバード達のお陰で無事に解決された。

第二十二話：飛べファイヤーシャトル（後書き）

「ドライアスが電波研究所を襲に来ると言う男の子がいます。私は、風邪を引いたケンタくんの代わってエースバロンと一緒にその子に会いました。なぜその子を信じないのか解りません。　太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ　第二十三話：ディードとウソ付き少年　次回も世界平和です。」

第二十三話：ディードとウソ付き少年（前書き）

平成２２年1月17日太陽の勇者ファイバードの宇宙皇帝ドライアスの声をしていた声優の郷里大輔さんが急性心不全の為お亡くなりになりました。心よりご冥福を申します。そして太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓの完結をこの場を持ちまして郷里大輔さんに誓います。

第二十三話：ディードとウソ付き少年

「ふ～っ・・・休憩にしましょうかハカセ。」

「そうじゃのぉ。」

天野とジェイルとシャーリーそしてナンバーズは、ドライアスによって破壊されたファイヤージェットの修理をしていた。

「所でケンタは？」

天野は、何時も居る筈のケンタの姿が居ない事に気付く。

「ケンタくんは、風邪を引いてしまったらしく2、3日安静にするとケンタくんのお母さんから電話がありました。」

「あのケンタが！？」

天野は、ケンタが今まで風邪なんか引いたこと無かったので驚いた。

昨日：シャマルの勤めている病院

「ケンタくん！大人しくしていなさい！」

何故かケンタが病院に行く事になったが、ケンタのお母さんだけじゃなくフェイトも付き添いをしていた。

「えっ！？な・・何でフェイト先生まで来ているのさ！」

「フェイト先生には、近所で何時もお世話に成っているからアンタの風邪引いている事を言ったら快く付き添ってくれる事に成ったのよ。」

眼鏡を掛けたケンタのお母さんが理由を説明する。

「それにケンタくんは、注射を打つ時に逃げ出すってお母さんから聞いたよ？」

フェイトは、ケンタの弱点をお母さんから聞いていた。

ガシッ！

フェイトは、ケンタの両腕を掴んで固定している。

「嫌だ！嫌だ！」

ケンタは、抵抗するが大人のフェイトの力の前には無力だった。

（どうしよう・・診療室に入った方が良いのかしら？）

シャマルがフェイトからケンタの治療に注射器を使ってくれと言わ

れ来たのは良いが診療室でケンタが騒いでいるので行くのか行かないか迷っていた。

結局ケンタの嫌いな注射を打つ事になり2、3日安静に家に居る事を指示した。

「先程、南西と北東そして南東の電波研究所が壊れた話をしましたが、たった今入ったニュースによりますと南と西と東そして北の電波研究所でも同じ事故が起こった様です。現地で詳しい情報が入り次第またお伝えします。」

少年は、おやつを食べながらそのニュースを聞いていて考えていた。

「南西・・北東・・南東・・・東西南北・・あっ！次は、家の近くの北西の電波研究所だ！」

少年は、急いでおやつを食べると外に出た。

「どうしたんだいフィット？」

老婆が家に帰って来ると孫の名前を呼び止める。

「おばあちゃん！宇宙人が電波研究所を襲いに来るんだよ！」

「・・・おやつは、食べたのかい？」

老婆は、孫のフィットの言っている意味が解らなかった。

「おばあちゃん僕の話をきいているの！？宇宙人が攻めて来るんだよ！」

「そうかい！そうかい！遊んで来な・・」

老婆は、笑顔でフィットが遊びでするヒーローごっこだと思っていた。

「もおいいよ！おばあちゃんと話していても面白くないよ！」

「何処へ行くんだい？」

「次に狙われるのは、近くの電波研究所だよ！」

フィットは、そのまま電波研究所に向かう。

電波研究所では、警備の武装局員達が休憩の為にお茶を飲んでいた。

「大変だよ！大変だよ！のんきにお茶なんか飲んでいる場合じゃないよ！」

フィットが急いだ様子なのに武装局員達は、笑顔でいた。

「今度は、どうしたの？」

武装局員の女性がフィットに聞いてきた。

「宇宙人でも来るのかな？」

等と言いフィットが自分達にカマって欲しかったと思っていた。

「ニュースで聞いたんでしょ？他の電波研究所が壊された事を！」

「南西と北東と南東そして東西南北のそれぞれの電波研究所だったね。」

「偶然だと思うの？次に狙われるのは、ここの電波研究所だよ！」

「へぇ～。ところでフィット君。電波研究所の連続事故がどうして宇宙人が攻めて来た事に成るのかな？」

別の武装局員の人がフィットに質問をした。

「ん～っと・・僕が宇宙人だとしてだよ。」

【うん、うん。】

武装局員達は、面白そうにフィットの話を聞く。

「ミットチルダを征服するには、たくさんの部下を宇宙から呼ぼうとしたら真っ先にキャッチされる電波研究所が邪魔になる。だから次々と電波研究所を破壊しているんだよ。」

「成る程・・フィット君は、お利口だね！」

武装局員達は、それでもフィットの冗談だと思っている。

「んもう！」

フィットは、電波研究所を後にした。

「主はやて。先程の壊された電波研究所のデータです。」

「おおきにシグナム。」

はやては、この事故が自然に起こった物で無い事を直感して本局のカフェでシグナムとヴィータとで調べていた。

？？「あれ？はやてちゃん！？」

はやては、振り向くとガッチリとした下顎が少し大きい男がはやての名前を呼んだ。

「徳田さん・・徳田さんですか！？」

はやては、１０年前に隣のマンションに住んでいた徳田オサムだ。

「どうして徳田さんがミットチルダに？」

「ああ、ちょっと取材に来ていたんだよ。」

徳田は、仕事でミットチルダの本局に来ていた。

「取材？」

「そうだよ。前回ドライアスがミットチルダを侵略された事があったよね。僕は、その時の関係者のノルウェールさんの所に行って来ていたのさ。」

「ノルウェール一等空将にですか？」

「うん。僕の勤めている帝都新聞社のスポンサーがノルウェールさんだから簡単にアポも出来たんだ。」

はやては、徳田さんを昔から面白い兄的な存在に懐かしがっていた。

「おっと！そろそろ空港行きのバスが出る時間だ。それじゃあね。」

徳田は、はやて達に挨拶をすると帰って行った。

「ただいま戻りました。」

火鳥は、天野達が作業をしている場所に来た。

「南西と北東と南東そして東西南北。メカ獣に襲われた様子は、ありませんね。」

火鳥は、ミットチルダの電波研究所が次々に事故の様な物になっている事に疑問になっていたが偶然の自己と判断した。

「あれ？ハカセ、ドクター来て貰えますか？」

シャーリーがパソコンで別の作業をしていたら不思議な物を見つける。

「何じゃ！？」

「テレビ局や警察に入っている情報に妙なのがありますね。」

天野とジェイルは、シャーリーがテレビ局と警察の情報をハッキン

グして変な物を見た。

「どんな情報です？」

火鳥が天野に聞く。

「今度は、ミットチルダの北西の電波研究所がドライアスに狙われているって言うるんじゃ。」

「発信者は、その近くに住んでいるヴィヴィオちゃん位の年の男の子みたいだよ。」

天野とジェイルが情報を火鳥達に説明した。

「ヴィヴィオと同じ年の男の子がウソを言っているとは、思えません。」

火鳥は、その位の子供にウソを言えるとは考えられなかった。

「でも今日は、ケンタ居ないのよどうするのおじいちゃん。」

そうケンタは、今風邪で此処に居ない。

「私が行きます。」

ディードが出てきた。

「ディード行くのかい？」

ジェイルは、珍しくディードが行くと言う言葉を耳にする。

「はい。ウーノ姉さま達は、ファイヤージェットの修理で疲れていると思います。私もウーノ姉さま達の手伝いをしたいです。」

ディードは、無口だが心優しい娘と言う事を天野達も解っているので了承してエースバロンと一緒に現地の向かう事にした。

フィットは、屋根の上から双眼鏡を持って宇宙人が来るのではないかと心配している。

キィィィン・・・

近くにパトカーが止まるとパトカーから佐津田刑事とティアナが降りて来てフィットの家に向かう。

「あっ来た！」

フィットは、屋根から下りる。

「ちょっとお伺いします。」

佐津田刑事は、庭で花に水をやっているフィットの祖母に聞いてき

た。

「あの電波研究所が襲われるって言った子は、この子ですか？」

「そうだよ！」

「これっ！どうもすいません！すいません！」

祖母は、一生懸命謝った。

「おばあちゃんは、宇宙人がせめて来るって言うのに僕の言う事を信じてくれないんだ。」

「じゃあその宇宙人は、何時来るのかな？」

佐津田刑事は、少し意地悪にフィットに言う。

「佐津田刑事！子供相手に意地悪になるのは良くありませんよ。」

ティアナは、フィットを見て信じたかったがそれらしき証拠も無いのでフォローした。

「良いかい僕。事件が起こったらおじさん達が何とかする。子供は、大人に任せれば良いんだ。もう人騒がせをしちゃいけないぞ。」

佐津田刑事達は、パトカーに乗って帰って行った。

ブゥゥゥゥンン！

「ん！」

フィットは、双眼鏡を持つとエースバロンの姿を発見した。

「アレって宇宙人だ！」

フィットは、急いで悪い宇宙人と思い１人で棒を持ってエースバロンを追いかける。

エースバロンは、地上に着地するとハッチからディードがジーンズと黒いＴシャツの上にデジムの上着を着て出て来た。

ディードは、そのまま電波研究所に向かう。

「すいません。」

ディードの声に警備をしていた武装局員が気付いた。

「何ですか？」

「警察やテレビ局に変な情報を言った男の子を知っていますか？」

「ああ、それは、フィット君の事ですね。」

「フィット君と言うんですか？」

「間違いないと思いますよ。ＵＦＯやお化けが出たとか言っている子です。」

「？」

ディードには、何の事だか解らなかった。

「多分アノ子は、寂しいんだよ。」

ディードは、その武装局員の話を聞いた。

「両親は、私達と同じ局員でしたが違法犯罪者を逮捕する時に深手を負わされてしまい。殉職してしまったんですよ。今は、料理教室をしているおばあさんの所でくらしているんです。」

「だから寂しさのあまりＵＦＯを見たとかお化けが出たとか言うんだと思います。」

局員達の話を聞いて理解したが本当にコレがウソなのかディードは、納得できなかった。

その後局員達からその子の家を聞いてエースバロンの所に戻ってくる。

『そうだったのか。』

「その様なんですけど・・・！」

ディードは、状況をエースバロンに説明するとフィットがやって来る。

「お前等！此処を壊しに来たんだな！」

フィットは、棒を持ってディードに襲い掛かるが片手で棒を素早く握る。

「落ち着いて下さい。」

ディードは、フィットを宥めたが聞いてくれない様子。

『乱暴は、よしなさい。』

「？」

フィットは、エースバロンが喋った事に唖然とする。

『君がフィット君だね。』

「ジェット機が喋った！？お前等やっぱり宇宙人なんだな！？」

フィットは、警戒した。

「仮に私達が宇宙人だとしてもどうして此処を壊さないといけないですか？」

ディードは、優しくフィットに問いかける。

「そ・・それは、ドライアスの命令だからだよ！」

『ドライアスだけが宇宙人では無い。奴を憎む宇宙人も居る筈だ。』

「私達は、貴方の味方です。もしドライアス達が来たのでしたらまた連絡してください。」

ディード達は、フィットが宇宙人が全て悪者でないと説得した。

そしてディードは、天野平和科学研究所の電話番号をフィットに渡して帰って行った。

ディード達は、天野平和科学研究所に帰ると大体の事を天野達に説明した。

「フィット君は、ドロボーなのかい？」

【！？】

火鳥の言う意味が天野達は、解らなかった。

「おい火鳥。どういう事だ？」

チンクが火鳥に聞いた。

「ウソ付きは、ドロボーの始まりって言うじゃないか。」

「それは、言いすぎだぞ・・・」

トーレも常識的に教えた。

「ドロボーでは無いウソ付きか・・・でもフィット君は、襲われるとは言ったけど襲われたって言ってないなんだよね？」

火鳥は、フィットがウソ付きでない事をディードやエースバロン同様に考えていた。

フィットが家に帰る最中だった。

「ん？」

ゴゴッ・・・

「何なんだ！？」

フィットは、空に変な物体がミットチルダ北西電波研究所に向かう

のを見る。

「エースバロン、ディード。たった今フィット君から連絡があった。」

『「えっ！？」』

二人は、火鳥からフィットから研究所に連絡があった事を聞く。

「研究所の近くにＵＦＯの様な物が研究所の近くに着地したとはっきり言っている。」

今度は、正確にフィットが伝えていた。

「火鳥兄様。行って来ます。」

『そうだな確認の為に俺も行った方は良いと思う。』

ディードとエースバロンは、フィットが気になっている様子。

「そうだな、現地に行って確認して来てくれ。」

エースバロンとディードは、現地のフィットの場所に行った。

電波研究所の近くにフィットがエースバロンとディードを待っている。

「まだかな・・」

フィットは、二人が来るのか不安でいた。

「あっ!?」

しばらくするとエースバロンがやって来た。

「お待たせしました。」

ディードは、今度の服装が戦闘服のボディースーツを着て来た。

エースバロンは、他のバロンチームと共にロボットに変形する。

「！ロボットに成った・・・」

フィットは、エースバロンがロボットに変形して戸惑う。

『驚かせてすまない。私は、エースバロン。君の言う通り宇宙人だ。』

エースバロンは、なるべくフィットに話せる様にしゃがむ。

「や・・やっぱり・・」

フィットは、怯えていた。

『でも心配しなくていい。』

「私達の使命は、悪い宇宙人からこの平和な星を守る事。」

『もし私達が悪い宇宙人だったら真っ先に研究所を壊しに行っている。』

ディードとエースバロンの言葉をフィットは、信じて見たくなる。

「うん！」

フィットの顔が緊張の顔から笑顔に変わる。

「では、貴方が見たと言う場所を教えてくれませんか？」

ディードは、フィットを抱き上げると宙を飛んだ。

『さあ行こう。』

二人は、フィットが見たと言う場所に行く。

「あれ？」

フィットは、ＵＦＯが着地した場所の辺りまで来たが何処にもそれらしき跡が無い。

『確かに此処にＵＦＯが着地したんだね？』

「そうだよ。この目で見たんだよ。」

フィットは、確かに此処で見たのに跡が無い事に疑問に成った。

「ん？」

ディードは、誰がが来ている事に気付くとはやてとシグナムとヴィータにシャマルの姿もあった。

「あっ！エースバロン！」

ヴィータは、エースバロンを確認するとはやて達と一緒にコッチに

来た。

『はやて。どうしてこんな場所に？』

エースバロンが聞くとはやては、電波研究所の事故を調べる為に近くを調査していた。

「我々も調べたがＵＦＯらしき跡は、見つからなかったぞ。」

「ウソを言っているんじゃね・・　ギロ！　ビック！　へ・・？」

ヴィータが最後まで言おうとしたらディードが『フィット君は、ウソをついていません！』と言うで睨んだ。

「本当に見たんだよ！信じて！」

フィットの正直な瞳にエースバロンの何かが動いた。

『よっし！もっとこの辺りを調べるんだ！』

エースバロンは、他のバロンチームに命令する。

『すまないがもう一度調べてはくれないか？』

エースバロンは、はやて達に頼む。

「そうですね何か起きてからじゃ手遅れになるかもしれませんし。シグナム、シャマル、ヴィータもう一度調べよお。」

はやても何時も事件でお世話になっている火鳥達の手助けに成りた

い。

だが結局ＵＦＯの跡らしき物を見つけられなかった。

「そんな筈は、無いよ！絶対何処かに居る筈だよ！」

『フィット君、悪い宇宙人が居るなら研究所にいるか近くに居る筈だよ。でも何処にも居ない。』

「本当に・・本当に見たんだよ！」

フィットの瞳がウルウルに成りながらも此処で見た事を言う。

「・・・信じます。」

ディードは、フィットを連れてまた調べ始めた。

［異常無かったのか・・」

はやて達とエースバロンは、通信で火鳥に報告した。

『ああ、彼は、確かに見たのかもしれないけれど現場には何も。』

「そうだ、我々も調べたんだが発見出来なかった。」

「本当に強情なガキで見たって言うんだぜ。」

シグナムとヴィータも火鳥に言う。

『・・・・・』

・・・・・・本当に・・本当に見たんだよ！・・・・・・

・・・信じます。・・・・

エースバロンは、フィットの言葉を信じたディードの目が優しさやフィットを信じる気持ちに気になっていた。

『ファイバードもう一度調べてみる。』

エースバロンは、ディードとフィットの調べている方角に向かう。

「おっ！おい！」

はやて達は、急に気が変わったエースバロンを追いかけに行った。

『ん！？』

エースバロンが何かを発見した。

「これは！？」

飛行魔法でエースバロンを追いかけていたはやて達も驚いた。

それは、巨大に何かが掘った跡だった。

『さっきは、何故気付かなかったんだ！？』

エースバロンは、自分を責める。

「ひょっとして今頃！」

はやて達は、ディードとフィットの心配に成る。

電波研究所では、テシター達が武装局員や従業員達を拘束している。

カチッ！

テシター達は、研究所に爆弾をセットしている。

「お前等何をしている！」

フィットが研究所に来るとテシター達に怒鳴る。

キラッ！

テシター達がフィットを確認した。

「見た限りは、無事で帰すワケにはいかねぇな。」

後ろからシュラがいた。

ディードは、双剣を構えてフィットを守る。

バキューン！

『その子に手を出すな！』

エースバロンが空から攻撃して来た。

「たぁ！」

ドン！

「ぐあ！」

ディードは、その隙を狙ってシュラをたたき飛ばす。

「フィット君！今の内に！」

ディードは、フィットを非難させる。

『バロンチーム！フォームアップ！五体合体サンダーバロン！』

サンダーバロンに合体した。

『フィット君、ディード大丈夫か！？』

サンダーバロンは、二人の元に来る。

「大丈夫です！」

『森の中に！』

サンダーバロンが指示をする。

ゴッゴッゴッ！！

地面から円盤型のロボットが出現した。

『他の電波研究所を壊したのは貴様だな！』

「その通り。今頃気付いたか！」

クルクル！

ロボットに乗ったシュラは、ロボットを回転させながらサンダーバロンに体当たりした。

ガキン！

『ぐああ！』

ドカン！

サンダーバロンは、倒れた。

「此処で研究所が爆発するのを眺めているんだな！」

『何！？』

研究所には、爆弾が仕掛けられていてまだ人が居た。

「研究所には、まだ人が居るよ！」

「助け出しましょう！」

ディードは、フィットをテシター達から守りながら研究所に行く。

バーン！バーン！

サンダーバロンは、砲撃をしたらロボットの姿が無かった。

クルクル！

サンダーバロンの真上から回転しながらロボットが攻撃をする。

ガキン！

『ぐああ！』

ドカン！

ロボットは、倒れたサンダーバロンの前に突っ込んだ。

『ぐう！』

サンダーバロンも潰されない様に腕で抑えていた。

「飛竜一閃！」

ダン！

空からシグナムがサンダーバロンの援護をしてロボットは、引っ繰り返った。

「此処は、私達に任せて研究所を！」

『わかった！』

サンダーバロンは、はやて達に任せて研究所に向い爆弾を取り外す。

「早く！急いで！」

ディードが研究所の人々をフィットと共に誘導する。

ガチャッ！

外に出るとテシター達が待ち構えていた。

「コッチです！」

ディードが先頭に歩くと他の人達も続いて向かう。

バーン！

テシター達の背後には、サンダーバロンが両肩の砲撃で撃った。

「紫炎一閃！」

「ラーテンフォルム！」

はやて達の隙の無い攻撃でロボットは、身動きが取れない。

『はあぁぁぁ！』

ロボットの後ろに居るサンダーバロンの体が光りだした。

『サンダァァァァクラァァァァシュゥゥゥゥ！！』

サンダーバロンは、そのまま体を飛ばしながら体当たりをロボットにした。

ドカカァァァァァァァァンンン！！！

ロボットが爆発すると一つの脱出ポットが逃げて行った。

『おかし過ぎるな。』

「あいつ等は、この所妙な行動をしているな・・」

「警戒した方が良いな。」

はやて達とサンダーバロンは、ドライアス達の行動に何か企んでいると思った。

『それにしてもアノ子は、本当の事を言っていたんだな・・』

するとフィットがサンダーバロンの元に来た。

「ありがとう！お姉さんとサンダーバロンさんは信じてくれて。」

「悪かったよ・・信じなくて・・」

ヴィータは、少し反省している様子。

『フィット君。もしまたドライアスが来たらまた私達が守ってあげる。だから安心するんだ。』

「それと寂しかったら遊びに来てください。フィット君と同い年の男の子もいますから。」

「本当に来ても良い？」

「はい。だからテレビ局や警察に迷惑を掛けないでくださいね。」

ディードが笑顔で言う。

「うん！約束するよ！」

エースバロンは、ディードを乗せて天野平和科学研究所に帰って行った。

「さようなら～！」

フィットは、笑顔でエースバロン達を見送った。

第二十三話：ディードとウソ付き少年（後書き）

「月面基地がドライアスに占領された。月から隕石の雨を降らせようと言うんだ。火鳥兄ちゃんは、捕まっちゃうし他の皆は隕石の下敷きに成っちゃうし・・くそぉ！こう成ったら俺１人でも何とかするぞ俺だって宇宙警備隊員だい！　太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ　第二十四話　出た！最強合体　次回も世界平和！」

第二十四話：出た！最強合体（前書き）

お知らせ！

太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓのイメージＯＰ，ＥＰを募集します。

内容は、自由ですので３月２２日が締め切りですので気軽にメッセージボックスに入れてください。

挿絵の方も募集します。此方も３月２２日までが締め切りです。

第二十四話：出た！最強合体

近い未来人類も宇宙に進出する時が来る。

その実験が月の基地では、マスドライバーを使ってスペースシャトルを月の引力圏から飛び立つ実験とシャトルを瞬間ワープを行う実験がニュースでやっている。

「へぇ～。人間も他の星に住める様に成るんだ・・・」

天野達は、リビングでそのニュースを見ている。

「これから先宇宙旅行出来る日が来るかもしれないッス。」

ウェンディは、興奮しながらテレビを見る。

「そうなったら俺達も火鳥兄ちゃんの星に行けるかもね！」

「ファイヤーシャトルじゃあ行けないのかい？」

火鳥は、ファイヤーシャトルなら行けると勝手に思っていた。

「行けたとしてもスピードが遅すぎて時間が掛かってしまうよ。」

ジェイルが火鳥の為に説明する。

「ドクター、火鳥。いよいよ無人シャトルの発射が始まるよ！」

セインが二人に告げるとシャトルが発射し始めた。

そしてシャトルは、月の引力圏から脱出して飛び立った。

ピューン！ドカーン！

だが、月から脱出したシャトルに目掛けて何かの光線が当たり爆発した。

「一体どうしたんだ！？」

テレビを見ていた天野達も理解出来なかった。

するとシャトルが爆発した方向からドライアスジェットと戦艦が月面基地に向かい着地した。

「ハカセ、ドクター！行って来ます！」

火鳥とケンタは、ファイヤーシャトルで月面基地へと向かう。

月面基地に着地したドライアスジェットは、デスイーグル、デスドラゴン、デスタイガーに分離した。

戦艦は、着地してから入り口らしき所から沢山のテシター達が出て来て基地を占領する。

「諸君！この月面基地は、ただいまより皇帝ドライアスとＤｒ．ジャンゴとＭｒ．ビスマルクの支配下となった！」

指令室にゾルとシュラとジャンゴそしてＭｒ．ビスマルク（覆面を被ったレジアス）の手によって制圧されてしまう。

「ファイヤーシャトル、大気圏脱出しました。」

火鳥は、通信で天野とジェイルに大気圏脱出を伝える。

［火鳥くん！どうやら奴等の狙いが解ったよ！］

「っと言うと？」

ジェイルに続いて天野が通信に変わる。

［電波研究所を壊したのは、今度の事に関係しとるんじゃ。奴等の狙いは、月面基地のマスドライバーとワープ装置じゃ！］

「マスドライバーとワープ装置!?」

ケンタもその事実に驚く。

［あのマスドライバーで巨大な岩石を地球目掛けて落とされれば大変な事になる。それが４０メートル位の物でも威力は、原爆１００倍の物だよ。］

「ええ!?原爆千個分!!」

［それだけじゃない!ワープ装置を使えばミットチルダにも攻撃が出来る!だから奴等は、ミットチルダの電波研究所を次々と壊したんじゃ!］

ケンタは、ジェイルと天野の説明を聞いて身が震えた。

「ケンタ我慢していろよ!スピードを上げるぞ!」火鳥は、早く解決させる為に急いで月面基地に向かった。

戦艦型のロボットは、大きい隕石をマスドライバーに乗せている。

「ぐっはっはっ!こんなモンで良いか?」

ロボットを操縦しているゾルがシュラに通信する。

「ああ。準備は、良いな。」

シュラは、基地の人を使って隕石を地球に落とそうと準備していた。

「最初の一発目を始めるか。」

「やれ！」

ジャンゴとＭｒ．ビスマルクが基地の人に命じるが多くの命を奪う行為に指が震えて動けない。

「何やっているんだ！ふざけているのかぁ！！」

「い・・いいえ！」

ドン！ポチ！

Ｍｒ．ビスマルクは、ボタンを押すのに躊躇している基地の人の指ごと力強く叩いた。

そしてマスドライバーに乗せた隕石が動き始める。

「貴方！何て取り返しの付かない事を・・バコン！「口答えするな！！」

Ｍｒ．ビスマルクは、基地の人を固い拳で殴り飛ばす。

「「はっはっはっはっはっはっはっはっ！！」」

ジャンゴとＭｒ．ビスマルクは、隕石が地球に落ちるのを楽しみにしている。

「あっ！隕石！」

「何！？」

ファイヤーシャトルに乗っているケンタと火鳥の見える範囲で地球目掛けて通り過ぎた。

「物凄いスピードだ！今からでは、間に合わん！サンダーバロン！スーパーガーディオン！頼む！」

火鳥は、地球に居る二人に連絡をして隕石を止める様に支持した。

火鳥の連絡を聞いたサンダーバロンとスーパーガーディオンは、急いで隕石を止めに大気圏近くまで来た。

『アレか！』

二人が確認すると隕石を止めに入る。

『『ぐおおおおお！！！』』

しかし隕石は、もう大気圏の引力に入って止める事が出来ない状態だった。

『なんてパワーだ！』

『お・・落ちる！』

二人は、それでも隕石の落ちる軌道を変えて人の住まない海の真ん中に移す。

「ふっ、詰まらん！」

Ｍｒ．ビスマルクは、地球の映像で隕石が大都市に落ちない事が面白くなかった。

「見たか！コレがジャンゴ様の隕石落とし作戦じゃ！」

ジャンゴは、人質にしたテレビ局の人を使って全世界に中継させている。

「今のは、ホンの小手調べじゃ。小さな隕石一つ起こす破壊力を今度は、大都市のど真ん中に命中させてやる。ミットチルダと地球の各国首脳に告ぐ！皇帝ドライアスとワシ等に地球を分け渡す降伏宣言を出せ！」

「返事が無い場合や抵抗する場合は、遠慮無く攻撃を開始する！」

「「ぐっはっはっはっはっはっ！！！」」

ジャンゴとＭｒ．ビスマルクは、笑いながらテレビに映っていた。

火鳥とケンタは、ファイヤーシャトルを月に着地させると月面基地

に向かう。

「此処だ。」

火鳥の後ろには、ケンタもいる。

火鳥は、基地の電子ロックの扉を自分の出す電波で開けた。

「うおっ！てりゃっ！」

入り口を警備しているテシター達を倒していく。

「危ない！火鳥兄ちゃん！」

ケンタの声に気付くと奥からテシターが来た。

ケンタは、ファイヤーシャトルに乗る前に天野から対テシター光線銃をもらっていたので出した。

ビューン！ビューン！

バタン！

奥から来たテシター達は、ケンタの攻撃で倒れた。

「すまないケンタ。」

「へへっ♪それより早く基地の人達の居場所を！」

ケンタが言うと火鳥は、目に内蔵されている温度探知機で基地の人

達の場所を見つけ出す。

人質の人達は、無事だったがコントロールルームには、まだ人質のテレビ局の人達が捕まっている事を聞いた。

火鳥は、ケンタに此処で捕まっていた人達の安全な場所に避難させるのを指示すると急いでコントロールルームに行く。

「さあ！次のコースをプログラミングして貰おうか？」

ジャンゴが基地の人に次の隕石の落とす様に支持する。

「えっ！？国連と時空管理局からの返事がまだですよ！」

ガチャッ！

「おれ達は、人間が苦しむ様が見たいからな。」

シュラは、銃を構えて言い返した。

「くっ！」

基地の人は、苦情の顔のままプログラミングを始める。

「ちょっと待ったぁーーーーー！！！」

コントロールルームの入り口から声が聞こえた。

「お月さんで悪事を働くヤッツァ許せねぇ！！」

火鳥がコントロールルームに来て走り出す。

テシター達も火鳥が走り出すと攻撃し始めたが火鳥に次々と倒された。

「おっと！そこまでだファイバード！コレが目に入らねぇか？」

シュラの後ろには、コントロールルームの人達がテシター達に銃を向けられている。

「くっ！キタネェぞ！その人達を放せ！」

「こいつ等を殺されたく無ければ言う事をきくんだな。」

火鳥は、構えが解いた。

「では、まずは東京の壊滅を見ているんだな！」

Ｍｒ．ビスマルクが言うとプログラミングをしている人に銃を向けて命令した。

ポチ！

「あっ！」

「「あっはっはっはっはっはっはっはっ！！！」」

マスドライバーに置かれた隕石が動き出して地球目掛けて発射された。

火鳥は、その後シュラに連れて行かれ次の隕石の上に鎖に繋がれた。

「ぐっあああああああ！！！」

ビリビリ！！

鎖から高圧電流が流れて火鳥は、動けない状態になる。

「ぐっはっはっ！今までの分をまとめて返してやれ！」

「ふっはっはっはっはっはっはっはっはっ！！」

基地の中で見ているジャンゴとビスマルクは、火鳥が苦しむ姿を見て楽しむ。

「どうしたファイバード？仲間から連絡も無い様だな。」

高圧電流を止めてシュラは、火鳥に話す。

「さあ、どうする?泣いて命乞いでもするかぁ!?」

「例えこの身が滅びようとも貴様等の野望を必ず止めてみせる!」

「そうか・・」

ビリビリビリ!!

「ぐあああああ!!!」

シュラは、ロボットに乗っているゾルに合図すると電流が流れ始めた。

(スーパーガーディオン・・サンダーバロン・・・隕石の第二が東京目掛けて来る・・・止めてくれ・・)

火鳥は、懸命に隕石の下敷きに成っている二人に連絡をする。

スーパーガーディオンとサンダーバロンを下敷きにした隕石は、海底の深い場所にある。

ピィィィィンンンンン！！

ガキン！

隕石が光出すと燁が入り其処からスーパーガーディオンとサンダーバロンが無事に出てきた。

『ファイバード！』

『何！？隕石の第二が！』

『行くぞ！』

『おう！』

二人は、急いで海から出ると巨大なライディングボートに乗ったウエンデイ、トーレ、ノーヴェ、セッテ、チンク、オットー、ディード、ディエチと大気圏の近くで遭遇する。

「ドクターとハカセの指示で来たッスよ！」

『ああ！頼むぞ！』

サンダーバロン達は、隕石の来るコースまで素早く来た。

『いいか?今度は、大気圏に入る前に粉々にするんだ!』

『わかってるって!』

「わかった!」

「任せろ!」

ナンバーズも自分達の武装を取り出す。

ディエチは、新しくイノメースカノンマーク2をドクターからもらっていた。

『アレだ!』

『よぉし!行くぜ!』

隕石が来るとサンダーバロンとスーパーガーディオンとナンバースは、攻撃を開始する。

「IS発動!ライドインパルス!」

「IS発動!ランブルデトネイター!」

「Is発動!スローターアームズ!」

「IS発動!レイストーム!」

「IS発動!ブレイクライナー!」

「ＩＳ発動！ベヴィバレル！」

「Ｉｓ発動！エリアルレイヴ！」

「ＩＳ発動！ツインブレイズ！」

『うおおおお！！！』

『はあああああ！！！』

サンダーバロンとスーパーガーディオンは、一斉射撃を隕石に発射した。

バッバッバッバッバッバッバッバッ！！

ドカァァァァァァァァァンンンンンンン！！！

隕石は、見事に粉砕した。

『やったな！』

『このまま月に向かうぞ！』

「解ったッス！」

サンダーバロン達は、月に急いで向かう。

「くっそ！宇宙警備隊の奴等め！」

「攻撃出来ない様にファイバードごと隕石を落としてやる！」

コントロールルームでジャンゴとビスマルクが言っていると入り口近くでは、ケンタが隙のあるチャンスを伺っていた。

（俺が此処で頑張らなきゃ皆やられちゃうんだ！）

ケンタは、決心を決めた。

「其処までだ！」

「「何！？」」

ビューン！ビューン！

ジャンゴとビスマルクが振り向くとケンタが対テシター光線銃を撃つとテシター達は、次々と倒れた。

「小僧！」

「貴様のいたのか！」

ジャンゴとビスマルクは、ケンタも居る事に驚く。

「俺だって宇宙警備隊員だい！」

ケンタは、対テシター光線銃を持って構える。

「ふん！知っているぞ！」

「その銃が人間には、効かない事はな！」

ジャンゴとビスマルクは、銃をケンタに構えた。

「くっ！」

ビューン！ビューン！

「ぐっはっはっはっ！」

「小僧！思い知らせてやる！」

ケンタも窮地に追い込まれた。

「「グ八八八ハッハ・・・ゴキン！キィン！　ザ・・ジ・・ズ・・ゼ・・ゾ・・　バタン！　」」

ジャンゴとビスマルクの頭に大きいベンチで強く殴られて気絶した。

「さっきのお返しだ！！」

プログラミングをしていた人が隙を見て二人の頭にベンチで殴った。

「ありがとう！それよりも火鳥兄ちゃんを！」

「ああ！そうだった！」

ケンタと基地の人は、急いでマスドライバーのコントロールプログラミングを解除を始める。

『ファイバード！岩の中にしっかり埋め込んでやるぜ！』

ゾルは、別の隕石をロボットで持ち上げて鎖で隕石に縛られている火鳥に叩き付け様とする。

ガキッ！

マスドライバーの固定プログラムが解除された事によって鎖が外れた。

「ファイヤァァァァァ・・・シャトルゥゥゥゥ！！」

火鳥の呼びかけにファイヤーシャトルは、先端のコクピットが脚部に成りウィング辺りが両肩腕に変形して大きいウィングの左辺りに窪みのあるロボットになった。

「とうぁ！」

火鳥は、火の鳥に成って大きいウィングの左辺りの窪みに入る。

『チェェェンジィィィ！！グランバード！』

火鳥は、グランバードに成った。

『ブレスタージェット！』

グランバードは、手を翳すとブレスタージェットが現れる。

ブレスタージェットは、グランバードの正面に装着する。

『フォームアップ！ジェット合体グランバード！！』

ジェット合体グランバードに合体した。

『ドライアス！これ以上の狼藉！このグランバードが許さん！』

「何を！返り討ちにしてくれるわ！」

ゾルが言い終わるとシュラもロボットのコクピットに入る。

ドシン！

『ぐあ！』

ロボットは、グランバードに突進してグランバードが岩にたたき付けられた。

『凄いパワーだ！』

ロボットは、グランバードの方に向きを直すとミサイルを連続発射した。

バッバッバッバッバッバッバッバッ！！

『ぐっ！』

グランバードは、身を固めてガードする。

『止めだ！』

ゾルは、グランバードに砲撃を撃つ姿勢に変えた。

「グランバード！ＩＳ発動ライドインパルス！」

ガシィン！！

『ぐあっ！』

トーレは、瞬時に高速攻撃を使いロボットを後進させた。

『大丈夫かグランバード！？』

『ああ！』

すると他のサンダーバロン達もやって来て安心する。

『さあ！何処からでも掛かって来やがれ！』

形成逆転でグランバード達の有利に成った。

『くっ！ドライアス様ぁ！！』

『見てはおれぬは！』

デスタイガーとデスイーグルとデスドラゴンが現れる。

デスタイガーが右半分の体に成り、デスドラゴンが左半分の体に成りそしてデスイーグルが胸部と頭部に変形して合体した。

『三獣合体！ドライアス！！』

ドライアスが合体してグランバード達の前に立つ。

『墓場まで良く来たな！手厚く葬ってくれる！』

『言わせておけば！』

「行くぞ！」

『おう！』

『よせ！スーパーガーディオン！ノーヴェ！』

ノーヴェとスーパーガーディオンは、グランバードが止めるがドライアスに向かって飛び掛る。

「『うおぉぉぉぉぉぉ！！』」

ガキィン！

二人は、攻撃するがドライアスも右手でガードした。

『何の！』

ドカン！

「『ぐううう！！』」

ドライアスは、そのまま二人を振り払う。

ヒュッ！

二人が倒れたのと同時にグランバード達もドライアスに襲い掛かる。

パキィン！ドン！

しかし、ドライアスは、全く隙が無い。

『こ・・この・・　ドン！　ぐあああぁぁ！！』

サンダーバロンが立ち上がろうとすると戦艦のロボットが突進した。

「サンダーバロンを離すッスゥゥゥゥゥ！！！！」

「今助ける！！」

ウェンディとチンクがサンダーバロンの救助に向かうが

ガシャ！

『チンク！ウェンディ！』

スーパーガーディオンが二人を抱えて回避する。

『お前等の相手は、コッチだ！』

シュラ側のコクピットから攻撃が始まった。

『ホラーハーケン！！』

ギン！

ドライアスの肩のドラゴンと虎の首がファイバード達を襲った。

ドン！

グランバードは、倒れる。

『ぐっはっはっはっはっ！どうしたグランバード！』

『くそっ！負けるものか！』

グランバードは、立ち上がる。

『グランキャノン！』

両腿辺りの部分が開くとグランキャノンを出した。

『デスブレード！！』

ドライアスは、左手から盾を出し盾かた巨大な剣を出した。

ヴィィィィィィィ！！！！

グランバードの中央の宝石に素粒子が吸収されていく。

ピッピッピッピッピッ！

グランキャノンのバレルにドライアスを照準する。

キラッ！

グランバードの目が光った。

ピュゥウウウウウウウ！！！

グランキャノンを放射してドライアスもデスシールドでガードした。

ドカアァァァンンンン！！！

爆発した。

『やったか？』

グランバードは、ドライアスを倒したのか疑問だ。

『ぐ・・ぐっはっはっはっはっはっ！！』

『何！』

グランキャノンを受けて無傷のドライアスを見て驚く。

『どうした？その程度か！』

ピューン！

ヒュッ！

『ぐあっ！』

グランバードは、ドライアスの砲撃を回避した。

『逃がすか！』

ヒュッ！

ドライアスは、グランバードを追いかける。

ピューン！

『ぐっ！』

パキューン！！

グランバードは、ドライアスの攻撃を避けてグランキャノンで反撃する。

ドォーン！

『ぐあああ！！』

グランバードは、ドライアスの攻撃で怯んだ。

『覚悟ォォォォォォ！！！』

ドライアスがグランバードの真上でデスブレードを振り掛かる。

『くっ！』

ヒュッ！

グランバードは、ドライアスの攻撃をギリギリでかわす。

『はぁぁ！』

『うっ！』

ガキィン！

グランバードは、グランキャノンでデスブレードからガードする。

キィィィィィィィンンンン！！！

デスブレードから超音波が発生した。

『ぐあああ！！』

グランバードは、超音波に耐え続ける。

『やるな！だが此処までだぁぁ！！』

キィィィィンンンン！！

ガキィン！

『くっ！』

ドライアスがグランキャノンをデスブレードで使って遠くに飛ばした。

『今度こそ貴様の最後だァァァァ！』

ドライアスに追い込まれたグランバードは、絶対絶命のピンチに成った。

ドピューン

『ぐおおお！！』

『！？』

行き成りグランバードの後ろから砲撃が現れてドライアスに直撃した。

『ん？ファイヤージェット！？』

グランバードの危機をファイヤージェットが救った。

［どうやら間に合ったようじゃな！］

［ファイヤージェットには、エネルギーがフルチャージしているよ。］

天野達がグランバードに連絡した。

『そうか！ファイバードとグランバード！二つの力を一つにすれば！』

［へっ！？］

［それは、どう言うことだい？］

天野達は、グランバードの言っている意味が解らない。

ピカァァァァァァ！！

グランバードから光が出てファイヤージェットに注がれた。

『これは！？』

ドライアスも理解出来なかった。

『見るがいい！正義の力を！』

グランバードは、合体を解除して本体の火鳥が出て来た。

「ファイヤー・・・ジェエエット！！」

火鳥が叫ぶとファイヤージェットは、ファイバード形態に変形する。

グランバードもこのまま上半身と下半身がそれぞれ脚部と上半身のパーツに変形する。

火鳥がファイバードに成ると変形したグランバードを支える柱の様なパーツに変わり脚部と上半身のパーツを装着する。

『フォームアップ！サイキョオオオガッタイィィィ！グレートファイバァァアドォォォッツ！！』

最強合体グレートファイバードに合体した。

「ファイバードとグランバードが合体しちゃった！？」

月面基地の中でケンタが更に合体した事に驚く。

「ハカセ！」

「またしても設計外な事が！」

「凄いです！」

天野平和科学研究所で見ていた天野、ジェイル、シャーリーも驚いている。

グレートファイバードは、ドライアスと同じ大きさだ。

『ドライアス。人々の夢を奪い。地球の平和を破らんとする悪の野望・・・このグレートファイバードが許さん！』

グレートファイバードは、ドライアスの目の前に立って言う。

『グレートファイバードだと！？』

別の所でナンバーズとスーパーガーディオンとサンダーバロンと戦っているゾルとシュラも驚く。

『アレが・・！』

『グレードファイバートか！』

「我々も負けていられないな！」

他のメンバーも気を引き締めてロボットと交戦を開始した。

『何がグレートファイバードだ！叩き切ってくれる！』

グレートファイバードは、後ろからフレイムソードを取り出し通常のより大きく変化した。。

『フレイムソード！！』

グレートファイバードは、大きくなったフレイムソードを持って構える。

『うおおおお！！』

ドライアスは、そのままグレートファイバードに攻撃を開始する。

キィン！

ドライアスとグレートファイバードは、お互いの剣を交じらせて鍔迫り合いになる。

『ぐっはっはっはっはっ！！』

ドライアスは、何時もの強気でいた。

『うおおぉぉぉ・・・せりゃ！！』

キィン！

グレートファイバードは、ドライアスを押し返す。

グレートファイバードも額が光出した。

『フレイムソード・チャージアップ！！』

剣の刃に不死鳥の様な炎を纏ドライアス目掛けて構えた。

『ドライアス様！』

ドン！

ゾルとシュラは、サンダーバロン達を振り払うとドライアスの元に向かう。

そしてドライアスの盾になる。

『とわぁ！えええいいいい！！！』

シュパ！！

『ドライアス様！』

『此処は、一先ず退却を！』

『ええい！』

ドライアスも悔しい表情で回避した。

ドオオオオンンン！！

ロボットは、グレートファイバードの必殺技で爆発して二つの脱出ポットが逃げて行った。

『グレートファイバード！今日は、貴様に花を持たせてやる！』

ドライアスは、ドライアスジェットに変形して逃げた。

「やった！やったぁぁ！」

月面基地でグレートファイバードの勝利を喜ぶケンタ達。

キョロキョロ！

Ｍｒ．ビスマルクとジャンゴは、気付くと残っているのが自分達だ

けだと解って自分達の脱出ポットで逃げた。

ケンタが基地の外でグレートファイバード達の所に行く。

「ミラクルスゴイよ！これで地球に平和が戻って来るね！」

『いや、この世にドライアスが居る限り本当の平和は、訪れない。』

「うん！グレートファイバード達なら出来るよね？」

『ああ！必ず！』

『その通りだ！』

『平和を守る！』

「そうッス！」

「頑張ろ！」

グレートファイバード達のこれが影響で士気が高まった。

第二十四話：出た！最強合体（後書き）

「綺麗な人だね？じいちゃんの嫁さん！？って３０年前に死んだお祖母ちゃん！？どうしてお祖母ちゃんが夢でドライアスに従えなんてお告げをするのさ！火鳥兄ちゃんとヴィヴィオは、死んだお祖母ちゃんとスバル姉ちゃんとギンガ姉ちゃんのお母さんの幽霊に会ったの！？　太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ　第二十五話　過去からのメッセージ　次回も世界平和！」

第二十五話：過去からのメッセージ（前書き）

ゲンヤとクイントの出会いを個人的に考えました。

第二十五話：過去からのメッセージ

「ん・・？此処は、何処だ？」

目を覚ますと其処は、星空が見れる草原の中にゲンヤがいた。

ドス・・

「ん？」

ゲンヤが下で何かが当たる感触を確認の為見ると天野が寝ている。

「天野さん！天野さん起きてください！」

クラクラ！

「ん・・おはようゲンヤさん。」

ゲンヤは、今に寝ている天野を揺すりながら起こした。

「おはようじゃ無いですよ！周りを見てください！」

天野は、ゲンヤに言われて周りを見ると驚く。

「何じゃ？ってあれ？ゲンヤさん？ゲンヤさん！？」

いつの間にかゲンヤの姿が無くなっていた。

「あれ？天野さん！天野さん！！」

ゲンヤもいつの間にか天野が消えた事に驚く。

【・・・さん。ゲンヤさん。】

ゲンヤは、何か懐かしい声だと思い振り返った。

「！？お前は！？」

【くん・・博君。】

天野の後ろから人の声がして振り向いた。

振り向くと綺麗な女性だった。

「ゆ・・百合ちゃん？」

天野は、もう亡くなった妻の百合が居る事に戸惑う。

【３０年ぶりね・・・】

「勝手に一人で死んじゃうなんて酷いぞ！ワシは、ずっと寂しい思いをしておったんじゃよ！」

天野は、百合に嬉しくて走り出す。

スッ！

「おっとっとっと！」

天野が抱きつこうとすると百合の体が透けた。

【博君・・あなた宇宙皇帝ドライアス様に刃向かっているんですってね？】

「何処に行くんじゃ！？ワシを一人にしないでくれ！」

天野は、別の向こうに行く百合を追いかけた。

【ドライアス様は、地球の主と成るべき方・・・宇宙警備隊と手を組むのは止めてちょうだい・・・】

「ん？」

天野は、百合の手を見ると疑問に成る。

「百合ちゃん！ワシのやった結婚指輪は、どうしたんじゃい！？」

【一日も早くドライアス様に降伏するの・・約束よ・・・】

「百合ちゃん！百合ちゃぁぁぁぁんんんん！！！！」

【ゲンヤさん。】

「俺の死んだ女房のクイント！？何で居るんだ！？」

ゲンヤは、数年前に死んだクイントが現れた事に驚く。

【ゲンヤさん。何でレジアス中将に逆らうの？レジアス中将に従えばもっと良い暮らしが出来るのに・・・「クイントじゃねぇな！」・・・えっ！？何言っているの？】

ゲンヤの予想も出来ない言葉にクイントが戸惑う。

【何言っている「黙れぇ！！」ビクッ！「いいか！！良く聞けクイントはな！そんな言葉を使わないし熱血感あふれる女なんだ！てめ

ぇは、偽者だ！悪霊め！！」

ゲンヤが言い終わるとクイントは、消えて辺りが真っ白に変わる。

「百合ちゃぁぁぁぁぁんん！！　ドス

天野は、寝ていたハンモックから落っこちた。

「何の音だ？」

リビングで火鳥達と掃除していたケンタが大きな音がした方を見る。

「悪魔メェェェェェ！！　ドタン！

ゲンヤの寝室からゲンヤの声と何かにぶつかる音が聞こえた。

すると天野がリビングにやって来た。

キョロキョロ！

周りを見ると棚の中を調べ始める。

「おはようございます。」

「どうしたの？おじいちゃん。」

火鳥達が何かに探す天野に注目する。

「そこの棚の物ならゴミ焼きしていますけど？」

掃除を手伝いに来たスバルが言う。

「ゴミ焼きぃ！？」

天野の顔が真っ青に変わる。

天野がゴミ焼きした場所に向かう。

「天野さん！何だか知らないですけど！手伝います！」

起きてリビングに来たゲンヤが天野と一緒に行く。

「「アッチ！アッチ！」」

「おじいちゃん！」「「お父さん！」」

ゲンヤと天野がゴミ焼きしている場所で熱いのにも関わらず何かを探している。

其処へ火鳥達も来た。

「何をしているの！？火傷しちゃうよ！」

ケンタが心配している。

「火傷が何じゃい！」

「そうだぞ坊主！」

ゲンヤも天野の手伝いをしている。

「ん！」

ゲンヤは、探していると蒼い宝石箱を見つけた。

「あった！アッチ！アッチ！」

天野が手を出すと宝石箱の表面が火で熱くなっている。

「フッーー！フッーーーー！！」

天野は、口で暑くなった宝石箱を冷やす。

「なぁに？それ？」

ハルカが研究以外で一生懸命になるその宝石箱を聞く。
天野は、宝石箱を開けるとハートの形をした指輪だった。
「宝石が取れてますよ?」
チンクが見ると指輪の宝石が取れている。
天野は、その指輪を持ってリビングに戻る。
「何か書いてあるよ。」
「本当ッスね。」
ケンタとウェンディが指輪の裏を見ると何かが書かれていた。
「ちょっと見せて。」
ハルカが指輪の裏を見る。
「ＦＲＯＭ　ＨＩＲＯＳＩ　ＴＯ　ＹＵＲＩ・・百合って確か・・」

ハルカは、天野を見る。

「そうワシのカミさん。それは、ケンタとハルカのおばあちゃんに送った結婚指輪じゃ。」

「ハカセのカミさんですか・・」

「百合ちゃんは、これが捨てられそうなのを教えてくれたんじゃな・・・」

「「「「百合ちゃん？」」」」

天野が奥さんをそう呼ぶのにケンタ、ハルカ、ノーヴェ、ウェンディが驚く。

「はってな？他にも何かを言っていた気がしたんじゃが・・・」

ポチ

天野が考えているとヴィヴィオとチャンプが手を滑らしてテレビの電源が着いた。

「昨夜、人々の亡くなった肉親や友人が現れてドライアスに従えと言う世界規模の現象が起こりました。」

火鳥達は、そのニュースに釘付けになる。

「「あっ！思い出した！」」

ゲンヤと天野が同時に喋る。

テレビでは、死後の世界が既にドライアスの支配下になったと言う専門家もいた。

「嘘じゃーー!!百合ちゃんがそんな事をいうかぁーーーー!!」

「そうだ!クイントがそんな事を言うもんかぁーーーー!!」

ゲンヤと天野は、テレビに殴りかかろうとしたが

「ハカセ!落ち着いて下さい!」

「落ち着いて!」

「そうです!」

天野の周りには、ケンタとハルカやジェイル、ナンバーズが抑える。

「落ち着いてお父さん!」

「はい!深呼吸!」

スバルとギンガがゲンヤを止めに入った。

「ハカセとゲンヤさんのカミさんってどんな人だったんです?」

火鳥が二人の奥さん達を聞く。

「そう言えば、じいちゃんとゲンヤさんの奥さんの事は、何も知ら

ないや。」

「私とケンタが生まれるずっと前に亡くなったのよね。」

「そうね、私とスバルが小さい頃に死んだのよ。」

ケンタ、ハルカは、お祖母さんのことを知らなかったがスバルとギンガも小さい頃に亡くなっている。

天野は、白衣のポケットから一枚の写真を取り出しケンタ達に見せる。

「コレがおばあちゃん!?」

「すっごいキレイな人。」

「美人ッス!」

ケンタ達は、百合の写真を見て喜ぶ。

「百合ちゃんと出会ったのは・・・・・

天野と百合が出会ったのは、大学の時になる。

天野は、世間に理解されない天才科学者だった天野をただ一人理解してくれたのは百合だけだった。

百合は、美人で頭も良くそして誰よりも優しい心の持ち主だった。

そして天野と百合は、結婚した。

結婚後、天野は大学で研究に没頭し百合もボランティアで医者として人々の為に働いた。

しかし、幸せは長く続かなかった。

百合は、買い物に出ていると横断歩道を渡っているお婆さんが居るにも関わらずトラックが突っ込んで来た。

百合は、そのお婆さんを庇ってトラックに引かれて亡くなった。

その時に天野があげた結婚指輪の宝石が事故のせいで砕けて粉々になった。

「ハカセ・・・」

「美しくも・・・悲しいお話ですね・・・」

火鳥とジェイルが天野からそんな悲しい過去があった事を知って天野を可哀想だと思う。

「そう・・あれは、悲劇じゃった・・・「天野さん解るぜ！」

ゲンヤは、号泣で天野を見る。

「俺の女房・・・クイントを無くした悲しみ同じで解るぜ！」

「ゲンヤさんのカミさんは？」

火鳥が聞いた。

ゲンヤは、首に掛けているネックレスについている写真付きのペンダントを見せる。

「俺とクイントが出会ったのは・・・・

ゲンヤとクイントが出会ったのは、お互いが管理局に居た頃だった。
ゲンヤは、魔力も無い平凡の男で出世も約束されない地位だった。
そんな時・・新人の局員がゲンヤの所属していた部隊にやって来た。
それがクイントだった。

「ゲンヤさん！どうしてあんな奴等に馬鹿にされて黙っているんですか！」

「クイント・・・俺は、何の才能も無い男なんだ・・・」

クイントがため息を吐いて部屋から出て行った。
だが！

「リボルバァァァァシュウウウウトオオオオオオオ！！！」

ドカーン！
ゲンヤの居た部屋が扉ごとゲンヤとその部屋を巻き込んだ。
ズシン！ズシン！
クイントは、まるで恐竜が歩くようにゲンヤに近寄る。
ガシッ！

「アンタ男でしょ！？そんな事を言わない！これから頑張るの！良

い？」

「（は・・はいを・・言わないと俺が・・・殺される・・・・）は・・・はい・・・解りました。」

ゲンヤは、胸倉を掴まれてクイントに従った・・・いや、従わないと殺されると確信した。

「「・・・・・・・・・」」

スバルとギンガは、父：ゲンヤからそんな出会いがあった事に青ざめてゾッとする。

今まで悲しみに包まれていた空気が一瞬で恐怖に変わった。

そんな事も関わらずゲンヤは、話続ける。

そしてゲンヤは、クイントのフォローもあって部隊の部隊長に昇進できた。

その後二人は、結婚してクイントも救助部隊に配属された。

そんなある日自宅で休暇を取っているとクイントが二人の子供を連れて帰って来た。

それがスバルとギンガだった。

二人には、子宝に恵まれない状況だったのでゲンヤもクイントも子供が欲しかった。

結果スバルとギンガを自分達の子供として養子になった。

だが、クイントは、任務の最中に殉職してしまった。

ケンタ達は、恐怖から悲しみに変わる。

「俺は、クイントが残した形見であるスバルとギンガが結婚するまでしっかりと育てようとその日から誓ったんだ！」

「ゲンヤさん！」

天野は、ゲンヤの手を握った。

「何かを失った事で変わる気持ち解るぞ！」

天野は、ゲンヤの話を聞いてテンションが上がる。

「ワシも百合ちゃんを失った事で実験室を出て百合ちゃんの為！人々の平和の為に立ち上がったんじゃ！」

天野が何故今まで世界平和に拘るのか理由が解った。

「ふ～ん・・・そんな事情があったのか。」

「おじいちゃん・・・本当にお祖母ちゃんを愛していたのね・・」

「お父さんも心からお母さんを愛していたんだね。」

ケンタやハルカ、スバルが二人が自分の奥さんを大事に思っていると感じた。

「だからこそ！ワシには、信じられん！あの百合ちゃんがワシにドライアスに降伏する様に言うのが・・・」

「俺もクイントがそんな事を言うのは、信じられねぇ！」

「ハカセ、ゲンヤさん。では、直接本人達に聞いて見ては？」

ジェイルの言葉に、天野も頷く。

その後天野、ゲンヤ、火鳥、シャーリー、ジェイル、ウーノ、クアットロは、何がを作り始める。

「出来た～～～！！」

天野が出来た事を言うとケンタ達が近寄る。

「何コレ！？」

「ドクター、何を作ったのか解らないんだけど・・・？」

ケンタとノーヴェは、十字架などの呪い道具の付いたロボットを見て驚く。

「名付けてイタコメカ！」

天野が発明品の名前を言う。

「イタコと言うと死んだ者を呼び寄せる女性の事ですか？」

チンクが聞く。

「そう！これで百合ちゃんとクイントさんを呼び出して確かめるんじゃ！」

天野は、ジェイル、シャーリーと一緒にイタコメカを操縦している。

カチャ！

シュルルルルル・・・・・

周りが暗くなる。

「やだ！何よこれ！？」

ハルカが火鳥の後ろに隠れる。

「ん？ノーヴェ姉ちゃん？」

ケンタの後ろには、ノーヴェが後ろで小さく丸くなる。

「い・・いいだろ！べ、べ、べ、別に！」

実は、ノーヴェかなりの怖がりである。

「こうして雰囲気を盛り上げれば、向こうも出て来やすいと思ってね。」

ジェイルが説明する。

モクモク・・・

イタコメカから煙が出て来た。

「百合ちゃん！」

「クイント！」

天野とゲンヤは、二人が出て来るのを期待する。

しかし

ボァァァァッ！

イタコメカは、結局煙しか出さなかった。

「何だ・・」

「失敗したみたいッスね・・・」

ケンタとウェンディが諦めると他のメンバーも諦める。

その夜

警察庁独身寮では

「ぐお～～～！」

寮の部屋で佐津田刑事が鼾をかきながら寝ている。

【佐津田さん。】

「ん？」

佐津田刑事が振り向くと２０代前半の若い外人の男が立っていた。

「ティーダ・・・ティーダなのか！？」

それは、佐津田刑事が昔ミットチルダで研修の為訪れた時にコンビを組んで死んだティアナの兄だった。

「何でお前が居るんだ！？」

佐津田刑事は、死んだはずのティーダが現れて驚いた。

【佐津田さん。ドライアス様に従ってください。そうすればもっと世界が平和に成りますよ。】

「しかし・・・ティーダぁぁぁ・・」

佐津田刑事は、迷いながら起きるまでその悪夢を見る事に成った。

八神家：はやての部屋

【はやて・・・はやて。】

「ん？」

はやてが目を開けると１０年前に死んだダイノガイストが現れた。

「ダイノガイスト！？」

【はやてよ・・何故ドライアスに逆らう・・ドライアスに従えば良い世の中に成るんだぞ？】

「え・・？そ・・それは・・・『惑わされるなはやて！』え！？」

はやては、後ろを見ると別のダイノガイストが居た。

「ええっーーー！？ダイノガイストがふ・ふ・二人ィ！？」

はやては、なにが何だか解らなくなった。

『はやてから立ち去れ！はぁぁぁ！！』

ピカァァァ！！

後ろのダイノガイストが光りだすと

【ぐあああ・・・・】

前に居るダイノガイストが消える。

「ダ・・ダイノガイスト・・・なん？」

『はやてよ・・お前は、このダイノガイスト様の一番の宝だ。自分の信じる事は、最後まで信じるんだ。良いな・・・』

ダイノガイストの体が消え始めた。

「待って！待ってぇぇぇーーー！！ダイノガイストォォォォォ！！」

はやては、ダイノガイストに呼びかけるが周囲が真っ白に変わり始めた。

「ダイノガイストォォォォ！！」

はやては、体から大量の寝汗をかきながら起きた。

「ハァッ！ハァッ！な・・なんや？今のは・・・ゆ・・夢？」

はやては、今まで見ていた夢を確実に覚えているのに戸惑う。

高いタワーの屋上でシュラ、ジャンゴ、レジアスが変な装置を動かしていた。

「計画は、順調だ！」

「人間の記憶を司る脳を中枢に働きかけて亡くなった肉親や友人の夢を見せて我々への忠誠を吹き込む。名付けて夢枕マシーン。」

ジャンゴがその装置の名前を言う。

「後一週間もすれば地球人は、我々に従う。」

レジアスは、不適に笑う。

「よくこんな馬鹿馬鹿しい作戦を思い付くな・・」

「何だと！？」

「貴様にこの作戦の偉大さが解らんのか！？」

ドン！

ジャンゴとレジアスが装置に文句を言うシュラに言うとジャンゴの手のせいで装置が二人に向いた。

【こら！ジャンゴ！】

「ひっ！母ちゃん！」

ジャンゴが振り向くとジャンゴと同じ片方に眼鏡を付けた老婆が居た。

【アナタ！】

「お！お前！」

レジアスも振り向くと自分の秘書でもあり娘でもあるオーリスそっくりのレジアスの女房が居た。

「母ちゃん！おれ悪い事何て・・」

「お前、すまない！後でお墓を掃除して綺麗な花をあげるから許してくれぇぇ！！」

どうやらジャンゴは、母親にレジアスも奥さんが怖い様らしい。

「「ん？」」

二人は、我にかえると幻と気付いた。

カチャカチャ

「異常無いな…おかしいな？」

火鳥は、昼間のイタコメカの修理をして壊れている所が見当たらなかった。

「ふぁあ・・・」

火鳥の近くに居るヴィヴィオとチャンプが眠たそうだった。

「ヴィヴィオ、チャンプ眠いかい？」

「うん…」

「キッキッ・・・」

ヴィヴィオとチャンプは、頷く。

「遅いし、そろそろ寝よう。」

火鳥がヴィヴィオを抱き抱えようとすると辺りが暗くなる。

モクモク

イタコメカから煙が出るが何時もと違う雰囲気。

「火鳥パパ・・・おんなのひとがふたりいるよ・・・」

「ん？」

火鳥は、ヴィヴィオの見ている方を見ると天野とゲンヤの妻の百合とクイントが出て来た。

【はじめまして天野の家内の百合と申します。】

【私は、クイント・ナカジマと申します。】

二人は、礼儀正しく火鳥に挨拶をした。

「はじめまして火鳥勇太郎と申します。」

「ヴィヴィオだよ。」

火鳥が正座をしているとヴィヴィオも正座した。

【何時も主人がお世話に成っています。】

「いえいえ！此方こそお世話に成っています。」

【ウチの主人と娘達がお世話に成っています。】

「いえいえ！ご主人と娘達には、お世話に成りぱなしです。」

火鳥は、礼儀正しく返事を返す。

「ヴィヴィオもね、スバルさんとギンガさんにあそんでもらっています。」

【まぁそうなの？】

クイントがヴィヴィオに微笑み返す。

「あの、お顔の方が優れないようですが？」

【お恥ずかしい。幽霊なものですから。】

「それは、ご苦労様です。」

火鳥は、幽霊の事を詳しく知らない。

「何か御用でしょうか？」

【私たち主人達にドライアスに従えなど決して言っていません。】

【ですが・・・おかしな波に邪魔されて主人の夢に出る事が出来ないのです。】

「おかしな波？」

火鳥は、百合からその言葉を聞いて目の色を変えた。

【火鳥さん。どうか主人にお伝えください。これからも人々の為に

平和の為に頑張って欲しいと。】

【そしてゲンヤさんとスバルとギンガに体の方には気を付けてと伝えてください。】

「はい！解りました。」

「ヴィヴォオもスバルさんとギンガさんとゲンヤさんにいうよ。」

【【お願いします。】】

二人は、消えて行った。

翌日、火鳥は、天野に昨日の夜あった事を伝えた。

「脳味噌の中には、記憶を司る部分があります。睡眠中に特殊な波長か電波を出せば人の夢を操る事が出来ます。」

ジェイルが人間の脳味噌の一部を教える。

「夢をコントロール？」

「それで百合ちゃんやクイントさんは、電波の干渉が無い火鳥に会いに来たんじゃろ。」

天野は、大体の事を把握する。

「これは、ドライアスの仕業ですね。」

「うむ。」

『こちらガードウィング。ファイバード聞いているか？』

ガードウィングからの通信が入った。

［こちら火鳥。どうした？］

火鳥が通信に出る。

『空を散歩してたら海鳴タワーから妙な電波をキャッチしたんだ。』

［妙な電波？］

［それじゃ！ドライアスのメカが出している電波じゃろ！］

『ドライアスのメカだと！？』

［我々が来るまで監視を頼む。］

『そう言うな。そうと成ったら黙っているか。』

ガードウィングは、そのまま海鳴タワーに向かう。

「何だあの飛行機は？」

レジアスがそらから飛行機を発見する。

「あれは！宇宙警備隊！」

シュラが確認するとガードウィングだった。

『バトルアップ！チェンジ・ガードウィング！』

ガードウィングは、ロボットに変形した。

『テメェー等の企み。このガードウィングが打っ潰してやる！』

「何を生意気な！」

レジアスが睨む。

「返り討ちじゃ！」

ジャンゴが言うと空の向こうから何かが近づいて来る。

「ん！？」

ガードウィングが振り返ると闇魔大王の形をしたロボットだった。

闇魔大王のロボットは、口を開けるとシュラをそのままコクピットの乗せる。

『くたばれ！宇宙警備隊！』

闇魔大王のロボットは、剣の様に長い尺でガードウィングに攻撃を開始する。

海鳴タワーの駐車場辺りでは、他のガードチームも来た。

三人は、空を見るとガードウィングがドライアスのメカと交戦している。

『いかん！あのままでは、やられる！』

『アノ馬鹿！オレ達が来るまで待ってれば良いのに！』

他のガードチームは、ガードウィングを心配していた。

ドシン！

『ぐあああ！！』

ガードウィングは、ロボットの攻撃に辺り真下に物凄い勢いで落ちてきた。

『バトルアップ！チェンジ・ガードスター！』

『バトルアップ！チェンジ・ガードレスキュー！』

『バトルアップ！チェンジ・ガードファイヤー！』

三人もロボットに変形した。

『スターブラスター！』

『ジェットミズチャージャー！！』

ガードスターとガードファイヤーは、ガードウィングを助ける為に敵の注意を此方に向けている。

『セーフティーバリアー！』

ガードレスキューは、片手から光のネットを出してガードウィングを助け出す。

『大丈夫かガードウィング！？』

『ああ！こんなのでやられてたまるか！』

ガードウィングは、何時もの調子だった。

『ガードチーム！フォームアップ！』

ガードスターが胸の辺りに変形しガードファイヤーが胸を収める部

分と両腕、両腿に変形しガードレスキューが両足に変形して装着した。

ガードウィングは、叫ぶと足のパーツと胴の部分に変形してガーディオンに装着し更に頭の部分も変形した。

『四体合体！スーパーガーディオン！』

ガードチームは、スーパーガーディオンに合体した。

『さあ掛かって来い！これからが本番だ！』

スーパーガーディオンは、自信満々だった。

「おのれ！計画の進行を早めてくれる！」

タワーで見ていたジャンゴが装置を操作する。

キィィィィィィ！！！

ジャンゴが装置を強めた事により周囲の人間達は、苦しみ始めた。

「ど・・・どうなっているの？」

天野の運転に乗ったケンタが驚いた。

「ジャンゴめ！装置を強くしたな！」

火鳥は、ロボットなので電波の干渉が無いので効かなくケンタのヘルメットには電波を遮断する装置が存在する。

天野とゲンヤも同じ様なヘルメットを装着していた。

「天野さん！」

「ん？」

ゲンヤが指を指す方を見るとタワーからテシター達が現れ始めた。

「ケンタ！ハカセとゲンヤさんを頼んだぞ！」

「うん！」

「てめぇー等ぁ退きやがれ！！」

バコ！バコ！

火鳥は、車から降りてテシター達と戦い始めた。

「じいちゃん、ゲンヤさん急いで！」

「おう！」

「わかったぜ！」

三人は、車を降りると走って海鳴タワーに入って行く。

バッバッバッバッバッバッ！！

『ぐおおお！！』

ロボットは、スーパーガーディオンの攻撃に怯んでいる。

『うおおお！』

バシィン！バシン！バシィィィンンン！！

「ぐおお！！」

ドカン！

ロボットは、素早く剣道の様にスーパーガーディオンをビルに叩き落した！

『どうした！さっきまでの威勢は口先だけか！・・ん？』

シュラは、モニターを見るとケンタと天野とゲンヤが外の階段を使っているのを発見した。

「「はぁっ！はぁっ！はぁっ！」」

「じいちゃん、ゲンヤさんしっかりして。」

ゲンヤも天野も年のせいで直ぐに息が上がってしまう。

「も・・・もう駄目じゃ！一歩も動けん・・・」

「天野さんしっかりしてください・・・」

ゲンヤも息が上がっていたが天野を励ます。

ガキィン！

「「「ん！？うわあぁぁぁぁぁぁぁ！！！」」」

三人の後ろでロボットが襲い始めた。

天野の左右の肩ずつには、ケンタとゲンヤが持ち必死で逃げる。

「助けてぇーーー！！火鳥兄ちゃーーーん！！」

ケンタが火鳥に助けを求めた。

「ファイヤー・・・ジェェェット！！」

火鳥は、空からファイヤージェットを呼び変形し巨大なロボットに変わり火鳥も変化したファイヤージェットに向かって宙を飛び体が火の鳥の様に成りロボットの中心に乗り移った。

『チェェェンジィィ・ファイバード！！』

火鳥は、ファイバードと成った。

『フレイムブレスター！！』

ファイバードは、腕を空に翳すと空からフレイムブレスターがやって来た。

フレイムブレスターがファイバードの真下に下りると合体した。

『フォームアップ！武装合体ファイバード！！』

ファイバードも合体した。

『ファイヤーバスター！！』

バッバッバッバッバッ！！

『ファイバード！？』

『人々の思い出を汚すドライアスの手先！今日と言う今日は許さん！』

『ほざくな！』

シュラは、ファイバードに襲い掛かろうとする。

ファイバードは、武装合体ファイバードの合体を解除した。

『ファイヤー・・・シャトォォォル！！』

ファイヤーシャトルがやって来た。

グランバードもこのまま上半身と下半身がそれぞれ脚部と上半身のパーツに変形する。

ファイバードは、グランバードを支える柱の様なパーツに変わり脚部と上半身のパーツを装着する。

『フォームアップ！サイキョオオオガッタイィィィ！グレートファイバァァドォォォッツ！！』

最強合体グレートファイバードに合体した。

『グレードキャノン！』

ドカーン！ドカーン！

ピュン！ピュン！

ロボットは、尺を回転させて防御する。

ガシッ！

グレートファイバードは、その隙を狙ってロボットの武器を取り押さえる。

「や・・・やっと着いた・・・」

ケンタは、頂上に着いて疲れが見えた。

「「ん？」」

天野とゲンヤが見ると装置の近くにジャンゴとレジアスが立っている。

「Ｄｒ．ジャンゴ！」

「Ｄｒ．天野。やはり貴様か。」

「レジアス中将！」

「ゲンヤ部隊長！貴様か！」

カチャ！

ジャンゴとレジアスの周りからテシター達が出現した。

バキューン！バキューン！

ケンタが光線銃でテシター達の相手をする。

ガキン！

「ふぐぅぅ！！」

「がが！」

天野がベンチでジャンゴを攻撃してジャンゴも杖でガードしている。

ガシッ！

ゲンヤとレジアスもお互いの両手を組んで押したり押されたりしている。

「何故ワシの計画がわかった？」

ジャンゴが天野に聞く。

「愛の力じゃい！」

「ワケの解らん事を！」

「じいちゃん！ゲンヤさん頑張れ！」

テシター達を片付けたケンタが二人を応援する。

「ジャンゴ！お前に勝てない愛の力で勝ってやるわい！愛のパーンチィー！！」

天野は、百合にあげた結婚指輪をした手で拳を作る。

バコーン！

ジャンゴは、天野のパンチに当たり倒れた。

「ナカジマ流星拳！！！」

バコバコバコバコ！！！

「ぐあああああ！！！」

ゲンヤは、レジアスを（自称）必殺技で倒した。

ドン！

レジアスとジャンゴは、そのままシュラの乗っているロボットの頭に落ちた。

ドシン！ドシン！

『さっきのお返しだ！』

スーパーガーディオンがロボットに殴りつけた。

シュウウウウウ！！

ロボットは、上昇すると

「「うわ～～～～！！！」」

ジャンゴとレジアスは、振り落とされないように掴まっている。

「わっ！わっ！「じいちゃん危ない！」「危ない！」

天野は、滑らして下に落ちそうな所をケンタとゲンヤに助けられた。

ドン！

「ぐぉん・・・」

天野を助けたのは、良いが急に引っ張られて床に天野の頭が当たった。

「じいちゃん！早く起きてってば！」

「しっかりして下さい！」

【博くーん！！】

天野の頭に百合の声が聞こえてきた。

【頑張って博くーん！！平和の為に立ち上がるのよ。】

「ゆ・・百合ちゃん！？」

「じいちゃん大丈夫！？」

気付くとケンタとゲンヤいた。

天野は、夢枕マシーンのところに向かう。

バコン！バコン！ドオオン！！

ビリ・・ビリ・・・

「コレでどうじ・・・ドカーン！「「「うわああ！！」」」

三人は、装置を壊した事によって発生した爆風に飛ばされタワーから落ちた。

『大丈夫か！？』

スーパーガーディオンが三人を助けた。

「ありがとうスーパーガーディオン。」

「くそ！失敗か！」

『退却するぞ！』

シュラが操縦して逃げようとする。

『逃がさん！』

グレートファイバードは、後ろからフレイムソードを取り出し通常

のより大きく変化した。。

『フレイムソード！！』

グレートファイバードは、大きくなったフレイムソードを持って構える。

「早くしろ！」

「グレートファイバードにやられるぞ！」

レジアスとジャンゴは、シュラの乗っているコクピットにいる。

「ええい！邪魔だ！　ドカーン！

『ウォータートルネード！』

ブシャァァァァ！！

正面には、スーパーガーディオンが攻撃した。

グレートファイバードも額が光出した。

『フレイムソード・チャージアップ！！』

剣の刃に不死鳥の様な炎を纏ロボット目掛けて構えた。

『とわぁ！えええいいいい！！！』

シュパ！！

ドオオオンンン！！

ロボットは、グレートファイバードの必殺技で爆発して三つの脱出ポットが逃げて行った。

事件が終わると天野達は、ある場所に向かった。

そこは『ＹＵＲＩ　ＡＭＡＮＯ』と書かれたお墓だった。

「君のお蔭で助かったよ百合ちゃん。この指輪大切にするからね。」

「俺達も世界平和の為に頑張るからさ！」

「安心して眠ってね。」

「私もここで改めて誓います。」

ケンタ、天野、ハルカ、ジェイル、ナンバーズが手を合わせて拝んだ。

「ん？」

火鳥とヴィヴィオがお墓を見ると百合が現れてお辞儀をして消えた。

ゲンヤとスバルとギンガは、急遽ミットチルダに行った。

「クイント・・・」

「「お母さん。」」

三人は、黒い喪服を着ていた。

其処は、クイントのお墓だった。

「クイント・・・必ず・・・平和な世の中にしてやるからな・・・」

ゲンヤ達が花を添えて帰ろうとすると

『ん?』

付き添いで一緒に居たガードファイヤーが駐車場から何かを感じた。

感じた方を見るとクイントが現れた。

【娘達を守ってくれてありがとうございます。】

クイントは、笑顔でガードファイヤーに言うと消えた。

第二十五話：過去からのメッセージ（後書き）

「じいちゃん達がタイムマシンを発明したんだ。でも、実験中にガードファイヤーが何処かに消えちゃった！ん！ガードファイヤーが着いた先は、数年前のミットチルダだっだ。あれ！？大変だ！空港で火災が発生した！　太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ第二十六話　過去があるから今が在る！　次回は、お休み！」

第二十六話：過去があるから今がある（前書き）

今回の話は、五年前のスバルの過去をします。

第二十六話：過去があるから今がある

「暇だね・・・ガードファイヤー。」

『そうだな・・・』

スバルとガードファイヤーは、消防署の駐車場にいる。

だが、今日は、ガードレスキューがいない。

ガードレスキューは、仕事が忙しくシャマルと一緒に病院に行っている。

［スバル姉ちゃん！］

「あっ！ケンタくん。どうしたの？」

スバルは、デバイスからケンタの連絡があった。

「うん、じいちゃんが新しい発明をしたらしんだ！来る？」

「うん！『オレも一緒に行って良いか？』えっ！？ガードファイヤー？」

スバルは、隣に居るガードファイヤーがケンタとスバルの会話の間に入ってきた。

［うん！良いよ。］

ケンタも了承した。

「ガードファイヤーも行くの？」

ケンタからの通信を終えたスバルがガードファイヤーに聞いた。

『ああ！この中に居ても体が鈍ちっまうんだ良いだろ？』

「まあ良いか。」

スバルとガードファイヤーは、天野平和科学研究所に向かう。

スバルとガードファイヤーが着いたらケンタに連れられて格納庫にいた。

「じゃじゃ～～ん！名付けてミラクルタイムマシンじゃ！」

「ミラクルタイムマシン？」

スバルがその名前に食い付いてきた。

「そう例えば、過去に戻って真実を確かめる物だよ。」

ジェイルが火鳥達に説明する。

「それでは始めます！」

カチャッ！

シャーリーがミラクルタイムマシンのレバーを押した。

ヴィィィィィンンンン！！！

ミラクルタイムマシンは、音を唸らせる。

ピッカッ！

【うわっ！】

一同は、眩しさに目を瞑る。

「ん？」

ミラクルタイムマシンが光終わるとケンタが目を開ける。

「何にも変化無いよ。じいちゃん、にいちゃん、シャーリー姉ちゃん。」

「ありゃ？」

天野も外と家の中を確認すると全く変化が無かった。

「おかしいですねハカセ。」

「そうじゃのぉ。」

ジェイルがミラクルタイムマシンの完璧さを理解していた天野も疑問になる。

「また失敗ね。」

ハルカが呆れていると

「待って！」

スバルが驚いた口調で火鳥達に言う。

「ガ・・・ガードファイヤーが居ないよ・・・・」

火鳥が周りを確認するがガードファイヤーの姿が無い。

（ん？此処は・・・・）

ガードファイヤーは、気付くと何処かの町の駐車場に居た。

（確か・・天野ハカセの研究所で実験していた最中だったよな？）

ガードファイヤーは、実験前を正確に覚えていた。

『ん！？』

ボオアァァァァ

空を見ると何処かで火事が起こっている。

『くそっ！こんな時に！』

ガードファイヤーは、急いで火事が起こっている場所に行く。

『！』

ガードファイヤーは、町を通ると建物が今日の年号を示していたが

００７１年　４月２９日

（００７１って！今から五年前か！どうなっているんだよ！）

ガードファイヤーが居る場所は、五年前のミットチルダだった。

空港から火事に成っており救助隊の局員達も居たが誰一人として入ろうとしなかった。

「何している！早くしないと取り残された人達が死んでしまうぞ！」

救助隊の隊長が他の局員に命令するが全く動かない。

「無理です！周囲の火を何とかしなければ進めません！」

「くそ！」

何も出来ない自分が悔しい隊長。

『おい！何やっているんだ！てめぇーらそれでも火消しか！』

【！】

局員達が振り向くと見た事も無い消防車がいた。

「し・・しかし、この火をどうにかしないと『だったら！部隊で氷雪系の使える局員を呼んで辺りの火を消せ！』わ・わかった！」

救助部隊の隊長は、他の部下にガードファイヤーが言われた事を伝えて作業に入る。

（ああ言ったが空港は、間に合わなそうだな・・・こうなたら！）

キィィィンン！！

ガードファイヤーは、火が舞い上がる空港に行く。

「お父さん・・・お姉ちゃん・・・痛いよ・・熱いよ・・こんなのヤダよ・・・お家に帰りたいよ・・・」

一人の少女が炎が燃え盛る空港を泣きながら迷っていた。

ギシ！

少女の後ろにある銅像に輝が入る。

「誰か・・誰か助けて・・」

グラッ！

「！」

少女が振り向くと銅像が少女に向かって落ちてきた。

ドカン！

「！」

壁からガードファイヤーが破って入る。

ドオン！

「・・・・・あれ？」

少女の目の前には、消防車が銅像から自分を庇って盾に成っていた。

『もう安心しな。』

ガードファイヤーは、優しく少女に問いかけた。

『怪我は、無いか？』

「う・・うん。」

少女は、ガードファイヤーの質問に頷きながら答える。

『それじゃあ急いで避難する「待って！まだ中にお姉ちゃんがいるよ！」何だって！』

ガードファイヤーは、空港の奥を見ると物凄い火で普通の人では進めない。

『目を瞑っていろよ。』

ガードファイヤーは、ロボットに変形する。

ブシャァァァ！

ガードファイヤーは、空港の奥の火を水で消していく。

ガシッ！

ガードファイヤーは、少女を片手で持つと奥に進む。

『ん！』

ガードファイヤーは、奥に進むと柱の下敷きに成って気絶している少女を発見した。

グラッ！

ガードファイヤーは、柱を退かして少女の姉を救出した。

ボオアァァァァ！！

『何！』

ガードファイヤーの後ろから急激に引火していった。

どうやら空港の引火し安い物質が原因で再び燃え始める。

『仕方ない！』

ガードファイヤーは、消防車に戻ると二人の少女を中に乗せた。

ドカアァァンン！！

ガードファイヤーは、空港の壁を次々と貫いて外に脱出した。

『此処まで来れば安心だな・・・』

ガードファイヤーは、火が来ていない場所に行くと二人の少女を下ろした。

ピッカッ！

少女達を降ろすと同時に謎の光が現れてガードファイヤーを包み込む。

「・・・・・・あれ？」

キョロキョロ！

少女は、目を開けると姉と一緒に地面に倒れていた。

すると直ぐに救急車がやって来て少女と少女の姉を救急車の中に搬送された。

（カッコイイな・・・・）

少女：スバル・ナカジマ１０才は、その時から謎の消防車の人に憧れて時空管理局を目指す事になる。

現在

「ガードファイヤー！何処！？」

スバル達が行方不明に成ったガードファイヤーを必死に天野平和科学研究所の中を必死に探す。

ピッカッ！

【！】

また突如光が現れて一同は、目を瞑る。

『あれ？』

ガードファイヤーの声が正面から聞こえて来て目を開けるとガードファイヤーが何時の間にか居た。

「ガードファイヤー！」

スバルは、ガードファイヤーの元に駆け寄る。

『スバル？どうしたんだ！？』

自分を本物かを確かめるスバルに驚いた。

「一体何処に行っていたの！！心配したんだから・・・」

スバルは、怒鳴りながら泣いた。

『す・・・すなねぇ・・・』

ガードファイヤーは、スバルに対して申し訳無い気持ちで一杯になる。

「ガードファイヤーは、何処に行っていたの？」

『・・・・』

ケンタからの質問に答えられなくなる。

ピンポーン！

その時、外からインターフォンが鳴る。

「はぁーい！」

ハルカが急いで玄関に向かう。

ガチャ！

「失礼ですが、此処は、天野平和科学研究所ですか？」

ハルカが玄関を開けるとコートを羽織ったスーツ姿の３０代後半の男が立っている。

「はい。そうですが、どなた様でしょうか？」

ザッ！

男は、敬礼した。

「はっ！私は、ミットチルダ災害部隊隊長のスイフト・ローレル二佐と申します。此方にご用があり訪問いたしました。」

スイフトが何故天野平和科学研究所に来たのかハルカは、疑問だった。

「私は、ノルウェール一等空将に宇宙警備員の方々が居るとお聞きして来ました。」

ハルカは、ノルウェール一等空将の知り合いと思い研究所の中に入れる。

「スイフト隊長！お久しぶりです。」

スバルがスイフトに会うと挨拶をした。

「スバルさん知り合いなの？」

「うん！起動六課に配属される前に所属していた時にお世話に成った人だよ。」

ハルカは、スバルとも知り合いに驚いた。

「スバルさん・・・実はね・・・」

ハルカは、耳元で事情を説明した。

「えっ！そんな事が！？」

スバルは、スイフトを見た。

「心配無い。私は、ノルウェール派の人間だ。」

※時空管理局には、レジアスの様な武力派とノルウェールの様な争いが全てで無い博愛派の2つに分かれていた。

「スバル、スイフトさんを格納庫に。」

火鳥が割って話しかけた。

「えっ！けど・・・良いの？」

ハルカが心配そうな目で火鳥を見た。

「大丈夫だよ。この人からは、悪意も感じ無いよ。ハカセやドクターと同じ平和を願うエネルギーで溢れているよ。」

ハカセやスバルも火鳥が言うのに間違い無いと思った。

火鳥達は、スイフトを連れて格納庫に向かう。

「此処は！」

キョロキョロ！

スイフトは、研究所の下にこんな巨大な格納庫がある事に言葉で言い表せ無い程だった。

（アイツは！）

ガードファイヤーは、スイフトを見た時驚く。

そう五年前の空港の火災で局員達に指示していた隊長だった。

「！」

スイフトは、ガードファイヤーを見た瞬間に固まる。

しばらくして

ザッ！

スイフトは、ガードファイヤーに敬礼する。

「五年前の空港の火災事故で死人や怪我人が出なかったのは、貴方の御陰です。災害部隊を代表して御礼を言います。」

「・・・・え？」

スバルは、五年前の火災に巻き込まれた記憶を覚えている。

「ええーーーーーっ！！」

スバルは、五年前の事故で自分とギンガを助けてくれたのがガードファイヤーだと驚いている。

『えっ？じゃ・じゃあ管理局に入ったのって全部オレにあるのか！？』

ガードファイヤーは、あの時最初に助けた少女がスバルだとは気付かなかった。

「スイフトさん？」

天野がやって来た。

「はい？」

「ここの基地の事は、誰にも言わんでもらいたいんじゃが・・・」

「ああ！その事でしたら解っています。ノルウェール一等空将から厳重に外には漏れない様に言われています。安心して下さい。」

スイフトは、此処まで立派に成ったのがガードファイヤーの御蔭で今の自分が居るのだと自覚している。

スイフトが研究所から帰ってしばらくしてからスバルとガードファイヤーも消防署に帰る最中。

「ガードファイヤー。」

『な・・なんだ?』

ガードファイヤーは、管理局に入った理由が自分だと解って何時もの雰囲気じゃないスバルに気付く。

「私ね・・あの時、物凄く怖かったんだ・・・熱いし、煙臭かったし、誰も居ない孤独だったんだ。でもその時助けてくれたガードファイヤーを見て思ったんだよ。私もアノ人みたいに沢山の人々を救いえる人に成りたいって初めて思ったんだ。」

『おいおい!そ・・そんな事言われたら・・・何も言い返せないだろうが・・!』

ガードファイヤーは、照れて上手く言い表せなかった。

『まあ・・オレも小さい頃からアニキに憧れて宇宙警備隊に進んだんだけどな・・・』

「ガードファイヤーもなの?」

ガードファイヤーが宇宙警備隊に入った理由がお兄さんのフレイムナイトに在った。

「ガードファイヤーこれからもよろしくね!」

『ああ！これからも頼むぜ相棒！』

スバルは、最後までガードファイヤー達宇宙警備隊と一緒にドライアスを倒し平和を守る事を決意する。

第二十六話：過去があるから今がある（後書き）

「うわぁー！すげぇー泣き声！赤ちゃんがコレだけ居ると迫力あるよね。でも心配ご無用。ウーノ姉ちゃんの歌声を聞けば直ぐにご機嫌に成るからさ！えっ！あの人形が怖い？うわっ！ドライアスのメカだ！　太陽の勇者ファイバード太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ　第二十七話　赤ちゃん救出作戦　次回も世界平和！」

第二十七話：赤ちゃん救出作戦（前書き）

今回の話は、ウーノ関係です。お楽しみください。

第二十七話：赤ちゃん救出作戦

ジャンゴとレジアスは、あるテレビ番組を見ている。

「英才教育は、早ければ早いほど効果が出ると言われます。この様に赤ん坊の頃からパソコンと親しんでいると本人の知らない内に能力が開発されます。」

「「これだ！」」

ジャンゴとレジアスは、そのテレビ番組を見て思いつく。

「理想の暗黒社会を作る為の英才教育！ワシの想うがままに動く軍隊！」

「そして立派な管理局の犬にも！」

「ついでに子供を人質に取れば大人供は、大慌てで我々の要求を呑む。」

「「がっはっはっはっはっはっ！！！」」

ジャンゴとレジアスは、その作戦を考えていた。

ショッピングセンター

「ハルカ、ウーノ姉ちゃんまだ買うの？」

「バーゲンの時に纏め買いするのが主婦の知恵って物よ。」

「それに節約にもなるし。」

ハルカとウーノは、しっかりと考えていた。

「海鳴せんべいは、買ったのか？アレは、研究の友！発明の活力じゃからな！」

天野がやって来る。

「ハカセ、それが原因でこの前に前歯を代えたばかりじゃないですか。」

「あっ！」

天野も思い出した。

「火鳥さん、ヴィヴィオ。今度は、日用品のコーナーに行くわよ。」

「はいはい。」

火鳥は、沢山の食べ物の詰まった紙袋を持っている。

「パパ、だいじょうぶ?」

「うん大丈夫だよ　ドン　「キャ!」

火鳥は、紙袋で前が見え無く前の人とぶつかる。

「ちょ、ちょっと何処見ているの・・・よ?」

前の人は、火鳥を見た瞬間に驚いた。

「す・・すいませ・・シャマル先生!?」

火鳥も驚く。

「カップラーメンに冷凍スパゲッティ・・・料理は、しないんッスか?」

一緒に同行していたウェンディがシャマルに聞く。

「い・・いえ!今日は、たまたま一人だけ非番だったから作る暇が無いんですよ。」

シャマルは、慌てて買い物を紙袋にしまう。

「仕方ないよ。シャマル先生は、キャリアウーマンだもん。」

「キャリアウーマン?ケンタ何ッスか?」

ウェンディがケンタに聞く。

「ばりばり働く女性の事だよ。」

ケンタの説明に火鳥は、納得した。

「オギャー！オギャー！！」

【！】

赤ちゃんルームから泣き声が響く。

「うわ・・・スゲぇー泣き声・・・」

「怪獣映画の怪獣よりも迫力あるッス・・」

「風邪かしら？」

シャマルが心配そうに言う。

「熱？」

「ええ。幼児には、直ぐに熱を出す子が居るのよ。」

「それは、大変だ！先生来て下さい。」

「ちょ！ちょっと火鳥さん！？私小児科は専門じゃないんです！」

「でもお医者様でしょ？」

「え？それはそうですけど・・・」

火鳥は、シャマルを連れて赤ちゃんルームに行く。

「お母さん立派なお医者さんを連れて来ました。もう大丈夫ですよ！」

母親は、安心する。

「良かった！この子急に泣き出して・・・」

母親が事情を話す。

シャマルは、火鳥に紙袋を渡して赤ちゃんの方に行く。

「拝見します。は～いどうしたのかな？「オギャーーーー！！！！！」

シャマルが拝見をしようとすると赤ちゃんは、泣き出す。

「あっ、ほらいい子だから。」

シャマルは、宥めようとしても泣き止まない。

「！」

火鳥は赤ちゃんを抱きかかえる。

「それっ！」

ヒョイッ！

火鳥は、赤ちゃんを投げた。

「火鳥さん！！！！！」

シャマルは、あまりの出来事に悲鳴を上げる。

カシッ！

フルフル！

火鳥は、赤ちゃんをキャッチすると逆さまにして上下に降る。

「火鳥さん！！やめて！！」

「やめて！！」

シャマルと赤ちゃんの母親は、火鳥に止める様に言う。

ポロッ！

赤ちゃんの体からおしゃぶりが出て来る。

火鳥は、赤ちゃんをベットに置いた。

「これが欲しかったんだろ？」

火鳥は、おしゃぶりを赤ちゃんに渡す。

「あぅ。」

赤ちゃんは、火鳥が渡したおしゃぶりをしゃぶる。

「あぅあぅ。」

「ん？へぇ～君の名前は、カッちゃんって言うのか。僕は、火鳥勇太郎よろしく。」

火鳥は、カッちゃんの手を握り握手をした。

「か・・・火鳥さん？赤ちゃんの言葉が解るんですか？」

「あれ？解りませんか？」

火鳥は、赤ちゃんの言葉が普通の人でも解る物だと思っていたらしい。

「ただいまよりセンター広場にて赤ちゃんコンクールを行います。」

ショッピングセンターの放送が響く。

ショッピングセンターアナウンス室

「一才未満のお子様でしたらどなたでもご参加できます。どしどしご参加ください。」

アナウンス室では、女性がＭｒ．ビスマルクに後ろから銃を向けられて無理やり嘘の放送をされていた。

赤ちゃんコンテストの会場には、沢山の赤ちゃん達で溢れかえっていた。

「あぅ？」

カッちゃんも赤ちゃんコンテストの会場に入ると赤ちゃんの形をした大きい人形を見る。

「あぅ・・・オギャーーーーー！！！！」

カッちゃんは、泣き始めた。

【オギャーーーーーーー！！！】

他の赤ちゃんもカッちゃんに連れられて泣き始めた。

「うわ・・泣き声の大合唱だ・・・」

「すごいおと・・・・」

「みんなアノ人形を怖がっているんだよ。」

火鳥が赤ちゃんの泣いている原因をケンタ達に教える。

「あら♪あら♪ここは、私に任せてください。」

ウーノが赤ちゃん達の前にやって来た。

「♪～～～～♪～～～～～～♪～～～～～～♪～～

「ほほ～ぅ・・ウーノの歌には、不思議な効用があるようじゃな。」

「はい、心が和みます。」

ケンタや天野にジェイルもウーノの歌に興味を持つ。

ショッピングセンターアナウンス室

「うぐぅぅぅ・・・」

Ｍｒ．ビスマルクは、ウーノの歌声を聞いた途端に苦しみだした。

「みなさん！逃げてください！」

女性は、隙を見て言う。

「ん？」

火鳥達もその放送を聞いた瞬間に歌っていたウーノも歌を止めた。

バコン！

「くそ！余計な事を！」

Ｍｒ．ビスマルクは、女性を殴ると走り去る。

会場では、赤ちゃんの人形が口を開けて泡が出て来た。

その泡は、赤ちゃん達を包み込んだ。

「あっ！赤ちゃん達が！」

カチャ！

赤ちゃんの人形の胸が開き巨大な掃除機が赤ちゃん達を包み込んだ泡を回収する。

「ドライアスめ！」

火鳥達は、移動する赤ちゃんのロボットを追いかける。

キュウウウウウウ！！

ショッピングセンターの駐車場には、パトカーがやって来て佐津田刑事とティアナが出て来る。

「撃て！子供は、国の宝！貴様等何ぞに渡してたまるか！「佐津田刑事！大変です！」どうした！？」

佐津田刑事が見ると捕まえられた赤ちゃん達の母親が来ていた。

「撃たないで！」

「何するのよ！」

母親達が佐津田刑事達を止める。

「危険です！下がってくだ「アノ中には、ウチの子供が捕まっているのよ！」

ティアナが説得をしようとするがロボットの中には、赤ちゃんがいる事に母親達も抗議する。

【オギャーーーーーーーー！！】

ロボットを操縦しているジャンゴが赤ちゃん達の泣き声を聞き笑っている。

「ふっふっふっ・・・子供達の泣き声を聞かせれば宇宙警備隊も手が出せまい！」

「ジャンゴ！交代してくれ！一人位殺して良いか！？」

「止めておけ！状況は、変わらないぞ。」

ロボットの別の場所では、レジアスが赤ちゃん達の鳴き声にイライラしていた。

「黙らんかぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

ドシーンンンン！！！

レジアスは、怒鳴りながら拳を壁に叩きつけた。

【・・・・・・・・・・・・・・】

「ふ～～～・・・」

レジアスは、ようやく納まったと思う。

「オギャーーーー！！！」

だが、カッちゃんは、泣き止まなかった。

【オギャーーーーーー！！！】

他の赤ちゃん達も次々と泣き出す。

ロボットからスピーカーが流れる。

「子供達は、全員暗黒世界の構成する要員として悪の英才教育を施される。」

バタン！

佐津田刑事達の周りに居た母親の数人が倒れて気絶した。

「お・・奥さんしっかり。」

佐津田刑事は、気絶した母親を介抱する。

「警察は、何をしているんです！もしも何か在ったら警察のせいですわよ！」

母親の一人が佐津田刑事に怒鳴るが「落ち着いてください。警察は、決してお子さん達を見捨てる様なマネはしません。」

ティアナも佐津田刑事のフォローをしている。

キュウウウウウ！！

パトカーが動き始めた事に佐津田刑事とティアナは、見えた。

「「こらーー！貴様等（あんた達）！！」」

怒鳴るがパトカーは、ただ通り過ぎていく。

「Ｄｒ．ジャンゴが！？」

「悪の英才教育じゃと！？」

ガードスターには、火鳥、ケンタ、天野、ヴィヴィオ、ウーノが乗っている。

ジェイルとウェンディとハルカは、ガードレスキューに乗っていた。
ガードファイヤーには、スバルが乗っていた。
『くそ！オレ達が手出しできないと思って！』
『こうなったら力付くで子供達を取り戻すか！』
「駄目だよ！ガードファイヤー！アノ中には、生まれて一年も経っていない子供達なんだよ！もしも怪我でもしたら取り返しのつかない事になるよ！」
スバルがガードチームを説得した。
「スバルの言う通りよ！あの子達は、まだ立って歩く事も出来ない赤ん坊ばかりなのよ！絶対に手荒な事は、しないで！」
シャマルもスバルに続いて言う。
「それに今アノ子達は、成長過程で一番大切な時よ。悪の英才教育なんかをされてしまったら・・・アノ子達は、一生・・・」
ウーノも赤ちゃんが今大切な時期だと解っている。
火鳥は、目のサーチャーでロボットの構造を調べると後ろ腰の辺りに入り口を発見する。
「よっし！アソコからなら！オレが行こう。奴の体内に潜り込んで子供達を救出する。」

「俺も行く！」

ケンタが言うとガードスターは、止まり火鳥が降りる。

「「待って！」」

ウーノとシャマルが降りてきた。

「私達も行きます。」

「ウーノ姉ちゃん！シャマル先生！」

「ケンタくん、私こう見えても立派なお医者さんよ。」

「もしも子供達に何か有ったらきっと後悔するわ。」

ウーノは、そのままガードレスキューから治療道具を持ち出す。

『ウーノさん危険です！』

「ありがとう。でも、私も助けたいんです。」

「ケンタ。」

「うん！」

ケンタは、対テシター光線銃：フレイムショットをウーノに渡す。

「はい！これフレイムショット持って行って。」

「ケンタ君・・・」

「俺よりウーノ姉ちゃんに持たせた方がきっと良いよ。まっ、火鳥兄ちゃんとシャマル先生が付いているから安心だしね。」

「ありがとうケンタ君。」

ウーノは、お礼を言う。

「何グヅグヅしとるんじゃ！」

「早くするんだ赤ちゃん達が心配だ！」

天野とジェイルが火鳥達に言う。

「はい！」

火鳥は、後ろにシャマルを背負って走った。

火鳥達の後ろからガードウィングがやって来た。

『バトルアップ！チェンジ！カードウィング！』

ガードウィングは、変形すると両手に火鳥とシャマルを乗せた。

「あたしも行くッス！！」

ウェンディもライディングボードに乗りウーノを乗せる。

「ガードウィング！」

「ウェンディ！」

『走りより速いぜ！』

「あたしも少しは手伝いたいッス。」

ガードウィングは、火鳥が発見した入り口に向かう。

『行くぜ！それっ！』

ブン！

ガードウィングが的確に投げた御陰で火鳥達は、火鳥が入り口を開けて中に入れた。

「ウーノ姉！」

「ええ！」

入り口にライディングボードを止めるとウーノを中に入れる。

赤ちゃん達に捕らえられている場所では、泣き声もほとんど無い状態だった。

だが、カッちゃんだけは、懸命に泣き続けている。

「がっはっはっはっ！！お前だけ泣いているとは良い根性しているな！」

レジアスは、カッちゃんの入ったカプセルを見ている。

「うっ・・・オギャーーーーー！！」

「がっはっはっはっ！！大きくなったらワシの右腕に育ててやるぞ！！」

火鳥達は、ロボットの中の通路に出た。

ドッドッドッドッドッ！！！

通路には、テシター達が火鳥達を狙っている。

「トウワ！！」

ヒュッ！！

ボコボコボコ！！

火鳥は、正面にいるテシター達を倒した。

「グラールヴィント！！」

バリアジャケットを着たシャマルも後ろのテシター達をデバイスで倒している。

「ウーノその間に赤ちゃん達の所に行くんだ！」

火鳥達は、赤ちゃんが捕らえられている通路を確保してウーノに言う。

「でも火鳥さん達は！？」

「私達は、ここで片付けます！さあ！行って！」

「ありがとう！」

ウーノは、火鳥の言った通路に駆け足で行く。

（赤ちゃん達の泣き声が聞こえない・・・・まさか！脱水症状に！？）

ウーノは、勘付いて懸命に赤ちゃん達の捕らえられている場所に向かう。

外では、ガードチームがロボットを追いかけていた。

『いかん！このままでは、ドライアスに連れさらわれてしまう！』

『子供達が救出されるまで何としても食い止めるんだ！』

『バトルアップ！チェンジ・ガードレスキュー！』

『バトルアップ！チェンジ・ガードファイヤー！』

『バトルアップ！チェンジ・ガードスター！』

ガードチームは、ロボットに変形した。

スバルもバリアジャケットに変身する。

ガシン！！

「『『『おりゃぁぁぁぁぁ・・・・』』』

スバル達は、ロボットの足を止めるがそれでも動きが止まらない。

ゴン！

「うわぁぁぁ！！」

スバルは、ロボットに蹴られて飛ばされる。

『スバル！！』

ガードファイヤーは、ロボットから離れてスバルを受け止める。

ボウ！！

ロボットの口から火炎放射がカードスターとガードレスキューに放射される。

「ここね・・・」

ウーノは、扉を開けると赤ちゃん達が入ったカプセルがあった。

「誰だ！」

レジアスは、扉から誰かが入った事に気付きウーノを見る。

「！お・・・お前は！？」

レジアスは、ウーノを見た瞬間に目を疑った。

「貴様が何故此処に!?・・・11年前に死んだ筈だが!何故居るんだ!ウーノ・クラーク!!」

レジアスは、ウーノを問い詰める。

ガタガタガタ・・・

ウーノは、レジアスを見た瞬間に足の震えが始まり止らなかった。

(何故・・・レジアスを・・・直接見た瞬間に震えが止まらない・・・)

ウーノの目の前が真っ白に成りある脳裏が浮かび上がった。

「レジアス!あの時・・何で娘を殺したんだ!」

「フン!あの小娘が大人しくデータを・・ゼウスを渡さないからだ!」

「そ・・・それだけの事で娘を・・・娘を!!」

(お父さん・・やめて・・もういいから・・!)

ガシッ!!

ガルドマンは、レジアスの首を絞める。

「やめろ・・」

苦しむレジアス。

［娘を！娘を返せぇ！！］

（お願い・・・そんな事しないで・・・あの優しいお父さんでいて・・・）

それでもガルドマンは、レジアスの首を緩めない。

バキューン！！

（お父さん！！）

銃声と共にガルドマンの下腹から血が溢れている。

［馬鹿な奴だ！親子揃って！］

レジアスは、去ろうとするが・・

ガシ！

レジアスの右足首にガルドマンの手を懸命に握っている。

［む・・・むすめ・・を・・かえ・・・せ・・・］

バタン！

ガルドマンは、倒れて死んだ。

「あああああああ！！！！」

ウーノの目から涙が溢れて叫んだ。

「ウーノォォォォォォ！！」

火鳥達もウーノの悲鳴を聞いてやって来た。

「ん！？貴様！」

レジアスは、銃を抜く。

「とりゃあああ！！」

ドーン！！

「ぐあああ！！」

レジアスは、火鳥の蹴りで倒れた。

「まだ年端もいかねぇ赤ん坊達を悪に染めようなんざ許せねえ！！」

火鳥は、レジアスを睨み戦う。

「ウーノさん！大丈夫！？」

シャマルがウーノに駆け寄る。

「わ・・私の事より・・・赤ちゃん達を・・」

ウーノは、怯えた表情のままシャマルに言う。

「ええ！解ったわ！」

シャマルは、ウーノの持っている治療道具の入ったカバンを貰うと赤ちゃん達の所に向かう。

シャマルが赤ちゃん達の入ったカプセルを見ると弱っている状態だった。

「いけないわ。脱水症状だけでなく酸素欠乏症に成り掛けているわ。」

シャマルは、治療道具で応急処置を施した。

だが、問題に入ってしまう。

出口らしき物が存在しない。

このままでは、赤ちゃん達が手遅れに成る危険性もあった。

「！？」

ウーノは、周りを見るとレジアスの持っている大砲が床に落ちていた。

カチャ！

ウーノは、震える体で大砲を壁に狙いを定める。

ドーン！

「きゃ！」

ウーノは、大砲の反動で後ろに飛ばされる。

「ガードファイヤー！」

『どうしたスバル？』

「あれ！」

スバルが指を指すとロボットの体の一部から穴が開いていた。

「シャマル！ウーノ！」

火鳥が二人を呼ぶ。

「早く赤ちゃん達を！」

ウーノが言う。

バコン！

火鳥は、レジアスを殴り飛ばす。

「ガードチーム！赤ちゃん達を！」

『任せろ！』

空からガードウィングが現れる。

キュウィィィィィィィ！！

ガードウィングは、翼のタービンを回転させると風が起こり赤ちゃ

ん達の入ったカプセルを外に出した。

赤ちゃん達の入ったカプセルは、他のガードチームやスバルがネットやウィングロードを使って回収した。

タッタッタッタッ！！

火鳥は、両手にウーノとシャマルの手を掴むとウーノの開けた入り口から飛び降りる。

するとガードウィングが待機していた。

「ウーノとシャマル先生を頼む！」

『おう！』

火鳥は、ガードウィングに渡す。

「ファイヤァァァァ・・・シャトルゥゥゥゥ！！」

火鳥の呼びかけにファイヤーシャトルは、先端のコクピットが脚部に成りウィング辺りが両肩腕に変形して大きいウィングの左辺りに窪みのあるロボットになった。

「とうぁ！」

火鳥は、火の鳥に成って大きいウィングの左辺りの窪みに入る。

『チェェェンジィィィ！！グランバード！』

火鳥は、グランバードに成った。

『人質が居なくなった今もう手加減はしないぞ！』

「くっそ！こうなれば貴様だけでも倒してくれる！」

ジャンゴがロボットのコクピットから言っているとレジアスもやって来た。

ロボットは、背中からキューピットが使う矢を出す。

ヒュッ！

ロボットが矢を放つと矢が無数に出て来てグランバードを攻撃した。

『クッ！』

グランバードは、攻撃を耐える。

『ブレスタージェット！』

グランバードは、手を翳すとブレスタージェットが現れる。

ブレスタージェットは、グランバードの正面に装着する。

『フォームアップ！ジェット合体グランバード！！』

ジェット合体グランバードに合体した。

『オレ達も居るぜ！』

ガードチームとスバルがやって来た。

『ガードチーム！フォームアップ！』

ガードスターが胸の辺りに変形しガードファイヤーが胸を収める部分と両腕、両腿に変形しガードレスキューが両足に変形して装着した。

ガードウィングは、叫ぶと足のパーツと胴の部分に変形してガーディオンに装着し更に頭の部分も変形した。

『四体合体！スーパーガーディオン！』

ガードチームは、スーパーガーディオンに合体した。

ヒュッ！

バッバッバッバッバッバッバッ！！

スーパーガーディオンは、ロボットの矢をガードブラスターで防いだ。

「小賢しい！」

レジアスがコクピットを操作するとロボットは、空を飛んで腰からミサイル発射する。

『ぐおお！！』

『うわあ！』

「きゃっ！」

グランバード達は、身を固めた。

モクモクモク！！

下は、ミサイルを放った影響で煙が出ていた。

「やったか？」

ジャンゴが様子を見ると・・・

ボワッ！！

「「！」」

煙からスーパーガーディオンが出て来た。

ピカ！

スーパーガーディオンの額が光構えた。

『ガードフラッシュ！』

ドーン！

ロボットの胴体にGの文字が刻まれて地面に落ちる。

両腿辺りの部分が開くとライフルの様な武器を出した。

『グランキャノン！』

ヴィィィィィィィ！！！！

グランバードの中央の宝石に素粒子が吸収されていく。

ピッピッピッピッピッ！

グランキャノンのバレルをロボットに照準する。

キラッ！

グランバードの目が光った。

ピュウウウウウウウウ！！！

ドカァァァァンンン！！！

ロボットが爆発すると二つの脱出ポットが逃げて行った。

こうして赤ちゃん達は、救出されて安心する火鳥達。

「本当にありがとうございました。」

カッちゃんのお母さんが火鳥達の所にやって来た。

「よかったね。カッちゃんの泣き声の御陰で救われたんだよ。」

「た～い、た～い！」

「えっ？ウーノ少し良いかい？」

「はい。」

ウーノが火鳥の方に来た。

「カッちゃんがまたウーノの歌声を聞きたいらしいよ。」

「まぁ♪はい。」

スーッ・・・・・

ウーノは、静かに深呼吸した。

「♪～～～～～♪～～～～～～～～～♪～～～～～♪～～～～～～～～～♪～～～～～♪～～～～～～～～～♪～～～～～～～～～♪～～～～～♪～～～～～～～～～♪～～～～～～～～～♪～～～～～♪～～～～

「ウーノ?どうしたんだい?」

ジェイルは、何時ものウーノとは違う雰囲気を感じた。

「ドクター・・・私は、何者なんですか?ガルドマン・クラークの事をご存知ですか?」

「!?ウ・・・ウーノその名前を何処で・・・!?」

ジェイルは、ガルドマンの事を話したのは天野、ゲンヤ、ノルウェール、マリエルにしか話していないので瞳孔が開いて驚く。

「・・・・わかったよ。でも、ハカセ達をリビングに呼んでおいてくれ。私がハカセ達に全てを話すよ。」

「解りました。」

ウーノは、部屋から出て行った。

(まさか・・・全てを話す時がこんなに早く来るとは・・・)

ジェイルは、決心してリビングに向かう。

第二十七話：赤ちゃん救出作戦（後書き）

「リビングに俺達を呼び出したジェイルにいちゃん。えっ！？ウーノ姉ちゃんの真実を俺達に教えるってどう言う事なんだ！？あれ！？大変だ！イタコメカが何故か作動しちゃったよ！　次回　太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ　第二十八話　ガルドマンとウーノ　次回はお休み！」

第二十八話：ガルドマンとウーノ（前書き）

お久しぶりです。今回の話は、ウーノが作られた理由と少しホラーな部分もありますがご理解してください。

第二十八話：ガルドマンとウーノ

ジェイルは、眠っているヴィヴィオ以外のメンバーをリビングに呼んで深刻そうな表情で考えている。

「ジェイルくん、一体どうしたんじゃ？」

天野も何時ものジェイルの表情で無い事に直ぐに気付いた。

「・・・・・皆さん・・・これから言う事が全てです。しっかり聞いていてください。」

【？】

火鳥達は、戸惑いながら騒ぎ出した。

「今から数年前・・・私が大学に居た頃に遡ります。」

ガルドマンが死んでから2ヶ月間後にジェイルは、留置所から出て自宅で安静にしていた。

自宅のドアのインターフォンが鳴り開けると役所の人間が一人立っていた。

「ジェイル・スカリエッティさんですね?」

「はい・・そうですが・・」

「実は・・・」

役所の人間の話によると死んだガルドマンには、死んだ娘以外の人が死んでいる事が明らかになり知り合いで私物を引き取ってくれる人を探している事が明らかになった。

ジェイルは、何時もお世話に成ったガルドマンに申し訳ないと思い快く私物を引き取る形に成った。

ガルドマンの自宅で私物の引き取りの整理をしていると一枚の紙と一本のビデオテープを発見した。

ジェイルは、まず手紙を読み始めた。

『ジェイルへ　この紙を見るときには、もう私がこの世に居ないと言う事だろう。まず君に謝らなければ成らない。私の娘のウーノは、病気でも事故でも死んだのじゃないアル男に殺された。私の研究データタゼウスをアル男からデータを渡さない娘は、殺されてしまった。これは、私のわがままとして聞いて欲しい。このビデオテープを見

て娘の人生をやり直させてもらいたい。そして娘にすまない。私の身勝手さで永久の眠りに入っていたお前を生き返らせてしまってすまなかったっと真実を話す時に伝えてくれ。頼むぞジェイル。　ガルドマン・クラーク　』

ジェイルは、手紙を読み終わると他の私物と供にそのビデオテープも持ち帰った。

自宅に帰って来たジェイルは、早速ビデオテープを再生し始める。

ビデオで写っている映像には、小さいウーノとガルドマンの思い出の映像だった。

数週間ジェイルは、そのビデオを見て観察を開始する。

自分のパソコンで映像の細かいところまでインプットして最後の所まで来たが良心的な物で中断していた。

・・・・私は、本当にして良いのか？・・・と言う疑問に入ってしまう。

そして天野に出会うまでその疑問を持ったまま大学で狭い思いをしながら暮らしていた。

メンバーは、ジェイルの話を聞いて深刻そうな顔に成る。

「・・・そうか・・ジェイルくんは、ウーノ達を作るのにそんな辛い思いをしていたとはな・・・」

天野は、真面目なジェイルを理解してくれた。

コクン・・・

ジェイルは、黙りながら頷く。

「・・・兄ちゃんよお・・」

ゲンヤがジェイルに話しかけてきた。

「・・・はい。」

ジェイルは、自分のせいでギンガやスバルを普通じゃない体にしてしまった原因が自分にある事を自覚していた為ゲンヤに殴られても仕方ないと思った。

「オメェさんは、何時でも苦しんでいたんだな・・・」

ゲンヤは、ジェイルの肩を軽く叩いた。

「ゲンヤさん・・・」

ジェイルは、自分の事を許してくれたゲンヤに言葉が出なかった。

「そうですよ！」

火鳥も声を出した。

「火鳥くん・・」

「ドクターは、僕達にウーノ達って言う素晴らしい仲間を作ってくれたじゃないですか。」

「そうだよ！」

ケンタも入って来た。

「ミットチルダの襲撃の時やノーベル賞でもジャンゴの事件もジェイル兄ちゃんが居なかったら今頃オレ達生きていないよ！」

「ケンタくん・・・」

「そうです！」

「そうッス！」

「ジェイルさんは、間違っていないわ！」

黙っていた他のメンバーもジェイルを励まし始めた。

「みんな・・」

ジェイルは、泣きそうになる。

「おぃおぃ・・男が簡単に泣くなよな。」

「ゲンヤさん・・」

ジェイルは、ゲンヤに慰められた。

「ドクター・・・」

ジェイルの目の前に立っている。

「ウーノ・・・本当に「良いんです。」えっ!?」

ウーノは、話を聞くまで深刻そうな顔だったのが理解した様な顔付きになった。

「私の方こそドクターを誤解していました。私達を作ってくれたのがドクターで本当に良かったです。」

「ウーノ。」

こうしてメンバーは、ジェイルと和解した。

「う～～～・・・オシッコ・・」

ヴィヴィオは、寝ていたが尿意で目を覚まして廊下に歩いていた。

「ん？」

ヴィヴィオは、廊下の隅に置いてあるイタコマシーンの近くに誰が居る事を感じる。

【こんにちわお嬢さん。】

死んだガルドマンの魂がヴィヴィオに挨拶した。

「こんにちは。」

ヴィヴィオは、人に会ったら挨拶をしなさいと火鳥に教えられていた。

【お嬢さんは、家族とか居るの？】

ガルドマンは、ヴィヴィオに家族が居るか聞いた。

「うん。火鳥パパとウーノママがいるよ。」

【そうかい、じゃあパパとママに心配させてはいけないよ。】

「うん♪」

ヴィヴィオは、元気な笑顔でガルドマンに言う。

「わたしのなまえは、ヴィヴィオだよ。おじいちゃんのなまえは？」

【ああ！そうだったね私は、ガルドマンだよ。さあ、トイレは右の方にあるから急ぎで行きなさいヴィヴィオ。】

「うん。」

ヴィヴィオは、トイレに向かった。

【ウーノ・・私は、何時でもお前とヴィヴィオを見守っているからな・・・】

ガルドマンは、消えていった。

第二十八話：ガルドマンとウーノ（後書き）

ティアナ「佐津田刑事が銀行強盗の疑いで逮捕！？本局に行って説得しても信じてくれない！はやて部隊長達も信じてくれない！待っていて下さい！必ず無実を証明してみせます！　次回　太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ　第二十九話　大奮戦ティアナ・ランスター　次回も世界平和！」

第二十九話：大奮闘！ティアナ・ランスター（前書き）

＊今回の話は、ジャンさんの勇者指令ダグオンA，Sとリンクさせました。
悪質な感想は、お止めください。

第二十九話：大奮闘！ティアナ・ランスター

「此処から出せ～～っ！俺は、無実だ～っ！」

佐津田刑事は、管理局の牢屋で騒いでいた。

「どう言う事ですか！？はやて部隊長！」

起動六課はやて部隊長室では、ティアナの怒鳴り声で響いている。

「仕方ないやろ～。佐津田刑事が逮捕されない動機が無かったんやから。」

「今の我々には、佐津田刑事を庇えない。」

はやての隣にいたシグナムも言い返した。

「現に佐津田刑事は、昨日私と一緒に銀行強盗の捜査をしていました！」

ティアナと言う証言もあるが一人だけでは、証言に成らなく後一人

いれば完全なアリバイも出来た事にティアナも後悔する。

「それでやティアナ。アンタ非番なのに佐津田刑事と一緒に警察の仕事もして仕事疲れやろ?どうや?二週間有休したら?」

はやては、ティアナが管理局の仕事だけで無く警察の仕事でも評判が良いことを知っていた。

そこで佐津田刑事がこんな形で居なく成ったのを見計らってティアナに特別有休を取らせようと思った。

しかし!

「・・・・つまり・・・私を捜査から外すのと同時に佐津田刑事を見捨てるんですね・・・・?」

ティアナは、歯を食いしばりながら手が震えている。

「仕方ないやろ~。警察もそうやけど管理局も市民からの評判が大切やし。」

「解りました!」

ドン!

ティアナは、デバイスと管理局の身分証明ＩＤをはやての机に置いた。

「でも私は、一人でも佐津田刑事の無実を証明してみせます。」

ドーン！

ティアナは、部隊長室のドアが壊れる位の音を鳴らして出て行った。

（（今日のティアナは、怖かったな…））

はやてとシグナムは、内心動揺していた。

『ん？』

起動六課の駐車場では、ガードスターが不機嫌なティアナを伺っていた。

ティアナは、そのまま自分のバイクに乗ると何処かに行ってしまう。

『ぁ～ぁ～・・・・』

ガードスターは、最初起動六課に殴り込みしたティアナを見て不安だったが出て来て不機嫌が増した事に心配した。

事の始まりは、今から昨日に遡る。

ミッドチルダでは、銀行が次々に倉庫を壊してお金を奪う連続銀行強盗事件が発生していた。

佐津田刑事とティアナも強盗事件の被害にあった銀行に訪れていた。

「何だ？こりゃ？」

佐津田刑事とティアナは、被害にあった銀行の倉庫を見るとまるで人に作れない様な大きな穴が開いていた。

「よっし！現場を徹底的に調べるんだ！」

佐津田刑事は、ティアナを含めた警官に指示を出した。

「早く犯人を見つけないと警察だけじゃなく管理局の信頼に関わるぞ。」

「佐津田刑事！」

現場からティアナがやって来た。

「どうした？」

「現場にこの様な物が置いてありました。」

ティアナは、四角状の板を佐津田刑事に渡した。

「何だこりゃ？」

佐津田刑事は、四角状の板を確認しようとした。

「そこまでだ！」

「「！」」

佐津田刑事とティアナは、振り向くとレジアス中将の部隊がやって来た。

「これより先は、我々管理局の管轄内に成った！」

レジアス中将が正面に立って言う。

「バカを言うな！これは、警察の仕事だぞ！」

佐津田刑事は、堂々と抗議した。

「これは、警察も同意した直ぐに立ち去れ！」

レジアスも睨む。

しかし佐津田刑事も睨む。

両者の睨み合いは、数分間続いた。

「佐津田刑事。」

ティアナは、佐津田刑事の正面に来て頭を横に振った。

「くっ！」

佐津田刑事は、これ以上睨み合いをしてたらティアナの将来に関わってしまいと感じた。

佐津田刑事は、昔アル男を思い出した。

それは、ティアナの死んだ兄：ティーダ・ランスターを思い出した。

佐津田刑事がまだ新米の刑事だった頃、研修でミッドチルダに訪れていた。

佐津田刑事と研修のコンビで組まされたのがティーダ・ランスターだった。

しかし、二人で違法魔導師の追跡中にティーダが死んだ。

「ティアナ、行くぞ！」

佐津田刑事は、証拠の物をレジアスに渡すとティアナ達数人の部下を連れて現場を後にした。

「くっ！」

佐津田刑事は、ガードスターの中で悔しい顔をしながら本局で今回の事件を調べる為に向かっていた。

「!?」

ティアナは、デバイスからはやての連絡がきている事に気付いた。

「はい、ティアナ・ランスターニ等陸士です。」

【ティアナ?ちょっと佐津田刑事に代わってもらえるかな?】

「はい、佐津田刑事。八神部隊長からです。」

「おう。」

ティアナは、デバイスを運転している佐津田刑事の見える範囲に移動させた。

「こちら佐津田刑事であります。」

【佐津田刑事、ちょっと機動六課まで来てくれませんか?少し確認したい事があるんで。】

「わかりました。」

佐津田の連絡が終わると通信がきれた。

佐津田刑事は、本局の近くに行くとティアナを降ろした。

「少し時間が掛かるがお前は、本局で連続銀行強盗事件の情報を集

めてとけ。オレも後から本局にいくからな。」

「はい。」

ティアナは、佐津田刑事を乗せたガードスターが見えなくなるまで見送った。

佐津田刑事は、機動六課の駐車場に止めて出ようとした時。

「動くな！」

「！？」

佐津田刑事は、周りを見ると武装局員達に囲まれていた。

「また会ったな・・・」

レジアスが正面から佐津田刑事を見下す。

「貴様は！これは、何のつもりだ！？」

「貴様が銀行強盗の容疑者として逮捕する！」

「何だと!?」

佐津田刑事は、ワケのわからない事に戸惑う。

レジアスは、さっき現場に残されていた四角状の証拠を見せて開けた。

すると【佐津田】と書かれた字と佐津田刑事に似たマスコットキャラが画像で表示された。

「これが何だって言うんだ!」

「これが証拠だ!」

佐津田刑事は、バインドで拘束されて本局に連行された。

「離せ!オレは、無実だ!」

佐津田刑事は、最後まで自分が犯人でない事を言い続けた。

「(少し遅いわね・・)ん?」

本局で調べ物を終えたティアナは、佐津田刑事の帰りを待っていると一台の車が牢屋方面に向かおうとしていた。

良く見ると佐津田刑事が車の後ろに乗ってバインドで拘束されている。

「な！何で！？」

ティアナは、急いで牢屋方面に向かう。

「離せ！オレじゃない！」

「いいから入れ！」

佐津田刑事は、牢屋に入れられそうになる。

「佐津田刑事！」

ティアナは、急いで佐津田刑事の方に向かうが他の局員に邪魔されてしまう。

「ちょっと離しなさいよ！」

「そうは、いかないんだ！」

ティアナは、無理やりにも行こうとしたが数人の局員達に抑えられていて進めない。

「ランスター二等陸士。これは、命令だ！これ以上この男を庇った

らお前も反逆罪で牢に入れるぞ！」

他の局員が忠告でやめたが別の方に走って行った。

その日ティアナは、本局で佐津田刑事の無実を言い続けたが相手にもしてもらえず一日が過ぎた。

そして今日、機動六課ではやて達にも言ったが誰も信じてくれなかった。

天野平和科学研究所では、ミッドチルダの連続銀行強盗事件のテレビを見ていた。

「ケンタ、銀行って何なんだい？」

「みんなのお金を預かる場所だよ。」

「みんなのお金を預かって何をするんだい？」

「えっ？それは・・・・」

ケンタは、銀行がみんなのお金を預かる場所としか知らなかった。

「銀行は、お金に必要な企業や投資家に貸し出して運用している所だよケンタくん。」

天野平和科学研究所に遊びに来ているスバルが説明した。

「もしも銀行が無かったら経済が成り立たないんですよ。」

紅茶とお菓子を運んで来たウーノが説明した。

「経済？」

火鳥は、経済の意味を知らなかった。

ガードスターは、起動六課の駐車場に居たが他の警官が引き取ってパトロールに使っている。

［佐津田刑事が逮捕された？］

ガードスターは、火鳥達に連絡するとケンタが驚いた。

『ああ、今回の事件で佐津田刑事は、牢屋にぶち込まれちまってテ

ィアナもはやてに捜査から外されたんだ。でもあの頑固女は、佐津田刑事の無実を証明する為に捜査を開始した。オレは、あの石頭と頑固女が居なく成ってせいせいしたよ『『ふ～～ん・・・』』ん？』

ガードスターの通信にガードファイヤーとガードレスキューが割り込んで来た。

『さっきから聞いていたが本当は寂しいんじゃないか？』

『何たって大事な相棒達が居なく成ったんだからな！』

『うっ！何を馬鹿な！「ん？」！』

ガードスターは、ムキに成って声を大きくして乗っている警官にバレそうに成る。

［でもティアナさんは、佐津田刑事を何でああまでして無実を証明したいんだろ？］

『『『？』』』

通信を聞いていたガードスターとガードレスキューとガードファイヤーは、疑問に成った。

［私知っているよ。］

スバルが入って来た。

［ティアには、一人のお兄さんが居たんだ。］

数年前にティアナの兄：ティーダ・ランスターは、違法魔導師の追跡中に殉職した。

だが管理局は、そんなティアナの兄に対して問題発言を言った。

「首都航空隊のエリートでありながら犯人を取り逃がしたのは失態」

上官の人が死んだことよりも自分たちの面子を優先させた言い訳にはティアナの目が疑った。

「例え死んでも任務を失敗するような役立たずは・・・」

まだ9才のティアナにとってたった一人の兄を侮辱された言葉だった。

ティアナは、その会見に居て泣き始めた。

その時！

「違います！」

一人の男が会見されている場所から大声で叫んだ。

泣いていたティアナが泣き止んだ。

「誰だ！」

会見で問題発言放ったティーダの上官がその抗議した男を見る。

「自分は、ティーダ・ランスター一等空尉と共にパートナーを組んでいた佐津田刑事であります！」

「だから何だ！」

「彼が死んだのは違法魔導師の魔法が子供に当たりそうになったので盾になって死んだのです！そんな彼に言う言葉でありますか！！」

「エリートと呼ばれながらも犯人を取り逃がし殉職する者など首都航空隊の看板を汚したも当然だ！」

「そんな事で・・・看板の評価でティーダ・ランスター一等空尉を侮辱なさるんですか！？」

「それがどうしたんだ？」

「ティーダは・・・アンタよりも人々の安全を考える素晴らしい管理局の鏡だ！」

佐津田刑事は、涙を流しながら会見場を後にした。

一人の女性局員が同僚たちに止められながらも上官の前に立った。

「な！なんだお前は！？」

その瞬間女性局員の拳が上官の顔面に食い込んだ。

「き！貴様！私に手を出すとはただで済むと思っているのか！！！」

慌てふためく上官の言葉に女性局員は・・・・

「・・・てにしろ・・・」

「？？」

「勝手にしろっ！！！」

女性局員の容赦の無い攻撃が上官にヒットする。

その光景を見ていた局員や記者たちは飛鳥に恐怖した。局員たちの何人かは女性局員を止めようと飛鳥にバインドを施したりするが、女性局員は力技でバインドを引き千切り止めに入った局員たちも殴り飛ばした。

「き・貴様・・・じょ・・・上官に手を上げるとは・・・ただで済むと思っているのか！！」

その瞬間上官の顔面は女性局員に仰向けに倒された。

「・・・上等だ・・・懲戒処分なり！！死刑にするなり好きにしろ！！！」

女性局員の拳が上官の顔面にたたきつけられた瞬間地面に物凄いク

レーターができた。

そして誰もが女性局員に恐怖している。

それは人間ではなく獣の姿だからだ。

その後Ｓクラスの魔導師たちが駆けつけ女性局員：東飛鳥三等陸士を拘束した。

上官を殴るという飛鳥のも公的は達成していたためか飛鳥は抵抗せずにそのまま独房行きとなった。

後この事件は『ランスター半殺し事件』としてまた飛鳥は『管理局の獣』して語り継がれることになった。

その後飛鳥三等陸士を止める為にＳクラス魔導師を投入する事件：ランスター半殺し事件が起こった。

『そんな事があったのか・・・』

スバルの話を通信で聞いていたガードファイヤー、ガードスター、ガードレスキューは、ティアナが佐津田刑事をあれほど信頼している理由が解りその後のとんでもない事件を聞いた。

『面白いなその女！』

ガードファイヤーは、飛鳥の事が気に入ったらしい。

『オレだったら飛鳥って奴と同じ事をしたぜぇ！』

ガードファイヤーは、面白がっていたが他の人達は顔を真っ青にしていた。

管理局の牢屋では、寝っころがっている佐津田刑事が懐から何かを取り出した。

それは、ティーダと佐津田刑事が映っている写真だった。

「ティーダ・・・オレは、どうすりゃあ良いんだ・・・・」

佐津田刑事は、牢屋で喋らない写真のティーダに問いかけていた。

「しかし、佐津田が容疑としてあげられた証拠は、いったいどう言う物じゃい？」

天野がガードスターに聞いた。

『ええ、何でも四角状の板でした。』

「板？具体的にどんな形じゃ？」

『はい、こんな形ですハカセ。』

ガードスターは、佐津田刑事が捕らえられる所しっかりと録画していた。

天野は、その映像に映っていた証拠を見て思い出した。

「ん？あーーーーっ！！」

「ハカセどうしたんですか？」

ジェイルが天野に聞く。

「佐津田が容疑としてあげられた証拠は、２０年前ジャンゴがワシのトコから盗んでいったモンじゃ！」

【えっ！？】

「って事は、連続銀行強盗事件はドライアスの仕業なの？」

一同は、驚く。

「ガードチーム！」

火鳥がガードチームに出動を命じた。

『了解！』

『捜査を開始する！』

消防署に居たガードファイヤー、ガードレスキューが動き出す。

『よ～し！・・・っと言いたいトコだが・・・とほほほ・・・あの石頭と頑固女が居ればオレも捜査に加われるのに・・・』

ガードスターは、今別の警官が乗っていて捜査が出来ない状態だった。

『ん？』

ガードスターは、信号で止まっているとティアナが左側から歩いているのに気付く。

ティアナは、そのまま近くの喫茶店に立ち止まった。

「ちょっとすいません。」

「あっ！はい、いらしゃいませ。」

喫茶店からウェーターが出て来た。

「昨日の銀行事件の事で聞きたいのですが。」

ティアナの言葉でウェーターの顔色が変わった。

「失礼ですが、何者でしょうか？」

「私は・・・・・！？」

ティアナは、身分証ＩＤを出そうとしたがはやてに預かっている事に思い出す。

「ワケあって銀行強盗事件を調べている者です。」

「さぁ、私もその時居なかったので。」

ウェーターは、お店の中に入って行った。

「くっ！ん？」

ティアナは、道路を見ると何時も佐津田刑事と乗っているパトカーに気付く。

「くっ！」

ティアナは、ガードスターを見ると何処かに行った。

『はぁ～～・・・・』

ガードスターは、溜め息を吐いた。

そして夜に成りミッドチルダの下水道では、何か動いていた。

それは、テシター達が大きな袋を担いで移動している。

そのテシター達の後ろにゾルの姿もあった。

火鳥とケンタは、ミッドチルダに向かうとそこから車を使って捜査していた。

「!?」

キュウウウウゥゥゥッ!!

火鳥は、何かに感じたのか車を急ブレーキをかけて降りた。

「どうしたの兄ちゃん!?」

「っ！」

火鳥は、マンホールを見ると開けて下水道に向かう。

下水道では、ミッドチルダの別の銀行の辺りに来たテシター達が一斉に光線銃を使い大きな穴を開けて銀行の金庫のお金等を袋に詰めた。

「ちっ！つまんねぇ仕事だぜぇ・・」

ゾルは、嫌々お金を袋に詰める。

ドカァン！

テシターの一人が誰かに殴られた様に飛ばされた。

「誰だ！」

ゾルは、振り返った。

「アンタがドライアスの配下のゾル？」

ゾルがファイバードと思っていたが別の声がした。
紅のプロテクターを装着し紅のフルフェイスを装着している。
「貴様！何者だ！？」
ゾルは、睨んで聞いた。
「あたし？ウィザーアスカ！宇宙警察機構ダグオンよ！」
「ダグオンだと！？」
ゾルも噂で聞いた事があった地球では、エイリアン達の地球侵略をしていたがその野望も宇宙警察機構ダグオンによって粉々に敗れた事を！
「やれっ！」
バッバッバッバッバッバッ！！
ゾルは、テシター達に指示すると機関銃でウィザーアスカに発砲した。
シュッ！
ウィザーアスカは、機関銃を軽くかわすと素早くジャンプして宙にベルカ式の魔方陣が作られ同時にウィザーアスカの足が紅く染まる。
「朱雀・・・舞羽陣！！！」

ドカッ！ドカッ！ドカッ！ドカッ！ドカッ！ドカッ！

ウィザーアスカの蹴り技は、華麗に舞ってそして凄まじい破壊力でテシター達を倒す。

「しゃらくせい！！」

ゾルが殴りかかる。

ドシィンンッ！！

ゾルの渾身の一撃のパンチをウィザーアスカは、片足だけで止める。

「朱雀・・・飛翔脚！！」

ドカーン！！

ゾルは、ウィザーアスカの放つ蹴り技でそのまま下水道の壁に叩きつけられた。

「さあ！ドライアスの居場所を教えな！！」

ウィザーアスカは、倒れたゾルに言う。

「アマ・・・調子に乗りやがって！」

ヴィィィィンンン！！

ゾルの額から光線が発射すると蟷螂のロボットが出て来た。

「ウィザーアスカ！この場は、預けてやるぜ！」

ゾルは、コクピットに乗り込んだ。

「逃がす・・！」

ウィザーアスカが横を向くと火鳥がやって来た。

「何だ！？」

火鳥も何が起きているのか解らなかった。

「あたしは、宇宙警察機構ダグオンのウィザーアスカよ。次にドライアスが狙って来るとしたら紙幣印刷局に必ず来るわ。」

「何だって！どういう・・」

火鳥は、ウィザーアスカを呼び止めようとするがいつの間にか消えていた。

火鳥は、直ぐに天野に連絡した。

「何！？今度は、レビン銀行が襲われたか！？」

「はい、お金の方は無事でした。ですが・・・」

「どうした？」

「俺が着いた時には、ウィザーアスカと名乗る人物が銀行のお金を守ってくれました。」

［何じゃそのウィザーアスカとは？］

「宇宙警察機構ダグオンと言う俺達宇宙警備隊と同じ宇宙の平和を守る組織の一人だと思います。俺もそのダグオンと会うのは初めてだったんで。」

［なるほど・・・次に狙われるのが紙幣印刷局じゃな・・・よっし。」

天野は、紙幣印刷局以外にも狙われる場所の検索していた。

ティアナは、昔の夢を見ていた。

兄：ティーダ・ランスターの殉職の会見で上官が兄の侮辱発言を言うと佐津田刑事が反論して会見場を後にしティアナも佐津田刑事の後ろ姿を見ながら着いて行った。

【ん？】

佐津田刑事は、後ろを振り向くと幼いティアナが着いて来ている事に気付く。

【お前がティーダの妹か・・・・・】

佐津田刑事は、子供のティアナと同じ目線に成る為しゃがんだ。

【すまねぇ・・・お前の兄ちゃんを守れなくて・・・・】

佐津田刑事は、ティアナに泣きながら謝った。

【ありがとう、お兄ちゃんを信じてくれて。】

ティアナは、佐津田刑事に笑顔で答えた。

その時のティアナの瞳に映っていた物は、佐津田刑事が誰よりも兄：ティーダ・ランスターを理解している姿に見えた。

「ハッ！」

ティアナは、目を覚ますと知らない部屋のベッドに寝ていた。

「まったく、ようやく目が覚めた？」

部屋から女性の声が聞こえて振り向くと赤ジャンを着た女性が椅子

に座っていた。

「飛鳥さん！？」

ティアナは、起き上がろうとしたが一日中バイクでの移動や現場の近くの聞き込み等で疲労がピークに達していた。

「無理に動かない方が良いわ。アンタ休みも無く現場で仕事していたみたいだし、でもそんなアンタ嫌いじゃないね。」

飛鳥は、ティアナのコンディションを直ぐに見抜いた。

「でも私どうして此処に？」

「ティアナ覚えて無いのかい？あたしがマンションに帰る時道端にアンタが倒れていたんだよ。」

飛鳥は、ティアナに説明した。

「まぁ、人が一人倒れていても良かったんだけど顔見知りでもあたしの幻術を教えたアンタだと知ってウチに入れたのさ。」

この東飛鳥は、ティアナがまだ起動六課の訓練中によく面倒を見てもらい幻術を教えたティアナの師匠でもある。

その為か訓練中になのはと喧嘩をしていた。

なのはの実戦をしない訓練に不満を持ち訓練が終わるとティアナに幻術を教えたり起動六課を抜け出して実戦も行わせた。

「どう言うワケだい？あたしは、アンタをよく知っている。こんなにも疲労がピークを達しているのに無理をしてするワケでもあるの？」

「実は・・・」

ティアナは、飛鳥に事のワケを話した。

佐津田刑事が無実なのにも関わらず逮捕され納得いかなく自分一人で捜査を始めた事を。

「・・・・それがアンタ自身の信じた正義かい？」

「はい！佐津田刑事は、人々の平和の為に例え一人に成ってでも戦う正義に感動しました。だから、私の信じる正義の為に貫くだけです！」

ティアナは、迷いの無い瞳で飛鳥を見つめた。

「ぷっ・・・アハッハッハッハッハッ！アンタ！相当その男に惚れているんだねぇ・・・・」

飛鳥は、腹を抑えながらティアナの話を真面目に聞いていた。

「／／／／／な・・何を言っているんですか！」

ティアナは、顔を真っ赤にしながら言う。

「あ～っ、ゴメンゴメン・・・でも良い情報を教えてやるよ。今度犯人が犯行を行うなら紙幣印刷局が高いと思うよ。まぁそれも可能な範囲だけどね。」

「飛鳥さんありがとうございます！私のバイクは？」

「マンションの駐車場に止まっている、あたしの車の隣に止めているよ。」

ティアナは、飛鳥にバイクの鍵を渡されると外に出て行った。

ティアナは、起動六課の駐車場にバイクを止めるとはやての居る部隊長室に駆け出した。

部隊長室には、はやてとシグナムとヴィータが居た。

「今度襲われる所は、紙幣印刷局だと思います！」

「その根拠は、何だ？」

はやてと一緒に居るシグナムが聞いた。

「これは、東三等陸士から聞いたのですが犯人が銀行の襲撃に失敗したら一気に紙幣印刷局が狙うと言ってますし私個人としても印刷機が危ないと勘で思います！」

「勘だと!?ふざけるなぁ!」

納得出来ない理由にヴィータが怒鳴る。

「な・・・何で仲間の話を聞かないんですか!お願いです!紙幣印刷局の人々の非難をさせて下さい!事件が起こる前に未然に防ぐ事が我々管理局員や警察の務めじゃあないんですか!」

ボコンッ!

シグナムがティアナの右頬を拳で殴った。

「そんな曖昧な事で機動六課を動けるか!」

シグナムがティアナを怒鳴りながら睨む。

「危険が直ぐ来るかもしれないのに黙っていられません!!」

ビクンッ!

ティアナが今以上の怒鳴りに三人は、驚く。

「解りました・・・この件は、私個人で処理します!」

ティアナは、駆け足で部隊長室から出て行く。

(事件が起こってからじゃ意味無いのよ!起きそうな事件を未然に防いでこそ人々の安全を守ったって言うじゃない・・・私は、戦う!例え一人に成っても!佐津田刑事ならそう考える筈よ!)

ティアナは、バイクに乗り紙幣印刷局に向かう。

『ん！？』

起動六課の駐車場に居たガードスターがティアナがバイクで何処かに向かうのを確認する。

ガードスターは、バイクに乗ったティアナを追いかける。

「くそ・・」

佐津田刑事は、牢屋をどうしても脱出したいので考えていた。

「ん？」

佐津田刑事は、牢屋の通路から足音がするのに気付く。

よく見ると若い清掃員の女性が佐津田刑事の居る牢屋の通路を掃除していた。

「おやおや・・そのカッコ刑事さんですか？」

清掃員の女性は、佐津田刑事に聞く。

「ああ・・そうだが・・」

佐津田刑事は、答える。

「何でアナタみたいな人がこんな所に?」

「フッ・・・まぁ良いや・・・ちょっと聞いてくれるか?」

「ええ。」

「俺の相棒のアニキも局員で元相棒だった・・・だが、一緒に違法魔導師の追跡中・・・近くにいた子供に魔法が間違って行ってしまい・・そいつは、子供の盾に成って殉職しちまった・・・だがそんな元相棒を上官は、会見で幼い相棒が見ている前で侮辱した・・・オレは懸命に否定してもそれでも謝りもしないで自分が正しいと思っていた・・・。だからオレは、相棒を立派な警察のような局員にしたいと今でも思っている。そう・・・元相棒・・・ティーダの様に自分の信じた正義を信じて貫けっとな・・・悪かったな・・・こんな詰まんない話をしちまって。」

「いいえ・・詰まんなくないわ。」

清掃員の女性は、腕に付けているブレスレットを上に翳した。

「トライダグオン!!」

清掃員の女性が叫ぶとブレスレットを起動させると身体に紅のプロ

テクターが装着された。フルフェイスのマスクが装着される。

「ウィザーアスカ!!」

「!?アンタ・・一体?」

清掃員の姿が変わり驚く佐津田刑事。

「さあ!こんな所に居ないで早く自分の正義を貫きなさい佐津田塀介刑事・・・はぁっ!」

ガシィン!ドカァン!

ウィザーアスカは、牢屋を一蹴りで壊すと別の壁から車が現れる。

「さあ!一々驚いていないで早く乗って今ので局員達に勘付かれたみたいだから・・・」

佐津田刑事も今ので奥から局員達の声で聞こえていた。

「解った!だがその前に紙幣印刷局に向かってくれないか!?犯人は、次に其処を必ず狙ってくると思う!」

「いいわよ。」

ウィザーアスカが車に乗ると佐津田刑事の乗り急いで脱出し局員達を撒いて紙幣印刷局に向かう。

ティアナのバイクの後ろからガードスターがこっそりと追っていた。

『こちらガードスター。今紙幣印刷局に向かっている。』

ガードスターは、天野平和科学研究所に連絡を入れる。

[ええ!?でもじいちゃん達の分析がまだだよ?]

『ティアナの推理だ。紙幣印刷局の印刷機が危ないと言っている。』

『本当か?』

『その推理には、信用できる根拠があるんだろうな?』

ガードファイヤーとガードレスキューは、通信でガードスターに聞く。

『無い。』

ガードスターは、覚悟の上で答えた。

『無い!?』

ガードウィングが通信に入って来た。

『馬鹿野郎！それガセネタじゃねぇか！！』

ガードウィングが怒鳴る。

「いいや案外そうでもない。」

「私達がコンピューターで計算した所一番確率が高いのが紙幣印刷局と出ているよ。」

「あのティアナっと言う娘以外と優秀なのかもしれんのぉ。」

天野とジェイルの計算でも紙幣印刷局と出てティアナを評価した。

「よし！ガードファイヤーとガードレスキューそしてスバルは、紙幣印刷局周りを。ガードスターとガードウィングは、紙幣印刷局に向かって来れ。」

火鳥がガードチームに指示した。

『冗談言うなそんなあても無い理由で動けるか！オレは、オレのやり方で捜査をさせて貰うぞ！』

ガードウィングは、紙幣印刷局とは別の方向に向かう。

「ガードウィング！『かまうなファイバード。オレは、一人でもやるさ。』すまないガードスター。」

火鳥は、申し訳なさそうに言う。

（たとえ頑固女でも真剣に人間の安全を願う心を信じられなくて宇宙警備隊とは言えるか！オレは、佐津田刑事とティアナの魂を感じ取ってこのパトカーに入ったんだ。）

ガードスターは、自分がこのパトカーに入った理由があった。

ティアナは、バイクを紙幣印刷局の目の前に置くと走り出した。

「待ちなさい！あなた通行証持っているんですか！？」

ティアナは、入り口の警備員に取り押さえられてしまう。

「犯人が此処を狙っているのよ！早く警備体制を強化しないと犯人に紙幣の印刷機が奪われてしまうわ！」

ティアナは、自分の言い分を言っても相手にしてもらえなかった。

『ん！？』

ティアナの止めてあるバイクの後ろでガードスターが止まっていると空から蟷螂のロボットが現れた。

ドカーン！

蟷螂のロボットは、口からミサイルを発射して印刷局の建物に当たった。

「う・・何なの！？」

ミサイルの衝撃で倒れたティアナが起き上がると蟷螂のロボットが下りてきた。

「あ・・あれは、ドライアスのメカ!?」

ティアナは、連続銀行事件の犯人がドライアスの仕業だと察す。

『バトルアップ!チェンジ・ガードスター!』

ガードスターは、ロボットに変形した。

『待て!』

蟷螂のロボットは、ガードスターを見る。

『ドライアス!このガードスターが居る限りこれ以上好きにさせないぞ!』

「ば~かめ!たった一人で何が出来る。」

バッバッバッバッ!!

蟷螂のロボットは、ミサイルをガードスターに発射する。

『メットオン!』

ガードスターは、ミサイルをかわすとスタープラスターを構える。

『くらえ!』

バッバッバッバッバッバッ！！

見事に蟷螂のロボットに当たるが全くダメージの無い状態だった。

ドカァーン！！

『ぐあああ！！』

ドシィーン！！

ガードスターは、蟷螂のロボットの鎌に当たると紙幣印刷局の建物の中にまで当たって倒れた。

「何だ！これは！？」

佐津田刑事は、ウィザーアスカの車から出ると紙幣印刷局がドライアスのメカに襲われているのに驚く。

「アタシの仕事は、此処まで。さぁ！行きな多分アンタの相棒が建物内にいると思うからさ。」

「何！？ティアナが！色々すまねぇ！」

佐津田刑事は、紙幣印刷局の中に入った。

「佐津田刑事！？どうして此処に！？」

ティアナは、管理局の牢屋に居る佐津田刑事がどうして紙幣印刷局に居るのか解らなかった。

「話は後だ！それより人々の非難の誘導をするぞ！」

「はい！」

佐津田刑事とティアナは、戸惑う人々の目の前に立った。

「皆さん慌てないで落ち着いて！」

「我々の指示に従ってください！」

二人は、懸命に人々を非難させる。

ドーン！ドーン！

蟷螂のロボットが屋上を鎌で攻撃して建物が益々崩れて掛かっていく。

「うわぁ！」

蟷螂のロボットの攻撃で建物の一部が紙幣印刷局の人を下敷きにする。

「「ん！？」」

佐津田刑事とティアナは、気付き助け出すと

「お前は、非難した人達の誘導を頼む！俺は、この人を連れて行く。急げ！」

「はい！」

ティアナは、建物から非難した人達の誘導を行う。

蟷螂のロボットは、おくじょうを壊すと真下に印刷機があった。

『ふん！こんな物で金を作っているのか・・・じゃあ頂くとするか。』

ゾルは、印刷機を盗もうとする。

『紙幣の印刷機を奪う気か！そうはさせん！』

ドカーン！

ガードスターは、蟷螂のロボットにタックルをする。

『ぐううう！！くそぉ！』

ゾルは、蟷螂のロボットの鎌をガードスターに振り落としたがガードスターも真剣白羽取りで防いだ・

ガードスターの後ろには、佐津田刑事が傷付いた人を担いで外に出ている。

『食らえ！』

ドン！

『ぐああ！』

蟷螂のロボットがガードスターに膝蹴りしてミサイルを発射した。

ヒュッ！　ドシーン！

ガードスターがミサイルをかわすと建物に一部に当たってしまい真下の佐津田刑事の所に落ちてきた。

「佐津田刑事！」

ドン！

ティアナが瞬時に佐津田刑事と傷ついた人を強く押して大丈夫だがティアナの真下に建物が落ちてくる。

「ティアナ！」

『いかん！』

ガードスターが気付き向かう。

ティアナは、目を瞑った。

「・・・？」

ティアナが目を開けるとガードスターが支えて守ってくれていた。

『ぐ・・ううう！』

「あ・・アナタ！？」

『早く逃げて・・・』

「す、すまん。ティアナ行くぞ。」

佐津田刑事は、ティアナを連れて非難をする。

『随分と重そうな物を背負っているじゃねぇか・・・よしせっかくだから墓標を刻んでやる。もっとも力が入りすぎてテメェーの体ごと真布断つだろがな・・・ウリャアアア！！』

蟷螂のロボットがガードスターに振りかかった。

バッバッバッバッバッ！！

空からバルカン砲が蟷螂のロボットに当てる。

『バトルアップ！チェンジ・ガードウィング！』

空からガードウィングが現れた。

『ガードウィング！？』

『勘違いするな・・オレは、小僧と嬢ちゃんに頼まれて来ただけだ。』

ビィイイイインンンン！！

蟷螂のロボットの目からから光線がガードウィングに放たれたがかわしてロボットの懐に入り込む。

ドシーン！

『ぐあああ！！』

ガードウィングは、ロボットの鎌で数メートル飛ばされた。

ガシ！

『ぐう！』

ロボットの鎌で首を狩られ様とするが踏ん張って抑えるガードウィング。

「ガードファイヤー！アレ！」

ガードファイヤーに乗っていたスバルが指を指すと下敷きに成っているガードスターと蟷螂のロボットに首を狩られそうなガードウィングの姿があった。

『ガードスター！ガードウィング！』

ガードファイヤーとガードレスキューは、向かう。

『バトルアップ！チェンジ・ガードファイヤー！』

『バトルアップ！チェンジ・ガードレスキュー！』

ガードレスキュー、ガードファイヤーは、ロボットに変形してスバルもバリアジャケットに変身する。

ガードファイヤー達は、下敷きに成ったガードスターを助ける。

『ぐふっふっ・・その首と胴体を切り離してやるぜ！』

ゾルが今にもガードウィングを殺そうとしていた。

ドシーン！！

『何だ！？』

突然後ろから体当たりされた事にゾルが振り変えると車に乗ったウィザーアスカがいた。

「融合合体！！」

ウィザーアスカの車：ウィザーエヴォーラが人型に変形するとウィザーアスカと一体化した。瞳が淡い緑に光る。

『ダグ！ウィザー！！！』

『ウィザーブレード！！』

ダグウィザーはベルカ式の魔方陣を繰り出すとウィザーブレードが光に包まれた。

ロボットが襲い掛かってくるがダグウィザーはウィザーブレードを逆手に持った瞬間ロボットのカードウィングを挟んでいる鎌を両断してその御陰でガードウィングが開放された。

『アタシがするのは、此処まで後は頼むわガードチーム。』

ダグウィザーは、何処かに消えてしまった。

『ガードチーム・フォームアップ！』

ガードスターが胸の辺りに変形しガードファイヤーが胸を収める部分と両腕、両腿に変形しガードレスキューが両足に変形して装着した。

『三体合体！ガーディオン！！』

ガーディオンに合体した。

『テリャッ！』

「リボルバーシュート！」

ガーディオンとスバルが蟷螂のロボットに殴る。

『ガードブラスター！』

バッバッバッバッバッバッバッ！！

ガードブラスターを放つがロボットは、空を飛んだ。

『野郎！コイツの本当の力を見せてやるぜ！』

蟷螂のロボットの鎌の長さが数倍増してガーディオンに襲い掛かる。

しかしガーディオンは、上手く避けた。

『野郎！・・・！？』

ゾルは、ロボットを動かそうとするが動かせない。

それもその筈、鎌の長さを倍にしてしまった為動けなかった。

『今だ！』

ガーディオンの星の紋章から雷の六角の星が現れた。

『ライトニングスター・・・フラッシュ！！』

ズッパッ！！

蟷螂のロボットは、ライトニングスターフラッシュで一刀両断して爆発して１つの脱出ポットが何処かに逃げていった。

「いや～・・貴方方の御陰で大切な印刷局を守る事が出来ましたよ。」

「ありがとうございます！」

佐津田刑事とティアナは、ガードスターにお礼を言った。

スバルは、こっそりとティアナにバレ無い様に見ている。

「本当に見事な活躍でした！」

『いえ。貴方達が他の人達を上手く非難させてくれたから安心して戦う事が出来たのです。ご苦労さまでした！佐津田刑事！ティアナ・ランスター二等陸士！』

ガードスターは、敬礼した。

【刑事？二等陸士？】

【何だ・・通りで非難方法の指示が明確だったんだワケだ。】

【ありがとう。刑事さん。局員さん。】

【やっぱりこう言う時は、警察や管理局が頼りだよな。】

佐津田刑事とティアナは、驚きと戸惑った。

「自分は、職務を実行しただけです。」

「私も同じです。」

「「そちらこそご苦労様でした！」」

佐津田刑事とティアナもガードスターに敬礼した。

佐津田刑事とティアナは、管理局の軍法会議に呼ばれた。

「佐津田刑事・・ティアナ・ランスター二等陸士。今回の脱走や無断で行動した事には、黙ってはいられない事になった。」

上層部の一人が言う。

「私が「いいえ！全て自分がした事です！ランスター二等陸士は、自分の命令に従ったに過ぎません！ご処分は、全て自分にしてください。」佐津田刑事・・・」

ノルウェールが二人の前で言う。

「今回の罰は・・・」

ティアナと佐津田刑事は、息を飲んだ。

「ふっ・・」

ノルウェールは、微笑んだ。

「ランスター二等陸士と佐津田刑事は、１週間の休暇を命ずる。」

【！？】

上層部の者達は、動揺する。

「お待ちください！それでは、他の者達に示しがつきません！」

レジアスがノルウェールに抗議するが

「二人が来る前に紙幣印刷局の方々のお礼が殺到してしまい。もしも彼らに懲戒処分等したら我々の信頼にも大きく関わる事に成りますよ？」

ノルウェールは、レジアスだけじゃなく上層部の者達を睨んだ。

その睨みでレジアス達は、言い返せなかった。

レジアス達が去るとノルウェールは、二人に「亡きティーダ・ランスター一等空尉のお墓参りに行って来なさい。」

その後、二人はティーダのお墓参り行った。

第二十九話：大奮闘！ティアナ・ランスター（後書き）

「ウーノ姉ちゃんの特技歌。火鳥兄ちゃんの故郷の歌を火鳥兄ちゃんがじいちゃんから貰ったオカリナを吹き終わったら直ぐに歌えたんだ！ミラクル凄い。ええっ！宇宙からＳＯＳ！？よっし！ファイヤーシャトルで出動だ！って何だ！？戦艦や戦車にグリフォンや色んなのに変形するのは！？　次回　太陽の勇者ｓｔｒｉｋｅｒｓ第三十話　変化自在セブンチェンジャー　次回も世界平和！」

第三十話：変化自在セブンチェンジャー（前書き）

今回の話は、伝説の勇者ダ・ガーン関係を少しだけ絡みました。

第三十話：変化自在セブンチェンジャー

天野平和科学研究所では、天野とジェイルとシャーリーが数えられない程の発明品（不良品も含める）の整理を一同で行っていた。

ガラッ！

「うわ！ぐお！」

ケンタが壁に背中を当てて休んでいると壁が動き中からまた変な発明品の山が出て来た。

「？」

火鳥は、発明品の中に気に成る物を手にした。

「何です？これ？」

火鳥は、天野に聞いて見せる・

「ほぉ～・・・これは、ワシが昔子供の時に作ったオカリナじゃな。」

天野は、オカリナを吹こうとした。

フーー・・ボウ・・・ボウ・・・

「ゴホッゴホッ！」

「ハカセ！」

天野がオカリナを吹こうとしてたら中から大量のホコリが溜まっていてジェイルがむせた天野の背中を擦った。

スッ・・・

火鳥は、オカリナを持つと吹き始めた。

♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～

火鳥が吹くオカリナの音色は、不思議な雰囲気と無数の星の光を見ている感じに一同が感じる。

♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～♪～・・・・・

火鳥のオカリナの音色が終わる。

「兄ちゃん、今のは？」

「綺麗な音ね。」

「パパ・・何なの？」

ケンタ達が興味を持ったらしく火鳥に聞く。

「オレの故郷・・・遠い星の世界の音楽だよ。」

「火鳥さんさっきのメロディー、歌っても良いですか？」

ウーノが火鳥に聞いた。

「ああ、良いよ。」

火鳥から許可を貰うとウーノは、深呼吸した。

遠い故郷（ほし）の歌をウーノは、歌い始めた。

ウーノが歌い終わると一同は、拍手をした。

ビーッ！ビーッ！

すると指令室の機械が反応した。

「何じゃ！？」

「調べましょう！」

天野、ジェイル、シャーリーは、司令室の機械で調べ始めた。

【ＳＯＳ・・・ＳＯＳ！こちらスペースシャトルヘラクレス！ＮＡＳＡ返事をしてくれ！】

どうやらスペースシャトルの通信だった。

【こちらＮＡＳＡ！どうした何があった！？】

【船外作業中に流星に当たり進路が狂い地球から離れる一方だ！】

【軌道の修正は、出来ないのか?】

【エンジンがやられて噴射出来ない!】

【解った!今直ぐ時空管理局に要請して救助に向かわせる!】

【急いでくれ!ヘラクレスの外には、作業をしていた乗組員が中に入れないで居るんだ!もう一体のアトラスは、こちらよりも流星のダメージが大きく通信も出来なく生存しているかわからない状態なんだ!】

天野達は、大体の状況を把握した。

「いくら時空管理局の戦艦で救助しても時間が掛かり過ぎて間に合いません!」

「火鳥!出動じゃ!」

火鳥とケンタは、ファイヤーシャトルに乗り宇宙へ向かう。

宇宙では・・・・

「おい！アトラス生きているか！？返事をしろ！」

ヘラクレスの外で作業していた乗組員がアトラス側の方に向かい懸命に呼び続ける。

ピカッ！

「！？」

乗組員は、後ろが妙に光が出ている事に気付いて振り向くとグリフォンの様なロボットがアトラスの方に向かっているのに驚く。

グリフォンから戦艦に変形してアトラスの修復を完了させるとそのままアトラスを運んだままヘラクレスの方に向かうがファイヤーシャトルやって来たのを見てアトラスを地球に運んで行った。

【こちら宇宙警備隊！救助に来ました。】

火鳥がヘラクレスの中居る乗組員に連絡をすると乗組員達も安心する。

外に居る乗組員もファイヤーシャトルの中に入れて救助を完了させて地球に向かう。

『お嬢、本当にあのままで良かったのか？』

アトラスを運んでいる戦艦が自分の中に入る紫髪のヴィヴィオと同い年の少女に聞く。

「大丈夫・・・何となくだけどあの乗り物から邪悪な物は、感じなかったから・・・」

『お嬢の勘は恐ろしい程当たるからな・・・信じるぜ。』

戦艦は、そのまま安全な場所にアトラスを置くとそのまま空の彼方に消えてしまった。

天野平和科学研究所では、臨時のニュースが流れていた。

【臨時ニュースです。先ほどＮＡＳＡ基地が何者かに占拠せれてしまいました。】

「そこ火鳥さん達が着陸する場所でしょ？」

「えらいことに成ったぞ！」

天野達は、火鳥達に連絡を取ろうとしたが何らかの影響で連絡が繋がらない。

ファイヤーシャトルは、ＮＡＳＡ基地に到着するとヘラクレスを基地の滑走路に下ろして着地した。

「ありがとう。まさか君達にまた助けて貰えるなんて思っていなかったよ。」

この外で居た乗組員は、月面基地でマスドライバーの操作を担当していた男：クロード・ウィンチェスターだった。

「けどあの時の人だった何て偶然もあるんだね。」

ケンタもクロードと少し話した事があった為知っていた。

「!?待て！何か様子がおかしい！」

火鳥は、あまりの気味の悪い静けさに警戒する。

「何なんだ!?」

クロードが指を指すと正面から大量のテシターの大群が此方に向かっていた。

［ケンタくん!火鳥くん!聞こえているかい!?］

ビスターからジェイルの声が聞こえる。

［今ＮＡＳＡ基地は、ドライアスの占拠されているよ!］

「ええ!?」

ケンタは、驚いた。

「シャトルの中に居る者聞いているか?この基地の人間は我々の支配下に成っている。お前達も命が欲しければ投降しろ。」

シュラがテシター達の中で言いファイヤーシャトルのハッチが開く。

「何!?」

ファイヤーシャトルから出て来たのが火鳥と知って驚くシュラ。

「ドライアスの悪党め!貴様等の好きにはさせん!」

「ファイバード何故此処に!?」

「テメェー等の悪事を許すなと天がオレを遣わせたんだろよ!」

「ほざくな掛かれ!」

シュラが命令するとテシター達が一斉に火鳥に襲い掛かる。

火鳥は、次々にテシター達を倒していく。

「ケンタ今の内に人々を安全な場所に避難させるんだ。」

「オーケー兄ちゃん！」

ケンタは、フレイムショットを片手に持って他の人々の避難誘導をさせる。

「待て！シュラァ！」

シュッ！

火鳥は、シュラを追いかけるがテシター達が邪魔して思う様に行動できない。

『宇宙警備隊・・・邪魔は、させんぞ。』

デスイーグルが火鳥を見ていた。

デスタイガーが右半分の体に成り、デスドラゴンが左半分の体に成りそしてデスイーグルが胸部と頭部に変形して合体した。

『三獣合体！ドライアス！！』

「出てきやがったな！」

『ハァ！』

シュッ！ドシーン！！

ドライアスは、そのまま片足で火鳥を踏みつけようとしたが火鳥が素早く避けた。

『逃げろ！逃げろ！』

ドライアスは、歩きながら火鳥を踏みつけようとする。

「！」

火鳥の目の前には、壁が立ちはだかっていた。

『死ね！』

「兄ちゃん！！」

シュッ！

火鳥がドライアスに踏まれる寸前に何かの物体が目にも見えない速さで火鳥を非難させた。

「！？」

良く見ると青いジャガーのロボットが火鳥を口に咥えていた。

『何！？』

ドライアスもこの謎のロボットに戸惑う。

『早く呼べ！』

謎のロボットは、そう言うとドライアスと闘い始める。

「ファイヤァァァァァ・・・シャトルゥゥゥゥ！！」

火鳥の呼びかけにファイヤーシャトルは、先端のコクピットが脚部に成りウィング辺りが両肩腕に変形して大きいウィングの左辺りに窪みのあるロボットになった。

「とうぁ！」

火鳥は、火の鳥に成って大きいウィングの左辺りの窪みに入る。

『チェェェンジィィィィ！！グランバード！』

火鳥は、グランバードに成った。

『小賢しい真似を！』

ドライアスは、ホラーハーケンを放とうした。

ボアァァァァァッ！！

ジャガーのロボットは、口から火炎放射をドライアスに放って邪魔をした。

『グランバードだったな？此処は、オレに任せて人質を助けろ。』

『ああ！貴様の名前は？』

『オレの名は、セブンチェンジャーだ。』

グランバードは、その名前を聞くと人質が捕らえられている場所に向かった。

『遊びは、此処までだ！』

ドライアスが言うと地面から別のロボットが現れた。

『フッ・・・大分骨の出来た奴等じゃないか。』

シュッ！

セブンチェンジャーは、ジャガーからグリフォンに変形して空中からミサイルを放つ。

『フン！』

ドライアスは、デスブレードで振りかかる。

シュッ！

今度は、人型に変形したセブンチェンジャーが両手に二つの剣を持ちデスブレードを塞いで素早く右膝でドライアスの腹部を蹴り飛ばす。

『ぐあああああ！！』

ドライアスは、セブンチェンジャーの変化自在の戦いに苦戦をしていた。

日本：海鳴町・翠屋

「・・・・・・」

「恭也どうしたの？」

「えっ！？何でもないよ母さん。」

高町なのはの実家が経営する翠屋の店内では、テレビでＮＡＳＡ基地のニュースをやってる所を見た恭也はセブンチェンジャーを見た瞬間に目を疑った。

（何でセブンチェンジャーが地球に？だとすればヤンチャーも地球に帰って来ているのか？）

恭也は、ポケットに入れている四角状の機械ダイレクターを握りながら考えていた。

ドカァン！！

基地の人々が人質に成っている場所に壁を貫くグランバード。

「う・・宇宙警備隊！？」

中には、ゾルと数人のテシターと人質達がいた。

『ドライアスの手下め！人々を解放しろ！』

「くっ！」

ゾルは、基地にセットしている自爆装置を押そうとする。

『させるか！』

ドン！

「がああああ！！」

グランバードは、ゾルやテシター達を片手で掴むと外に放り投げた。

『さあ皆さん今の内に！』

グランバードは、人質の人々をケンタの居る場所まで連れて行くとセブンチェンジャーの所に急行した。

『デビルフォーン！！』

キィィィィィンンンン！！！

『ぐあああああ！！』

『食らえ！』

ドピューン！！

『がああああ！！』

セブンチェンジャーは、ドライアスとロボットに乗ったシュラの連携攻撃に押されていた。

『ブレスタージェット！！！』

セブンチェンジャーの後ろからグランバードがブレスタージェットを呼び出す。

バッバッバッ！！

ブレスタージェットは、ミサイルをドライアス達にお見舞いした。

ブレスタージェットは、グランバードの正面に装着する。

『フォームアップ！ジェット合体グランバード！！』

グランバードは、合体を終えるとセブンチェンジャーの後ろに自分が来た。

『遅くなってすまない。』

『気にするな・・・行くぞぉ！！』

『おう！』

セブンチェンジャーはドライアスを、グランバードはシュラが乗ったロボットを相手にしていた。

『チェンジャーメッサー！！』

セブンチェンジャーは、胸の飾りを外すと手裏剣をドライアスに投げ飛ばした。

『こしゃくな！』

ドライアスは、デスブレードで攻撃をするがグリフォンやジェット機などにセブンチェンジャーが変形して上手く攻略できない状況である。

グランバードは、両腿辺りの部分が開くとライフルの様な武器を出した。

『グランキャノン！』

ヴィィィィィィ！！！！

グランバードの中央の宝石に素粒子が吸収されていく。

ピッピッピッピッピッ！

グランキャノンのバレルをロボットに照準する。

キラッ！

グランバードの目が光った。

ピュウウウウウウウ！！！

ドカァァァァンンンン！！！

ロボットが爆発すると1つの脱出ポットが逃げて行った。

『おのれえ・・・』

ドライアスもドライアスジェットに変形して逃げて行った。

『！？』

グランバードは、セブンチェンジャーが居ない事に気付き空を見るとジェット機に変形していた。

『じゃあな。またいつか。』

セブンチェンジャーは、空の彼方に消えて行った。

『セブンチェンジャーか・・・』

グランバードは、不思議とセブンチェンジャーが頼もしく思えた。

『これで良かったのかお嬢？』

空の彼方でセブンチェンジャーは、自分の中にいる少女に聞いた。

「うん・・・あの人達は、味方だけどまだ私達の正体は隠していた方が良いと思うの。」

『解りましたよお嬢。』

第三十話：変化自在セブンチェンジャー（後書き）

「火鳥兄ちゃんとなのはさんのお兄さんが野球勝負する事に成った！？詳しい事は、解らないけど行き成りそんな事になっちゃった。えっ！？力兄ちゃんが！？　次回太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ　第三十一話　火鳥対恭也！？　次回はお休み！」

三十一話：火鳥対恭也！？

「火鳥勇太郎！ならば正々堂々野球で勝負だ！」

火鳥の目の前に現れた男：なのはの兄の高町恭也が睨んで言う。

事の原因は、二時間前に遡る。

火鳥とケンタとヴィヴィオは、休日のなのはに誘われてなのはの実家の喫茶店翠屋来ていた。

「此処が有名な翠屋か・・・」

「ケンタ、何なんだいその翠屋って言うのは？」

「ヴィヴィオも知らないよ。」

火鳥とヴィヴィオは、翠屋の事を知らなかった。

「翠屋って言うのは、海鳴町で一番有名な喫茶店でお茶やケーキの評判が良い所さ。」

「にゃははは♪そんなにウチの実家を褒めないでよケンタくん。」

なのはは、内心嬉しかった。

「ただいまー！今帰ったよ。」

なのはが翠屋の玄関を開けると誰かが来た。

「あら?なのはじゃない!どうしたの急に?」

「実は、行き成り休暇に成っちゃったから帰ってきたんだよ。」

「そうだったの・・・」

翠屋の玄関から来た人物は、なのはの顔とそっくりな顔をしていた。

「「「・・・・・・・」」」

三人は、唖然となのはとそっくりの人をジーッっと見ている。

「あっ!すいません!此方が私の母の高町桃子です。」

「高町桃子です。ウチの子がお世話に成っています。」

「いえいえ!此方こそお世話に成っています。火鳥勇太郎です。」

「天野ケンタです。」

「火鳥ヴィヴィオです。」

火鳥は、桃子に挨拶をした。

「うわっ・・・なのはさんのお母さんってなのはさんと瓜二つだね!」

「ヴィヴィオも解んない・・・」

ケンタとヴィヴィオは、なのはのドッペルゲンガーを見ている感じがする。

「お母さん。とりあえず火鳥さん達にお茶をお願い。あとで払うから。」

「はいはい。あっ！そうだ！ねぇなのは。隣の交番勤務していた根元さん今日奥さんの槇原先生と娘さんと一緒に来るらしいわよ。」

「根元さんと先生が！？」

なのはは、突然の事で驚いた。

「なのはさん、根元さんと槇原先生って？」

ケンタが聞いた。

「根元さんって言う人は、私が小さい頃に翠屋の隣の交番に勤務していた巡査さんで今は奥さんの槇原先生と一緒に実家の近い場所で巡査部長をしている人だよ。槇原先生は、昔フェレットを拾った時に治療した所の獣医さんだよ。」

なのはは、細かく説明した。

「おかえりなのは。」

翠屋のキッチンから２０代後半の青年がやって来た。

「ただいまお兄ちゃん。皆さんこの人が私の兄の高町恭也です。」

なのはが火鳥達に紹介した。

「はじめまして天野ケンタです。」

「火鳥ヴィヴィオです。」

「火鳥勇太郎です。」

火鳥達は、恭也に挨拶した。

「高町恭也です。」

恭也も挨拶をする。

「火鳥さんですか・・・ウチの妹とは、どの様な関係ですか?」

「お兄ちゃん!」

恭也は、兄としてなのはを心配するあまり火鳥に警戒していた。

「どの様な関係と言われても・・・一緒に仕事をしたり食事を食べたりした事ある位です。」

「あちゃ〜〜〜・・・」

火鳥のこの場の鈍感差にケンタは、呆れる。

ガラッ!

すると玄関から人がくる。

「こんにちは！」

玄関から来たのは、４０代前半の男と２０代後半の女と9歳位の少女が翠屋に入って来た。

「いらしゃい・・・根元さん？」

「やあ！恭也くん。」

「槇原先生？」

「なのはちゃん、お久しぶりね。」

恭也達は、久しぶりの知り合いに行き成り会い驚く。

「お久しぶりです。」

恭也と根元は、握手する。

「今どうしているんですか？」

「本官は、なのはちゃんが小学6年生の時に勤務先が変わって実家の近くの交番で勤務いるよ。」

「私も近くで動物病院を開いているのよ。」

根元夫妻は、お互いに笑顔で笑いあう。

「あ！そろそろだ！」

ヴィヴィオが翠屋のテレビのチャンネルを変えると『疾風！アイアンリーガー！』っと言うアニメが放送している。

「もうそんな時間か。」

ケンタや根元さんの子供もヴィヴィオ同様にテレビに釘付けだった。

「４４ォォォォォソニィィィィィィィィックゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥッッッッ！！！」

『疾風！アイアンリーガー！』の主人公：マグナムエースがゴールドアームに自らの技と魂を放った。

「マグナムエース・・・パパに似ている。」

「確かに火鳥兄ちゃんに似ているかも。」

ケンタもヴィヴィオの意見に同感だった。

「ケンタくんだったかな？男なら野球より剣道をする方がカッコいいぞ。」

「えっ！？けど・・・」

「お兄ちゃん！ケンタくんに何を言っているの！？」

ケンタが困っているのを見てなのはがケンタと恭也の間に割り込んだ。

「そうですよ。ケンタが望まない事を勧めるのは良くありませんよ。」

火鳥も間に入ってきた。

「では、私と剣道で勝負してもらえませんか？」

恭也が火鳥に挑戦を申し込むが・・・・

「ケンドーって何ですか？」

ズッコン！

ヴィヴィオ以外の人達は、火鳥の前で扱けた。

「剣道って言うのは、胴着を着て竹刀って言う武器を使って戦うスポーツだよ兄ちゃん。」

ケンタが解りやすいように説明した。

「わかりました。」

「火鳥さん！」

なのはは、火鳥を止めた。

「ウチのお兄ちゃんは、小太刀二刀緒神流の免許皆伝の持ち主ですよ。今なら間に合「構いませんよ。」えっ！？」

火鳥は、そのまま道場の方に向かった。

ケンタ達も後を付いていく。

道場に着くと恭也は、胴着を着てウォーミングアップをしていた。

「ケンタこれってどうやって着るんだい？」

「これは、こうやってコレもこう結ぶ。」

ケンタは、着替え場所で手伝い終わるとなのはが防具の付け方を教える。

「いいですか火鳥さん。剣道は、竹刀で先に相手に決めれば勝ちです。腕を当てる小手と胴を当てる胴打ちに頭に当てる面があります。特に面は、真っ直ぐ入っていないと面は成立しません。良いですか？」

「ありがとうございます。」

なのはは、竹刀の使い方やルールを説明した。

「準備は、大丈夫ですか？」

「はい大丈夫です。」

「では、審判は本官がさしてもらいます。」

根元が試合の審判になった。

「礼！」

コクン！

恭也と火鳥は、頭を下げてお辞儀した。

火鳥と恭也が近づくと竹刀を持って構える。

「始め！」

根元の合図で試合が開始した。

シュッ！

恭也は、素早く火鳥の懐に潜り込むと胴を狙った。

しかし！

「ハァッ！」

パシィーン！！

【！！？】

試合を見ていた一同は、目を疑った。

恭也が狙っていた胴が火鳥の素早い剣裁きで弾き飛ばした。

「メーンーーッッ！！！！！」

火鳥が隙を狙って面を打つが恭也は、竹刀でガードして鍔ぜり合い

に持ち込むが・・・・

パキッ!!ドシィーンッッ!!!!!

【・・・・・!!】

なのは達は、目を疑った。

火鳥の持った竹刀は、恭也のガードした竹刀を割ると恭也の頭に強烈で素早い面が落下して来ようとしたが瞬時に交わし床がクレーターを描くように潰れてしまった。

「・・・!試合場が半壊した為引き分け!」

根元は、一瞬戸惑ったがこのままでは試合が出来ないので引き分けと言う形で終わりにさせた。

「す・・すいません!大丈夫ですか!?」

火鳥は、驚いて動かない恭也に謝る。

「・・・・・・」

恭也は、そのまま愕然とした。

(何故だ・・・素人に引き分けしたとは言え・・・何となく負けた気分に成るのは・・・?)

恭也は、自分のプライドが傷つかれた。

「道場をこんなにしてしまって・・責任持って修理「火鳥さん良いですよ！こう成ったのは全てお兄ちゃんが原因なんで全てお兄ちゃんに任せてあげて下さい。」えっ！？でも・・・」

「なのはの言う通りですよ火鳥さん。」

「桃子さん。」

「元々恭也が試合何かしなければこんな事に成らなかったんですから。」

「なのは・・母さん・・・」

恭也は、自分に味方が居なくなった孤独感に襲われる。

「恭也くん・・・元気を出すんだ。」

「はい・・・」

恭也は、根元の励ましの御蔭で立ち上がった。

「こうなったら・・・」

恭也は、火鳥に指を指す。

「火鳥勇太郎！ならば正々堂々野球で勝負だ！」

「野球って何です？」

ガクッ！

またまた一同は、火鳥の天然さに愕然とする。

結局ケンタ達が説明する事になりなのはとケンタが恭也を説得すると一週間後に試合（バッターとピッチャーだけの試合）で話が済んだ。

ただしピッチャーが火鳥でバッターが恭也だった。

おい！これ二人だけって全然野球じゃ無いじゃん！！

とまあ突っ込むのは、やめて。

何処かの川の近くの練習所で野球の仕方を火鳥に教えるケンタと近くでヴィヴィオとなのはが見守っていた。

「此処から投げれば良いんだな？」

「そー！そー！思い切って投げて見て！！」

ケンタがピッチャーのボールを受け止める為のグローブを持って言う。

「よっし！こうか！」

ドシィーンッッ！！！

「うわっ！」

「きゃっ！」

「ああ！」

火鳥は、誤って地面に投げてしまう。

「う～ん・・・」

火鳥は、地面を眺めている。

「もっと慎重に狙って！此処だよ！」

ケンタがグローブの方を指差す。

「うん・・慎重に・・・狙う！！」

シュウウウウウウッッッ！！！！

「うわっ！」

ケンタは、火鳥の剛速球に避けられないでいた。

空から・・・

「バルディッシュ！ハーケンフォーム！」

【了解！マスター！ハーケンフォーム発動！】

シュッ！

「・・・あれ？」

ケンタが目を開けると空に浮いていた。

よく確認するとフェイトがバリアジャケットを着ていた。

「ケンタくん大丈夫！？」

フェイトは、心配した。

「火鳥ィィィィィィ！！！！」

フェイトは、火鳥に向かって怒鳴りしばらくフェイトのお説教が始まった。

［と言う訳なんだよはやてちゃん・・・」

なのはは、事の始まりをデバイスを使ってはやてに連絡をした。

「う～ん、ここは助っ人呼んだほうがええかな」

コーヒーするはやて。そこに電話しているシャマル。

「あ！はやてちゃん！今力君呼んだわよ！」

「ブゥーーー！」

飲みかけのコーヒー盛大に吹き出すはやて。

「はやてちゃん顔真っ青ですぅ」

「し！心配あらへんよーありがとなリイン（ガタガタガタ）」

引き出しあけるはやて其処には隙間なくビッシリ入っている胃薬。

この南力ははやての幼い頃からの友で何時もトラブルを起こしてしまう体質がある。

その為かはやては、時々力の事を思う度に胃が痛く成るのでガードレスキューにカウンセリングをして貰っている。

「ウチ何も悪い事せーへんのに力君が来る度に胃薬を飲まなあアカン様になってまうんや・・・・」

『はやて・・・・全て話すんだ。そうすれば少しは、楽に成りますよ・・・・・』

ガードレスキューは、はやてを可哀想に思った。

この後はやてが救急車に向かって独り言を言う姿を度々目撃する者が多く成りシャマルの勤めている病院で二週間入院していた。

「けど大丈夫だと思うよ。ケンタくん達の話だと天野ハカセに頼んで野球の特訓をするらしいから。」

「じゃあ、力君は、応援って形で頑張って貰おうかな。・・・・ん！？　キュピーン！！　な・なんや・・・力君が何かしでかしそうな予感が・・・」

はやては、心配するがその南力は・・・

「コラー！南力！また貴様過剰防衛しに戻って来たのか！？学生の時ならまだしも社会人に成ってもかぁーっ！たとえお上が許してもこの佐津田塀介が貴様を逮捕してやる！」

「さ、佐津田のおっちゃん！！オレただ小学生にカツアゲしている不良から守っ「黙れぇーっ！言い訳は、署で聞いてやる！ティアナ逮捕するゾ！」「はい！佐津田刑事！」えっ！ちょっと！」

力は、シャマルが呼んだ呼んだ事を思い出すと・・・・「ワリィ！佐津田のおっちゃん！！」

力は、ブレイブエラゴに乗り込んでシャマルの言われた場所に向かうが・・・

「南力！貴様まだ説教は終わっとらんぞ！まてーっ！スピード違反で道路交通法に基づき貴様を逮捕する！」

「其処の車止まりなさい！１０秒以内に停車しないと公務執行妨害で逮捕するわよ！」

（はぁ～っ・・・懲りない二人だな・・・・）

ガードスターは、佐津田刑事とティアナに呆れいた。

その後南力は、署で佐津田刑事とティアナの説教地獄が二時間行われ、はやてとシャマルが力を引き取りに来た。

しかもはやては、邪神モード突入になっていた。

「は・はやて・・・さん？」

「超必殺！！お仕置き八神スペシャルぅ！！！！！」

「うぎゃあああああああああああああああああああああああああああああ！！」

バキザシュザシュグサボキボキ

「「・・・・・・・・・・」」

佐津田刑事達は、力とはやての光景に何も言えなく只見てるしか出来なかった。

はやての脳内ではどんなに足掻いた所で最終的には力が１００％悪いことになるらしい。そして力をモザイクがかかるまでに血祭りに挙げるや佐津田刑事やティアナに土下座体制に入った。

「すみません！すみません！ウチの馬鹿たれがご迷惑おかけしましたのでとにかく私が謝っておきます！すみません！すみません！」

「あ・・頭を上げてください！」

「はやて部隊長！落ち着いてください！」

佐津田刑事とティアナは、土下座をしているはやてを宥めて署から出るとガードファイヤーが署の前で止まるとギンガとスバルが降りて来た。

「力さ～んひさしぶりですぅ～」

「ギンちゃ～ん元気だったぁ～」

っと超満面の笑みで駆け寄る両者にどこぞの少女漫画の親友同士の再会場面のような空気が流れそうに成るが

ビュン！ビュン！ビュッビュビュビュッ！ビュ！

コンマ数秒の間に数手の攻防が繰り広げられ二人は距離を置いた。

「衰えてませんね」

「ギンちゃんこそ腕上げたんじゃないの」

両者の口元には赤い雫が滴り落ちていた。

それを見ていたスバルとガードファイヤーは・・・

「に・人間の動きじゃない・・・」

『不覚にもパンチが見えなかったぜ・・・・』

二人の想像以上の戦闘力に驚く二人。

「力君少し頼みたい事があるんやけど。」

「ん？なんだよ？」

力は、はやてにその頼みたい事を聞いた。

「ってオレがキャッチャーをしろと？」

「そうや！力君だから頼めない事なんよ。」

「でもなぁ・・・」

「じゃあ今度お料理作ってあげるから。」

「あいあいさー！」

力は、シャマルの料理で簡単に買収された。

天野平和科学研究所

「野球とは、妙な事を始めたモンじゃのぉ。」

研究所では、天野とジェイル、シャーリーが発明の作業をしていた。

「え～っとスパナ・・・スパナ・・・。」

「あっ！此処・・・パワーだけはあるんだぜ。何たってなのはさんのお兄さんを剣道の試合の時に竹刀が壊れて試合場も半壊する位の力なんだ。」

「そりゃそうじゃろ・・ワシとジェイル君が最初に発明したモンじゃからな。」

「問題はコントロール何だよね・・・」

「「「コントロール？」」」

天野、ジェイル、シャーリーは、火鳥のコントロールで考えていた。

「よっし！私に任せてもらえないかい？」

ジェイルがケンタに言うとまず設計図を書きそして天野とシャーリーと一緒に組み立て作業が終了し火鳥を連れて外に出た。

そして火鳥の体には、ギブスの様な物を付けられ火鳥の正面を向いた先には変な機械があった。

「これは、名投手養成ギブス。」

「「「名投手養成ギブス？」」」

ケンタ、ハルカ、ヴィヴィオは、どんな発明なのは検討も付かなかった。

「良いかい火鳥君。スイッチを入れるよ。あの的目掛けて投げてみて。」

するとギブスは、勝手に動き投げやすいフォームに変化した。

バコン！

キャッチャーのロボットに目掛けて投げた。

「す・・凄いな・・・」

「完璧じゃなこれを毎日やれば直ぐにコントロールも・・・って火鳥？」

天野が火鳥を見るとギブスを外していた。

「何やっているんだい？完全に覚えるまでギブスを外しては「ドクターもう大丈夫。覚えました。」ふぇ！？お・・・覚えた？」

ジェイルは、唖然とする。

そしてまた投げる時には、ギブスのフォームの通りに覚えていた。

シュゥゥゥゥゥゥゥゥンンンンンンンンンンン！！！！

「あ！４４ソニックだ！！」

ヴィヴィオが火鳥が４４ソニックをした事で喜んでいた。

「す・・・すげぇ・・」

キャッチャーをしていたロボットは、火鳥の力加減の無い力で壊れた。

「ん？あの車何処かで・・・ってあーーー！！」

ケンタは、研究所に止まった車を見て思い出した。
以前ヴィヴィオと一緒に漫画を買いに出かけシュラに襲われそうな所を助けてくれた南力の車だった。
「おーーーー！！もう三年も経っているのか・・・」
そう以前の力は、１８才の時に三年後の世界に訪れていた。
「あれっ！？」
ジェイルが力を見た瞬間に驚いた。
「何ですか？」
「いや君何処かで見た記憶があるんだけど・・・・・・・・・」
ジェイルは、ジーッと力を見つめた。
「何処かで会いましたっけ？」
力は、何故か覚えも無かった。
そう以前ジェイルは、ミッドチルダに居た時に飛鳥や力に連れられて爆弾の解除をした覚えがあった。
詳しいは、勇者指令ダグオンＡ-Ｓ３４話を呼んでください。
「そう言えば・・・以前火鳥さん所で迷惑かけたようやな・・・力

君・・」

「うわ・・まって下さいはやて様・・・「問答無用!!超必殺!!お仕置き八神スペシャルぅ!!!!!」」

「うぎゃあああああああああああああああああああああああああああ!!」

バキザシュザシュグサボキボキ

何故力がはやてにボコボコにされているかはジャンさん作品の勇者指令ダグオンA-S14話を見てください。

「じゃあ力君。早速火鳥さんのキャッチャー務めて。」

「へ~い。」

力は、キャッチャーの付けるプロテクターとグローブを装着して構える。

「大丈夫なの?はやてさん?」

「大丈夫や~大丈夫や~。力君は、馬鹿力だけやのぉて強固な頑丈も折り紙付きや。」

「?」

ケンタは、はやての言っている意味が解らなかった。

すると火鳥も投げる構えに入り力もキャッチャーの構えに入った。

「ふん！」

火鳥は、力に向かって投げた。

【うわっ！】

天野平和科学研究所の人々は、もう死ぬなと思い目を瞑った。

「うおぉぉぉぉっっ！！」

ググッ！！

力は、火鳥の豪速球を見事止めて力が足を着けて居た地面が少し削れていた。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫ですよ！じゃあ練習をしましょう火鳥さん。」

「はい！」

練習に入った。

その日ボールも火鳥の豪速球で耐えられず壊れていまうのが９０球以上もありその度にケンタとヴィヴィオが野球ボールを買いに出かけた。

さすがにこの一週間ご飯の時と風呂の時と睡眠時間は、取っていた。

一週間後

火鳥達は、恭也に指定された野球場に来ていた。

「こんにちは恭也さん。」

「ちぃ～～ッス！」

火鳥と力は、野球のユニフォームを着てやって来た。

「来た。火鳥勇太郎。」

恭也もユニフォームを来て待っていた。

「恭也くん！」

「根元さん。どうして此処に？」

「いや～～何。この前の事が気になって仕事有休して此処に来たんだよ。」

「ありがとうございます。」

野球場の駐車場には、ガードスターに乗った佐津田刑事とティアナが降りた。

「ティアナ、確かに南力がこの野球場に来ると言う情報が入ったのか？」

「はい、隊長陣からキャッチャーに彼だと聞きました。」

「そうか・・・・」

佐津田刑事は、ティアナを連れて観客席に入ると根元とそのファミリーに偶然会う。

「おっ！佐津田じゃないか！」

根元は、何故か佐津田刑事の事を知っていた。

「こ、これは根元先輩！お久しぶりであります！」

「おお！相変わらず真面目で堅物だな君は！」

根元は、笑顔で佐津田刑事の肩を叩いた。

「佐津田刑事？この方々は？」

「おう？そうだったな、ティアナ。この人は、根元正巡査部長で俺が巡査の時お世話に成った先輩だ。此方が奥さんの根元愛さんと娘さんの根元鈴ちゃんだ。」

「はじめまして根元の家内の愛です。」

「はじめましてティアナ・ランスターです。」

ティアナも挨拶を仕返した。

「おっ！いかんいかん！本官は、これから審判をしないといけないんでじゃあ！」

根元は、試合場に急いで向かった。

早速恭也は、ウォーミングアップのバットの素振りを開始した。

「すご～～いッス。なのはの兄ちゃんのバットの素振りが見えない位速いッス。」

ウェンディは、驚いていた。

（ふん！どうだ？火鳥勇太郎。）

恭也は、自慢の神速が使った素振りをしながら火鳥側を見ると

「フレイムゥゥゥゥゥゥッッッソニィィィィィィィィィィィクククククッッッッ！！」

火鳥は、キャッチャーの力に向かって炎が宿っている豪速球を放つ。

「おぉぉぉぉぉぉぉッッ！！」

普通は、破壊力があり更に高温の宿った玉を受け取れば間違い無く

死んでいる球を力は何故か気合いで全て受け止めた。

「・・・・・・・」

恭也は、その光景に唖然と見て冷や汗を流していた。

そして試合が開始した。

「今日も審判は、本官がする。」

何故か根元ファミリーも来ており根元が審判を務めていた。

ルールを説明する。

ピッチャーは、三回玉が投げられる。

しかしバッターが一回でも玉に当たりホームランを出したらバッターの勝ち。

でも逆にピッチャーが三回全て投げられればピッチャーの勝ちだ。

「兄ちゃん頑張って〜〜ッッ！！」

「パパ頑張って〜〜ッ！！」

観客席には、ケンタとヴィヴィオの天野平和科学研究所の人達と機動六課のメンバー陣も来ていた。

「ティアナ、もしも妙な事が起きたら直ぐに南力を逮捕するぞ。」

「解りました。」

ティアナと佐津田刑事は、観客席で南力を見張っていた。

「プレイボール！」

根元が声を出すと妙な野球の試合が開始した。

「さあ始まりました！解説は、私何時も影が薄いマリエルと・・・・」

「ゲストのギンガ・ナカジマがお送り致します。」

「では、バッターの高町恭也さんの解説をいたします。職業は、実家のお店翠屋で働いていますが武術の方は小太刀二刀御神流免許皆伝の持ち主でその運動神経も抜群らしいですね。」

「では、ピッチャーの火鳥勇太郎さんに勝てる見込みは？」

「解りませんね。」

「えっ？」

「火鳥さんも凄まじい破壊力の豪速球を投げるので両者供五分五分ですね。」

マリエルは、そう言うと試合場を見つめる。

グイッ！

キャッチャーの力が火鳥に指で合図をする。

コクン

火鳥が頷くと投げの構えに入る。

シュッ！

「ゴロ？」

「いや違うゴロに見えるがギリギリ地面に当たっていない。」

「えっ？」

トーレの言葉にケンタは、驚く。

実際に地面スレスレの位置から投げていた。

「フッ！」

グイッ！

恭也は、余裕に笑うとバットの持っている位置を変えて下向きにした。

シュッ！

恭也は、バットを力一杯振った。

観客席の一同は、火鳥の投げたボールが当たると確信した。

しかし！

ギィィィィ！！

恭也のバットは、火鳥のボールが当たっているには当たっているが火鳥の馬鹿力は、恭也の想像以上の力で恭也の足も後ろに後退していく。

「タアァァァァ！！」

カコン！

恭也は、バットで軌道を変えてファールにした。

「ファール！」

根元の判定もファールだった。

「！？」

恭也は、バットを見ると火鳥のボールが当たった部分を野球のボールの形で残っていた。

（バカな・・・鉄バットだぞ！？）

恭也は、驚く。

キャッチャーの力は、次に使うボールを火鳥に渡した。

（面白い！本気に成るか！）

恭也の目には、熱い闘志が宿って来た。

火鳥は、第二回の投げの構えに入る。

シュッ！

今度は、フォークボールで変化球を放つ。

「神速！」

恭也は、小太刀二刀御神流の技神流をバットでフル活動させた。

カコン！

「ファール！」

またまたファールを出した。

「いよいよ三回目だ・・・・」

「どきどき！」

ケンタ達は、三回目を集中しながら見守る。

「そろそろ本気と行くか・・・・」

カチィッッ！

恭也は、手首と足首に付けてあるリストバンドを外した。

ドシィーン！

かなりの重量が在るかの様に野球場が揺れる。

「最後の勝負だ！来い！火鳥勇太郎！」

「解りました・・・俺もその言葉に答える！」

ピカァァァッッ！！

「うわっ！パパがマグナムエースに成ってる！！」

「そう言う恭也さんも何故かゴールドアームみたいな雰囲気に！？」

ヴィヴィオとケンタは、手に汗を流しながら盛り上がっている。

「行くぞぉぉぉぉッッ！！」

「来ぉぉぉぉぉぉいいいいいいッッ！！」

「フレイムゥゥゥゥゥソニィィィ

「いけぇぇぇぇ！！頑張れバッター！！」

「負けるなバッター！！」

観客席から佐津田刑事とティアナが応援する。

「負けるな火鳥兄ちゃん！」

「パパガンバレー！！」

ケンタとヴィヴィオも火鳥に応援のエールを送る。

「「いけぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ」」

火鳥と恭也は、共に叫ぶ。

バコン！

「！？」

恭也の鉄バットが火鳥のフレイムソニックに耐えられず折れた。

そしてそのままキャッチャーの力の方に目掛けて向かう。

（負けか・・・・・）

恭也は、敗北を覚悟した。

審判の根元が判定を言おうとした。

「引き分け！」

「えっ？どう言う事です？」

恭也がそう言うと力が来た。

「こう言う事だよ。」

力が火鳥の投げた球を恭也に見せた。

「こ・・これは！？」

恭也は、それを見て驚く。

それは、火鳥の投げた球が真っ黒焦げに焼けて薄い皮状に成っていた。

「流石です恭也さん。俺も後１０秒も耐えられていたら負けていました。」

火鳥が恭也を誉めた。

「良かったぞぉぉぉぉぉッッ！！」

「良い試合だったわよぉぉぉぉぉッッ！！」

佐津田刑事とティアナが涙を流して拍手する。

「兄ちゃんもかっこよかったよ！」

「パパすご～～い！！」

「火鳥すごかったぞ！！」

ケンタ達は、火鳥にも拍手した。

「でもこの試合でわかった様な気がする。俺の負けだ火鳥勇太郎。」

「恭也さん・・・・・」

恭也は、自ら敗北を認めた。

「楽しかったね～～・・・」

ケンタ達は、さっきの野球の試合の話で盛り上がっていると・・・

「あ！フェイト先生！」

ケンタ達は、試合の帰り道にフェイトと会ってしまう。

「ケンタ君・・・は！」

フェイトは力の姿を見るや否やバリアジャケットを装着しバルディッシュで斬りかかった。

「真剣白刃取り！！」

力は、フェイトのプラズマザンバーを受け止める。

「な・・・行き成り何でそうなるのぉぉぉぉぉ！！？？」

重いバルディッシュを受け止めながらフェイトに聞く力。

「黙れ！お前は、はやての人生だけでなく私の生徒の人生まで狂わせる気か！！」

もはや聞く耳を持ってもらえない。

（えっ！？何だかはやてさんからどす黒いオーラが！！）

ケンタは、はやてが段々怖くなってきた・・・その時・・

ガジッ！！

火鳥がフェイトと力の首根っこを掴んだ。

「火鳥さん！？」

「は・・放せ火鳥！！」

「じゃあもう喧嘩しないって約束します？」

火鳥の介入ではやてのオーラが一瞬で消えた。

「わ・・わかった・・わかったから！」

フェイトは、諦めた。

「じゃあ約束の指きり拳万で。」

火鳥が二人の指を持つと指きり拳万の構えになる。

「「・・・・・・・」」

「どうしたんです？」

「「ゆ～び～き～り～げ～ん～ま～ん～♪う～そ～つ～い～た～ら～♪はり～せん～ぼん～の～～ま～す～♪ゆびきった♪・・・・・」」

その後フェイトは、帰って行った。

試合が終わった後火鳥達は、天野平和科学研究所に帰って来た。

「ところで力君に見せたいモンがあるんよ。」

はやては、力を連れてこうとしたが力が逃げようとした瞬間にはもう手遅れだった。

研究室から天野とジェイルが妙な椅子を持って来た。

「名付けてミラクル電気椅子じゃ。」

「は・・はやてさん?な・・何で俺こんな格好なの?」

何時の間にか力は、そのミラクル電気椅子に座らされており手首と足首を縛られていた。

「決まっているやろ～～・・・・日頃己の仕事の尻拭いしてるウチの気持ちも考えんかァァァァァ！！」

ガチャッ！

はやては、ミラクル電気椅子のレバーを引いた。

ビリビリビリビリビリビリビリビリ！！

「ギヤァァァァァァッッ！！」

力は、三時間ミラクル電気椅子をされていた。

南力：職業私立探偵。

地球の別次元に行っては、問題を起こし何時もはやてが別次元の迷惑かけた場所ではやてが土下座体制で迷惑かけた人達に謝罪している。

※はやての土下座は、勇者指令ダグオンA-Sを御参照してください。

三十一話：火鳥対恭也！？（後書き）

ケンタ

「偶然授業参観の日に転入生が来るんだって・・・火鳥兄ちゃんが授業参観来る！？ハルカの親代わりだって言うんだけど・・・ああ！！兄ちゃんはランドセル背負わなくていいの！ちょっと其処は一年生の教室だよ！俺達は、４年３組何だから。そんなんだとハルカとの約束守れないだけじゃなくフェイト先生が怒るよ！次回　太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ　第三十二話　勇太郎の授業参観　次回も世界平和！」

特別話：人気ランキング発表！

とあるホテルの会場に火鳥達宇宙警備隊や機動六課が来ていた。

事の始まりは2週間前に成る。

「じいちゃん！みんな来て来て！！」

ケンタがポストから手紙を取るとある人物からの連絡だった。

その人物とは・・・

宛先人：天使

拝啓もう秋の紅葉の時期になりました。

実は、火鳥さん達に是非とも今回の人気ランキング発表会に出て頂きたく手紙を書かせていただきました。

この手紙が着いた3時間後に皆様方のサイズに合う衣装等を勝手に決めさせておきましたのでお知らせします。

それでは、2週間後のホテルレガシィにてお待ちしております。

天使より。

【えええええええええええええ！！！！？？？？】

天野達の殆どが行き成りの人気ランキング発表会に驚いていると・・

・

ピンポーン！

「はーい！」

ハルカが玄関を開けると宅配業者が大きな箱を持って立っていた。

その中身を見ると天野達のサイズに合うスーツやドレスが入っていた。

「わ～～～い♪可愛いドレス。」

「キレイッス！」

「ミラクルかっこいいジャン♪」

「ウーノママ。これヴィヴィオに似合う？」

「似合うわよヴィヴィオ。」

ナンバーズだけで無くヴィヴィオやハルカ、ケンタも喜んでいた。

「何で僕だけスーツなの・・・？」

「私は何でゴスロリ？」

っと少し不満のオットーやチンク。

二週間後

天野達は、天使が発表するホテルの場所まで天使が用意していた車でホテル着いていた。

「あっ！ケンタくん！」

ケンタは、振り向くとなのは達機動六課のメンバーが来ていた。

「なのはさん達も呼ばれたの？」

「そうだよ。」

ちなみに機動六課陣は、ガードウィングに大半を乗せられたが半分は他のガードチームに乗せられて来たらしい。

「コラー天野！貴様等が何で其処に居るんだ！？さては会場で何かしでかす・・・「佐津田刑事落ち着いてください！」は、離せティアナ！」

何故か佐津田刑事も会場で着る衣装を着ており佐津田刑事を止めているティアナもドレスを着ていた。

「にゃ・・・にゃはははは・・・・」

なのはは真っ白な表情に成った。

「な・・なのはさん？」

何時ものなのはじゃない事に気付いたケンタは、ガードスターの所に来た。

『ケンタ達も着ていたのか。』

「うん。それよりなのはさんどうしたの？」

『いや・・・実はな・・』

1時間前

「高町ーーーーッッッ！！！何でそこでハンドルを切るんだ！！タイヤが余計削れるだろうがーーーーッッ！！！」

「にゃあああああああ（涙目）！！！」

現在

『っとまぁなのは佐津田刑事に運転面でコッテリ扱かれちまったんだよ。』

「ああ・・・そうだったんだ・・・」

ケンタ達は、招待されたメンバーが集まった事なので会場に向かう。

［ようこそお集まり頂きました！！それでは、早速ですが太陽の勇者ファイバードＳＴＲＩＫＥＲＳ人気ランキングを始めさせていただきます。」

会場には、ケンタ達がテーブルに自分の名前が書いてある席に座ると司会者の天使が人気ランキング発表を宣言した。

［それでは、まず第１０位から発表いたします！第１０位！」

１０位：ディード

「やったねディード。」

「ありがとうオットー。」

［理由ですが・・・ディードとウソ付き少年の話で自分の意思と優しさが印象に残って票を入れた読者が多かったからです。続いて第９位！］

９位：ウーノ

「ママおめでとう！」

「ありがとうヴィヴィオ。」

［コレも理由として赤ちゃん救出作戦やデビルストーン謎などの原作のリリカルなのはＳＴＲＩＫＥＲＳと違いウーノのオリジナルの過去や家族が居たと言うストーリーに票を入れたのがありました。続いて第８位！］

８位：ガードスター

ガードスター達ガードチームは、外で待機していて会場の様子を通信で聞いていた。

『良かったじゃねぇか！』

『まさか８位にランキングされているとはな・・・』

［ガードスターは、何時も佐津田刑事やティアナを影ながらフォローしていたり大奮闘！ティアナ・ランスターでもティアナの言葉を信じたりティアナを助ける為に自分を盾にする等の印象があると言うメッセージがありました。続いて第７位！］

7位：ガードファイヤー

『イヤッホォー！！やったぜ！』

［良かったねガードファイヤー！］

スバルは、デバイスでガードファイヤーに連絡を入れて褒め称えた。

［これは、過去があるから今があるの話でミラクルタイムマシーンで5年前のミッドチルダにタイムスリップしたガードファイヤーがスバル、ギンガを助けてスバルがその影響で局員を目指す事に成った事が良かったとのメッセージを頂けました。第6位！］

6位：フェイト・T・ハラオン

「私がランキングに入っていたの！？」

［まあ戸惑うのもわかりますがフェイト先生の過保護！？でケンタを守る為に宇宙警備隊やジグナム達に反発する所が大人の女性と言う印象を貰いました。まあこの作品でも一番常識があり自分の重い過去も持っている彼女にしか出来ない事だと評価されました。］

「え／／／／／／そんな・・私は、只自分の生徒の事を考えてそんな行動に出たんだと思います。」

［続いて第5位！］

5位：佐津田刑事（塀介）

「このオレがランキングに入っていたのか！？」

［意外な事実ですが彼は、現場のベテランで何時も新人のフォワード達やティアナにも慕われていたり部下の言葉を信じて見る等が良いと言う言葉を貫っています。失敗しても、まっすぐに正義を貫いている人と言う言葉が感想でも書かれる位の印象です。続いて第４位！」

４位：ティアナ・ランスター

「あ・・あたしも！？」

［はい、最後まで佐津田刑事を信じたり人々の安全を優先している所が良いとあります。続いて第３位！」

３位：ヴィヴィオ

「わ～い！わ～い！ヴィヴィオが３位だぁ～♪」

「よかったわねヴィヴィオ♪」

「うん！」

［よかったね～～～・・・えっと理由としますとジャンさんの作品の勇者指令ダグオンＡ，Ｓで力君や楓ちゃんがファイバードの時代で自分の事を素直に受け入れている所が良かったとあります。続いて第２位！」

２位：火鳥勇太郎

「皆さんありがとうございます。」

［この作品の主人公が2位は嬉しい限りです。火鳥さんの天然さも印象があったり料理や運動でも印象に残ったっと書いてくれました。続いて第1位！］

1位：スバル・ナカジマ

『良かったじゃねぇかスバル。』

「ありがとうガードファイヤー。」

［スバルは、この作品のヒロイン的な存在ですね。何時もガードチームと一緒に行動し毎回毎回供に戦う所が良いんだと書いてくれました。以上で人気ランキングは、終了です。最後に皆さんで言いましょう。］

太陽の勇者ファイバードＳＴＲＩＫＥＲＳの全メンバー

【これからも応援よろしく！！】

特別話：人気ランキング発表！（後書き）

次回から次回作の勇太郎の授業参観を出します。

第三十二話：勇太郎の授業参観

とある昼下がりの休日

「明日じゃと！？」

「先週言った言ったじゃない！！」

ハルカが天野に何かで怒っていた。

その怒っている原因は・・・・

「授業参観なんで聞いとらんぞ・・・」

「まったく！」

ハルカは、呆れている。

「爺ちゃん、本当は学校に行きたくないんじゃないの？」

「ハカセ学校で昔暗い思い出もあったんじゃないんッスか？」

「はっは～ん・・・そうとう出来が悪かったんじゃない？」

ケンタとウェンディとハルカが天野をからかった。

ギック！

天野の顔は、図星だった。

「何か問題でも起こしちゃったとか？」

セインも混ざってきた。

「うるさいね～・・・エジソンだって小学校の時は、成績が悪かったんじゃ。」

かなり落ち込む天野。

「あの～・・」

火鳥とヴィヴィオも入って来た。

「ハカセの様な天才科学者が小学校から勉強をやり直すんですか？」

「大人も小学校から勉強するの？」

ガクッ！

一同は、扱けた。

「違うよ兄ちゃんヴィヴィオ。授業参観だよ。」

「「授業参観？」」

「オレ達が勉強している所をパパやママ達が学校に行って見に来るんだよ。」

ケンタが説明する。

「あたしのパパとママは、ドイツに居るから代わりにお爺ちゃんに来て貰おうと思ったんだけど・・・」

ハルカは、そのまま天野を睨む。

「ケンタは、パパとママが来るのか？」

「ママが来てくれるよ。」

「じゃあハルカは、寂しいよね。」

「別に・・・誰かに来て貰わないといけないって事も無いし！」

ハルカは、天野に向かって強く言う。

「俺が行っても良い？」

火鳥がその言葉を言う。

「本当！？」

ハルカの表情が嬉しくなった。

「俺で良ければ！」

「良いに決まっとる！ハルカの保護者代理で行けば問題ない！」

「行かずに住んで良かったッスねハカセ。」

ウェンディが天野に言う。

「馬鹿モン！世界平和を守る為には、学校がどう言う所なのかを知っておく事を火鳥が知っとく事も大切な事なんじゃ！解るじゃろ？」

でも下心としては、火鳥に行ってもらって嬉しい天野。

「はい！」

「よぉ～し！一杯予習して火鳥さんに良い所を見せなきゃ！」

その夜ハルカは、予習しながら自分と両親が写っている写真を見ていた。

翌朝

「ふあ～～・・・・・」

ジェイルは、昨日の夜研究が何時も以上に没頭し過ぎて寝る時間が遅い為欠伸をしていた。

「おはようございます。ドクター。」

「ああ、おはようウーノ。悪いけどコーヒーもらえるかい？」

「はい。」

ウーノは、コーヒーをカップに淹れてジェイルに渡す。

「おはようございます。ドクター。」

火鳥がやってきた。

「おはよう火鳥君。」

火鳥は、玄関に向かう。

「ん？ブゥーーーーーーッッ！！か・・火鳥君何背負って居るんだい！？」

火鳥は、ランドセルを背負っている姿を見てジェイルが驚いてコーヒーを吹いて聞いた。

「えっ？」

「何を背負って？」

「ランドセルです。」

何の迷いも無く答える火鳥。

「それは、そうだけども。」

「学校に行くんですよ。」

「学校？」

「ハルカの授業参観なんです。」

「火鳥！なんちゅう格好しとるんじゃ！」

天野も驚いて来る。

「学校に行くんです。」

「それは、生徒だけだよ！保護者がランドセルなんか背負って来たら笑い者だよ！」

ジェイルが火鳥に言う。

「そうなんですか・・・残念だな・・・。」

こうして火鳥は、ランドセルを置いてケンタ達が通う海鳴市立第４小学校に行く。

「火鳥！授業参観は、午後からじゃぞ！」

ジャンゴも海底基地では・・・

「出来たぞーーーー!!」

ジャンゴは、何か変な物を作り上げた。

「ついに完成したか・・・コレさえあれば光り輝く黄金は、手に入る。」

ジャンゴとレジアスは、不適に笑う。

「黄金だと?そんな物が目的でソイツを作ったのか?」

後ろにいたシュラとゾルが居てシュラが言う。

「何度言わせれば解る!大体お前等が来てから膨大な金が泡の様に消え取るんだ!」

「そうだ!資金を提供しているコッチの身にも成って見ろ!」

ジャンゴとレジアスが怒鳴る。

「ふん!金が無くったって地球位征服出来る。」

ゾルが言う。

「貴様等は、解っていないんだ!攻撃用のメカを作るのにどの位の

金が無くなっていると思っている!?」

「まぁ勝手にやれ・・」

「オレ達は、手を出さないからな!」

ゾルとシュラは、その場を去る。

「貴様等に頼らなくてもワシ等だけで黄金を手に入れてみせる!」

こうしてレジアスとジャンゴの作戦が始まった。

ケンタ達は、学校の教室に着くとクラスメイト達が何か騒いでいた。

「どうしたんだよ?」

「おうケンタ知ってるか?今日転入生が来るんだってよ。」

「マジっで?」

「あ!フェイト先生が来たぞ!」

クラスメイトの一人が言うとフェイトが来て全員が席に着いた。

「今日からみんなと一緒に勉強する転入生っを紹介します。」

フェイトは、教室のドアを開けると紫髪の少女が入って来た。

「今日からみんなと一緒に学ぶルーテシア・ボルボちゃんです。ルーテシアちゃんは、外国出身でお父さんの転勤で日本に来ました。まだ言葉とか解らないかも知れませんが仲良くしてあげてね。」

【はーーい！！】

クラスメイト達は、元気に返事した。

「今日の授業参観には、先週言った通り尊敬する人の作文を発表します。」

「はい！」

クラスメイトの一人がフェイトに手を上げた。

「フェイト先生にも尊敬する人とか居るんですか？」

「そうだね・・・居るよ。」

フェイトが話続ける。

「先生の家庭はね、少し複雑な家庭でお姉ちゃんが居たんだ。でも私が物心が付いた時には死んでいて大変でね。お母さんに何時もお姉さんは優秀だったって言って虐待されていたの。」

クラスメイト達は、フェイトのつらい過去を聞いて悪い気持ちに成った。

「そんな事が続いて先生も疲れて交差点で倒れた時トラックが来てダメかと思った瞬間に一人の男の人が先生を助けてくれたんだ。その人との出会いでその人がお母さんを説教して和解も出来たんだ。でも先生のお母さんもその後に病気で死んでしまったの。でもその人は、「どんな時でも挫けてはいけない。君の人生はこれからなんだって。」だから今の先生が居るのはその人の御蔭です。」

「スゲェー！やっぱりフェイト先生の尊敬する人はすごいなぁ！」

クラスメイト達は、感動した。

給食の準備をしていると誰かが教室に入って来た。

「すいません。屋上を掃除したいんだけど何処に行けば良いのか解る？」

「あれ？掃除のおばちゃん休みかな・・・？若いお姉ちゃんが掃除をしている。」

ケンタは、女性に聞く。

「ああ、おばちゃんは今日急に来れなく成ったからあたしが代理で来たんだよ。」

ガチャン！！

フェイトは、その掃除をする人の顔を見た瞬間飲んでいた牛乳瓶を落として割った。

「ひ・・東飛鳥・・・・」

そしてフェイトが絶望の顔に変わりますね。

フェイトの脳裏には、この東飛鳥三等陸士の原因でノイローゼ状態に成った記憶が過ぎった。

それを見た他の男子生徒（ケンタ以外）は・・・・・

「フェイト先生をあんなに怯えさせる何て・・・・」

「許せねぇ！あんなに優しいフェイト先生を！絶対に許せねぇ！！」

「俺達男子に対する宣戦布告だ！」

等と男子生徒達は、飛鳥さんを睨む。

（な・・何なの！？あの子達？）

流石の飛鳥さんも動揺している。

とりあえずこの場の空気に従って屋上を探す飛鳥。

「ルーテシアちゃんは、今日来たばかりだから授業がどんなのかを見といてね。」

コクン

ルーテシアは、フェイトの言葉に頷いた。

（それにしても兄ちゃん遅いな・・・）

「・・・・・・」

ケンタは、火鳥が来ない事に心配する。

ハルカも不安そうな顔に変わる。

授業参観が始まっても火鳥が来ない。

無理も無いその理由は・・・・・

「何処に居るんだハルカとケンタは?」

簡単に言えばケンタ達の居る教室が解らない。

「どうなされたんですか？」

火鳥が振り向くと初老の女性が居た。

「あの・・教室が解らないんですが・・・・おばさんも解んないんですか？」

「いいえ私は、この学校の校長です。」

「校長さんですか。」

「って探してらっしゃる教室は？」

「四年三組です。」

「では、着いて来てください。」

火鳥は、教室まで着く間にハルカの事を話した。

「ハルカちゃんの保護者代理ですか。」

「はい。」

「ハルカちゃんは、小さい頃から御両親と離れて暮らして寂しい筈ですよ。」

「ん～～～。そうでもないみたいですよ。」

「口に出さないだけです。本当は、御両親に来て貰いたいんですよ。ましてドイツに居る御両親は、それ以上に飛んできた筈です。」

「それじゃあファイヤージェットでドイツに居る両親を連れてきましょうか？」

「？」

「おっと！これは、秘密でした！はっはっはっはっはっはっ！」

火鳥は、笑って誤魔化した。

その頃教室では、ハルカが火鳥を待っていた。

「それでは、先生が言った人から順に前に来てハルカちゃん。」

「！はい！」

ハルカは、机から立つと作文の紙を広げて読もうとした。
するとテレビが勝手に起動した。
「あれ?リモコン何って弄っていないのに何で?」
フェイトは、リモコンでテレビを切ろうとしたが全く消えない。
テレビの画面から目玉の様な画像が流れ生徒達は、驚く。
ウィィィィィィィィィィ!!
【!?】
「?」
ハルカは、テレビが掛かった時には後ろを見て火鳥を待っていたのだが後ろの保護者達の様子に異変を感じ前を振り向いた。
「あ!・・・・・・・」
ハルカも生徒達と一緒に目玉を見て動かなくなってしまう。
『御嬢!』
ルーテシアの鞄から電子音の声が響くと何かに守られたかの様なバリアーの膜の様な物に守られた。
ガラッ!

「「！！」」

火鳥と校長がケンタ達の居る教室に入ると保護者達が自分の子供に駆け寄り言うが子供達は、全然反応が無い。

「これは、どうしたんだい！？」

飛鳥も異変に気付いたのか教室に来た。

「ケンタ！ケンタ！！」

火鳥は、ケンタを揺らしても反応が無い。

「ハルカちゃん！ハルカちゃん！！」

フェイトもハルカを揺らすがケンタと同様だった。

「！？」

飛鳥は、テレビを見ると駆け出す。

「タァッ！！」

ドカァン！！

飛鳥は、鉄膝蹴りでテレビの画面を壊す。

「！？何だって！？」

飛鳥がテレビを壊したが子供達は、動かない。

一方天野平和科学研究所では・・・

【今晩のお夕飯のおかずにどうですか?】

お昼の料理番組を見ながら天野達は、見ている。

ヴィヴィオとチャンプは、目をキラキラさせながら涎が出ような表情だった。

【まず材料に・・・ザー・・・・・・［うっはっはっはっはっはっはっ！！ワシ等は、Ｄｒ．ジャンゴとＭｒ．ビスマルクだ！］

行き成りテレビに異変が起きるとＤｒ．ジャンゴとＭｒ．ビスマルクが写った。

「ジャンゴ！」

「レジアス！」

天野とジェイルは、テレビの二人を睨む。

［日本政府と時空管理局に告ぐ！］

［良いか！よく聞けよ！今何十万もの小学生を人質に取った。］

「「人質！？」」

天野とジェイルは、どう言う事なのか解らない。

［嘘だと思うのなら学校を見るがよい！誰一人ピクリとも動かない筈だ！］

「動かんじゃと！？」

「どう言う事だ！？」

［ほって置けば筋肉が震え始めてそして最後には、心臓も停止して死んでしまう！］

［三時間だ！子供の命が欲しければ三時間以内に十万トンの金塊を地獄谷まで持って来い！］

「十万トンの金塊だと！？」

［要求通りじゃないと子供の命は、無いぞ！］

［［グッ八八八八八八八八！！！］］

テレビは、元通りに作動する。

「ハカセ！学校に行きましょう！」

「こりゃ！こうしてはおれん！」

天野とジェイルは、急いでケンタの通う学校に向かう。

Ｄｒ．ジャンゴとＭｒ．ビスマルクの小学生大量人質事件について時空管理局と日本政府の合同緊急会議が開かれているが会議は、困難を極め要求の十万トンの金塊を要求されて会議が難航いていた。

天野とジェイルは、病院にいるシャマルを連れて小学校に行くが子供達を調べているシャマルの顔が険しい顔のままだった。

「様子はどうじゃ？」

「かなり脈拍数が落ちています。このまま筋肉の硬直が続くと大変危険です！」

火鳥が来た。

「ハカセ！西側の方も同じです。」

ジェイルも来た。

「東側も同じです！テレビを見ていた子供達全員がこの様な状態です。」

「ジャンゴとレジアスめ！催眠術か何かを使いおったか・・・兎に角火鳥とりあえずお前は、地獄谷に行け！」

「ジャンゴとレジアスの悪巧みを何としても阻止するんだ。」

「解りました！」

火鳥は、教室を出るとファイヤージェットを呼び出し地獄谷に向かった。

「？あれルーテシアちゃん？」

フェイトは、ルーテシアが居ない事に気付く。

（けど・・・何でアノ子だけ大丈夫だったんだろ？）

フェイトは、ルーテシアの事を考えつつケンタ達を心配する。

国会議事堂では、トラックに金塊を載せていた。

「一万トンの金塊を用意するのが精一杯だった。」

「後一週間あれば要求通りの物が出来ると伝えてくれ。」

警視総監：冴島十三とノルウェールが佐津田刑事とティアナに言う。

「解りました！冴島総監殿！空将殿！この佐津田塀介ならびにティアナ・ランスター三等陸士。我が命に代えて任務を遂行してみせます。」

佐津田刑事が敬礼するとティアナも敬礼して地獄谷に行く。

「今地獄谷に到着しました。」

火鳥は、天野に連絡をしている。

［様子は、どうじゃ？］

「まだ奴等は、現れません。」

「ジャンゴとレジアスは、其処を取引にしている。兎に角待ち伏せするんじゃ。」

「解りました。」

地獄谷の近くでは、佐津田刑事達は来ている。

「あの山を越えれば地獄谷です。」

「解ったティアナ。後二十分か・・・ん!?」

上から大きな岩が降って来た。

『やばい!』

ガードスターは、急ブレーキを掛ける。

「くっそ!こんな時に全く!」

佐津田刑事達は、岩の方に行こうとすると岩が砕けてロボットが出て来た。

「Ｄｒ．ジャンゴとＭｒ．ビスマルクか!」

「待っていたぞ!」

ロボットのコクピットには、ジャンゴとレジアスが乗っている。

「地獄谷では、無かったのか!?」

［約束通りに事が運ぶと思ったか?それは、大間違いだ!］

「えっ?ん!?」

ティアナは、後ろのトラックを見るとテシター達が金塊の入ったケースを運んでいる。

［よっし!そのまま運べ・・・ん?その一台だけか?］

Ｍｒ．ビスマルクが聞く。

「そ・・・それは・・・」

ティアナは、どうしていいのか解らなかった。

［ワシ等は、十万トンの金塊と言った筈だ!］

「・・・「用意出来たのは、それだけだ!」佐津田刑事・・・」

［［何だと!?］］

「すまん!これで何とか子供達の命を助けてくれ!」

佐津田刑事は、土下座をして頼む。

「お願い!子供達を助けて!後一週間で要求の物が用意する!」

ティアナも土下座をする。

［五月蝿い！ワシ等は、約束を守らん奴は大嫌いだ！ガキ供の命は、無いもの思え！］

「ちょっとアンタ達！さっき事が運ぶ［五月蝿い！］

するとテシターの一人がケースに付いていた発信機を見つけてジャンゴ達に見せた。

［何！？これは発信機じゃないか！］

（（しまった！））

［小賢しい真似をしおって！金は、足りないし何て奴等だ！こうしてやる！］

ビスマルクがロボットを操作するとロボットの腕で佐津田刑事達を谷底に突き落とした。

『いかん！』

ガードスターが動き出す。

「ティアナ！塀介のおっさん！！トライダグオン！！」

茂みで見ていた飛鳥が叫ぶとブレスレットを起動させると身体に紅のプロテクターが装着された。フルフェイスのマスクが装着される。

「ウィザーアスカ！！」

『バトルアップ！チェンジ・ガードスター！』

ガードスターは、ロボットに変形した。

ガードスターは、警官数人をウィザーアスカが佐津田刑事とティアナを救出すると安全な所に降ろした。

「ふあ～～～・・・た・・助かった・・・ん！？」

佐津田刑事が上を見ると金塊の入ったケースをロボットがテシターを使って入れていた。

「引き上げるか？」

「そうだな・・・［Ｄｒ．ジャンゴ！Ｍｒ．ビスマルク！］

コクピットで話していると佐津田刑事の声が聞こえる。

「頼む！子供達の命を助けてくれ！この俺はどうなっても良い！」

「あたしもどうなっても良い！だから子供達の命を助けて！」

［五月蝿い！］

レジアスは、ボタンを押すと機関銃が出て来て佐津田刑事達に来る。

バッバッバッバッバッバッバッバッバッ！！！

『「ぐあああああああ！！」』

ガードスターとウィザーアスカが佐津田刑事達の盾になる。

ドピューン！！

すると空からレーザーがロボットを撃つ。

空に居たのは、ファイヤージェットだった。

「ファイヤー・・・ジェェェェット！！」

火鳥は、空からファイヤージェットを呼び変形し巨大なロボットに変わり火鳥も変化したファイヤージェットに向かって宙を飛び体が火の鳥の様に成りロボットの中心に乗り移った。

『チェェェンジィィ・ファイバード！！』

火鳥は、ファイバードと成った。

「融合合体！！」

ウィザーアスカの車：ウィザーエヴォーラが人型に変形するとウィザーアスカと一体化した。瞳が淡い緑に光る。

『ダグ！ウィザー！！！』

［来たなファイバード！ダグオン！］

『いたいけな子供達を人質にして悪事を働こうとは許せん！』

ガードスターとダグウィザーは、スターブラスターとウィザーブレードを構える。

するとその間に

「「待って（くれ）～～～～～～！！！」」

『『『？』』』

ティアナと佐津田刑事が来た。

「子供達が助かるまで手を出さないでくれ！」

「お願い！」

『ティアナ・・・』

ダグウィザーは、ウィザーブレードの構えを解く。

［ガッ八八八八八八！！やわな宇宙警備隊と宇宙警察め！！］

ポチッ！

バキューン！

『ぐあ！』

ガードスターは、レーザーでスターブラスターを弾かれた。

［貴様等も子供達と同じ運命にあわせてやる！］

ドピュ！！

『『『とう！』』』

ファイバード達は、ジャンプして回避したがそのジャンプしている隙に液体が足に付いて着地すると身動き出来なかった。

［それは、接着剤だ！］

『何！？』

ドピュ！ドピュ！

ファイバード達は、接着剤に大半を付けられて動きが出来なかった。

「Ｄｒ．ジャンゴ！Ｍｒ．ビスマルク！もうやめてくれ！！」

「我々は、一切抵抗しない！残りの金塊も必ず用意するわ！」

「だから子供達と彼らを助けてくれ！」

［五月蝿い！お前等もこうしてやる！］

ジャンゴは、子供達を人質にした技で佐津田刑事達も同じようにした。

（そうか・・・子供達を人質にしたのは超音波だったのか！？）

ピキッ！！

その時ダグウィザーの何かが切れた。

『・・・・あたしの我慢も此処までだ！！（某刑事ドラマ副署長風）』

パキ！！

ダグウィザーは、そのまま接着剤を根性で破るとロボットに目掛けて向かう。

『おらあああああ！！！』

ダグウィザーの蹴りの嵐がロボットに効く。

［くっ畜生！！］

『チェンジャーメッサー！！』

バコン！

［何！？］

何時の間にかセブンチェンジャーが来て動けないファイバード達の所に来た。

『セブンチェンジャー！』

『随分と困っている様だな・・・』

セブンチェンジャーは、人型からジェット機に変形するとミサイルの発射口から液体がファイバード達の身体に掛かると接着剤も取れた。

『俺の今日の役目は、此処までだ！行けファイバード！』

『よっし！』

『ファイヤー・・・シャトォォォォル！！』

ファイヤーシャトルがやって来た。

グランバードもこのまま上半身と下半身がそれぞれ脚部と上半身のパーツに変形する。

ファイバードは、グランバードを支える柱の様なパーツに変わり脚部と上半身のパーツを装着する。

『フォームアップ！サイキョオオオガッタイィィィ！グレートファイバァァァドォォォッッ！！』

最強合体グレートファイバードに合体した。

『うおおおおおおおおお！！！』

ドシーン！！

『おりゃ！おりゃ！！』

バコン！バコン！！

グレードファイバードは、ロボットにタックルするとダグウィザーと供に殴る。

その弾みで入れていた金塊のケースが外に出てしまう。

［ああ！金塊が！］

ジャンゴとレジアスは、急いで拾うが・・・

『余所見寸じゃねえええええええええええ！！！！！』

っとダグウィザーの蹴りの嵐を食らって拾えない。

『ガードスター！目を狙え！ダグウィザー！接着剤が出ている所を壊せ！』

『解った！』

『あいよ！』

バキューン！

ドカーン！

『おりゃあああああ！！』

バコン！

［しまった！！］

『『『今だ！グレードファイバード！！』』』

グレートファイバードは、後ろからフレイムソードを取り出し通常のより大きく変化した。。

『フレイムソード！！』

グレートファイバードは、大きくなったフレイムソードを持って構える。

グレートファイバードも額が光出した。

『フレイムソード・チャージアップ！！』

剣の刃に不死鳥の様な炎を纏ロボット目掛けて構えた。

『とわぁ！えええいいいい！！！』

シュパ！！

ドオオオンンン！！

ロボットは、グレートファイバードの必殺技で爆発して二つの脱出ポットが逃げて行った。

「はっ！」

「あれ！？」

ケンタやハルカが正気に戻った。

「ケンタ君！！」

ギュウウウウウウウウウ！！！

フェイトは、力一杯ケンタを抱き締めた。

「フェイト先生にママもどうしちゃったの！？」

ケンタ達は、何が何だか理解できなかった。

「お爺ちゃん何で居るの？ジェイルさんまで・・・？」

ハルカは、後ろを振り向いたが火鳥は居なかった。

「ん～～～～・・・はっ！」

地獄谷の近くで佐津田刑事達は、目を覚ました。

「佐津田刑事！」

「どうした！？」

トラックの金塊が元通りに置かれています。

「何！？」

佐津田刑事も確認すると元々の位置に金塊が置かれていた。

「俺は、一体？」

（飛鳥さん・・・ありがとうございます。）

＊ティアナは、飛鳥がダグオンだと知っているが宇宙警備隊の存在には未だに気付いていない。
それは、ミットチルダの事件の時に深手を負っていて寝ていた為宇宙警備隊が誰なのかフォワード達の中で彼女だけわかっていません。

「セブンチェンジャー今日もありがとう。」

空中では、セブンチェンジャーと中に居る仮面の少女が話している。

『な～に御嬢を守れって王子・・・いや陛下からの遺言だからな・・・さぁ早く学校に戻ろう。』

コクン！

キンコーン！カーンコーン！！

「火鳥さん来なかった・・・・「すみませ～～～～ん！！！」あ！」

廊下から火鳥の声が聞こえた。

「滑り込み？」

「アウトーーーー！！」

こうして火鳥の長い授業参観が終わった。

「うん大丈夫。ありがとう。」

ハルカは、ドイツにいる両親と国際電話で話している。

「じいちゃん。今度こそ授業参観に行った方が良いじゃない？」

「大丈夫じゃ！のう火鳥！」

「はい次こそは！」

「ううん！今度は、ジェイルさんに頼むわ。」

「えっ！？別に構わないけど・・・」

「決まり♪」

「そうですか・・・・」

ちょっとがっかりする火鳥だった。

第三十二話：勇太郎の授業参観（後書き）

ケンタ

「今日は、フェイト先生のアパートに兄ちゃんと一緒に来たら・・・何とあの有名な歌手のダニエル・ジャクソンのチケットをもらったんだ。ええ！？あのダニエルの友人がフェイト先生なの！？あれ！？恭也さんだ！ってなんだか物騒な物を持ってどうしたのかってダニエルの警護の仕事ーーーーーー！？　次回　太陽の勇者ファイバードｓｔｒｕｉｋｅｒｓ　第三十三話　目覚めし伝説の勇者達　次回も世界平和！」

第三十三話：目覚めし伝説の勇者達（前書き）

＊２０１１年３／１１　午後２：４５頃に地震が起こりました。東北の地震で多くの命が亡くなりました。この場を持ちましてご冥福をお祈りします。

第三十三話：目覚めし伝説の勇者達

「おじゃましま～す。」

「お邪魔します。」

とある休日にケンタと火鳥は、フェイトの住んでいるマンションに招待された。

「どうぞ。」

フェイトは、部屋のドアを開けると火鳥達を招いた。

「ここがフェイトさんのお部屋ですか。」

「うわ～！綺麗だな～！」

ケンタと火鳥は、フェイトの部屋の清潔さに感動する。

「テレビでもつけるケンタ君」

「はい。」

フェイトに勧められてケンタ達は、テレビを見ると。

【たった今ダニエル・ジャクソンが成田空港から出てきました。】

テレビには、サングラスをかけた男が報道人にインタビューされている。

「うわ♪そうかダニエルが今日から日本に来日しているんだっけ。」

フェイトは、懐かしそうにダニエルの映像をみている。

「ダニエル・ジャクソン？」

「世界平和と人々の幸せの為に働いている世界的に有名なアーティストだよ。」

フェイトは、火鳥に一冊の本を渡す。

「『優しさの翼を胸に』？」

火鳥は、本を捲ると沢山の病気や飢餓で苦しむ人々を介抱するダニエルの絵がある。

「貧しくてお医者に掛かれない子供達の為に自分のお金で孤児院を建てたり病院を建てたりしている自分の事を顧みず頑張っている人だよ。」

「フェイト先生は、何故ダニエルを知っているの？」

ケンタは、フェイトに聞く。

「先生が学生の時にダニエルが一年間だけ在学をしていた時があったの。私がうっかり教科書を忘れた時にダニエルがコレが必要なんでしょ？って言ったのが友達になったきっかけだったよ。それから管理局の仕事が無い間だけダニエルの手伝いをしていたの。そうね・・こんな話があるな・・・」

「大変だ！ダニエル！」

フェイトとダニエルが事務所で孤児院の子供達の為に折鶴を作っているとマネージャーが急いだ様子でダニエルに駆け寄った。

「どうしたんだいジョセフ？」

「近くの病院でもう長く命が無い少年が最後に君に会いたいと両親が事務所に来ているんだ。」

「わかった。その病院は？」

ダニエルは、ジョセフからその病院の場所を聞くと急いでフェイトもジョセフと一緒に病院に行った。

ダニエル達は、その病院に着くと急いでその少年の病室まで来た。

すると少年は・・・・

「わ～い！ダニエルだ！ダニエル・ジャクソンだ！」

少年は、体の弱った状態のままダニエルが来た事で喜んでいる。

「ダニエル！僕ね！僕ね！」

少年は、ダニエルに質問をしてダニエルも誠実に答えた。

ポロ・・・

フェイトとジョセフは、こんな幼い命がもう直ぐ終わると思う度に目から涙が止まらなく少年に見えない様に後ろを向いたがダニエルがフェイトの手を取ると首を横に振る。

「フェイトダメだよ。これは、僕達の仕事じゃないか。」

フェイトは、ダニエルのその言葉を聞いて涙を堪えた。

そして・・・

「午後４：５０、５６秒。息を引き取りました。」

医師が悲しい口調で宣告した途端に・・・

ダニエルの瞳から大量の涙が溢れていた。

フェイト達もつられて涙が溢れ出た。

そしてダニエルの留学が終わると記者が「一番良かった事は?」と聞かれてダニエルは

「優しくて良い親友が出来た事です。」

ダニエルは、それ以上の事を言わずに去った。

「なるほど・・・」

火鳥達は、フェイトの説明を真剣に聞いているとインターフォンが鳴りフェイトが行き戻ると一通の手紙が入っていた。

「ダニエルからだ。」

フェイトが手紙を開けると読み読み始める。

拝啓お元気ですか？

僕も忙しいけど毎日が充実しています。

もう直ぐ此方に日本に来日するのでフェイト以外の招待パスを2枚送ります。

ＢＹダニエル・ジャクソン

フェイトは、読み終わると正体パスをケンタと火鳥に渡す。

「フェイト先生良いの！？」

「こんな大事な物を僕達で良いのですか？」

「大丈夫、私以外にも多分なのはの家にも来ているから。」

「なのはさんの所に？」

火鳥がフェイトに聞く。

「うん。ダニエルは、なのはのお兄さんの恭也とも知り合いだからきっと来ていると思うよ。」

翠屋

「お兄ちゃん。ダニエルとフィアッセさんから手紙が来ているよ。」

「ありがとうなのは。手紙を部屋の机に置いておいてくれ。」

「はーい。」

恭也は、ダニエルとはよく妻のフィアッセと友人でもあり数年前に彼の護衛をした事もあったのかフィアッセ同様に友人になっていた。

「何々？」

恭也は、ダニエルの手紙を読むとフェイト同様の内容が書いていて招待パスが自分以外にも5枚入っていた。

「美由紀もなのはもダニエルに会いたがっていたからな・・・残りの三枚は・・「恭也くーん！」ん？」

外を見てみると根元夫妻がいた。

「根元さん？」

恭也は、外に出ると根元さん達に挨拶をした。

「どうしたんですか？」

「いや～ママと鈴がどうしてもダニエルのコンサートを見たいって頼まれて此処まで来たんだけど・・・席が満員で入れそうにないんだよ。そして偶然恭也君の家を見つけたから挨拶に来ただけなんだ。コレウチの温泉饅頭良かったら士郎さん達と食べて。」

根元は、恭也に饅頭を渡した。

「そうだ！実は、3枚ダニエルの招待パスを貰っているんです。良かったら使いますか？」

「え？けど・・・「大丈夫です。なのはと美由紀以外に行かないん

で貰ってください。」そうかい？じゃあ、ありがとう。後ダニエルとフィアッセちゃんが合同で新曲を出すんだってね？」

「ええ！？」

「知らなかったのかい？今日の朝やっていたよ。」

「はい。」

恭也は、根元達が帰るとフィアッセの手紙を見ると根元の言う通りの事が書いていた。

「楽しみだな・・・」

恭也は、ワクワクしながら車庫の自分の愛車を洗車始める。

青と白のランボルギーニ・ディアブロを洗車しながら昔を思い出していた。

根元が海鳴町から実家の交番に移動する時にパトカーとして使われていたランボルギーニ・ディアブロを廃車する話が出て来た時に真っ先に引き取りたいと手を上げたのが恭也だったからだ。

「けど、恭也君。このパトカー・・元々ランボルギーニ・ディアブロは、維持費が高いよ・・・」

「お願いします！俺この車・・ダ・ガーンの思い出が詰まった車なんです。どうか譲ってください。」

恭也は、３０秒位頭を下げた。

「解った！解ったから！頭を上げるんだ恭也君！本官も上の人に頼むからな！」

根元は、上の人に頼むと簡単にｏｋをだした。

それもその筈２０年前のオーボス事件で一緒に恭也と戦ったノルウェールの力もあり簡単にｏｋが出たと言う事だった。

その日から仕事で稼いだお金を少しずつランボルギーニ・ディアブロの維持費として少しずつだが調子も戻って来て今では元気に走れる位までに仕上がった。

（恭也・・・もう直ぐ貴方の力が地球が貴方を必要としています・・）

「！？？」

恭也は、誰かに言われた気がしたが誰も居なかった。

「・・・まさかな・・？」

恭也は、ダイレクターを見て呟いた。

警視庁

「佐津田刑事入ります。」

「同じくティアナ・ランスター二等陸士入ります。」

佐津田刑事とティアナは、警視庁の会議室のドアを開けた。

「突然のお呼び出し何事D・・！？」

佐津田刑事達は、驚いた。

会議室に居たのは、冴島警視総監にノルウェール一等空将など管理局の重鎮や警察のトップが揃っていた。

「揃いました。」

「はい。」

冴島総監が言うとノルウェールが頷く。

「実はな、佐津田君、ランスター君。今日からあのダニエル・ジャクソンがチャリティーコンサートで日本に来日しているのは知っているな。」

「はい、ニュースで話題になっています。」

「それでだ。ダニエルが日本に来るまでのミットでもダニエルの暗

殺が行われようとしていたんだ。」

「行われようとしていた？」

佐津田刑事は、冴島総監の言葉に気になる。

「管理局がそれを未然に防いでいたのだがその暗殺の張本人達がイカルダ夫人達共産党の面々だと解った。元々ダニエルは、ＦＣ共和国出身の人間で一部の国民達は、今のイカルダ大統領よりもダニエル・ジャクソンを新しく大統領に当選しようとしたがイカルダ夫人の弾圧の事件を聞いているね？」

「はい、確か５千人の国民が死亡した大惨事だったと聞いています。」

冴島総監の話にティアナが答える。

「そうだ。その殺された国民達がダニエルの支持者ばかりだったんだ。」

「「何ですって！！」」

佐津田刑事とティアナが驚く。

「それとイカルダ夫人達がこの日本に潜伏しているとの情報も入っている。恐らくＤｒ．ジャンゴ達と手を組んでいる物見える。そこでノルウェール一等空将と相談した結果少数精鋭で君達もダニエルの護衛のメンバーに加ってもらう。」

こうして時空管理局と警視庁で組織されたメンバーでダニエルの護

衛を任された。

海鳴武道館・・此処は、国技館同様にスポーツの試合だけでなくコンサートまで出来る海鳴町有名な場所でもある。

「此処が海鳴国技館か・・・」

火鳥は、フェイト達と一緒に海鳴国技館に来ていた。

「火鳥さ～～～～ん!!フェイトちゃ～～～～ん!!ケンタく～～～～ん!!」

振り向くとなのはとその姉の美由紀がいた。

「なのは達も招待パス貰ったの?」

「うん!火鳥さん!ケンタ君!紹介するね私の隣にいるのは、姉の高町美由紀だよ。」

「高町美由紀です。何時も妹がお世話になっています。」

「いえいえ!此方こそ妹さんには、お世話になりっぱなしで・・」

火鳥は、美由紀に挨拶をした。

（この人本当にキョウちゃんをやっつけたのかな？）

（ウン！けっこう強いよ！）

なのはと美由紀は、小声で話している。

「あの・・」

ビックン！！

なのはと美由紀は、一瞬火鳥の声に驚く。

「僕と恭也さんがどうしたんですか？」

「「いいえいいえ！！なんでもありません！！」」

「？」

「そうだ！ケンタ君！フィアッセさんが来ているんだ。良かったら楽屋に行かない？」

なのはは、話題を変えるためにケンタに聞く。

「フィアッセってあの有名な歌手の！！」

「ケンタ誰なんだい？フィアッセって？」

「フィアッセさんは、ダニエルと並ぶ位有名な歌手でチャリティー活動している人だよ。」

「なのはさん。僕も行って良いですか？」

「大丈夫ですよ。」

なのは達は、楽屋に向かうと佐津田刑事達がいた。

「ん？き！貴様等は！！」

楽屋の扉には、佐津田刑事とティアナが警備をしており火鳥達に駆け寄った。

「こらーーー！！社会の敵！！何しに来た！！？さては、テロでもする気だな！！「佐津田刑事！！佐津田刑事！！」止めろ！離せ！ティアナァ！」

「どうしたんですか？」

扉近くから別の人が出て来た。

「なのはどうしたんだ？佐津田刑事。ウチの家族に何か御用ですか？」

「家族？」

佐津田刑事は、警戒を解いた。

「さぁ佐津田君。ちょっとお話聞かせてもらおうかな・・・」

するとノルウェールが佐津田刑事の後ろにいた。

「え！空将！これは！」

「いくら何でも勘違いしてはいけませんね～」

ノルウェールに連れて行かれる佐津田刑事。

「佐津田刑事！」

ティアナも同行していた。

「まあ楽屋に入ろうか・・」

恭也は、楽屋を開けるとダニエル・ジャクソンと金髪の美女フィアッセ・高町がいた。

「本物のフィアッセだ！！」

「久しぶりねダニエル。」

「久しぶりだねフェイト。」

ダニエルは、フェイトとの再会で喜ぶ。

「ダニエルがミットでコンサートの最中に狙われたって日本で聞いた時には心配だったんだよ。」

「僕も怖かったけどこのコンサートで多くの貧しい人々の寄付金が

集まると思うと苦でもないよ。」

ダニエルは、決意のある瞳でフェイト達を見つめた。

「そうだ！さっきお茶菓子が届いたから一緒に食べません？」

フィアッセがお茶菓子の入った缶詰を取り出そうとすると！

「！！？」

火鳥の目のセンサーに何かが反応した。

「いけない！爆弾だ！！」

「「「「「「え！？」」」」」」

火鳥はケンタ、フェイト、ダニエルを恭也はフィアッセ、美由紀、なのはを瞬時に担いで楽屋から非難した。

ドカァァァァァァンンンンンンン！！！

楽屋は、爆風で壊れた。

近くのカメラは、ジャンゴ達が隠れている場所から見ていた。

「おのれ～～～！！またしても失敗したか！！」

ジャンゴとレジアスは、悔しがっている。

「レジアス中将！ジャンゴ！ダニエルを抹殺する約束じゃあなかっ

たんですの！！？」

豚の様に丸々としたＦＣ共和国イカルダ大統領が通信でジャンゴとレジアスに文句を言っている。

「心配するでない。」

「次は、上手くやる。」

「アイツが死ななければ次の大統領になれませんわ！貴方方は、私達のレアメタル鉱脈が欲しいんでしょ！？」

「わかっておるわい！」

ジャンゴは、通信をきった。

「良いのか？そんな約束しちまって？」

ゾルがジャンゴ達に聞いてきた。

「あのメス豚が大統領でいれば今度は、あのメス豚を抹殺してレアメタルを奪うだけだ。」

レジアスは、冷酷な目でゾルに言った。

「一体何があったんだ!?」

楽屋で爆発音があり佐津田刑事達が駆け寄ると火鳥達がフィアッセとダニエルを安全な場所に避難させていた。

「ちょっと!佐津田刑事警備は、ちゃんとしていたの!?死ぬ所だったんだよ!」

佐津田刑事達は、自分達の警備が万全をしていたのにも関わらずまんまと抜けられた事に愕然とした。

（こうなれば彼等を呼ぶか・・・・）

ノルウェールは、佐津田刑事達から離れると初代ダクオンと二代目ダクオンの大道寺炎と南力に連絡した。

「大丈夫だぜ会長。」

「そうそうだって俺達」

「「海鳴武道館にいるも～ん。」」

力と炎は、何故か根元達と一緒に観客席で座っていた。

「わかりました。何か異変を感じたら必ずイカルダ夫人達がいます。非難は、ガードチームに任せます。君達は、イカルダ夫人達を探して下さい。」

「「了解」」

炎達は、ダクコマンダーをきった。

「お～い！力君！大道寺！ポップコーン運んでくれ～～！」

大量のポップコーンを持った根元が二人を呼んでいた。

「「は～い！」」

南力：二代目ダグオンにして現在探偵活動しながら警官志望の男。

力の隣に居るのは、大道寺炎。海鳴町の交番に勤務する警官にして初代ダグオンの一人。

この二人何故来ているのかと言うとノルウェールにダニエルのコンサートのチケットを貰い着いたのは良いが根元夫妻と偶然会ってしまう。

「あれ？力君に大道寺じゃないか？どうしたんだ？」

「根元さんお久しぶりです。」

力は、根元に礼儀正しく挨拶した。

何時もの人に対する態度では、無い力。

それもその筈、力が初の佐津田刑事に補導されてしまい根元が勤務する交番で説教をしていた。

「南力！貴様何をしたのかわかっとるのか～～～～！！！」

佐津田刑事が毎度の事ながら怒鳴っていると・・・

「ま～！ま～！佐津田！落ち着け！」

根元が佐津田刑事を抑えた。

「もういいだろ？後の事は、本官に任せてもらえんか？」

「しかし！根元先輩！」

「あ～、あ～！心配しなくても大丈夫だ。帰った！帰った！」

根元は、佐津田刑事を外に追い払った。

そして力と根元の二人だけになると力の腹から。

ぐるるるるるるうううううう！！！

ド派手にお腹が鳴った。

「そうか・・もうこんな時間か・・待っていろよ力君。」

力は、頷く。

数分後

「こんばんわ～～～！出前で～～す。」

交番に出前が来ると普通盛りのカツ丼と特特特盛りのカツ丼が来た。

「さあ腹が減っただろ？遠慮なく食べなさい。」

ガツガツガツガツ！！

力は、思いっきり腹が減っていたかのように夢中で食べる。

「本官はね、君のお父さんが居なければ今頃死んでいたんだよ」

「え？」

食べ終わった力に根元が力の亡き父：新吉について教えてもらった。

「本官が銀行強盗に銃で撃たれそうになった時逆に強盗を撃って助けてくれたのが新吉さんだった。人々の為に頑張ったお父さんに対して恥ずかしいとは思わないかい？」

「すみません・・・」

力は、初めて人に対してすまない気持ちで一杯だった。

そして根元は、家まで送ってあげた。

その事から力は、根元に勤務する場所での喧嘩をしなくなった。

それは、自分にここまで良くしてくれた根元の顔に泥を塗る真似をしたくなかったからだった。

根元が海鳴町から実家の田舎の交番に移ってから根元の家に来ては奥さんの愛も良くしてもらい鈴の面倒も見る事も数回あった。

「炎のお兄ちゃん。力お兄ちゃん。此処空いているよ。」

鈴が二人の席を取っておいてくいれた。

「あんがとな～鈴ちゃん。」

「しっかりした子だな。」

「ふふふ！ありがとうございます。」

炎が鈴のしっかりした行動に感心していると愛が照れていた。

コンサートが始まる5分前。

「いけません！今すぐコンサートを中止すべきです！」

佐津田刑事は、ダニエルにコンサートの中止をするように説得した。

「いいえ、此処で屈してしまえばイカルダの思う壺です。僕は、FC共和国の人々の未来の為にも止めるわけにはいきません。」

「佐津田刑事！お願いです。私からもお願いします。」

フィアッセも佐津田刑事に頼む。

「佐津田君。」

ノルウェールも佐津田刑事に諦めろと言う表情だった。

「わかりました！ティアナ！再度警備のチェックをするぞ！」

「はい！」

佐津田刑事とティアナは、再び会場の警備を見直しに行く。

そしてコンサート開始の時間が来るとダニエルとフィアッセがホールに現れた。

「皆！今日このチャリティーコンサートに集まってもらってありがとう。」

「実は、ダニエルから大事な報告があるの。」

ダニエルに続きフィアッセが言う。

「そうなんだ。実は、この日本が終わったら僕はＦＣ共和国の大統領選挙に出るんだ。だからこれが僕の最後のコンサートだから楽しんでね！」

ホールに歓声が沸いた。

ゴッゴッゴッゴッゴッ！

ホールがゆれ始める。

するとホールからロボットが現れる。

「ドライアス！」

「あれが・・・ドライアスの・・」

火鳥の言葉に恭也は、ドライアスのロボットを見る。

「狙いはダニエルだ！行け！」

シュラは、テシター達にダニエルを襲うように命じる。

「おのれぇ！」

火鳥が先に走ると恭也も続いて走る。

「テメェ等！このメデテェ日を壊そうとするとは許さねぇ！」

「俺も居るんだぞ！」

恭也は、クナイでテシターに投げる。

「ハァッ！テァッ！」

火鳥は、蹴りと正拳付きでテシターを倒す。

「トリャッ！」

ノルウェールも杖でテシターを叩き割る。

「ちっ！あの野郎！ファイバードとフレイムナイトと同じ位強いな！」

「くっ！」

シュッ！

恭也は、クナイを投げるがロボットには全く刃が立たない。

ビィイイイイイイイイイイイ！！

「く・・くそ！」

恭也のクナイや刀は、ロボットの磁力で奪われてしまう。

「「レイジングハート（バルディッシュ）！セットアップ！」」

なのはとフェイトがバリアジャケットに変身する時。

『食らえぇぇぇぇぇぇ！！』

ロボットに乗っていたジャンゴが会場の外に設置していたＩＭＦを作動した。

「へ・・・変身出来ない・・・」

なのは達が動揺している。

「フェイト先生！早く早く！」

ケンタがダニエル達と供になのはとフェイトをつれて安全な場所まで逃げる。

「始まったか。」

「行くぞ！」

「おう！」

炎と力は、直ぐに会場の裏に回っていた。

「トライダグオン！」

力がダグコマンダーを起動させると水色のダグテクターが装着されフルフェイスのマスクで覆われる。

「ブレイブリキ！！」

「トライダグオン！」

炎がダグコマンダーを起動させると赤いダグテクターが装着されフルフェイスのマスクで覆われる。

「ファイヤー・・・エン！！」

二人は、イカルダ達を捜索し始める。

ボオオオオオオオオオオオ！！！

ロボットは、頭から火炎放射でホールを焼く。

「力君！大道寺！？」

観客席で座っていた根元は、ロボットが現れた途端に二人の姿が無くなっていた。

「ゴホッ！ゴホッ！あ・・あなた・・」

「ぱ・・ぱ・・くるしい・・」

愛と鈴は、煙を吸ってしまい苦しそうだった。

「コレは！？」

ホールに入ると火の煙が辺り一面に燃えていた。

「佐津田に！ティアナちゃんか！？」

佐津田刑事達は、根元の声に気付き直ぐに根元達の元に来る。

「根元先輩！此方です！」

佐津田刑事は、根元達を非難させると他のホールに居る人々も非難を開始する。

『バトルアップ！チェンジ！ガードファイヤー！！』

『バトルアップ！チェンジ！ガードレスキュー！』

『バトルアップ！チェンジ！ガードスター！』

ガードチームも変形した。

『ガードファイヤーは、消火作業を！ガードレスキューは、私と一緒に瓦礫に埋もれた人々の救助活動を開始する。』

『『了解！』』

「ファイヤー・・・ジェェェット！！」

火鳥は、空からファイヤージェットを呼び変形し巨大なロボットに変わり火鳥も変化したファイヤージェットに向かって宙を飛び体が火の鳥の様に成りロボットの中心に乗り移った。

『チェェェンジィィ・ファイバード！！』

火鳥は、ファイバードと成った。

「フレイムライナー！！」

ノルウェールは、叫ぶと光り出してフレイムライナーに吸い込まれていった。

『チェェェンジ！フレイムナイト！！』

フレイムライナーは、変形してフレイムナイトに成った。

『くっ！これは！？』

『体が言う事を効かない！！』

ファイバード達は、磁力の力で地面に倒れこむ。

『何時も何時も！やられている礼だ！』

ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ！！

『『うあああああああああ！！！』』

『苦しめ！苦しめ！』

ゾルは、更に磁力を上げてファイバード達を潰そうとしている。

バコン！

「くそ！何で俺は、こんなに無力なんだ！」

恭也は、自分がファイバード達よりも劣って役立たずな自分に怒り目から大量の涙を流している。

「力が・・・力が欲しい！！皆を守る力が欲しいィィィィィィィィィィィィィィ！！！！！」

ピカァァァァ！！

するとダイレクターが光始めた。

（恭也・・・今こそ貴方の力が必要としている時です。戦いなさい！）

「お・・オーリン！？」

ピカァァァァ！！

ダイレクターが光輝くと恭也の部屋にある勇者の石の一つが光出し海鳴武道館に来て恭也のランボルギーニ・ディアブロに乗り移った。

ブウゥゥゥゥゥゥゥゥンンンンンン！！！

駐車場にある恭也のランボルギーニ・ディアブロは、勝手に動き出しそのまま恭也の所で止まると！

『チェンジ！ダ・ガーン！』

ダ・ガーンに変形した。

「ダ・ガーン！！」

『恭也早く命令を！』

「よっし！ダ・ガーン！急いで避難が遅れて逃げられない人々の救助にあたれ！」

『了解！』

ダ・ガーンは、火災現場に向かう。

『くっそ！俺たちだけじゃ全然間に合わない！』

ガードチームは、人々の非難をさせているが瓦礫に埋もれた人や火

に取り囲まれた人々が多すぎて猫の手を借りたい気分だった。

『手を貸す！』

『『『！！』』』

ガードチームは、ダ・ガーンの突然の介入で驚くがダ・ガーンと供に人々の非難を着々と完了させた。

『恭也！終わったぞ！』

「よし！アースライナー！アースファイター合体だ！」

恭也は、ダイレクターを翳した。

するとダイレクターが光だしダ・ガーンも光り出しアースライナーとアースファイターが現れる。

『おおおお！！！』

アースライナーは、腰と両足の様な部品に変形してアースファイターも両肩と両腕に変形した。

『とう！』

ダ・ガーンは、パトカーに変形するとアースライナーとアースファイターの間の腹部に変形して頭部も出て来て合体した。

『地球合体！ダ・ガーンＸ！』

ダ・ガーンＸに合体した。

『くっそ！また新手の奴か！』

磁石のロボットに乗っているゾルは、ダ・ガーンＸに睨む。

『あれは！？ダ・ガーンＸ！？』

『ダ・ガーン？』

磁力で身動きできないファイバードとフレイムナイトがダ・ガーンＸを見る。

『ならコイツもファイバード達同様に動けなくしてやる！』

ゾルは、磁力光線をダ・ガーンＸに放つとダ・ガーンＸが素早く避ける。

『ダ・ガーンブレード！』

ダ・ガーンＸは、ダ・ガーンブレードを抜いた。

『うおおおおおお！！！』

ダ・ガーンXは、そのままロボットに目掛けて走り出した。

グサッ！ドカアアアアンンンン！！

ロボットの磁力光線が発生している部分をダ・ガーンブレードで斬るとそのまま本体を斬るとXを描いてダ・ガーンブレードを収めると爆発し脱出ポットが出て逃げた。。

「いいぞ～～～！ダ・ガーンX！」

ダ・ガーンXがロボットを倒すと喜んでいるダニエル達の前に銃を向けているイカルダ夫人達の姿がいた。

「おっほっほっほっほっ！！さあ潔くこの者達と一緒に死なさい！」

イカルダ夫人は、傲慢にもケンタ達まで殺そうとしたが、ダニエルが前にきた。

「良い度胸ね。次の大統領も私ですわ。」

「皆さんは、早く逃げてください。彼女達の目的は、僕なんですから。」

「けどダニエル！」

フェイトもダニエルの前に立つがジャンゴの作った強力なＩＭＦのせいで変身できないがケンタ達を守りたいと言う気持ちが強くダニエルの隣に立っている。

「良いでしょう！それなら皆まとめて死になさい！」

ポンポン！

イカルダ夫人の肩を何者かが軽く叩く。

「！」

後ろを振り向いたイカルダ夫人は、目に疑う光景だった。

「「よっ！」」

共産党のメンバーがファイヤーエンとブレイブリキにボコボコにやられてゴミの山の様に重なっていた。

「こうなればダニエルだけでも！　パキューン！！　っ！！」

「そこまでだ！」

「動くな！両手を挙げて伏せなさい！」

イカルダ夫人の銃を佐津田刑事とティアナの銃が当たりイカルダ夫人は、怯んで動けなかった。

「ティアナ！早くバインドを掛けてイカルダ夫人達を拘束しろ！」

「はい！」

ティアナは、急いでイカルダ夫人達にバインドをして拘束した。

ダニエルのチャリティーコンサードが終わりダニエルは、ＦＣ共和国行きの飛行機に乗るのを火鳥達は、見送っている。

「ありがとうございます。皆さん。僕は、これからＦＣ共和国に帰って選挙活動をします。これからは、人による人の為の人の政治を出来る国にしてみせます。」

「立派な大統領になってください。」

「ダニエル、私日本にいても貴方の応援しているからね。」

「ありがとうフェイト。さようなら皆さん。」

ダニエルは、ＦＣ共和国に戻り見事大統領になりＦＣ共和国からＦＣ民主国にさせ歴代の大統領で世界平和と自由を尊重する大統領へと語り継がれていった。

第三十三話：目覚めし伝説の勇者達（後書き）

ケンタ

「ギンガ姉ちゃん保母さんの仕事して忙しそうだけど楽しそうな感じだよな。あの黒いロボットは、何だ！？　太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ　第三十四話　私は、ブラックガインだ。　次回も世界平和だ！」

特別編：エースオブエースＶＳ管理局の獣（前書き）

今回は、ジャンさんの勇者指令ダグオンＡ'　Ｓ　不死鳥舞う第十六話　形見の続きを書きました。＊ジャンさんと文章表現は違いますので予め断っておきます。

特別編：エースオブエースＶＳ管理局の獣

機動六課が出来てしばらくしてからの話。

「少し・・・・頭を冷やそうか・・・・・」

スバルとティアナにクロスファイアシュートが炸裂しようとしたその時

スバルとティアナに降りかかる魔法を受け止める飛鳥。倒れているティアナを抱き起こす飛鳥。

「ティアナ！しっかりしな！」

「すいません・・・・飛鳥さん・・あたし・・あたし・・・・・・」

「もう何も心配しないでゆっくり休んでろ」

「はい・・・・」

「スバル・・・・」

「はい！」

「ティアナを頼む・・・・・」

「解りました！」

飛鳥は眠ったティアナを抱えるとスバルに渡した。対峙する飛鳥と

なのは。

「何で邪魔するのかな?東三等陸士?」

飛鳥は、なのはを睨みつけた。

「自分の意に反したら罰ですか・・・傲慢過ぎません?高町一等空尉。」

「ティアナ達がいけないんだよ。私の指導を無視したから・・・」

「んなもん・・・口で言えば良いじゃないですか!!あんたはちゃんとティアナ達のことを見てたのか?」

「・・・口で言ってもわからないよ・・・だったら徹底的にやる」

その言葉に

「・・・あたしの我慢も此処までだぁ!!」

飛鳥の野生が頂点に達するのだった。

「あんたはティアナと同じ士官に降りて・・・ティアナの声を聞こうとしたか?」

「え?」

「あんたは技術じゃなくて・・・人として何かを教えようとしたか?」

「え？」

「間違って・・・悔やんで・・・積み重ねていくのが人だ」

「あなたに・・・私の気持ちは分からない！！」

「さぁな・・・知りたくもないし興味もない」

「はやてちゃん・・・リミッターの解除を」

（え？なんで？）

「相手は東飛鳥だから・・・全力全開で倒したい」

（んまぁ・・・飛鳥なら間違って死ぬ事はないかな）

「安心しろはやて・・・あたしはそんなヤワじゃない」

飛鳥の言葉にはやてはなのはのリミッターを解除する。

「・・・エクセリオンモード」

身体中から凄まじい魔力を噴出すなのはを平然とした顔で見る飛鳥。

「ほお・・・凄いねえ・・・あたしに会った時から・・・あんたにその本音をさらけ出した覇気がありゃこんなことしなくても済んだんだろうけど」

「・・もう時計の針は・・・戻んないんだよ」

「ああ、来いよ」

レイジングハートをグッと握るなのは。

「行くよ・・・東飛鳥あああ！！！」

なのはのレイジングハートを掻い潜りなのはに掴みかかる飛鳥はそのまま投げ飛ばすが、なのははウイングロードに舞い降り飛鳥にレイジングハートの照準を合わせると飛鳥はなのはに向かって飛び掛り蹴りかかった。

【プロテクション！】

なのはは、瞬時に飛鳥の攻撃を全開の防御魔法を張る。

「朱雀・・・飛翔脚！！！」

飛鳥の蹴りの連撃が舞のようになのはに向かって降り注いだ。

「ぐっ！！！」

飛鳥の蹴りは凄まじい破壊力で防御魔法ごとなのはを蹴り飛ばす。

「全力全開！」

「凶牙粉砕！」

「スターライト！」

「スターダスト！」

「「ブレイカー（シューティング！！）！！」」

そして周囲は、二つの白い光に包まれた。

目を覚ましたティアナが最初に目にしたものは、白い天井だった。

いきなり視界の情景が変わったことに、ティアナは上体を起こしながら少し混乱している。

「ん！？ティアナ！」

ベッドの近くの椅子で眠っていた佐津田刑事が最初にティアナの意識に気付いた。

「大丈夫？」

シャマルはティアナに駆け寄る。
佐津田刑事がホッとした表情に変わった。
「ここは医務室ね。昼間の模擬戦で撃墜されちゃったのは、覚えてる？」
「はい…」
ティアナは思い返したくない出来事を思い出しながら力無く返事する。
「高町と東が戦って結果二人とも体力が同時に無くなると気絶して引き分けだ・・・」
佐津田刑事はティアナにウーロン茶の入ったペットボトルを渡した。
「ありがとうございます。」
ティアナは、佐津田刑事にお礼を言うと飲み始める。
「どこか、痛いとこある？」
「いえ、大丈夫です…9時すぎ!?」
ティアナは、医務室の時計を見ると昼間から今の時間までずっと寝ていたことにティアナは驚いた。

「正確に言うなら・・・1週間後の夜の9時だ。」

「すごく熟睡してたわよ？　死んでるんじゃないかって思うくらい」

佐津田刑事とシャマルは微笑みながら冗談を口にする。

「最近、ほとんど寝てなかったでしょ?溜って疲れがまとめてきたのよ」

ティアナは気まずげに表情を曇らせた。

バコォン！

佐津田刑事は、ティアナの頭に拳骨をお見舞いした。

「馬鹿野郎！これに懲りたら身体の管理をしっかりしておけよ・・・」

「すいません・・・」

ティアナは、反省の色を見せて佐津田刑事とシャマルに謝った。

「けどティアナ、佐津田刑事は一週間寝ずに貴女を看病していたのよ。」

「シャ／／／／／シャマル先生！！」

佐津田刑事の顔が真っ赤になりシャマルも微笑んだ。

「明日から！俺の方で警察の仕事がまだまだ残っているんだからな！」

「はい！遅れた分沢山働きます！」

ハッ！

「佐津田刑事！飛鳥さんは！？」

「ん！？東か・・・今別の事件に出ている。アイツにもしっかり謝っておけよ。アイツもお前を心配しているんだからな。」

都市部に違法魔導師のテロで火災が発生していると連絡がありティアナも機動六課のヘリポートにフォワード達と一緒に居た。

佐津田刑事もなのは達の隣に居て内心ティアナを心配で一杯だった。

「今回は空戦だから、出撃は私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長の三人」

なのははフォワードたちに告げる。

「皆はロビーで出動待機ね」

「そっちの指揮はシグナムだ。留守を頼むぞ」

スバル達は返事をするが、ティアナだけ一歩遅れて返事をする。

「……」

ティアナの様子を悲しげな顔で見つめていたなのはは少し躊躇うように告げた。

「…それから、ティアナは出動待機から外れとこうか」

彼女の言葉にフォワードたちは驚愕を浮かべた。

「その方がいいな、そうしとけ」

ヴィータも同意した。

ギリッ！

それを見ていた佐津田刑事は、歯を力強く噛み締め力一杯左手を握っていた。

なのは達の指示に気に入らない気持ちで一杯だった。

「体調も魔力もベストじゃないだろうし―」

「言うことを利かない奴は、使えないってことですか…？」

なのはの言葉を遮ったティアナの言葉には、冷たい怒気が露骨に含んでいた。

「……」

なのはは呆れたように溜め息をつくと厳しい表情でティアナを見据える。

「自分で言っててわからない？　当たり前のことだよ、それ」

「現場での指示や命令は聞いてます！　教導だってちゃんとサボらずにやってます！」

ティアナに険しい表情を浮かべたヴィータが歩み寄ろうとするが、なのはが手で制する。

「あたしは、なのはさんたちみたいにエリートじゃないし、スバルやエリオみたいな才能も、キャロみたいなレアスキルもない！　少しくらい、無茶したって！　死ぬ気でやらなきゃ、強くなんてなれないじゃないですかッ！！」

次の瞬間、シグナムはティアナを黙らせるために拳を振りかぶったがティアナの頬に吸い込まれていくがその間に誰かが入った。

バコォン！

「……」

一同は、ティアナの前に立った人物を見る。

それは、佐津田刑事だった。

「佐津田刑事！！」

ティアナは、左頬が真っ赤に腫れる佐津田刑事に歩み寄る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

佐津田刑事は、そのまま立ち上がるとシグナムに近づく。

グィッ！

佐津田刑事は、無表情でまだ殴られていない右頬をシグナムに見せ

る。

「まだ・・・此処が空いているぞ。」

シグナムは、佐津田刑事の瞳に宿す何かに一歩退いた。

「佐津田刑事!!一体どういうつもりだ!?」

「・・・今のお前等は、何の進歩もしていないな・・・」

「なに!!」

「確かにティアナのやった事は無茶以外のなにものでも無いだろう・・・だがお前達はそれに気付かなかったのか!!?」

「!!!!!」

佐津田刑事のその言葉を聞いた瞬間にスバルとヴァイス以外の六課メンバーの誰もが凍りついた。

「・・・仲間を見ず一方的に虐める何て・・・そんなものは仲間じゃねえ!!!」

佐津田刑事は、そのままティアナを連れて行く。

「ティアナを何処に行くんですか!?」

なのはは、ティアナを連れて行く佐津田刑事に聞く。

「決まっている。都市で逃げ遅れた人々の誘導にティアナの力がいるんだ。」

「いけません！上官の私が「ティアナは俺の部下でも有るんだぁぁ！！」・・・」

佐津田刑事は、人としてなのはにキレた。

「高町！お前等が違法魔導士の逮捕をするならな・・・その前にまだ非難出来ず不安な人々を救う事も俺等警察官やお前等管理局の仕事だろぉ！」

そう言い残すとガードスターにティアナを乗せて現場に向かった。

『・・・・・・』

ガードスターも何も言わなかったが佐津田刑事と同じ立場なら一緒の事をしていたと思った。

「これは！」

ガードスターから降りた佐津田刑事とティアナは、現場を見て驚いた。

煙が充満してあちらこちらに火が上がっていた。

「・・・・すけ・・て・・・」

「「！！」」

二人は、瓦礫のしたから子供の声が聞こえた事に気付き探すと少年が下敷きになっていた。

「ティアナ！俺が持ち上げる。お前は、その子を助け出してくれ。」

「はい！」

佐津田刑事は、力一杯瓦礫を持ち上げティアナが少年を助ける。

「も・・う・・・」

「諦めちゃダメよ！直ぐに出してあげるから！」

「そうだ！君は、俺たちが必ず助ける！だから諦めるな！」

佐津田刑事とティアナは、少年を必死で応援する。

グラッ！

「「！！」」

真上の建物の一部が佐津田刑事達の真上から落ちてきた。

（すまねぇ・・・ティーダ・・・）

昔を佐津田刑事を思い出した。

違法魔導師に撃たれたティーダに駆け寄る飛鳥と佐津田刑事。

「おい！ティーダ！しっかりしろ！！おい！！」

「ぶぐ・・・う・あ・・ひが・・し・・・わ・るい・・・さつ・・ださ・・ん・・すいま・・せん・・・」

「誰か！医療班を！やはくしろぉ！！」

佐津田刑事は、航空部隊の連中に言うが全く動かない。

「我々は、違法魔導師を追う。そんな奴放っておけ！」

ティーダの上官が残酷な一言を言い部下達を連れて違法魔導師を追いかける。

「糞ったれが！！」

佐津田刑事は、ガードスターの入るパトカーにティーダと飛鳥を乗せて急ぎ病院に向かう。

意識を失いそうになるティーダその光景を見て悟った飛鳥。

「・・・なあ・・・なにあんた勝手に死のうとしてんだよ」

「・・・う・・ぐ・・・・あ」

「おい！あんたが死んだら妹どうなるんだよ！！たった二人きりの兄妹なんだろ！！なあ！！」

「東の言う通りだ！諦めるな！ティーダ！」

「・・・あ・・あ・・・」

力尽きてしまうティーダ。

「！！？」

危険運転をしていた佐津田刑事の運転もティーダが力尽きた事で運転を止める。

「おい・・・何死んでんだよ・・・おい！！！妹どうすんだよ！！なあ！！お前死んでる場合じゃないだろ！！目え開けろよ！！死んでる場合じゃねえだろ！！！！」

涙を流す飛鳥。

「クソォォォォォォッッッッ！！」

佐津田刑事も泣き叫びながらステアリングを力一杯叩きつけ警笛が辺りに響き渡る。

ガシン！

「「？」」

よく見るとガードスターが佐津田刑事達を盾になって庇っていた。

『早く！ウィザーアスカ！彼らを手伝ってくれ！』

すると何時の間にかウィザーアスカがティアナの隣にいた。

「はやく！一緒に引っ張るぞ！」

「はい！」

ティアナとウィザーアスカは、少年を救出したのを見た佐津田刑事も瓦礫を降ろした。

（彼女を見ていると東に見えてくるな・・・）

佐津田刑事は、ウィザーアスカを見てそう思った。

「後は、アンタ達の仕事でしょ？この人達を安全な場所まで非難させて。」

そうウィザーアスカは、さっき助けて少年を含む二十数人を佐津田刑事達に託すと何処かに行ってしまった。

「誘導をするぞ！ティアナ！」

「はい！皆さん此方です！」

「我々の指示に従ってください！」

『私が安全なルートを確保します。私の後に続いてください。』

こうして佐津田刑事とティアナのお陰で被害も最小限で済み死傷者も出ずにすんだ。

『・・・・』

ガードスターが駐車場で待機していると白い何かがやって来た。

［こんにちわ。］

すると若い男の幽霊がガードスターに挨拶をした。

『貴方は？』

［私は、ティーダ・ランスター・・・ティアナの兄です。］

ティーダは、礼儀正しくガードスターに挨拶をした。

『ティアナのお兄さんですか。私は、ガードスターです。何時も妹さんにはお世話になっています。』

［いえいえ、何時も妹がお世話になっています。］

ティーダは、お辞儀した。

『安心して下さい。妹さんは、一生懸命管理局員として人々の安全を第一に思っている立派な局員ですよ。』

［そうですか・・・ありがとうございます。アイツは、昔から無茶をして迷惑をかけていると思っていましたが・・・ティアナには、

いい上司の佐津田さんと貴方に恵まれているようですね・・・これからも妹と佐津田刑事さんを宜しくお願いします。」

ティーダは、そう言って消えていった。

（ティアナは、幸せ者だなぁ・・・）

ガードスターは、笑顔で思った。

特別編：エースオブエースＶＳ管理局の獣（後書き）

次回は、私がブラックガインだ！を載せます。

第三十四話：私がブラックガインだ。

「うわあああああ！！」

「きゃあああああああああ！！！」

海鳴町の町では、突如ドライアスのロボットが現れて人々が逃げ惑っていた。

するとケンタと火鳥の乗ったファイヤージェットがやって来た。

「兄ちゃん！ドライアスのメカだよ！」

火鳥は、頷くとロボットに向かってスピードをだした。

「ふん！つまらん仕事だ・・・」

シュラがビルの頂上からカメラの様な装置を作動させるとファイヤージェットに向かって特殊な弾を装填した銃を構えた。

パキュン！！

撃ち放つと弾は虫に変化し、ファイヤージェットに付いてそのまま機体の中に入り込んだ。

「ケンタ！今すぐ脱出レバーを押すんだ。」

「うん！」

ケンタは、そのまま脱出レバーを引くと外に出る。

「ファイヤー・・・・ジェェェェット！！」

巨大なロボットに変わり火鳥も変化したファイヤージェットに向かって宙を飛び体が火の鳥の様に成りロボットの中心に乗り移った。

『チェェェンジィィ・ファイバード！！』

火鳥は、ファイバードと成った。

『ファイヤーバスター！！』

ファイバードは、両腕から火を放つ。

『何！？』

しかし効いていない様だった。

『フレイムブレスター！！』

ファイバードは、腕を空に翳すと空からフレイムブレスターがやって来た。

フレイムブレスターがファイバードの真下に下りると合体した。

『フォームアップ！武装合体ファイバード！！』

ファイバードも合体した。

ファイバードの額が光出した。

『フレイムソード・チャージアップ！！』

剣の刃に炎が纏いロボット目掛けて構えた。

『えええいいいい！！！』

スカッ！

ファイバードの攻撃がまるで幽霊を攻撃しているかのように効果が無い。

「もういいだろ・・・」

シュラは、カメラを切るとロボットも消えてファイバードの中に入っていた虫も素早く戻ると去った。

火鳥とケンタは、天野平和科学研究所に戻ると直ぐに天野とジェイルに聞いた。

「それは、ホログラフィーだね。」

「ホログラフィー？」

「ホログラフィーってセリカちゃんの時ジャンゴ達が使っていたあれ？」

ケンタは、その言葉聞いて思い出した。

「おう、立体映像じゃよ。」

「ドライアス達が何かの悪巧みの実験をしていたのかもね。」

「まっ！何事も無くて良かった良かった。」

一方ドライアスの海底基地

「ふふふ。」

ジャンゴは、シュラの持って来たファイバードのデータを受け取る

とコンピューターにインストールした。

「本当にファイバードを倒せるのか？」

傍にいたゾルがジャンゴに聞いた。

「ふん、アヤツのデータを取ったロボットを作れば打倒宇宙警備隊やダグオンそしてダ・ガーンとやらも倒せる。」

「そうなれば暗黒世界が出来る。」

後ろにいたレジアスは、笑う。

「「がっはっはっはっはっはっはっ！！」」

そして着々とロボットのフレームや機能を作る作業を開始するジャンゴ。

皆さんは、この作品太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋａｒｓでお忘れでは無いでしょうか?スバルの姉ギンガ・ナカジマを。

彼女は、只影が薄いっと言う理由でこれまで出て来れなかったワケではない何故なら・・・

ＡＭ６：３０

「コレで良し！」

ギンガは、動きやすいトレーナーやズボンに着替えて少し整える感じで化粧をすると部屋を出る。

「おはようギンガ。」

「おはようございます火鳥さん。」

廊下で会った火鳥に挨拶をするとリビングの朝食を食べ終わると天野平和科学研究所を後にした。

「ギンガさん。」

「！？」

道を歩いているギンガが振り返るとティアナと佐津田刑事がいた。

「ナカジマ、もう慣れたのか?幼稚園の保母の仕事は?」

「はい、何とかやっていますよ佐津田刑事。」

ギンガは、笑顔で答える。

「そうか・・・頑張れよ。」

佐津田刑事は、ティアナにガードスターに乗せると警察署に向かう。

とある幼稚園。

ギンガは、そのまま職員室に入る。

「おはようございます。」

ギンガは、元気良く挨拶をした。

「おはようございます。ナカジマ先生。」

「おはようございます。」

中年のおじさん（クレヨンしんちゃんの園長酷似）の様な人が園長。

そして他の先生達もまたまたクレヨンしんちゃんの先生達に酷似している。

「直ぐにバスに行ける準備します。」

ギンガは、直ぐに荷物をロッカーに置くとエプロンを付けて園長が乗っているバスに乗り込んで出発した。

そもそも何故ギンガ・ナカジマが保母さんをしているのかと言うと・・・・

地球に来たばかりの時・・・・・

「はぁ～～～～・・・・・（何もしないのってある意味拷問に近いわ～～～～・・・・・）」

ギンガは、ノルウェールの命令で父ゲンヤやマリエルと一緒に来た

のは良いがやることが無くて暇な毎日を過ごしていた。

戦いの時は、スバルやナンバーズそしてファイバード達が居るから不要で家事もハルカが居るので不要。

そう結果的にヒマその物だった。

そんな時ノルウェールが一冊の本を渡した。

「空将？これは？」

ギンガが目にした本の題名は、『目指せ！保育士免許！』と書かれた物だった。

「はい。まぁ騙されたと思ってそれで勉強をしなさい。あっ！そうだ！君は、今日から山海高校に３ヶ月間在学しなさい。安心しなさい。全て手続きしておきましたから。君とランスター二等陸士を。」

「はい？」

ギンガは、どういう事なのかさっぱり解らなかった。

こうしてギンガとティアナは、三ヶ月間山海高校で在学していた。

ギンガは、学校にいる間も研究所に帰った時も保育士の勉強をまじめに行った。

そしてその結果見事保育士免許を取得した。

「ティアナ。山海高校はどうだった？」

ガードスターに乗った佐津田刑事は、ティアナに在学中の出来事を聞いていた。

「はい。担任の広瀬さんは、とても親切な先生でした。解らない事や困った時に何時もアドバイスをくれました。」

「そうか・・・それは良かった。」

ティアナの話した担任広瀬海は、かつて山海高校で鬼の風紀員として活躍した人物で初代ダグオンの大道寺炎も彼に何時もお説教されていた。

「しかし、佐津田刑事・・・フェイトさんとなのはさんは、広瀬さんが親切って言うとかなり否定していました・・・それは、何でしょうか？」

「まあそれは、アイツ等の日頃行いが悪いせいだろうな。」

佐津田刑事は、青空を見て言った。

山海高校

「ティアナ・・・お前は、何時でも素直だったな。」

とある教室で海が呟いていた。

「だが！聞いているのか！！フェイト！！！高町！！！」

海は、片手に持っている竹刀を床に叩いた。

「「ひぃぃぃ！！！」」

二人は、肩を震えながら海の目の前で正座をさせられていた。

この二人・・・どんな事またしたんだろなぁ・・・・？

お昼過ぎるとギンガが担当するクラスでは、全員外に出ていた。

「はい、みんな。これから山海高校の裏山に絵を書きに行きますね。」

【は～～～い！！】

ギンガが言うと園児達は、元気良く返事をした。

こうしてギンガ達は、山海高校の裏山に到着すると其処にはきゅうりやトマトなどの夏野菜が出来ていた。

「ぼくナスをかく～～！」

「トマト～～！」

などと言い園児達は、畑の野菜中心に書き始めた。

「おや？ナカジマ？」

「え？」

ギンガが畑を見ると作業着を着て麦わら帽子を被った初老の男がやってきた。

「朝日山校長先生。ご無沙汰をしております。」

ギンガは、お辞儀をした。

「ナカジマ、保育士の仕事はどうた？」

「はい、色々苦労もありますが毎日が充実しています。」

「ほっほっほっ！それは、良かった。」

笑顔で朝日山校長は、安心する。

「おじいちゃん！トマトおいしいの？」

「ん？」

園児の一人が朝日山校長に聞いた。

「後一ヶ月すれば畑の物が食べられるぞ。」

「じゃあおやすみのひに来ても良い？」

園児が言うと「ああ！何時でも来なさい。」笑顔で言う。

それを聞いた園児は、物凄く喜んだ。

ジャンゴの海底研究所

「ふふふ・・ようやく完成したわい。」

ジャンゴとレジアスがファイバードを真似したロボットを完成して

喜んでいた。

「後は、この装置を押せば起動するはずだ。」

レジアスは、ボタンを押そうする。

「まったく、これで本当にファイバード達を倒せるのか？」

「あいつ等の考える事は、俺たちには理解できない。」

ジャンゴやレジアスの作業を見ているゾルとシュラは、半信半疑だった。

ポチッ！

しかし！

シ～～～～～ン・・・・・・・・・・・・・

ロボットは、全く動かない。

「なぬ！？」

ジャンゴとレジアスは、完璧な筈のロボットが起動しなくて驚く。

「ほらな。」

「とんだ骨折り損だな。」

ゾルとシュラは、呆れて研究室を後にしようとしたその時だった。

海底の研究所の真上では、雷雲が鳴り響いている。

そして・・・・

ゴロロロロロロロロロロロロロロロロッッッ！！！！！

そのまま雷がジャンゴの研究室のロボットに向かって落雷した。

「「ぐあああああ！！！」」

レジアスとジャンゴは、吹き飛ばされた。

「何だ！？何だ！？」

ゾルとシュラも研究室から出る手前で戻ってきた。

落雷したロボットから突如微かだが動き始める。

『・・・！？』

ロボットは、何処なのかと思っているのか回りを見渡した。

「！？ふっはっはっはっはっはっはっ！！！ついに動き出したぞ！そうだ貴様は、ワシの息子ガイン・・・ブラックガインじゃ！！」

「これでファイバードやダグオンに仕返しが出来るぞぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

ジャンゴとレジアスは、大いに喜んだ。

ギンガ達は、裏山から帰ると昼食を取って園児達は、バスで帰る時間になりギンガもバスに乗った。

園長がバスの運転をしながらギンガが園児達を次々と家の前で保護者に渡して挨拶をする。

そして園児達も1／3以下になり山道に入ると。

ドカァーン!!

「うわっ!」

「きゃあああ!!」

園長やバスに乗っている園児達も突然の爆音で驚いてバスが崖に落ちそうになっていた。

「どうしたの?」

ギンガは、周りを見るとドライアスのメカが現れた。
近くで森林の警備をしていた男がドライアスのメカを確認していた。
「あれは?例のドライアスのメカ?」
この男は、刃柴竜・・・初代ダグオンのメンバーである。
直ぐに近くの仲間に応援に来て貰うためにダグコマンダーで連絡をした。
海鳴町の山に入る地点
「おう!此方大道寺!竜どうした?」
【炎!直ぐに来てくれドライアスのメカが現れた!】
シャドーリュウとなった竜が炎に連絡をした。
「わかった!」
「トライダグオン!」
炎がダグコマンダーを起動させると赤いダグテクターが装着されフルフェイスのマスクで覆われる。
「ファイヤー・・・エン!!」
ファイヤーエンは、ファイヤーストラトスで急行した。

「園長先生、落ち着いて子供達を先に避難させてください。」

ギンガは、安全なルートを確保をすると園長や子供達を次々に非難させていく。

そして園児も二、三人に成った途端バスが落ち始めた。

「もう大丈夫よ！」

ギンガが園児達を抱きかかえた。

「アレは！？タイプ・ゼロ・ファースト！」

メカに乗っていたジャンゴとレジアスは、ギンガの存在に気付いた。

「丁度良い！ついでにヤツも連れ去れば我々の戦力は、上がる！行

けぇ！ブラックガイン！！」

レジアスが言うと突如黒い新幹線が現れ黒いロボットに変身した。

『私は、ブラックガイン最強の戦士だ。』

雷と共にブラックガインが現れた。

（しまった！こんな所じゃあまともに戦えない！）

そうギンガの腕には、子供達を抱きかかえて非難させるのがやっとの状態だった。

ブラックガインは、ゆっくりとギンガ達の乗ったバスに来た。

だが！

バスや外で非難している園長や園児達を両手で持って安全な場所に運ぶ。

『此処なら安全だ。』

「え！？」

ギンガは、突然の事でどういう事なのかわからない。

「何をしておる！ブラックガイン！そんなガギ共などいい！」

「そうだ！タイプ・ゼロ・ファーストを連れ去れ！」

レジアスとジャンゴがブラックガインに文句を言う。

『黙れ！私は正義の戦士だ！！』

ブラックガインは、レジアス達に反抗した。

「ジャンゴ・・・ファイバードの戦闘力だけじゃなく性格もコピーしたんじゃあ？」

「くそ・・・」

二人が悔しがっているとファイヤーストラトスとシャドージェットがやって来た。

「融合合体！！」

ダグビークル・ファイヤーストラトスが人型に変形すると炎と一体化し瞳が淡い緑に光る。

『ダグ！ファイヤー！！』

「融合合体！！」

シャドージェットが人型に変形すると竜と一体化し瞳が淡い緑に光る。

『ダグシャドォォォォッ！！』

ダグファイヤーとダグシャドーが現れた。

「くっそ！撤退じゃ！」

ジャンゴとレジアスは、形勢逆転されてしまい逃げた。

『くっそ！待ちやがれ！！』

ダグファイヤーは、悔しがる。

『何だ？あのロボットは？殺意が今までの敵と違って感じない？』

ダグシャドーは、瞬時にブラックガインの雰囲気を呼んだ。

ギンガは、仕事を終えて天野平和科学研究所に戻るとダグファイヤーとダグシャドーに連れて行ったブラックガインが格納庫でテストをしていた。

「見事な射撃力だ。ガードスターの次に凄い。」

天野やジェイル、シャーリーは、ブラックガインの性能を見ていた。

「ん?ギンガ君帰って来ていたのか。」

ジェイルが先にギンガを発見した。

「天野さん、ジェイルさんどうなんですか?彼・・・ブラックガインは?」

ギンガは、自分や子供達を助けてくれたブラックに感謝していたがやはりジャンゴの作ったロボットなので心配だった。

「ふむ、さっきウーノやクアットロにもブラックの内部構造を調べてもらったが何処もおかしい部分等無いぞ。」

「それにジャンゴやレジアスは、火鳥君のデータだけ丸ごと彼にインプットしてもらって性格もまともな位だね。本当に良かった。」

「えっ?なんで?」

ケンタがジェイルのその言葉を聞いた。

「うん、コレだけの性能を持っていて性格も凶暴なら兵器の様な物だからね。」

ジェイルが説明した。

「それじゃあブラック、最後に言語能力をしてもらいます。ギンガ

言って。」

マリエルが基本的な言語能力をギンガに指示した。

「特許許可する東京特許許可局！」

ギンガは、簡単に言った。

『特許許可する東京特許きょきゃ・・？』

ブラックは、言語能力がまだまだらしい。

「これから宜しくブラックガイン。」

ギンガが挨拶した。

『こちらこそ宜しくギンガ。』

海底基地

「くそーーーーー！！！」

「折角の作品がファイバード共に奪われるなんてーーーーーーー！！！！！」

ジャンゴとレジアスは、悔しさのあまり叫んでいた。

「ふん！とんだタダ働きだったぜ。」

「俺達は、この件から降ろさせてもらうぜ。」

ゾルとシュラは、何処かに行ってしまう。

「くっそ！こうなれば！」

「あれを使うか！」

ジャンゴとレジアスは、倉庫から黒い機関車と灰色の新幹線そして赤い円盤を取り出し海鳴町に向かう。

翌朝ギンガは、昨日園児の一人にブラックにお礼が言いたいと頼まれてブラックと一緒に幼稚園に来た。

園児達が来るとブラックの方に駆け寄って滑り台やジャングルジムの様にあそび始めた。

「ありがとう、ブラック。」

『え？』

「ありがとう！」

「あんがと！」

沢山の園児達がブラックにお礼を言った。

【見つけたぞブラックガイン！】

空から赤い円盤と黒い機関車に灰色の新幹線がやって来た。

「園長先生！子供達や先生方を連れて非難してください！」

「しかし！ギンガ先生！？」

「早くしてください！！」

「わかりました！」

園長は、ギンガの言われた通り一同を幼稚園から非難した。

ギンガは、バリアジャケットを着るとウィングロードを出した。

「ブラック！私の出したウィングロードで非難の少ない方に行くから私の後に続いて！」

『了解！』

二人は、ウィングロードを使い建設中のデパート建設場所に行った。

【おのれ！チョロチョロと！こうだ！】

ジャンゴの乗った赤い円盤は、ブラックに目掛けて何かを撃った。

『ぐああ！！』

それがブラックの顔に付いた。

「ブラック！大丈夫！？しっかりして！」

ギンガは、必死でブラックに呼び続ける。

しかし！

『タイプ・・・ゼロ・・ファースト・・・捕獲する！』

ブラックの目の色が変わった。

そのままブラックは、ギンガに歩み寄る。

バッバッバッバッバッバッバッバッ！！！

誰かがブラックにバルカン砲を発射した。

空からファイヤージェットがやって来た。

「ファイヤー・・・ジェェェェット！！」

巨大なロボットに変わり火鳥も変化したファイヤージェットに向かって宙を飛び体が火の鳥の様に成りロボットの中心に乗り移った。

『チェェェンジィィ・ファイバード！！』

火鳥は、ファイバードと成った。

『ギンガ！コレは一体！？』

「ファイバード！ブラックは、ジャンゴ達の機械で操られているの！」

『何だって！？』

『邪魔するヤツ・・・排除・・・排除ォォォォォォ！！！』

ブラックは、ファイバードを攻撃する。

『たぁ！』

ファイバードは、ギンガを抱えて回避する。

【行くぞ！レジアス！】

【おう！レッツ！ブラック！マイドガィィィンンンンン！！！】

するとレジアスの乗っている灰色の新幹線と黒い機関車とブラックガインに赤い円盤は、フォーメーションを取って飛んだ。

灰色の新幹線が左腕にブラックが右腕に黒い機関車が残りの部分に変形すると頭に赤い円盤が装着した。

【黒い翼に殺意を乗せて！】

【灯せ不幸の赤信号！】

【悪者特急ブラックマイトガイン定刻破ってただいま到着！】

ブラックマイトガインは、完成した。

「ハカセ！大変です！」

ギンガは、直ぐに天野平和科学研究所に連絡した。

「何!?ジャンゴの奴等が!?ブラックを!」

【何とか出来ませんか!?ブラックを救い出す方法を!】

「わかったよ!今スバルくんをストームクレーンで向かわせている!それまで持ちこたえていて!」

「頼んだぞ!スバル!」

スバルは、ストームクレーンで猛スピードで向かっていた。

【スバルくん!】

「ドクター?」

【ブラックが操られている部分は、頭部の円盤の辺りに特殊な電磁波が出ている君の技術とストームクレーンなら出来る筈だ!急いで火鳥くん達の所に向かってくれ!】

「わかりました!」

スバルは、更に猛スピードで向かう。

ドカーン！！

『ぐあああ！！』

ファイバードは、仲間であるブラックを傷つけられなくてギンガを守り続けている。

【とどめだ！ファイバード！ブラック動輪剣！】

ブラックマイトガインは、大剣を出した。

すると！

ドカーン！

何かが当たってブラックマイトガインは、倒れる。

「間に合ってよかった！」

「スバル！？」

ストームクレーンに乗ったスバルがやってきた。

「機甲合体！！」

＜ＰＯＷＥＲ　ＬＯＡＤ＞

スバルがストームクレーンから飛び上がるとクレーンアームが展開した。そのまま上半身が起き上がり下半身の四輪部分がリフトアップしていく。リフトアップと同時にクレーンアームが装着されている腕が展開し胸部が展開した。

「たあ！！」

スバルが胸部に乗り込むとゆっくりと胸部が閉じ同時に竜の顔が胸に現れた。

＜ＣＯＮＮＥＣＴ＞

瞳が淡い緑に光る。

『メタルゥゥゥゥゥゥ！ダグオン！！！！！！』

メタルダグオンがブラックマイトガインの前に現れた。

【何故？胸の紋章が竜何だ！？】

ブラックマイトガインに乗っているレジアスがメタルダグオンに質問する。

『それは、カッコイイからだよ！』

（それって楓姉ちゃんの台詞だよ。スバル姉ちゃん・・・）

天野平和科学研究所の司令室のモニターで見ていたケンタがそう思った。

『メタルトンファー！！』

右腕のクレーンアームを振り回しながらブラック動輪剣を防ぐ。

【縦一文字斬り！！！】

『うおおおおおおお！！』

ブラック動輪剣とメタルトンファーがぶつかり合う。両者一歩も引かない。

『たあああああああ！！』

クレーンアームが回転してブラックマイトガインを弾く。

【【ぐあああああああああ！！！】】

『はぁぁぁぁぁぁぁぁ・・・・・』

メタルダグオンは右腕に魔力を収束させた。そして膨大な魔力は身体中から放出される。

『一撃必殺・・・』

ブラックガインの操られている電磁波にメタルダグオンは頭部に狙

い定める。

『ディバイン・・・・バスタァァァァァァァァッッ！！！！』

ブラックガインにメタルダグオンの必殺技が頭部に入った。

ドカァァァァンンンンンン・・・・・・

ドン！

ブラックマイトガインは、そのまま倒れた。

『・・？此処は・・？』

ブラックもレジアス達の洗脳から我に返った。

【くっそ！こうなれば！タイプ・ゼロファーストだけでも！】

ジャンゴの円盤にレジアスが来るとファイバードに抱えられたギンガに向かって飛び出した。

『ギンガ！』

ブラックは、動こうとしたが合体の形態のままでは動けないので合体を解除して飛んだ。

【タイプ・ゼロ・ファーストを奪ってやる！『そうは、させるかぁぁ！！！』何！？】

目の前にブラックがやって来た。

『うおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！！』

ブラックは、円盤を掴むと上空に急上昇した。

【ブラック！？まさか！コヤツ！自分諸共ワシ等まで自爆する気か！？】

【頭に乗るなぁぁぁぁぁぁ！！！】

レジアスがバルカン砲でブラックを切り離すとブラックは、爆発した。

レジアス達は、そのまま何処かに去って行った。

「ブラック！！」

ギンガは、駆け寄った。

しかし！ブラックは、頭部だけしかない状態だった。

『ギ・・ギンガ・・だ・・い・・じょうぶ・・か・・？そうだ！アレが出・・来るようになったん・・だ・・特許許可する東京特許許可局・・・どう・・だ？』

「ええ・・私何かよりも上手よ・・・」

ギンガの目から涙が流れていた。

『そうか・・・特許許可・・す・・る・・東・・きょ・・う・・特許・・きょか・・』

そういうとブラックの目の光が消えた。

『ドライアス・・・・貴様等だけは！許さない！！』

ファイバードは、拳を力一杯握り締めた。

第三十四話：私がブラックガインだ。（後書き）

ケンタ

「爺ちゃん達が汚れた水を浄化するミラクルウォータークリーナーってのを発明したんだ。魚まで元気にしちゃうって言うんで大喜び！・・・って俺魚嫌いなんだよな・・・「魚が嫌いだと？」カチャッ！　ヒィッ！嘘嘘！！あれ？海が真っ赤だよ！？どうして！？　太陽の勇者ファイバードｓｔｒｉｋｅｒｓ　第三十五話　赤い海の恐怖　次回も世界平和！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6804h/

太陽の勇者ファイバードstrikers

2011年9月10日10時00分発行